

不屈ノ爪～The Iron
Clow～

明るい脳筋

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

1999年11月29日20時50分。北緯26°。東経128°の地点で1隻の艦が沈んだ。その艦の名は、ヴェラ・ガルフ。世界最強と呼ばれ《鉄の爪（アイアンクロー）》の二つ名を持った艦は母港から遠く離れた異郷の海で、その短い生涯を終えた：筈だった。

彼女が眼を醒ましたのは、『深海棲艦』と言う未知の敵と戦う『艦娘』と呼ばれる少女達のいる世界だった。

再び戦う事になった彼女は、この先の見えない戦争にどのような影響をもたらすのか。

かわぐちかいじ氏の沈黙の艦隊に登場する打撃巡洋艦（イージス艦）を主人公にした作品です。

一部キャラが崩壊する可能性があります、ご容赦ください。

目次

第1部 Operation Red

Stingray

プロローグ 爪、撃沈 | 1

第1話 雨、現れし爪 | 5

第2話 接触す | 14

第3話 艦長テレス・C・カーバー | 25

第4話 変わりつつある世界と闘うた | 25

めの猶予 | 36

設定と世界観 | 44

第5話 新たな母港 | 52

第6話 艦隊配属 | 63

第7話 顔合わせ | 73

第8話 初めての出撃と強襲 | 87

第9話 初陣 | 103

第10話 『アカエイ』と『不沈海龍』 | 125

125

第11話 『レッド・ステイングレー』、 | 144

動く | 144

第12話 威力偵察 | 162

第13話 集結 前編 | 197

第14話 集結 後編 | 220

第15話 『Red Stingray | 255

』 Rising Phase | 255

255

第16話 『Red Stinger』	290	第2話 ANTI HOPE	446
『Rising Phase 2』		第3話 深海の王	463
第17話 『Red Stinger』		第4話 次なる目標は	481
『Rising Final Phase』		第5話 昔話	501
asei	333	第6話 Yesterday	
エピソード 不穏	361	第7話 第9艦隊 始動	602
番外編 バカと情報は使いよう		第8話 Battle / Genocide?	647
380		第9話 『氷山狩り』	686
第2部 Operation Double Blue			
プロローグ 大西洋 渚にて	402		
第1話 Next Navy	425		

第1部 Operation Red Stingray

プロローグ 爪、撃沈

1999年11月29日

沖縄沖では、米軍と1隻の潜水艦とが死闘を繰り広げていた。もともと、その戦闘ももう直ぐ終わりを迎える。

彼女の死によって。

『魚雷が2本、機関室の船底（キール）を突き破ります！』

轟音と共に、アメリカ合衆国海軍第3艦隊所属『タイコンデロガ』級打撃巡洋艦（イージス艦）26番艦『ヴェラ・ガルフ』の機関室に魚雷が2本、突き刺さった。報告は、さらに続く。

『不発魚雷です!!?』

それ以降もCIC（戦闘情報指揮所）に絶望的報告が入る。

『船倉甲板破損、浸水!!?』

『各区ハッチ閉め、防水措置をとれ!!?』

『燃料バラスト・タンク破損!!?』

『機関室浸水!!?』

世界最強と言われるこの『ヴェラ・ガルフ』にこれ程のダメージを与えた、戦闘国家『やまと』こと、元合衆国海軍第7艦隊所属原子力潜水艦『シーバット』を追う2発のMk-46魚雷が映っているディスプレイを見ながら、『ヴェラ・ガルフ』艦長テレンス・B・カーバー大佐が、そのディスプレイを殴りつけながら、吠える。

「Gオーツ!!?」

Mk-46、深度200m?で炸裂。

激しい爆圧が、『ヴェラ・ガルフ』の瀕死の艦体にさらなるダメージを与える。

しかし、『やまと』はすでに深海へと脱出していたのだった。

『5分で沈没します!全員に退艦命令を、艦長!』

漏電し、凄まじい火災を起こしているCICを見ながら、呆然と立ち竦むカーバー大佐は、小さく呟いた。

「この……、世界最強を誇る戦術データ・システムで武装したイージス艦が……。しかも、艦数3対1という絶対優位でありながら……、完璧に負けた」

彼の顔に、皮肉な笑みが浮かぶ。そして、再び呟いた。

「もう……世界のどの洋上艦をもつてしても、あの艦を沈めることは、不可能というところか……」

20時50分、北緯26。東経128。の地点。

『ヴェラ・ガルフ』沈没。

彼女『ヴェラ・ガルフ』は、母国、そして母港から遠く離れた沖繩沖で、その生涯を終えようとしていた。

彼女の艦体のほとんどが、海に沈みわずかに洋上に曝す艦首部分は、激しい炎につつまれている。

やがて、その艦首も海底に没し、周りには油と救命ボート、そして『ヴェラ・ガルフ』から出た浮遊物のみになった。

…沈む。

ただ、沈み続ける。

自分はたった1隻の潜水艦に負けたのだ。

しかし

それでもいい。

戦闘艦として生まれた以上、「死」常に身近なものだった。そのため、彼女には「死」

恐る感情が少なかつた。

それに：

彼女の最も大事なヒトは守れたのだ。

それ以上何を望む？

彼女の意識が遠退く。

やがて、『ヴェエラ・ガルフ』は、永久（とこしえ）の眠りに就いた。

第1話 雨、現れし爪

2017年 5月8日

雨。

ひたすらに雨が降り続ける。

この地に赴任して数ヶ月が経つが、毎日のように降り続けるこのスコールにはウンザリさせられていた。

パラオ本島のコロール島にある泊地司令部のこじんまりとした、提督執務室の窓際に立ち、外を眺めていた泊地司令官である江田 四郎（えだしろう）中将は、そんなことを考えながらポケットから煙草を取り出そうとした。

と、同時に背中に凄まじい殺気が突き刺さった。

彼は、ため息をつきながら煙草をポケットにしまい、椅子に座り仕事に戻った。

『深海棲艦』との戦争が始まって早5年。最初こそ優勢だった人類だが、圧倒的物量に押され、今ではほとんどの島嶼群を占領されていた。

南方海域はここ、パラオを除き全てが『深海棲艦』側にあり、この泊地もいつなんど

き襲われるか分かったものではなかった。

が、この泊地に置かれている戦力は雀の涙ほどしかない。その理由は、上層部がすでにこの泊地を放棄しているからに他ならなかった。

ここにいる戦力も一般人に未だに踏みとどまっていると、印象付けるための張り子の虎であり、実際に戦闘になると数日も持たない弱小部隊であった。

その事と毎日のように降る雨のせい、この基地の士気はお世辞にも良いとは言えない。そしてそれは、指揮官のやる気にも影響を及ぼすのだった。

江田は、机に置かれている膨大な書類の山の山頂にある報告書を見て、呻き声を上げた。この報告書を一番最初に見せるとは、彼の秘書艦も相当なワルだ。

その紙切れには、この泊地の主力艦である扶桑型戦艦の扶桑と山城が大破したと言う内容が書かれていた。

先程言ったように、この基地には雀の涙程の戦力である。そのため、この『欠陥戦艦』と呼ばれる艦も主力となってしまうのだ。

この際なので、この泊地の編成を書いておこう。

まず、戦艦扶桑、山城。次に空母だが、もともとはいなかったのだが、1週間程前に敵潜の影響で帰れなくなっていた軽空母瑞鳳を編入する事で確保した。

次に巡洋艦。重巡古鷹、加古に軽巡天龍、龍田、球磨、多摩。駆逐艦は、睦月型の睦

月、如月、弥生、卯月。吹雪型の吹雪、白雪、初雪、深雪。

以上が、この基地の全戦力である。見ての通り、大正生まれの艦がほとんどで、昭和生まれは吹雪型の4隻のみである。いわゆる、二線級の戦力と言うものだ。

これを見れば、本国がこのパラオをどうでもいと思っていることがよく分かる。

江田は、現在の資材の量を思い出し、この2隻に高速修復材（バケツ）を使えるかを諮詢した。次の輸送船の到着は1週間後で、現在のバケツの量は10個。一応、遠征で手に入れる事が出来るのだがその量はさほど多くない。

バケツよりもさらに問題なのは、資材の少なさだ。この基地で1ヶ月に使える資材は、各5000。バケツ同様に、遠征で手に入るがやはり少ない。これまでも、上層部に資材の量を増やすように要請していたが、こちらの望む返答はいまだ得られていなかった。

江田は、頭を掻きながらため息をついた。ため息をつくのは今日これで何回目かを考えたが、あまりの多さにもはや覚えていなかった。

再び、大破した2隻の事に頭を巡らした彼は、バケツを使用するといつ結論に至った。彼は、この良いとは言えない戦闘環境の中で必死で働いてくれる彼女らのために、出来る事をする方を選んだ。資材などはある程度どうにかなるが、彼女のメンタルはそうはいかないのだから。

江田は、バケツの使用許可書にサインをすると、秘書艦で同じ部屋にいる瑞鳳に呼びかけた。

「瑞鳳」彼女は、江田の呼びかけに面倒くさそうに答えながら椅子から立ち上がった。

「はい、なんですか？ テートク」

「こいつをドックの妖精さんに持って行ってくれ」

「あつ、はい分かりました」

そう言うのと、瑞鳳はピシツとした敬礼をすると走って出て行った。江田はそれを見送ると、次の書類に取りかかった。

全ての書類を見終わり、それに対する対処を済ませる書類を書くのが終わったのは、それから2時間後の事だった。さらに頭痛の種が増えた江田は、帰って来ていた瑞鳳に、休みを告げると外に出た。

相変わらず強い雨は、どうやらスコールなどではなかったようだ。傘では防ぎきれない雨だか、その雨のおかげで頭痛が少し軽くなったような気がした。

彼は、そのまま海岸まで出る事にした。何故かは分からないが、急にそうしなくなったのだ。

雨に足を取られそうになりながら、歩き続ける事10分。ようやく海岸にたどり着いた時には、すでに後悔していた。

同じ道を再び歩いて戻るのが、ひどく憂鬱な事に感じられた。

ふと、視界の端に何か大きな物体があることに気がついた。興味を持った彼は、その物体に近付いてみた。

最初の数歩では、それは流木か何かのように見えたが、10歩も行かぬうちに、流木などではないことが分かった。もっと柔らかい何かだ。

さらに近付く。

あと30メートルと言うところで、その物体が何であるか分かった。

ヒトだ。

江田は、すぐに走り出した。強い雨で、ベチャベチャになった砂浜を走るの容易な事ではないが、彼にはそんな事は関係なかった。

すでに傘は、投げ捨てている。雨に濡れるのも構わず、彼は走り続けた。

ようやく、倒れているヒトの元にやつて来た時、その人物が他と違うことに気付いた。まず、その人物は少女である事。次に、江田が普段仕事をしている少女達と同様、臍装と呼ばれる装備を付けている事、である。

つまり、この少女は：

彼は、無意識にこう呟いていた。

「艦娘か……」

……不思議な気分だ。いや、気分と言うのはおかしいかも知れない。

彼女は、ボンヤリと思った。

自分は、海の底に沈み死んだはずだ。しかし、ある程度の意識はある。考えられる程度だ。

だが

それは、自分の考えていた「死」の定義と違う。もつとも、その定義があっているかは、分からなかったが。

まあ、意識があるならそれも悪くないだろう。

……そうだ。

少し思い出に浸ろう。少し長くなるが、それもいい。

時間はいくらでもあるのだから……。

彼女が生まれたのは、アメリカのバージニア州、ノーフォークであった。当時は1993年である。

排水量9600トン、機関最大速度32.5ノット。後部甲板に2機のSH-60を搭載している。また、イージスシステムを搭載したイージス艦であり、対艦対空対潜

と、あらゆる脅威に対応出来る万能艦であった。

その後、生まれ故郷を離れた彼女は、第7艦隊に所属したのち第3艦隊に配置転換された。

そこで起きたのが、『やまと事件』である。米国政府は、『やまと』を沈めるため、そして日本を再び占領するためにロシアと結託し、第3艦隊を派遣。ロシア太平洋艦隊と共に、交戦を開始した。

結果は、惨敗。

ロシア側は、巡洋艦ヴァリヤグ、駆逐艦グロズヌイ、オスモトリテルヌイ、プロヴォルヌイの計4隻。

アメリカは、空母ミッドウエー、戦艦ニュージャージー、イージス艦ヨークタウン、巡洋艦デイル、駆逐艦レフトウィッチ、オバノン。そして、彼女ヴェラ・ガルフも撃沈された。

さらに、米軍の損傷艦にはヴェラ・ガルフの同型艦、2隻の姉である、レイク・エリー、ケープ・セント・ジョージも損傷した。

それに対し、『やまと』の被害は実質的にゼロ。米国の完全な敗北であったが、彼女はそんな事どうでも良かったと言える。

彼女が守りたかったのは彼女のクルー達であり、彼女の艦長だったからだ。

そこで、彼女に疑問が浮かんた。

自分は、本当に彼らを守れたのだろうか？

そう思うと、彼女は、今の状態に恐怖を抱いた。彼らを守れていないと言うなら、自分は何のために沈んだのか？

自分の死に何か価値があるのか？

彼女は、周りを見回した。

暗い。

何も無い。

自分に価値が持てない。

それは、彼女にとって恐怖以外の何者でもなかった。

彼女は、そこから必死で逃げようとしたが、足が進まない。彼女の冷静な頭はすでにパニック状態であった。

その彼女に出来る事は、もはや一つしかなかった。

彼女は、あらん限りに、叫ぶ。

「誰か、誰が助けてツ!!？」

ハッと、彼女は目を開けた。

そこには広い天井が広がり、明るい蛍光灯がついていた。

彼女は呆然とし、やがて、普通の状態ならかなり驚くであろう事を冷静に口にした。

「私の体…、ヒトになってる」

第2話 接触す

ヴェラ・ガルフは、天井を見ていた。天井には、小さな蛍光灯が一つあり、彼女の寝ている部屋を照らしている。

彼女から見える範囲に装飾はなく、飾り気のない清潔感のある部屋のようなのだ。

しかし、彼女にとって部屋の状態はほとんど問題ではなかった。

最大の問題は、彼女の身体がヒトになっていると言うことである。この問題を解決するため、彼女は、かれこれ30分は悩んでいた。

今のところ、一番しっくりくるのは自分が夢をみているということだ。艦である彼女が夢を見ていると言うのは少しおかしいが、今現実を起こっているこの事態に比べると、あまり気にはならなかった。

が、この考えが間違っていることはすでに証明されている。

夢か夢でないかを確認する最も確実な方法は、自分の頬を引っ張ることである。夢と言うのは、痛みがないと言われている。そのため、頬を引っ張っても夢ならば痛みはないのである。

と、彼女の乗員の1人が言っていた。

彼女は、その乗員の言った通り自分の頬を思いきり引つ張った。

幸か不幸か、彼女の身体に痛みが走り、彼女は引つ張るのを止めた。頬が熱を帯びている。鏡はなかったが、今引つ張った部分は赤くなっているに違いないなかった。

それが、約10分前の出来事。

再び考え出した彼女だが、答えは出ない。

彼女が、この10分間で得た答えは、分からないことはいくら考えても分からないと言ふことだった。

一つの結論にたどり着いた彼女は、どこか晴々しい顔をした。あまり良い答えでないことは分かっていたが、今の彼女には、それで充分満足だった。

問題が一つ片付いた彼女は、とりあえず今得たこの身体を動かしてみることにした。

まず、体を起こしてみよう。

……なかなか上手くないかない。が、徐々にコツを掴んだ彼女は、数分の格闘の末、身体を起こすことに成功した。

寝転んでいるときは見えなかったものが、いくつも見えた。

思っていた以上に部屋は狭く、こじんまりとしていた。室内の調度品と言えば、壁際にある数冊の本が入った本棚と小さなラック、窓際の花瓶に今彼女がいるベッドの横に

木で出来た椅子があるだけだった。

ずいぶんとサツパリした部屋だと思つたが、ふと、人間の病室と言うものがこれぐらいサツパリした部屋だつたことを思い出した彼女は、自分がどこにいるかようやく気付いた。

もちろん、そんなことに気付いてもあまり意味はないのだが。

彼女は、窓の外に目を向けた。

今まで気付かなかつたが、外はバケツをひっくり返したような大雨だった。

彼女は、その陰鬱な天気生きている実感を感じたのだった。

雨でビショビショに濡れた軍服を洗濯に回し、汗をシャワーで流した江田は、自室の軍服を着直して数時間前に出た執務室に戻つてきていた。

あの見知らぬ艦娘は、ひどく傷ついておりすぐにドックに送る必要があつた。江田は、彼女を抱きかかえてドックまで連れて行こうとした。何度か駆逐艦娘を抱きかかえた（断じてセクハラではない）ことはあつたし、今日の前にいる艦娘も駆逐艦サイズである以上、1人でも担いで行けると思つていた。

が、その艦娘は見た目以上に重く、1人で担げばそろそろ運動不足と足腰の弱さが目立つてきた彼の腰がキマってしまうのは目に見えていた。

そこで、彼は一旦戻り、助けを呼びその艦娘をドックまで運んだのだった。

ドックまで連れてくると、残り少ない高速修復剤を利用し、彼女を医務室に運んだのである。

それが、この数時間の江田の行動である。

すっかり疲労した彼は、瑞鳳が見ている目の前で椅子にドカツと座り、煙草に火をつけた。

瑞鳳が、こちらを睨みつけてくるが、彼にとつてはどうでもいいことだった。とにかく今は、この疲れきった体を楽にしたいと言う気持ちが強かった。

そんな気持ちが強かったのだらう、瑞鳳はため息をついて自分の仕事に戻った。

そのまま煙草を吸い続け、もうすぐ一箱開くまで来たところで、江田は執務室の室内が煙たくなっているのに気付き、吸っていた煙草を灰皿に押し付け、消した。

まだ強い雨が降っているが、このままでは執務室が煙たいままになるので、彼は窓を開けた。

雨の音が一層強くなる。

しばし外を見ていた彼は、ふと思ひ立ちドアに向かって歩き出した。

「どっくにいくんですか？」

瑞鳳が言った。

江田の答えは至極簡単なものだった。

「見舞いだ」

彼はそう言うと、ドアを開けた

雨の中を歩くこと数分。江田は、目的の場所に到着した。木造のこじんまりとした平屋で、一応診療所の役割を帯びている。

彼は中に入り、1時間ほど前にいた病室に向かった。

あの艦娘の病室は、奥から3番目の部屋だった。そこに向かう途中、いくつかのドアの前を通ることになる。

どこの部屋も空いておらず、今も負傷者達がそのドアの向こうにいた。時々聞こえる呻き声を聞きながら、彼は歩き続ける。

今の状態では、人類はそういつまでも持たないだろうと、彼は考える。その根拠がどこから来るかは分からなかったが、なぜかそう思えるのだった。

そんなことを考えていると、いつの間にか目的の部屋を通り過ぎていた。しつかりしないといけないなど、思いながら彼は、ドアを開けようとした。

ふと、ドアの真ん中あたりにあるガラス窓から中が見えた。

江田は、少女が起き上がり窓の外を見ているのに気付いた。

と、視線を感じたのか、少女がこちらに顔を向けた。その顔は、どこか悲しげに見えたが、気のせいかも知れない。

今の少女の顔は、完全に警戒の表情に変わっていた。彼は、ため息をついて中に入った。

どちらにせよ、話さなければならなかったのだから。

視線を感じたヴェラ・ガルフは、瞬時にこちらに顔を向けた。外を見続けていたため、時間の経過がほとんど分からなかった。まあ、そんなことはどうでもよかった。今は、こちらを見ている男が危険か危険でないかを見極める必要がある。

男は、室内に入ってきた。鯨のような顔をした男だ。どこかで会ったことのある雰囲気だ。おそらく、日本人。軍服らしき制服や物腰、そして腹の据わったような目つきを見ると、この男がいくつもの戦場を経験した軍人であることがすぐに分かった。

それだけ分かれば、相手とどのように話せばいいか充分に分かった。彼女は、使用言語を英語から日本語になおし、言った。

「凄い雨ですね」

男は、少し驚いたらしく、しばしためらってから言った。

「そうだな」

彼女はこの物言いから、この男が彼女と同じような存在を指揮していることを把握した。彼女は、再び言う。

「この雨では、視界も悪く戦いにくいのではないですか？」

男は言う。

「ああ、こんな天気の時、彼女らを派遣する訳にはいかないからな」

これにより、この男が前線に出ることがないことを彼女は知った。

彼女が、次の言葉を発する前に男が言った。

「さて、君の質問はここで一旦切つて、こちらの質問に答えてくれるか？」

「もちろん、構いません」

「では、まず最初の質問だ。君は何者か？」

それは、こつちが聞きたいと彼女は考えたが、普通に答えた。

「今の私が何者であるかは、私にも分からない。…ですが過去、私だったものなら言えます。」

私の名は、ヴェラ・ガルフ。タイコンデロガ級打撃巡洋艦26番艦ヴェラ・ガルフです。…これでいいですか？」

男は、頷きながら言った。

「ああ、それでいい。さて、君の名前が分かった以上、こつちも名乗らなければならないな。」

私は、日本国防海軍中将、江田 四郎だ。よろしく頼む」

聞き覚えのある名前だと、彼女は思った。そして、気付いた。沖縄沖のあの闘いの時

の雰囲気、江田 四郎という名前、鯨のような顔。

全てが、同じ人物のことを指すように思える。

その人物の名は、海江田 四郎。

彼女を沈めた張本人である。もちろん、同じ人物ではないだろうが、何かしらの関係があるとしたか思えないほどだった。

彼女は、ここで1つの結論にたどり着いた。

つまり、今自分がいる世界は、前にいた世界とは違うパラレルワールドと呼ばれる世界であると言うことだ。

彼女は、皮肉に感じ笑みを浮かべた。まさか、自分を沈めた人間と話が出来るとは。

「何か面白いことを言ったか？」

江田が尋ねてきた。

彼女は、その笑みを浮かべたまま言った。

「いえ、ただ皮肉だっただけですよ」

「どういうことだ？」

「いざれ分かります」

「ふむ、まあいいだろう。さて、こっちの質問はだいたい終わった。と言う訳で、君の聞きたいことに答えよう。もつとも、答えられる範囲でだが」

「それでは、早速。おそらく、あなたは私と同じような存在を知っているでしょう。それなら、この質問にも答えられはずです。私のような存在をなんと呼ぶか？そして、なぜそのような存在がいるのか？

差し当たって重要なのはこの2つです」

江田は、その質問を予想していたらしく、こう答えた。

「君のその質問には答えられる。しかし、完璧ではない。実は、我々にも君たちがどのような存在か理解しきっていないのだ」

「それでも構いません。今よりも知識を得られるならそれで充分です。恐怖とは、無知からくるものなのですから」

「分かった。少し長くなる」

そう言う江田は、部屋の少ない調度品である椅子に腰掛け、話し出した。

「2012年の夏。ハワイにヤツらは現れた……」

歯車が動き始める。

停滞した時を動かすために。

『神はサイコロを振らない』

アルバート・アインシュタインの言葉だ。

宇宙を含む世界の仕組みは完璧なる神の設計図に基^づくハズであると言うことだ。
彼女の存在は、イレギュラーであることは言うまでもない。

しかし

神は、それすらも見越してこの世界を創った。

だから、彼女が来るまで時が動くことはなかった。

しかし、彼女がきた以上、時が止まる必要はなくなつた。

時は動く

そして、世界を戦闘へと誘うのであつた。

第3話 艦長テレス・C・カーバー

パラオで世界事情を聞き始めたヴェラ・ガルフの話から少し離れ、もう一人の人物の話をしてしよう。

それは、太平洋の洋上にいる一人の男の話である。

アメリカ海軍第3艦隊所属タイコンデロガ級打撃巡洋艦レイク・エリー。そのCI C。肌寒い室内は、薄暗く唯一と言っていい光源であるディスプレイの光が、乗員たちの顔を不気味に照らしている。

CI Cの真ん中辺りで、男が仁王立ちして乗員たちを見ている。

男の名は、テレス・C・カーバー。このレイク・エリーの艦長である。カーバーは、時々乗員に話しかけたりしながら艦隊の航行を電子の目を使って見つめていた。

現在、第3艦隊は5隻の輸送船を護衛している。

旗艦であるキティホーク級2番艦空母コンステレーション（コニー）を中心とした輪形陣で、カーバーの乗るレイク・エリーはコニーの右舷側を航行していた。

コンステレーション自体は、2003年に退役したものの反攻作戦『ライジングス

トーム』の失敗により、ニミッツ級空母が全滅したため引っぱり出して来た艦だった。それはさておき。

C I C内のカーバーの元に1本の連絡が伝えられた。

「艦長。SH-60BシーホークLAMPS（軽航空機多目的システム）Mk-IIIが帰投しました」

「分かった。パイロットにゆっくり休むよう言ってくれ。：次はもう出しているか？」

「はい。2番機もすでに予定哨戒海域に到達し、哨戒活動を行っています」

「そうか…。ご苦労だった、行っていいぞ」

「ハッ。それでは、失礼します」

そう言うと、連絡を伝えに来た乗員は敬礼をして立ち去った。

「ずいぶんと穏やかな航海ですね」

レイク・エリーの副長であるトマス・マイクル中佐が、カーバーに話しかけてきた。

「そうだな。ここ数ヶ月では珍しく、ヤツらのテリトリーに入っても潜水艦はおろか、哨戒機すら見ない」

「連中、こちらの戦力にビビって出てこれないんじゃないですか？」

「そうだといいが、そいつは無いだろうな。こっちの戦力は、空母1隻、巡洋艦2隻、駆逐艦5隻の10隻にも満たない小艦隊だ。ヤツらがビビる訳がない」

「分かってますよ。しかし、ヤツらのテリトリーに入つて1日になりますが、1機の哨戒機も来ないのはおかしいですよ」

「確かにそうだが、こちらの運がいいだけだろうさ。あと1時間もしないうちに騒がしくなるだろう」

トマス中佐は、半信半疑の様子で頷いた。

カーバーの予測は、それから40分後に的中した。

「コンステレーションより入電！E-2早期警戒機が敵機を補足。本艦に迎撃命令が来ました！」

「お出でなすつたな。総員戦闘配置、敵機を撃墜する！」

カーバーは、CIC内の乗員たちに言った。

「敵機我が艦隊の位置を通報中、捕捉された模様！」

通信士が、伝えてきた。

「ECM（電子対抗手段）は？」

カーバーの問いかけに、通信士は言った。

「全艦が作動させていますが、おそらく効果はないかと……」

「クソツ。…迎撃用意は出来たか？」

「SM-2ER SAMはいつでも発射可能です。やれます！」

「OK、これ以上しやべられないように叩き落とせ！」

「了解。発射用意」

カーバーは、命令を下す。

「撃て！」

「ファイア！」

兵器担当の乗員が復唱し、スタンダード対空ミサイルの発射ボタンを押す。

艦が底から揺れ、凄まじい爆音が響き渡る。

艦の前甲板の Mk. 41 mod. 0 VLS（垂直発射システム）が開き、SM-2スタンダードミサイルが、白煙を噴きながら空に昇っていく。

「SM-2、発射確認。順調に目標に向かっていく模様。着弾まで、あと1分です」

カーバーは、頷いて言った。

「OK。そろそろ、次の仕事が始まるはずだ。敵哨戒機は艦載機だった。今度は、団体さんで来るぞ」

通信士が言った。

「艦長、どうやらその通りのようです。コニーより入電、敵機多数接近、迎撃せよとのことです」

「言われるまでもない。『深海棲艦』共にイージスの力を見せてやれ」

「アイ・サー！」

CIC内の乗員たちへ、慌ただしく動き出す。すでに、SPYーIBフェーズドアレイレーダーが何十機もの敵機を捉え、迎撃の用意を行っていた。

乗員の1人が言った。

「敵哨戒機にスタンダード命中！撃墜です！」

一瞬、室内が湧き立ったがそれもすぐに収まり、皆自分の仕事に戻っていった。たつた1機落としただけに過ぎないことは、全員が分かっていたからだ。

レーダーを見ていた乗員が、後ろにいるカーバーを見て言った。

「艦長！敵編隊が射程圏内に入りました。いつでもやれます！」

「よし、他の艦はどうか？」

「ケープ・セント・ジョージ、ステザム、デイケーター、ラッセル、アレイバーク、マツキャンベル全艦用意よしです」

「分かった。全艦に通達、一斉射用意。カウントは本艦で行う」

「了解。……艦長、全艦から了解来ました。いけます！」

カーバーは、大きく頷き言った。

「カウント、10・9・8・7・6・5・4・3・2・1…撃え！」

「ファイア!!？」

それは凄まじい光景だった。7隻の艦から一斉に放たれたスタンダードミサイルは、さながらナイアガラの滝が逆に流れ始めたようであった。

発射されたミサイルの何発かは、目標が重複し無駄になってしまったが、彼らにはそんなことはどうでもよかった。

勝つためならば、少しばかりの無駄遣いも致し方ないものだ。と上層部すら吹っ切れていた。

それ程、人類は追い詰められていたのである。

数分後、発射元から遙かに離れた上空で、何十もの爆発が起こった。

スタンダードミサイルは、全て炸裂し『深海棲艦』の艦載機を一瞬にして全滅させたのだった。

「目標、レーダーより消失。敵編隊全滅しました！」

今度ばかりは、大きな歓声が上がった。小さいながらも、敵に損害を与えることに成功したのだ。

しかし、やることはまだあった。

通信士が、カーバーに言った。

「艦長、コニーより入電。敵艦隊を攻撃せよ、です」

カーバーは、ため息をついて言った。

「どうやら、艦載機を攻撃に出したくないようだ。全く、弱腰な指揮官殿だ。よし、対艦戦闘用意。トマホークでもハーブーンでもいい、とにかくぶちかませ！」

第3艦隊が航行している地点から、約450キロの地点。そこに、『深海棲艦』の機動部隊がいた。

空母ヲ級を中心とした輪形陣を敷いており、ヲ級の周りには旗艦である戦艦タ級1隻、軽空母ヌ級2隻、重巡リ級2隻、軽巡ホ級3隻、駆逐艦ニ級6隻の合計15隻の大艦隊である。

そんな彼女らが見つけたのが第3艦隊であった。空母を含む輸送船団である以上、無視することはできない。

そこで、彼女らは居場所がバレる前に艦載機を発艦させ、攻撃を仕掛けたのだった。ところがである。攻撃予定時間を過ぎてても何の連絡もない。

もちろん、無線封鎖ということも考えられたが、どうもおかしい。

そんな訳で彼女らは、艦隊内でどうするかを検討会を行っていた。

「ヤハリ、モウ一度艦載機ヲ送ッテ見ヨウ。危険デハアルガ、致シ方アルマイ」
好戦的なヲ級が言った。しかし、それを咎める者がいた。

「ソウ急クナ、今ハ落チ着イテ状況ヲ見守ルベキダ」

タ級である。なんだかんだ言っても、旗艦である彼女の言葉は大きいのである。

ヲ級は、反論を試みた。

「シカシ、今ハ絶好ノちゃんすダ。コレヲ逃ス手ハナイ」

しかし、タ級は聞く耳を持たず、言った。

「イヤ、ヤハリ艦載機ノ報告ヲ待トウ」

こうして、議論は打ち切られた。彼女らは、帰つて来ることのない艦載機たちを待った。

彼女らは、イージス艦の存在を知つてはいた。その戦闘力が侮れないものであることも知つていた。

しかし、彼女らは相手がイージス艦であることを知らなかった。

そして、気付いた時にはもう遅かった。

レーダーに反応があつた。それに気付いたヲ級は、そのレーダーに映る高速で接近して来る物が味方出ないものだとしてすぐに察した。

ヲ級は、すぐに味方に警告する。

「敵ダツ！ 迎撃ノ用意ヲシロ！ みさいいるトカ言ウヤツガ来ルゾツ！」

タ級が、驚いた顔をして言った。

「ナニ？？ いーじす艦ガイタノカ！」

それが意味する所は一つ。

「クソツ、艦載機カラ連絡ガ無カツタノハソレガ理由カ！」

ミサイルは、急速に接近してくる。あまりの速さに、迎撃は間に合いそうも無い。夕級は全艦に、回避命令を出した。全艦が動き出し、ジグザグに回避行動を開始する。が、今接近して来ているBGM-109Bトマホーク(TASM)にとつては、回避運動など全く意味を成さなかつた。

最大射程460キロメートルのトマホークは、慣性誘導に従い目標に接近し、最終的に自らの弾頭に搭載したレーダーが作動し、アクティブレーダーホーミングにより目標に突入する。

TASM自体は退役していたが、『深海棲艦』の脅威により復帰。現在も使用されている。

『長すぎる槍』の1発目が目標にしたのは、ヲ級だった。ヲ級は、必死に回避しようとしたが槍はその動きに平然とついて行き、ヲ級に突き刺さり轟然と爆発した。

この爆発により、いつでも発艦できるように待機していた艦載機に引火し、ヲ級を内側から吹っ飛ばした。

一瞬で果てたヲ級の姿を見た彼女らは、自分もそうならないように死に物狂いで回避行動をする。

それが何の意味もないことはすでにわかっていたが、あまりの恐怖にそうせざるを得

なかった。

その後も飛来するトマホークは、無慈悲に『深海棲艦』たちに突き刺さり続けた。爆音が響き渡ること20分。

そこには、『深海棲艦』だった破片が散らばり、海の碧がどす黒く変色していた。

「レーダーより反応消失。敵艦隊を撃破した模様です」

レイク・エリーのCIC内は、熱気に満ち溢れていた。誰もが頬の肉を緩ませている。彼らは、『深海棲艦』を完膚無きまでに叩き潰したのだ。今日の戦闘だけで、これまでのキルマークを越えるに違いなかった。

カーバーは、艦内インカムを言い言った。

「皆、よくやってくれた。諸君らの素晴らしい働きのおかげで、我々はここ数年得ていなかった勝利を手にした。感謝する。」

しかし、この戦闘には勝ったが、この戦争に勝った訳ではない事を忘れないようにしてくれ。

この勝利が、諸君らに慢心として身につかず、自信として身につくことを期待する。
以上

戦闘は終わり、再び穏やかな航海に切り替わった艦隊は静かに陽が落ちつつある海を進んだ。

CICから、艦橋に上がってきたカーバーは窓の外の夕陽を眺める。晴れ渡った空は、夜の月と明日の太陽を約束してくれているように、カーバーは思ったのだった。

第4話 変わりつつある世界と闘うための猶予

「……まあ、こんな感じだ」

江田が話し終えた。目の前にいる新人の艦娘であるヴェラ・ガルフは、納得したように頷いた。どうやら、自分の説明は上手くできていたらしい。

なにせ、ここまで何も知らない艦娘を見るのはこの『提督』と言う職に着いてから初めてのことだった。

話し始めてすぐに気になったのだが、この艦娘は知らないことが多すぎる。これまでの艦娘たちは、だいたい自分たちの使命が分かっていたし、それが分かっている艦娘たちもある程度の事情は知っていた。

ところがである。

この、ヴェラ・ガルフと言う艦娘は使命どころか事情すら全く知らなかったのだ。

もちろん、これまでは物分かりの良い艦娘ばかりに会っていただけかもしれないが、この目の前にいる艦娘が物分りが良くないと言う風には見えなかった。それどころか、これまで出会った艦娘の中で最も知的な印象を与えられた艦娘であった。

そう言えば、この前妖精さんがこんなことを言っていたような気がする。

『今のところ、私たちが建造出来るのは第二次大戦当時の艦だけなの。それに、戦闘後に保護出来る艦娘も、第二次大戦当時の艦だけみたい』

ヴェラ・ガルフ。タイコンデロガ級打撃巡洋艦の26番艦。

第二次大戦中、確かにヴェラ・ガルフなる艦艇は存在した。しかし、巡洋艦ではなく護衛空母であつたはずだ。

また、現在打撃巡洋艦と言う艦種は、タイコンデロガ級イージス巡洋艦のみ。しかし、タイコンデロガ級は25番艦までではなく、今後も同型艦の建造予定はないとのこと。

ここから、導き出される結論は…。

「江田中将」

彼が口を開こうとした瞬間、ヴェラ・ガルフが話しを始めた。

「なんだ？」

江田は、出てきかけていた言葉を呑み込んで言った。

「かいつまんで言うと、私は艦娘と呼ばれる生物で、艦そのものがヒトの形になったもので『深海棲艦』なる敵対勢力と戦うためにいる、と言ったところですか？」

「まあ、大体そんなところだな」

ヴェラ・ガルフは、しばし考えたような表情をしたのちに、何かを決意したように言った。

「江田中将。信じてもらえないかもしれませんが、言っておくことがあります」

江田は、それが何であるかある程度予想がついていた。おそらく、彼が出した結論と同じ内容だろう。

「私は、あなたがこれまで見てきた艦娘とはおそらく、根本から違います。まず、私は第二次大戦当時の艦でないこと。そして、もう一つは……」

江田は、次の言葉で自分の結論が正しかったことを知った。

「おそらく、私はこの世界の艦ではありません」

江田の冷静な顔を見て、ヴェラ・ガルフは予想通りだと思った。目の前にいるこの男は、頭が切れることはすでに分かっていた。

江田が、口を開こうとした瞬間を狙って話を始めたのもどれほどの切れ者かを測るためだ。

彼女は、笑みを浮かべて言った。

「やはり、分かっていますね」

江田は、驚いたような表情をした後、肩をすくめて言った。

「君は全く恐ろしい艦娘だよ。ここまで、先が読める艦娘は初めてだ」

「褒め言葉として受け取っていいですか？」

「それは、君のよく切れる頭で考えてくれ」

「では、そうさせて貰います」

彼女はふと、窓の外に目を向けた。雨は止んだらしく雨音は聞こえない。暗くなつた外は、深い夜の帳に覆われている。

江田も、それに気付いたらしく言った。

「おや、どうやらずいぶんと時間がたつたらしいな。すまない、長居した。明日また来るが、その時までを考えていてほしいことがある」

彼女は、首をか上げた。江田は、その反応を予想していたらしく、説明を始めた。

「知つての通り、現在人類は『深海棲艦』の脅威に晒されている。各国軍も行動を起こしているが、あまり成果を挙げているとは言えない。

つまり、現時点で『深海棲艦』に対抗できるのは、艦娘だけと言えるだろう。と云うことで、君にも我々とは共に戦つてほしいのだが、君にそれを強要することはできないのだ」

彼女は、全く理解できないとばかりに首を振った。

「なぜです？ 私たちは、兵器ですよ。命令があれば動く。それなのになぜ、私たちの意思を尊重するんですか？」

江田の表情が曇つた。彼女は、まずいことを言つたと即座に察したが、もう取り返しはつかなかつた。

「ヴェラ・ガルフ、君はこの世界に来てまだそう時間が経っていないから分からないかもしれないが、艦娘は兵器ではなく一人の人間として、我々は見ている。

艦娘の扱いについても、国連や各国政府が行動を起こし、法律ですである程度のこととは定められている。その中には、艦娘に戦闘を強要してはならないと明記されている。つまり、今戦っている艦娘は自分の意思で戦っているわけだ。」

「はあ」

彼女は、分かったような分かっていないような感じで答えた。江田も、その返答に文句をつけずに言った。

「まあ、すぐに分かれとは言わない。少しずつ分かって貰えばそれでいい。君のように言った艦娘も何人かいたし、彼女たちもそのうちに私が言ったことの意味が分かるようになった。君も、そうなってくれると嬉しいのだが」

彼女は、何も答えなかった。これまでの全てを否定されたような気がしたが、どことなくすつきりしたような気もした。

「…それでは、また明日来る。仕事が片付いてからになるが、少し遅れるかもしれないにせ、仕事が多いのでな。提督業もなかなかキツイ。

…そうだ、明日はこの基地の見学でもしたらいい。私が言った意味が分かるかもしれないぞ」

それだけ言うと、江田は彼女の病室から出て行った。

彼女は、それを見送ると再び窓の外に目を向けた。

月が、星が、輝いている。その光を、彼女はただ見ているのだった。

再び、提督執務室に戻って来た江田は、イライラしながら待つていた瑞鳳にこつぴどく叱られることになった。

30分ほどの説教の末、江田の謝罪を受け入れた瑞鳳は自分の部屋に戻って行った。

彼は、それを見届けると、ため息をついて柔らかく座り心地の良い椅子に腰をおろした。そこまで歳をとっていないはずなのに、これほど老けたように感じるのは、やはりストレスかと思つたがなぜかそれ以外に原因があるように思えた。

ふと、机に目を向けると数枚の書類があることに気付いた。彼は、胃が痛くなるのを感じながら、1枚目の書類を読み始めた。

1枚目の内容は、派遣していた艦隊が遠征から帰還した報告書で、ある程度の資源を入手したことを伝えていた。

2枚目の内容は、付近を警戒していた駆逐艦（艦娘ではない）が、数隻の潜水艦を捕捉したと言う内容で、撃沈はできなかつたものの損害を与えることに成功した旨が書かれていた。

珍しく、悪い知らせがない。彼の経験上、良くない知らせは1番最初に見せるのが瑞

鳳のやり方だった。

ならば、今回は良くない知らせがないか瑞鳳がやり方を変えて悪い知らせを最後にしたかのどちらかだ。

江田は、最後の報告書を読み始めた。

内容は、驚くべきものだった。こちらに向かいつつある輸送船団の護衛艦隊が、『深海棲艦』の艦隊を撃破したというのだ。

これまで、せい言うことはたまにあつたが、重巡を沈めたら良い方で大体は駆逐艦や軽巡を沈めたと言う程度のもだった。

ところがである。

今回は、重巡どころか戦艦や空母まで沈めたと言うにわかには信じられないものだった。

内容が正しいか確認するために、彼はその報告書を5回ほど読み返した。どうやら、自分の目がおかしくなったわけではないらしい。

やがて、3枚の報告書を処理済みの方に追いやった彼は、立ち上がって外に目を向けた。

どうも気になる。

まるで、停滞していた時間が動き出したかのようなこの突然の勝利と戦果。これまで

どんなに攻撃しても、艦娘以外が沈めることができなかった空母や戦艦が、あっけなく沈んだ。

何かが変わりつつある。

江田にはそう思えて仕方がなかった。

設定と世界観

はじめに、この設定を書いた理由について言っておこう。

やりたかったただけだ。本当にそれだけ。

ん？そういうことは前書きで書くべきじゃないか？

ごもつとも。

しかしね、前書きを書くにしてもはちよいと長くなるから本文のところに書いてます。長い前書きなんて見たくないでしょ？

さて、おそらく諸君には疑問点があるだろう。ないかもしれないが。

まあ、今回は疑問があるとして見てくれるとありがたい。

その1　なんでこのタイミングなのか？

早めにやった方がいいかなって思ったから。

その2　今後、設定を本編で書くのか？

まだ考えてない。しかし、今のところない。

その3　このタイミングで書くなんて、もしかしてネタ切れ？

そんなことない。

その4 本当に？

だから違うって。

その5 本当のことを言ってください。

そのような事実はなく、誠に遺憾である。

そのろk、なに？こんな茶番劇はいらなからさっさとしろ？

はあ、わかりましたよ。それでは始めましょう。

世界観

2012年。ハワイ沖。

環太平洋合同演習通称RIMPACの最中。RIMPAC参加艦であるアーレイバーク級駆逐艦サン普森、同級ジョン・ポール・ジョーンズ（以後JPJ）、こんごう型護衛艦みようこうが正体不明の金属のような生物から攻撃を受けた。

これが、後に『深海棲艦』と呼ばれる敵性生物と人類との戦いの始まりであった。

サン普森、JPJ、みようこうの3艦はこの正体不明の生物をシーゴーストと仮称し、反撃を開始。

サン普森とみようこうが撃沈されたものの、シーゴーストの侵攻第1波の阻止に成功した。

この時の各艦の損害は、サン普森乗員の全員が戦死。みようこうは副長以下多数の

乗員が死傷した。また、唯一生き残ったJ P Jも戦闘中に艦橋に被弾し艦長以下幹部のほとんどが戦死する事態になっていた。

とても少ないと言えない損害を重く見た当時のR I M P A C艦隊司令官は参加艦艇全艦をハワイに集結させ、再び来るであろうシーゴーストへの迎撃の用意を始めた。

一方、ハワイからの連絡を受けた当時の大統領は、守りの難しい孤島であるハワイの放棄を即座に決定。当時は弱腰と多くの与野党議員に叩かれたが、そういった反対を全て押し切りハワイ放棄の用意が開始された。

方針が決まったことにより、各国は輸送船団とその護衛艦隊を派遣。ハワイ撤退作戦『リメンバー』が開始された。

輸送船団到着までの2週間、R I M P A C参加艦隊は民族の垣根を越えて協力し合い、シーゴーストの阻止に努めた。

その結果、突然の攻撃であったにもかかわらず民間人の死者ゼロと言う大変な成果を挙げることに成功した。

その一方で、R I M P A C参加艦隊の何隻かが撃沈されたが、多くの乗員が助けられ、死者はごく僅かだった。

シーゴーストの初攻撃から3週間後。ハワイ完全撤収終了。『リメンバー』作戦は、成功に終わった。

完全撤収から数日後、これまでの3倍の数のシーゴーストがハワイに向けて侵攻を開始。同日中にハワイが占領されたことを偵察衛星が確認した。

これに脅威を感じた各国政府も今回の撤収に習い、自国より距離のある島嶼群の放棄を行い民間人の被害を抑えることに成功した。

これらの先駆けとなる決定を下した大統領を世界中が評価した。

ハワイ占領から1週間後、アメリカはミッドウェイを含む全ての島嶼群の放棄を宣言。

これにより、人類は太平洋から完全に手を引くことになった。

それと同時に、人類は太平洋に防衛線を構築。リム・ラインと呼ばれるこの防衛線は、シーゴーストを阻止し続けた。

しかし、阻止だけではこの戦争に勝つことはできず、いずれ反撃に出なければならなかった。

充分な戦力のある今、敵を叩くべきと言うも意見に押された大統領は反攻作戦の実施を決定。

『ライジング・ストーム』と名付けられたこの作戦は、各国のほとんど全戦力を利用した一大作戦となった。

12月24日。聖夜の日に行われた作戦は、必要のない最新兵器、必要のない上陸部

隊、強襲揚陸艦を多数運用したマスコミ写りを重視したものとなった。

こういった作戦の末路は、常に悲惨である。

神のご加護に恵まれなかった作戦部隊は、多数のシーゴーストによる飽和攻撃により壊滅。上陸部隊の護衛に多くの艦が取られ、対潜スクリーンに穴が開いたこと、また防空網にも穴が開いたことが原因だったが、何よりもシーゴーストを過小評価したことが最大の要因だった。

この時の損害は、アメリカの所有するニミッツ級空母が全滅したと言っただけで、だいたい把握できるだろう。

作戦は失敗し、これまで維持できていたリム・ラインが全線で崩壊し、人類は敗走した。

2013年2月4日、大統領が辞任。後任としてニコラス・K・テネットが大統領に就任。

テネット大統領、就任演説で自分の任期中にシーゴーストの脅威から世界を解放する事を宣言。この演説により、世界各国の自殺率が減少した。

しかし、それも長くは続かず人類は希望を見いだせずにはいた。

しかし、その希望は突然現れた。

同月の27日。

日本の横須賀基地以下、大日本帝国時代軍港と呼ばれた4つの基地に艦娘なる少女と、妖精なる生物が出現。同時に、シーゴーストが『深海棲艦』なる生物であることが判明する。

日本政府、艦娘との共同戦線の構築を決定。また、『深海棲艦』に占領されていない離島に派遣した。

共同戦線は上手くいき、多くの戦果を挙げることに成功したものの侵攻を抑えられる程度で、この戦争は後にも先にも進めない消耗戦になっていた。

人物

ヴェラ・ガルフ

本作の主人公（陰が薄いような気がする、気のせいだよね）。沈黙の艦隊では、世界最強の洋上艦として登場し《鉄の爪（アイアンクロー）》と呼ばれていた。『やまと』と交戦し、撃沈されるも異世界に艦娘として転生。

最初は戸惑いつつも、『深海棲艦』との戦いに身を投じる。

なぜか、武装の炸薬が2倍になっており通常のミサイルではなし得ない破壊を行うことができる。

性格は、石橋も渡らぬほど慎重で、もはや被害妄想の域に達している。何よりも、自分の存在価値を求めているそれが得られないと、ある種のパニックに陥る。

江田 四郎

日本国防海軍中將。国防大学きつての秀才で今後の国防海軍を任せるに相応しい人材だったが、『ライジング・ストーム』の内容に反発したために上層部に嫌われ、放棄前のパラオ泊地に派遣された。

戦争の敗北を予感していたが、ヴェラ・ガルフに出会ったことにより勝利のために再び行動を開始する。

何よりも、艦娘の安全を重視し彼女たちのために出来ることは全てするホワイト提督だが、資材の少なさからあまり士気は高くない。

沈黙の艦隊の海江田 四郎によく似ている。

テレス・C・カーバー

アメリカ海軍大佐。第3艦隊所属艦レイク・エリー艦長。『ライジング・ストーム』作戦の生き残り。

現在は輸送船団の護衛に勤しんでいる。

沈黙の艦隊のテレンス・B・カーバー大佐によく似ている。

アレン・G・ナガブチ

アメリカ海軍大佐。大西洋艦隊旗艦空母ジョン・F・ケネディの艦長。カーバーとはアナポリス時代からの同期で、仲が良い。

現在は、大西洋で船団護衛に勤しんでいる。

沈黙の艦隊のアレックス・P・ナガブチ大佐によく似ている。

ニコラス・K・テネット

現アメリカ合衆国大統領。

自分の任期中に『深海棲艦』からの解放を宣言する。

沈黙の艦隊のニコラス・J・ベネット大統領によく似ている。

竹下俊雄

現日本国首相。ボケシタのあだ名があるが、なかなかの切れ者。

テネット大統領とも対等に話すことが出来る。

沈黙の艦隊の竹上登志雄によく似ている。

第5話 新たなる母港

5月9日

ヴェラ・ガルフは、強い光と扉の前の気配を察知して目を覚ました。

眩しいほどの陽光が、病室の大きめの窓から差し込んでいる。その光は、正確に眠っていた彼女の顔を直撃していたらしく、周りの景色の色が少し変わっているように見えた。

昨日、いつ眠りについたのか全く覚えていない。それほど疲れていたのかと、考えながら昨日の記憶を思い出そうとしたが、あいにく味気のない病院食が最後の記憶でそれ以外の事は一つと言っていていいほど何も覚えていなかった。

ヒトの身体になって初めて食べた食事があの味気がなく、そこまで美味くないこと
で有名（彼女の乗員の何人かが言っていた）な病院食だとは。

苦笑いを浮かべながら、今日は何をしたらいいかを考えていると、ドアが開く音がした。

起きた時に感じた気配を思い出した彼女は、窓の方に向けていた視線をドアに向け

た。

そこには、1人の少女が心配そうな表情を浮かべてこちらを見ていた。黒い髪をしたセーラー服の少女である。

少女は、ヴェラ・ガルフの顔を見てホツとしたような表情を浮かべた。どうやら、昨日よりはマシな顔になっているようだと考えていると、その少女が口を開き言った。

「えーと、ヴェラ・ガルフさんですよね？」

「そうですけど……」

「よかった、間違えてなくて。あつ、私特型駆逐艦1番艦の吹雪です。基地案内のために参りました」

吹雪か。ワシントン条約下の艦隊型駆逐艦。昭和3年の8月生まれで、最高速度38ノット。14ノット5000海里の航行が可能。武装は12.7センチ連装砲3基6門に3連装61センチ魚雷発射管3基9門、7.7ミリ機銃2挺。完成当時は、画期的な駆逐艦であったものの太平洋戦争開戦時にはすでに旧式化していた。

特型の中で生き残ったのは、特II型8番艦の曙と同じく10番艦の潮、特III型の2番艦響のみだった。

当の吹雪は、昭和17年10月11日ザボ島沖でヴェラ・ガルフの祖国であるアメリカの水上部隊と交戦、沈没している。

彼女の戦術情報システムは、それだけ告げると機能を停止した。不思議な気分だった。

アメリカと戦い散った駆逐艦が、アメリカの最新鋭艦に基地を案内するなど誰が予想できただろうか？しかも、2隻ともヒトの姿を得ているのだ。

かなり、ブツ飛んでいるが最早そんなことに驚く値しないほどこの数時間で経験してしまつた。だいたい、水中で直立出来る潜水艦と戦つただけでも充分におかしな話だ。「あ、あのー。どうかしましたか？」

吹雪が、心配そうに言つた言葉で彼女の思考は途切れた。ヴェラ・ガルフは、慌てて言つた。

「いえ、心配しないでください。ところで、基地の案内とは……」

「あつ、そうですね。説明が足りませんでした。すみません。えーと、昨日司令官とお会いしましたよね？」

「ええ、会いました」

「それでは、艦娘は自分の意思で戦うか戦わないか決める必要があるつて話も聞いていますよね」

「はい」

「その一環で、この基地に来た艦娘は基地の見学をしてもらうことになっています。」

一応、私とその案内役をさせてもらっているんです」

ああ、なるほど。話は理解できた。と言うより、さつきはなぜ理解できなかったのか分からないほど単純な話だ。どうも、朝は苦手らしい。

ヴェラ・ガルフは、言った。

「分かりました。それでは、案内お願いします」

その一言で、吹雪は笑顔で言った。

「はい！任せてください！」

この姿になって初めて出た外は、強い日差しによつて焼かれていた。これまで感じた中でおそらく、最も熱く感じられた。

その旨を吹雪に伝えると、彼女は笑いながら言った。

「きつと、艦娘になったからです。私も、艦娘になって初めての夏を経験した時は同じ風に感じました。艦だった頃は、そんなこと感じなかったんですけどね」

少し湿っぽい空気になったのは、ここが赤道に近い熱帯の島であるだけではあるまい。

そんな空気を吹き飛ばしたのは、その空気を作り出した張本人である吹雪だった。

「さつきの場所が、診療所です。基本的に人が入るところです。私たち艦娘は、ドックに入渠することで損傷や疲れを取っています」

「ドック？」

「はい。あそこに見えるのがそうです」

吹雪が、指差した方向に見えたのは昔見た日本の銭湯のような建物だった。

「あれが？」

「はい、驚きましたか？」

「驚いたも何も、あれはセントーじゃないですか」

「確かに建物は似ていますし、中身もそっくりですけど、銭湯ではないんです。艦娘は、ただあのドックに入るだけで怪我が治るんです」

啞然とした。ヴェラ・ガルフは、最先端な技術の塊であったがこの世界は、彼女のいた世界を遥かに凌駕する技術を持っているようだ。

「すごいですね…。まさか、そんな技術があるなんて…」

「確かにすごいですけど、正直、どれくらいすごい技術なのか良く分からないんです。私たち艦娘に関することのほとんどがブラックボックスの状態で、ただ運用しているだけと言うのが正確なところだと、司令官が言っていました」

ヴェラ・ガルフは、吹雪のその言葉の意味を考えた。それと同時に、江田中将の言葉を思い出した。

つまり、艦娘は本当に自然発生的に現れたという訳だ。おそらく、最もこの件に精通

しているのは、艦娘と共に現れた『妖精』さんであろう。

そんなことを考えているうちに、港湾施設が建ち並ぶ場所にやって来ていた。

吹雪が、その中でも一二を争うほどの大きさの建物を指差しながら言った。

「あれが、建造ドックと装備開発のための施設です。最近は、資材が少ないせいではほとんど運用されていませんけど、あそこで新しい艦娘を建造したり装備を開発したりします」

「いつぐらいから運用していないんですか？」

吹雪は、しばし考えたのちに言った。

「司令官と一緒にここに来た時から使用していませんから…ざつと半年ほどですね」

江田中将が話していたよりも逼迫した状態のようだ。早急に手を打ったほうがいい。が、戦果を挙げることでできない弱小艦隊に資材をやるのは勿体無いと言う上層部の考えも納得できる…。

「あのー、ヴェラ・ガルフさん？」

「…あつ、はい。何ですか？」

「次の場所に移動してもいいですか？」

「え、ええ分かりました」

2人は再び歩き始めた。途中、何人かの艦娘に会い話をしたが基本的にテンションが

高いとは言えない。もちろん、高ければ良いわけではないがそれなりに高い方が良いのは明らか（彼女の乗員たちにもそれが言える）であった。テンションは、ある程度士気に繋がる。

彼女は、吹雪に聞いてみた。

「聞いた通り、士気はあまり高くありませんね」

吹雪は、苦笑いを浮かべ言った。

「確かに、あまり高くありませんね。もちろん、司令官が悪い訳ではないんです。だけど、資源が少ないとどうしても下がってしまうんです…」

司令官は悪くない、か。

確かにそうだが、そう思っているのは何人くらいだろうと彼女が考えていると、吹雪が言葉を発した。

「伊良湖最中はおろか間宮アイスも出ないこの基地だし、資材も少なくて士気も高くないけど、そんなことは関係ないんです。司令官は、私たちの為に努力してくれている。私たちも、その努力に報いるためにできる限りのことをする。この基地では、それで充分なんです」

そう言えばと、彼女は考えた。

皆、なんだかんだ言って江田中將のことを良く言っていた。それが何を意味するか、

今、彼女は理解できた。

彼の努力は、無駄ではなくこの勝利から最も離れたこの基地に規律をもたらしていた。それも、大変強固で信じられないほどの連帯感も持った規律だ。この基地の艦娘は、彼のことを信じている。

ずいぶんと好かれているなど、考えた彼女は吹雪の後について基地を見て回っていた。

全てを見終わったヴェラ・ガルフは、吹雪と共にこれまでと違う雰囲気建物にたどり着いた。

吹雪が言った。

「ここが、泊地司令部です。司令官もここで仕事をしています」

なるほど、雰囲気が違う訳だ。彼女が、そんなことを考えていると、吹雪が突然言い始めた。

「司令官が、ヴェラ・ガルフさんと呼んでいます」

「…マジで？」

「マジです」

しばしの沈黙。やがて、彼女は諦めて言った。

「はあ、分かりました。案内してください」

数分後、ヴェラ・ガルフは提督執務室の座り心地のいい椅子に座り、江田中将と対峙していた。

「さて、基地の見学はどうだった？」

江田が言った。

「楽しかったですよ。吹雪さんもなかなか良い案内でした」

「キャリアがあるからな。もう何人も案内してきている。なにせ、彼女が私の初めての艦娘だったからね」

なるほど、吹雪がこの男のことを良く言う理由は分かった。

「さて、本題に入ろう。ヴェラ・ガルフ、キミはどうしたい」

主語が抜けているが、彼女にはそんなものがなくても理解できた。彼女は、言った。

「私は、戦いたいです」

「その理由は？」

突然、昨日の夜の記憶が甦った。彼女の答えは、昨日の段階でできていたのだ。

「自分の存在価値を探したいんです」

「存在価値？」

江田は、訝しげに言った。

「私が起きる前、夢のようなものを見ていました。これまでは、自分のクルーたちや艦長

を守ることが、私の存在価値でした。私が沈んでもきつとみんな脱出できたと思っていました。ですが、もし脱出できなかったのなら私はなぜ沈んだのか、私の価値はなんだったのかと思いました。パニックに陥った私は、そうして目を覚ましたんです」

江田は、何も言わずただ彼女を見つめていた。

「だから、探したいんです。そうしないと、自分が空虚な存在のような気がしてしまう。そんなことになるのもう嫌なんです」

江田は、しばし考えたような顔をしたのち、言った。

「なるほど。君の言いたいことは分かった。だが、戦ってもその存在価値は見つからないかもしれないぞ」

「何もしないで過ごすより、可能性のある方を選びます。これまでも多くの者がそうだったように、私も答えを見つけてみせます」

「そうか」

江田は、満足そうに首を縦に降ると言った。

「いいだろう。タイコンデロガ級26番艦ヴェラ・ガルフ、君の本基地の着任を許可する。しっかりと戦ってくれ」

江田は、しばし間をおいて言った。

「ようこそ我が艦隊へ。ここが君の新しい母港だ」

第6話 艦隊配属

5月12日

耳元で凄まじい爆音が響く。

驚いたヴェエラ・ガルフは、ベッドから飛び起きた。

そこで、彼女は気付いた。

このベッドは二段ベッドで、彼女の寝ている空間はそう高くないことに。しかし、気付いた時にはもう遅く、視界を覆う上のベッドが見えていた。

ガスッ！という鈍い音し、彼女の意識が飛びかけた。いや、一瞬飛んだ。

その後に襲いかかってきたのは、猛烈な痛みで、彼女は声にならない苦痛の叫びを発しながらベッドをのたうち回り、やがて落下した。

二段ベッドの下と言えど、高さはざつと30センチくらいはある。そこまで高いとは言えないが、頭をぶつけ、少なからずパニックを起こしている彼女には充分に高かった。背中から落ちた彼女は、しばしの間痛みを忘れ、呆然と横たわっていた。が、すぐに痛みはぶり返し、彼女は再びのたうち回り始めた。

ヴェラ・ガルフ、この世界に来て初の被害である。

ふと、隣にあったもう一つの二段ベッドから視線を感じ、彼女はそちらを見た。

「あのく、大丈夫ですか？」

そう言ったのは、ヴェラ・ガルフと同室の重巡古鷹である。どうやら、先ほどの音で起こしてしまつたらしい。

第一次ソロモン海戦の立役者の一人である古鷹だか、その壮絶な最期のことを考えると、どこか共感が持てるような気がする。

「大丈夫そうに見えたら、あなたの目は節穴ですよ」

と、ヴェラ・ガルフは、転がりながら言った。痛みは徐々に治まってきているが、頭はまだクラクラする。

「確かに、大丈夫じゃなさそうですね……」

古鷹は、気の毒そうな顔をして言った。

しばらくの間転がっていたヴェラ・ガルフは、やがて起き上がりこの悲劇の元凶を睨み付けた。

目覚まし時計は、未だに音を響かせている。

彼女は、立ち上がり辺りを見渡して何かを探し始めた。

「あのく、時計壊そうとしてないですか？」

古鷹の声にヴェラ・ガルフは、動きを止め、ゆっくりと振り返って言った。

「…なんでバレたんですか？」

古鷹は、ため息を吐きながら言った。

「今にも棒か何かで叩き潰してやろうって顔してますから」

ヴェラ・ガルフは、苛立ちげな顔で叩きつけるように目覚ましを止めた。

古鷹の二段ベッドの上の方が騒がしくなってきた。どうやら、もう1人の同居人も起こしてしまつたらしい。

「さつきからうるさいな〜も〜」

古鷹の妹である加古である。起工したのは、加古が先であるがクレインの故障によりネームシツプを取り損ねた不幸(?)な艦である。

また、第一次ソロモン海戦で古鷹と共に出撃したが、帰還途中米軍のS級潜水艦S-44(SS-155)に撃沈されている。

バーで朝まで飲むのが常だが、今日は珍しく早めに床についたらしい。

ヴェラ・ガルフは、素直に謝罪した。

「すみません、加古さん。そのうち美味しい酒を奢りますから」

加古は、眠そうな目を瞬時に輝かせて言った。

「本当！ヤッター。ちよつと高くて手が出せないヤツがあつたんだよね〜。ラッキー」

「あまり高いのはダメですからね」

と、クギを刺しておいたがおそらく聞いていないだろう。ヴェラ・ガルフは、冷汗をかきながら考える。艦娘も、給料は貰えるらしいが、今回の給料は加古の酒で消えることだろう。だが、それは仕方がないことだと諦めるしかなかった。

ふと、古鷹が疑問を持ったらしくヴェラ・ガルフに聞いてきた。

「そう言えば、ずいぶん目覚ましが早いですね。何か用事でもあるんですか？」

ヴェラ・ガルフは、しばしためらったがやがて観念したように言った。

「ちよつとした体力作りですよ。この身体を持った以上、前は必要なかった体力が必要になります。あなた方はこれまでの戦いで鍛えられています、私はそうではありません。昨日の体力測定で分かりました……」

「ああ。あれは……確かにその……そうですね」

「だからこそ、私は人一倍努力しなければいけないんです！」

古鷹は、再び気の毒そうな顔をして言った。

「頑張ってくださいね。体力が、少ないのは何もあなただけじゃないですから」

古鷹のその言葉は、ヴェラ・ガルフに何故か深く突き刺さるのだった。

さて、色々と忙しかったこの2日間である。

この基地に正式に配属になったのは、基地内の案内を受け、江田と話し合いをした次

の日で、その日は今後の扱いや給料、住居に食事など生活に必要なものから仕事内容まであらゆる書類の処理で1日を潰し、昨日は昨日で基礎体力の測定が行われた。

体力測定は悲惨の一言につき、ほとんど無いに等しかった。その後行われた基礎知識のテストは、この基地におけるトップの成績を叩き出したが、その前の体力測定の結果がヴェラ・ガルフに重くのしかかり、彼女のプライドをいたく傷つけた。

だから彼女は、ランニングでもしようと思ったのだ。

目標は、3キロ。そこまで長い距離ではないが、彼女にとっては十分に長い距離だった。

意思は強い自信はあった。たとえ、体力が無くとも意思の力でなんとかなる。精神論ではあるが、彼女はそれを信じていた。

しかし、走り始めてわずかに5分。疲労を感じている自分が信じられなかった。まだ、そう長い距離は走っていない。馬鹿な。

しばし走ったのち、ついに彼女は立ち止まり荒く息をした。

走った時間はわずか10分。ゆるいランニングであったため、距離はだいたい1キロと少し。目標の3キロに全く届いていなかった。

再び走ろうかと思ったが、体力的に無理があると判断し朝食までまだ時間があることに気付いた彼女は、今度はゆっくりと歩き始めた。

忙しくて気付かなかったが、この基地もどこか緊張感がありピリツとした空気が流れている。

士気は高くなくとも基地は基地かと考えながら、彼女は近きにあつた柱時計を見た。

0620。つまり6時20分。他の基地もそうだが、艦娘たちは海軍と同じ時間に食事をする。この世界における日本国防海軍は、彼女の世界で言うところの海上自衛隊に相当し、朝食の時間は同じ0630、つまり6時30分であつた。

もつとも、この時間に拘束力はほとんどなくどちらかと言うと食堂が開く時間と言う方が正しかった。

彼女は、朝食を取るために再び歩き出した。

他の基地には、鳳翔さんや間宮さんたちが食堂などで働いているらしいが、あいにくこの基地ではそんな贅沢は言つていられない現状があつた。いつでも放棄できる前線基地では、食えたらマシと言う考えが流れておりこれもまた、基地内の士気を下げている要因の一つになっている。

いたるところに存在する問題点を見ながら、ヴェラ・ガルフは1人で机を占領し、朝食を食べていた。

食事の量自体は軍隊らしく多めで、日本の朝食らしく焼き魚に白飯、味噌汁に漬け物、納豆、海苔、卵焼き、そしてなぜかサラダなどがありしつかりと栄養バランスを考えら

れている。

これだけ見れば文句はないのだが、食堂で働く人間の動きを見ているとその動きの一つ一つに違和感があった。

食事自体は温かいのだが、焼いているわけではないらしい。つまり、この焼き魚はレンジか何かで温めたもの、可能性で考えると冷凍食品であるかも知れない。

経費削減と考えるのが妥当で、そこからこの基地の逼迫具合が再び浮き彫りとなるのを、彼女は感じたのだった。

朝食を済ませたヴェラ・ガルフは、江田に呼ばれていたことを思い出し、食堂から少し距離のある泊地司令部に向かった。

数分ほど歩いたその時、後ろに気配を感じ振り返った。

そこには2人の軽巡、確か天龍と龍田だったか、がいた。

天龍は、古鷹と加古同様第一次ソロモン海戦に参加しており、空母大鳳を沈めたことで有名な米潜水艦アルバコアにより撃沈された。

龍田も、米潜水艦サンドランスに沈められている。

完成当時は、世界水準を軽く超えていたがそれから10年後には特型駆逐艦に着いて行くのさえ困難な状況になり、それ以降の駆逐艦にはそもそも着いて行けないほどの鈍足だった(33ノット。鈍足で有名な夕張より1ノット速いだけである)。

太平洋戦争当時の段階で、そこいらの駆逐艦より弱いと言う気の毒な軽巡であるが、本人たちはそこまで気にしていないらしい。

天龍が、駆け寄ってきて肩を掴み、思い切り揺らしながら言った。

「よお、お前が噂の新人か？オレの名は天龍、フッフ怖いか？」

ヴェラ・ガルフは、揺られるままに言った。

「はい、ヴェラ・ガルフと言います。よろしくお願ひしますね…、あつ、ちよつとこれ以上揺するの止めてください、で、出る…朝食が…」

天龍は、急に手を放したのでヴェラ・ガルフは後ろによろめいた。顔が青くなっているのが分かった。

天龍は、悪びれるわけでもなく謝った。

「おつと、すまねえな。ついやつちまつたぜ」

ふと、後ろに嫌な気配を感じ取った天龍は振り向くと同時に龍田に頭を引つ叩かれた。

「ごめんなさいねえ、天龍ちゃんが悪さして。私は龍田よく、よろしくね」

ヴェラ・ガルフは、この軽巡がかなり危険な人物であることを瞬時に悟った。皮肉の一言でも言いたいところだが、ここはよしておこう。

「よろしくお願ひします、龍田さん」

後ろでは、天龍が何やらギャーギャー言っているが2人はそれを無視しながら話し始めた。

「もしかして、あなたも提督に呼ばれたの？」

「はい。理由は聞いていませんが……」

「まあ、行けばわかるんじゃないかしら〜」

終始穏やかな口調だが、それがさらに恐ろしく感じるのはなぜだろうか？

答えが出ないまま、3人は泊地司令部に到着した。

提督執務室には、相変わらず疲労感溢れる江田が座り心地の良さそうな椅子に座りながら書類を見ていた。いや、正確には見えている振りをしているといったところか。

まあ、それはどうでもいいことだが。

しばらくの間、書類を見ていた江田はそれを机の端の方に流し、こちらに視線を向けた。忙しい雰囲気醸し出そうとしているが、残念ながらできていない。

江田は、3人の顔をそれぞれ見た後言った。

「さて、諸君らを呼び出したのは他でもない新しい艦隊編成を組むからだ」

その言葉が、全員の頭で理解するのを待つように少しの間をあけた江田は再び話を始めた。

「今現在の第二艦隊にヴェラ・ガルフを編入し、戦闘力の強化を図る」

第二艦隊は、龍田を旗艦とした水雷戦隊で天龍、吹雪、白雪、初雪、深雪の全6隻の編成である。ちなみに、天候が荒れる時は出撃していない。出撃しない理由は、天龍型の2人が特型駆逐艦たちに着いて行けなくなるからだろう。

それはさておき。

ヴェラ・ガルフは、焦りながら言った。

「ちよつと待つてください。今の私の体力では部隊に付いて行ける気がしません」

「なに、問題はない。別に実戦をするんじゃない。あくまで偵察任務に付いて行くだけだ」

ヴェラ・ガルフは、しばし躊躇ったのちに言った。

「分かりました。私は別に構いませんが、お二方が認めてくださるかどうか……」

「オレは別に構わねーぜ、なあ龍田」

「天龍ちゃんが言うなら私もそれでいいけど」

即答であった。

江田は満足気に頷くと言った。

「と、言うわけだ。ヴェラ・ガルフ、第二艦隊への配属を命ずる」

「了解」

ヴェラ・ガルフは、諦めに近い何かを感じたのだった。

第7話 顔合わせ

辞令を受けたヴェラ・ガルフは、後の2人と共に泊地司令部を出て第二艦隊の面々がいる宿舎に移動を始めた。

途中、現在使用している自室に戻り少ない荷物をまとめたのち古鷹と加古の2人に感謝の意を述べて部屋を後にした。

再び天龍と龍田と合流した彼女は、2人にある質問を試してみた。

「あの、お二人はこの基地のことをどう思っていますか？」

唐突な質問に一瞬困惑したような表情を浮かべた2人だが、先に理解した天龍が、返答した。

「おいおい、何でもまたそんなことを聞くんだ？」

ヴェラ・ガルフは言った。

「聴きたいから、聞いたままでです。特に深い理由はありません」

天龍は、諦めたようにため息を吐きつつ言った。

「士気は低い。それも最低に。補給は少ないし飯も食えたらマシって感じで、部屋もそこまで広くない。唯一、いいところかも知れないのは暇な日が多いってことだがオレら

にとつては、正直いい迷惑だ」

散々な評価だ。ヴェラ・ガルフは、やはりそう思う艦娘もいるかと考えているところに、天龍は続きを言った。

「けどよ、それは提督が悪いわけじゃない。こんな放棄寸前の基地に来た以上、生活がそこまでいいとは思ってない。提督は提督で少ない資材で頑張ってくれてる。そんじやあ、オレたちもそれに協力していく義務があるだろ？」

ほとんど狂信的。ここまで来ると、もはやそうとしか言えない。

それほどまでに、江田と言う男は信用されているのか。

これではやはり、あの男、自分を沈めた海江田 四郎とまるで同じではないか。カリスマ的な意味で。

1人物思いに耽っていると、肩を揺すぶられた。我に返ったヴェラ・ガルフは、こちらに怪訝そうな顔を向けている天龍の姿を見た。

「どうしたんだ？時々、心ここに在らずって顔してるぜ」

ヴェラ・ガルフは、天龍の手を肩から下ろしつつ言った。

「すみません、どうも考え事が多くて……」

「い、いや、別に考え事が悪いって言ってるわけじゃないんだ」

天龍は、慌ててそう言った。

この会話を、龍田は楽しそうに見ながら独り言った。

「また、面白い人が来たみたいね〜」

第二艦隊の面々がいる宿舎は、ヴェラ・ガルフのいた宿舎と少し距離があった。食堂は、前回の宿舎より遠ざかりその他の重要な施設より少しばかりの距離があった。

もつとも、少しと言つても歩く時間は20分ほどに増え、食事をするのも一苦勞なのだ。

それはさておき。

3人が宿舎にたどり着いた時には、赤道付近の島らしく蒸し暑い空気のおかげですっかり汗だくになっていた。人間の体にも不便なところがあると考えながら、ヴェラ・ガルフは2人に続き宿舎に入った。

宿舎内は、クーラーが効いており快適な環境を室内に作り出している。放棄前の前線基地になぜこのような文明の利器があるのか不思議に思ったが、それを口に出すことは無かった。

噴き出していた汗が乾いていくのを感じつつ、彼女は2人に着いて行く。6人に与えられた宿舎にしてはずいぶん広いと思いつつ、彼女が歩き続ける。ふと、空部屋を見た彼女はここが全盛期は宿舎いっぱいには艦娘がいたのだろうと予想した。この建物が建てられた当時は、このような事態になることは予想していなかっただろうと考えな

がら歩いていると、急に立ち止まった天龍の背中に顔をぶつけた。

鼻を抑えたヴェラ・ガルフを見ながら、天龍はすまんと頭を下げたがそれも一瞬で彼女を開いていた扉に押し入れた。

彼女が、半ば押し込められるように入った部屋の中には4人の同じような格好をした少女たちがいた。

驚いたような表情をした少女たちは、1人を除いて全員が警戒の顔をした。後ろの2人がニヤニヤしているのを感じた。復讐を決意したヴェラ・ガルフは、覚悟を決めて言った。

「はじめまして、新たに第二艦隊に配属になりましたヴェラ・ガルフです。よろしくお願います！」

顔が赤くなっているのを感じながら、ヴェラ・ガルフは少女たちの反応を待った。

反応はない。少しばかり動揺しているの少女たちを見て、ヴェラ・ガルフは少女たちに背を向けてゆつくりと部屋を出た後、急に走り出した。

「God damn!」と、彼女は叫びながら逃走を開始した。

天龍と龍田は、しばし呆然としたが我に返りヴェラ・ガルフを追いかけ始めた。

取り残された駆逐艦娘たちは、お互いに顔を向けた。

全員の考えは一致していた。

「大丈夫かなあ……」

ヴェラ・ガルフが、再び宿舎に戻って来たのはそれから30分後のことで、2人（特に天龍）の顔は疲労感に満ち溢れていたが、ヴェラ・ガルフ本人はほとんど消耗していないように見えた。

「それでは改めて自己紹介をさせてもらいます。私はタイコンデロガ級打撃巡洋艦26番艦ヴェラ・ガルフです。本日付けで第二艦隊に配属されました。よろしく願います」

その落ち着いた口調からは、先ほどのような緊張感を感じられずまるでそんなことは無かったかのようだ。

『よ、よろしく願います』

駆逐艦娘たちは、そのギャップに戸惑いながらも返答した。先ほどのことは話題にせずに、ヴェラ・ガルフと面識のあった吹雪が他の面々の紹介を始めた。

「え、えーと、それではこの子たちの紹介をしますね。まずは、白雪ちゃん」

白雪は、しつかりとした言葉で答えた。

「特型駆逐艦、2番艦、白雪です。よろしく願います」

ヴェラ・ガルフは、頭を下げた。何か考えごとをしているらしいが、吹雪は紹介を続けた。

「次は、初雪ちゃん」

布団にくるまつている初雪がめんどくさそうに答えた。

「特型駆逐艦…3番艦…初雪」

それだけ言い終わると、初雪は布団の中に頭を入れた。いつものことらしく、誰もがため息をついている。

吹雪は、空気が元に戻るを待つてからさらに続けた。

「次に、深雪ちゃん」

「特型駆逐艦4番艦の深雪様だよ」

全員の名前と顔が一致したヴェラ・ガルフは、この4人の評価を考えた。吹雪、白雪、初雪の3人は太平洋戦争に参加していたが、深雪は参加できていない。もちろん、参加できなかった方が良かったとも言えるが。

どちらにせよ、実戦を見てみないと分からないので評価の設定は保留した。

「よし、これで顔合わせはできたな。そんじや、全員で昼飯行くぞ！」

天龍は、まだ昼でもないのに言ったがどうやら他の面々も賛成らしく、ぞろぞろと動き始めた。

ヴェラ・ガルフは、呆れつつも布団に籠っている初雪を引きづり出して付いて行った。

20分歩き続けた7人は、汗だくになりながら食堂にたどり着いた。天龍が、今日は

奢ってやると息巻いている。どうやら、新人のヴェラ・ガルフに姉貴肌を吹かせたいようだが、あいにく彼女には効果はなかった。

食事がある程度済ませると、どう言う経歴を持っているかを聞かれた。あまり話したくなかったので軍機を盾にしようとしたが、興味津々の彼女らの顔を見ると話さざるを得ないことを瞬時に察した。

ヴェラ・ガルフは、ため息を吐くと話を始めた。

「実戦を経験したのは一回。米第3艦隊に所属していた時で、『やまと事件』に巻き込まれることになった」

『やまと事件』？本土の鎮守府にいる大和のことか？」

天龍が、疑問に思ったらしく言った。

ヴェラ・ガルフは、首を振ってそれを否定する。

「違います。正式な名前は、シーバットと言います。『やまと』は、あくまで自称であって本名ではありません」

天龍は、了解を告げると先を促した。

「私は、脱走艦である『やまと』を沈めるために空母ミッドウエーを旗艦とした第3艦隊と共に沖繩沖に派遣され、『やまと』と交戦しました。この段階で、ミッドウエーと多数の艦が撃沈されました。自分で言うのも何ですが、あの世界で私は世界最強の洋上

艦と呼ばれていました。最新鋭の戦術情報システムを備えた私に、ほんの少し強い原潜に負けるはずがない、そう思っていました」

白雪が、言った。

「あの、原潜って何ですか？」

ヴェラ・ガルフは、しばし考えて言った。

「原子力は分かりますか？」

「なんとなくは……」

「原潜、つまり原子力潜水艦は、名前の通り原子力を利用した潜水艦です。これにより、潜水艦は半永久的に潜行が可能になりました。原子炉が動く時に酸素を発生させるからです。原子力は、潜水艦に最も合った機関と言えます」

白雪は、感銘を受けたように頷いた。

ヴェラ・ガルフは、改めて話し始めた。

「しかし、姉のレイク・エリー、ケープ・セント・ジョージが『やまと』の魚雷で損傷し、わずかな間に戦闘可能な艦は私だけになりました。そして……」

彼女は、しばらく間を空けたのちに言った。

「私は合計4本の弾頭を抜いた魚雷を撃ち込まれて、沈みました。11月29日20時50分のことです」

重い空気が流れる。この話を振った天龍は、きつと後悔していることだろう。

ヴェラ・ガルフは、この空気をなんとかしようと思つたと振る舞つた。

「まあ、過ぎたことですから気にはしません。相手が悪かつたと諦めることにしています。それに、今私は生きています。過去に縛られずに行動することに、私は重きを置いていきます」

微かに空気は良くなったが、それもほんの少しだ。まだ押しが足りないかと思つてるところに、天龍が乗り出した。

「そんなことより、オレらよりもちつちえー巡洋艦が来てくれて嬉しいぜ。なあ龍田」
「そうね。まるで駆逐艦見たいなものね」

ヴェラ・ガルフは、口をポカンと開けた。そして、言つた。

「あのお、お二方？私、あなた方より大きいですよ」

今度は、天龍が口を開ける番だ。

「え？いやだつてよ、お前どう見ても駆逐艦娘サイズじゃねーか。巷じゃロリっ子とか言われてるくらいの大ささだぜ」

ヴェラ・ガルフは、冷静に反論する。

「ええ、私は駆逐艦サイズです。見かけはね。その理由は、私が建造された時にスプルーアンス級駆逐艦の船体を利用されたからです。イージスシステムを積んだから軽く9

000トン超えてますよ。あなた方の基準に合わせると重巡くらいのサイズですよ。だいたい、ロリっ子で何ですか？」

「…マジで？」

「マジです」

沈黙。龍田は、相変わらずニコニコしている。

やがて、天龍が気が抜けたように机に倒れかかった。

「マジカー。ようやく、同じ巡洋艦相手に先輩風吹かせられると思ったのに…」

しばし突っ伏した後、突然飛び起きた天龍は最後の賭けのような感じで言った。

「艦だったころの全長は!?？」

ヴェラ・ガルフは、無慈悲に返答した。

「567フィートです」

「それって何メートルだ!?？」

「173メートルです」

天龍は、再び突っ伏して言った。

「負けた…」

馬鹿馬鹿しい意地の張り合いは、ヴェラ・ガルフの勝利で幕を閉じた。

これを見ていた駆逐艦娘たちは、なんだか悲しくなつたとか、自分はこうならぬよ

うにしようなど散々な評価だったと言う。

宿舎に戻った彼女らは、ある程度まで打ち解けていた。アメリカの艦と聞いて、怖がっていた駆逐艦娘たちも自分たちと同じ駆逐艦サイズと言うこともあつてすぐに慣れてしまった。

一方天龍はと言うと、先ほどの件が未だに響いているらしく龍田に慰めてもらつてい

る。
何てことはない、第二艦隊の日常に新たな風が吹いていた。

その日の夜。泊地司令部に、ヴェラ・ガルフは呼ばれていた。

何となく呼ばれた理由は分かつていたが、聞かすにはいられなかった。

「なぜ呼んだんですか？」

江田はニヤリと笑つて言つて。

「何となくは分かつているんじゃないか？」

ヴェラ・ガルフは、ため息を吐いて言つた。

「明日にも偵察任務に行つて来いつてところですか？」

「その通りだ。流石に良く分かつているな」

「少し考えれば誰にでも分かります。それで、なぜ私を呼んだんですか？」

「さつき君が言つたように偵察に……」

「違います。普通は、旗艦を呼ぶと思うんですが」

江田はますます笑みを大きくする。その表情を見た彼女は、江田の真意を理解した。

「まさか、私に旗艦をしろと?」

「その通りだと言いたいところだが、違う。君と話がしたかったから来てもらったんだ」

「話…ですか?」

「そうだ」

ヴェラ・ガルフは、いまひとつ理解できなかったが江田は、彼女の返答を待たずに言った。

「君は、前の世界で私と会ったことがあるな?」

ヴェラ・ガルフは、大いに驚いたがそれを顔には出さずに言った。

「ええ、会いました」

「敵か味方か?」

「敵です」

「君を沈めた相手か?」

ヴェラ・ガルフは、返答を躊躇ったものの言った。

「そうです」

江田は、ため息を吐いて言った。

「やはり、か。そうではないかと思っただ」

しばしの沈黙。江田は、その後と言った。

「その人物の名前は？」

「海江田 四郎。階級は少将、一応米第7艦隊の所属です」

「一応？」

「はい。海江田少将は日本初の原潜の艦長に選ばれ、その初航海時に逃走、その後第7艦隊を脅迫しつつ独立国『やまと』を名乗り再び逃走、日本に向かう途中でロシア太平洋艦隊の攻撃型原潜レッドスコープオンと交戦し勝利、そして沖繩沖でロシア太平洋艦隊と米第3艦隊と交戦、ロシア艦、米艦それぞれ多数の艦を撃沈、もしくは損傷させています。そして、撃沈された米艦の中に私もいた訳です」

「…ずいぶんな経歴を持つているな、君の世界の「私」は。それで、君は彼を…つまり、「私」を恨んでいるか？」

彼女は、迷うことなく即答した。

「もちろん、恨んでなんかいません。海江田少将のことも、あの人のことも…」

長い沈黙が続いた。彼女は、その場で微動だもせず江田の返答を待ち続けた。

江田は、ポケットから煙草を取り出し、火をつけた。

彼は、窓の外に顔を向けて言った。

「：明日の朝0830時より偵察のために出撃してもらおう。偵察と言っても、どちらかと言うと哨戒任務に近い。本基地の周辺海域を規定のコースに従って航行してもらおう。何か質問はあるか？」

「規定のコースとは何ですか？」

「それに関しては、第二艦隊の面々の方が詳しく説明できるだろうから、そつちに聞いてくれ」

「はい」

「他に質問は？」

「ありません」

「よろしい。以上だ、行っていいぞ」

彼女は、しばし考えてから提督執務室を後にした。

江田は、最後までこちらに顔を向けることはなかった。

第8話 初めての出撃と強襲

5月13日

朝が来る。

明るい陽光は、あらゆるものを等しく包み込む。

光に照らされた、どこまでも続く海。それは、今では人類がそう簡単に踏み込んでならない領域になっていた。いや、戻ったと言うべきかもしれない。

ヴェラ・ガルフは、走りつつそう考えた。

搾取し過ぎた人類を、自然は追い出した。そう考えと今の状態は人類が自ら蒔いた種とも言えたが、あいにく人類にどうしても必要なのが海洋資源だ。

どちらにせよ、彼女にとってはそこまで気になる問題ではなく、人類自身が解決せねばならない問題に部外者が立ち入るのは無粋だ。

立ち止まった。息が乱れているが、昨日ほどではない。体力は付きつつあるようだ。

しばしの間立ち止まり、海の方に顔を向ける。息を呑むほどの光景だが、それに見とれている場合ではない。

彼女は、それに背を向ける。海に出る前にやるべきことはいくらでもあるのだから。6時半きっかりに食堂に入ったヴェラ・ガルフは、他の艦娘たちが談笑しながら入ってくるころにはすでに食事を終えていた。

彼女は、入れ替わるように外に出た。一瞬、呼び止められたように感じられたがそれを聞こえなかつたふりをして立ち去つた。

誰とも話さず、食事を済ます。まるで、クラスの暗い生徒のような感じだと苦笑いを浮かべたが、それが彼女の生存に影響がない以上関係のないことだった。今は、仕事のことを考えねば。

彼女は、とりあえず気象状態をレーダーで確認する。昨日、龍田から聞いた規定のルートの状態を確かめる。

今のところ、海を荒らす雲はないようだ。風速もそこまで強くなく、艦載機を飛ばすにも申し分ない天気だ。

偵察任務には良い日だ。もちろん、ある程度の悪天候でも彼女の索敵能力が落ちることはないが。しかし、やはり天気がいいほうが気持ち的にも嬉しい。

後ろに気配を感じ、振り返る。

見覚えのある少女がいた。確か…。

「瑞鳳さん…でしたっけ？」

「そうです。直接話すのは初めてですね」

「そういえばそうだ。何度か会ってはいるが話すのはこれが初めてだ。」

「ところで、何の用ですか?」

「激励つてところですか」

「激励?」

「はい。今回の偵察が初めての出撃ですよね?」

「ええ、そうですけど…」

「最初の出撃は慣れないことばかりで上手くいかないものです。私がそうでしたから。だから、ヴェラさんにも頑張つて欲しいんです。たとえ失敗したとしても」

「優しい少女だ。もっとも、飲酒適齢期であることは加古から聞いていたが。しかし、艦娘の年齢は何をもって決まっているのだろうか?」

「真実は、あの濃紺の海よりも深いのかもしれぬ。」

ヴェラ・ガルフの名前が、ヴェラで統一されたのは昨日のことだ。そのエピソードに
関しては、いざれ語るとして今はすでに海の上にいる第二艦隊に話を向けよう。

海に出て2時間。思っていた以上に快調な滑り出しを見せた彼女の初出撃は、穏やか
そのものだった。

空にはカモメが飛び、碧い海は沖へ出るごとに深みを増し、とても人が生み出すこと

のできない美しい碧色を見せてくれている。

第二艦隊の面々も、楽しそうに談笑しているのを見るととても戦時下とは思えない。きっと、彼女のいたあの世界でもクリスマスは穏やかに過ぎるだろうと、彼女は予想した。

あまりにも戦闘と離れた場所では、どうしてもその戦闘が同じ世界で起こっていることに思えないのだ。

旗艦を勤めている龍田が、こちらに顔を向けて言った。

「そろそろ艦載機を出してもらえるかしら？」

「分かりました」

ヴェラ・ガルフは、そう言うのと腰のあたりにある飛行甲板に手をかけた。格納庫からSH-60Bシーホークが現れた。彼女自身、この身体を得てからこの機体を見るの初めてだった。

格納庫から現れたシーホークは、まるで手乗りインコのように小さく可愛らしい。瑞鳳が、自分の艦載機を見てかわいいと言う感覚がなんとなく分かる気もする。

しかし、小さくなったとは言え能力的には通常サイズと全く変わらず、対潜攻撃もそつなくこなせるようだ。

シーホークの妖精が、発艦許可を求めてきたので彼女は即座に許可を出す。

小さな海鷹は、灰色の飛行甲板を蹴り青空に舞い上がった。

徐々に速度を上げるシーホークは、やがて視界から姿を消した。ヴェラ・ガルフは、シーホークをレーダーで追う。シーホークを表す光点が、第二艦隊から遠ざかり予定の哨戒海域に向かっていているのを確認した。

次いで再び出てきた2機目のシーホークに発艦許可を出し、鷹を空に送り出すまでにかかった時間は、わずかに1分程度。もちろん、現実ではもつと時間がかかるが何せ発艦のための細々とした作業のほとんどが省略されている。

艦に意思がある艦娘らしい発艦方法と言えた。

ふと、第二艦隊の面々がこちらを見ているのに気付いた。

「何ですか?」

ヴェラ・ガルフの問いに、初雪が珍しく発言する。

「ん、カ号」

「カ号?」

「ん」

ヴェラ・ガルフの問いに初雪は頷く。

カ号と言えば、カ号観測機のことだろうか? そうだとしたら、シーホークとカ号を見間違えたのだろうか? いや、おそらくカ号に似ていたからそう言ったのだろう。

「あいにくですが、これは力号観測機ではありません」

この答えに、天龍が興味ありげに聞いてきた。

「んじや、さっきのオートジャイロはなんだ？」

「あれはオートジャイロではありません。SH-60Bシーホークと呼ばれるヘリコプターです」

「ヘリコプターってなんだ？」

「説明するのが面倒くさいやつです」

「ハア？」

天龍は、意味が分からんと言いたげに言った。

ヴェラ・ガルフは、ため息をついた後返答する。

「はつきり言つて、私にもよく分からないんですよ。それでも何か言えとおっしゃるなら、オートジャイロは他の推進器から得た風力で回転翼を回して揚力を得るのに対して、ヘリコプターはローターと呼ばれる回転翼をエンジンで自力で回して揚力を得ているって言ったところですよ」

天龍は、しばし考えた後に後ろでニコニコしている龍田に聞いた。

「お前はヴェラが言ったこと分かったか？」

「なんとなく分かったわ」

「本当か？おれにはさっぱりだったぞ」

「あらく、天龍ちゃんには少し難しかったかしら」

「おれはそんなに馬鹿じゃないぞ！」

「でも、さっきの話は分からなかったんでしょ？」

「うっ…、そ、それはだなー、あつ、あれだちよつと本当に理解してるか聞いてみただけだぜ」

「本当に〜」

「本当だ！」

ヴェラ・ガルフは、まだまだ続きそうな2人を置いて4人の駆逐艦娘に補足説明をしていた。

「SH-60Bは、アメリカのシコルスキー社製のH-60の海軍仕様の機体で、基本的には陸軍のUH-60ブラックホークを元にしています。しかし、実際のところは相違点が多く、別機体と見るのが普通ですね。」

LAMPSSつまり、軽空中多目的システムとして開発された機体です」

「あの、軽空中多目的システムってなんですか？」

白雪が言った。

ヴェラ・ガルフは、その問いにしっかりと答える。

「基本的には、対潜活動が多いですが目標の探索や対艦ミサイルでの攻撃、救難活動に輸送活動、電子戦、指揮連絡ととにかく様々な任務で運用されるまさに多目的機です。使い勝手が良いので、各国で運用されています。日本でも海上自衛隊、いや今は国防海軍ですね、そこでも使用されているはずですよ」

深雪が言った。

「そう言えば、前の基地にいた日向先輩がロクマルは積めないぞつとやってたっけなあ」
「そのロクマルがどの種類の機体かは分かりませんが、おそらくSH-60のことでしょうね」

「へえ、あの機体のことを言ってたのか。納得」

「SH-60はLAMPSの3代目で、LAMPS MkⅢと呼ばれています。私には後部の格納庫に2機搭載されています」

「潜水艦を潰せるってのはいいことだぜ」

天龍が話に戻ってきた。

ヴェラ・ガルフは意地悪く言ってみる。

「おや、お話は終わったんですか？」

「うっせえ」

天龍は強く返答する。苛立っているのがよく分かる。

ヴェラ・ガルフは、ニヤリと悪い笑顔を浮かべたがそれ以上の追及はしないでおいた。それからさらに2時間後。

服から取り出した時計を見た龍田が言った。

「そろそろ針路変更の時間ね〜」

「おつ、もうそんな時間か。やっぱ戦わねえとやり甲斐ないな」

天龍がぼやく。龍田が、天龍を咎めた。

「も〜、天龍ちゃんつたら哨戒任務も立派な仕事よ」

「分かってるって」

そう言いながら、天龍は針路を変更する。

突然だった。

ヴェラ・ガルフの頭に声がよぎる。

《こちら海鷹1、正体不明の艦隊を発見！空母3、重巡2、軽巡5、駆逐艦6の大艦隊！艦隊速度15ノットでパラオ泊地に接近中》

ヴェラ・ガルフは、とっさに反応する。

「こちらヴェラ・ガルフ、不明艦隊の位置を知らせてください」

《こちら海鷹1、不明艦隊は貴艦隊より8時の方向に約540キロの地点。本機は現在安全距離に離脱中》

「了解、泊地に警告を出します。不明艦隊の動向を逐次報告してください」

《了k…、クソツ…こちら海鷹1攻撃を受けている！『深海棲艦』の機体だ！》

「こちらヴェラ・ガルフ！現在の任務を放棄、逃げ切ってください！」

《分かっていますよ、クソツ…奴らめ、立体機動で度肝を抜いてやる。一旦切ります。無事を祈っててもらえるとありがたいです！》

「分かりました。すぐにそちらに向かいます、それまで持ち堪えてください！」

《保証はできませんが…努力します！オーバー》

無線が切れ、頭の中の言葉も途切れた。

「あの、何かあったんですか？」

立ち止まっていたヴェラ・ガルフに気付いた吹雪が、心配そうに聞いてきた。

「嫌なニュースです。『深海棲艦』の艦隊を発見しました。空母3隻の機動部隊です」

吹雪の顔が青ざめる。

「何だ、どうした？」

他の面々も、彼女らの周りに集まって来た。ヴェラ・ガルフは、皆に機動部隊発見の報とシーホークが攻撃を受けている旨を伝えた。

「どうとう来たか…」

さつきまで威勢のいいことを言っていた天龍も、突然のことに驚いているようだ。

ヴェラ・ガルフは言った。

「こんなところで何もしないで突っ立っている訳にはいきません。まずは、泊地に連絡、次に敵艦隊を迎撃します」

「場所は分かっているの？」

龍田が聞いてきた。ヴェラ・ガルフは領きながら言った。

「本艦隊より540キロ、約300海里南西の地点です」

「全力で飛ばせば1時間で接敵できるな……」

天龍は小さくつぶやき、やがて言った。

「龍田」

「何かしら？」

「やれると思うか？」

「当たり前じゃない。最近、私も欲求不満が高まっているのよ」

「んじゃあ、決まりだな」

天龍が周りの駆逐艦娘たちのほうを見た。全員が頷く（1人は仕方がなさそうにだが）。

天龍は満足そうに頷くと、ヴェラ・ガルフに顔を向けて言った。

「と、言うわけだ。ヴェラ、指揮をとってくれ」

「…は…？」

く回想開始く

あ…ありのままに今起こったことを話します

『さつきまで旗艦じゃなかったのにいつの間にか旗艦になっていた』

な…何を言っているのか分からないと思いますが、私自身何故こうなったのか分からなかった…

頭がどうにかなりそうです

耳がおかしくなったとか聞き違いとかそんなチャチなものじゃ断じてないです

もつと理不尽なものの片鱗を味わいました…

く回想終了く

「何で私が旗艦になってるんですか!?!？」

天龍がさも当然と言いたげに言った。

「いや、敵艦隊の正確な位置分かかってんのがヴェラだけだし。それに、続報が1番最初に来るのはシーホークの母艦のヴェラじゃねえか」

「う…」

確かに理にかなっている。しかし、この世界に置ける実戦経験がない彼女が指揮をとるのはやはりどうかと思う。

ヴェラ・ガルフは、食い下がって言った。

「龍田さんはいいんですか？」

「私は別にいいわよ」

たつた今、ヴェラ・ガルフ最後の望みは絶たれた。つまり、腹をくぐるしかないと言
うことだ。

「分かりました、やりましょう。とりあえず、針路を変更。方位2—4—0」

全員がヴェラ・ガルフに続いて針路を変更する。

彼女は次の仕事を始める。泊地への警告だ。

「こちら第二艦隊新旗艦ヴェラ・ガルフ。応答されたし」

沈黙が続く。もう一度言おうとしたその時、無線が音を発した。

《こちらパラオ泊地。指揮官の江田だ》

指揮官が直々に出るとは、よほど暇なのかと思つたが彼女は本題にすぐに入った。

「こちら第二艦隊新旗艦ヴェラ・ガルフです」

《ヴェラか？新旗艦って何だ？まさか…》

無線の向こうから焦りが感じられたので、彼女は落ち着いて言った。

「龍田さんは無事です。少なくとも今のところは…」

ホツとため息が聞こえたのも一瞬、緊迫した口調が返ってきた。

《何があつた？》

「数分前、私の艦載機が敵艦隊発見を報じました。空母3隻を擁する機動部隊です」
《ついに来たか。それで、今はどうしている？》

「現在、敵艦隊との接敵のために前進中です」

《分かつた。すぐに、増援を送る。敵の位置は分かるか？》

「最新の情報だとパラオ泊地から南東方向に400海里程度です」

《少し雑な位置だが…》

「私のレーダー圏内に入ればより精度の高い情報が出せますが…」

《分かつている。その時は教えてくれ》

「了解しました」

《よし、他に報告することは？》

「ありません」

《分かつた。私は地上でぬくぬくとしている人間だ。そんな人間に言われたくないかもしれないが、言わせてくれ。無事に帰って来い》

「心配いりませんよ、『世界最強の洋上艦』の名は伊達じゃありません。それでは」

彼女は無線を切る。

と、再び無線が動いた。

《こちら海鷹1》

「こちらヴェラ・ガルフ、海鷹1へ。無事ですか!?？」

《こちら海鷹1、なんとか無事です。飛んでいるのがやつとつてところですが、まだ空にいます》

「よかつた…」

《できれば早く迎えに来てください。こつちが落ちる前に…》

「分かりました。今そちらに向かっていますから、もう少しの辛抱です」

《頼みます》

そう言うと、無線は切れた。

ヴェラ・ガルフは第二艦隊の面々に言った。

「急ぎましょう。私の艦載機が落ちる前に」

「でもさあ、艦載機が落ちるのは仕方ないことじゃない?」

そう言ったのは深雪である。確かにその通りかも知れないが、あいにくこの機体はそういうわけには行かない。

「残念ですが、落としたら結構マズイことになるかも知れませんよ」

「なんで?」

深雪の疑問にヴェラ・ガルフは答える。

「あの機体、結構高価なもので落ちたらどれくらいの資材が吹っ飛ぶか分からないんですよ」

この意味が分からない者はいなかった。

「それなら急がないとね」

深雪も言った。

彼女たちは海上をひた走る。パラオ泊地のために、人類の明日のために。

そして、もっとも重要なもの。

つまり自分たちの明日の腹のために。

第9話 初陣

彼女たちは海を駆けつけていく。

最初はしっかりとした陣形を保っていたが、ヴェラ・ガルフは自分が徐々に引き離されていることに気付いた。

急げと言った自分が遅れているのは格好がつかない。彼女は、必死について行こうとしたが、ついにはかなり引き離されてしまった。

さすがにおかしいと思ったのだろう、第二艦隊の面々はその場で止まり待つてくれた。

数分後、彼女が追いついたところで天龍が言った。

「急げって言った割には結構遅いぜ？」

「すみません……。あのく、皆さんの速度は何ノットでしたっけ？」

少女たちは顔を見合わせて言った。

「オレら33ノットだけ」

天龍が自らと龍田の最高速度を述べた。

「私たちは38ノットです」

駆逐艦娘を吹雪が代表して言った。

ヴェラ・ガルフは、ため息をついて言った。

「申し訳ないんですが……私、32、5ノットです」

沈黙。皆、何故先に言わなかったのかと言いたげな顔をしている。ヴェラ・ガルフは、それを見て恐縮するしかなかった。

白雪が言った。

「とりあえず進みましょう」

この意見に反対する者はいなかった。

途中、危ぶまれていた2機のSH-60B回収をなんとか成し遂げた彼女らは、とりあえず自分たちの胃が守られたことに安堵したが、危機が去ったわけではない。次は、帰る場所を守らなければならない。

しばしの間立ち止まっていた第二艦隊の面々は、再び動き始めた。

30ノット以上の艦隊速度を維持するのはあまり良いことではないのだが、基地が危機に晒されている以上、燃費は無視するべきだろう。

さて、戦闘を開始する前にやっておかねばならないことがある。

何も考えず、出たとこ勝負で攻撃をかけるのはもちろん良いことではない。少なくとも、それらしい作戦を考えなければ。

「と、言うわけで作戦を説明します」

ヴェラ・ガルフは言った。

第二艦隊の面々は、彼女に先を促す。

「まず、敵艦隊ですが空母3隻の機動部隊です。当然、主力は空母です。これを叩かない手はありません」

同意を示す頷きが帰ってくる。

「そこで、私の対艦ミサイルRGM-84『ハーブーン』をぶち込みます。シースキミングで攻撃すれば、30キロ圏内に近付かない限りレーダーで気付かれる恐れはありません。もつとも、気付かれても撃墜は困難でしょうが」

「それで、そのハーブーンって言うミサイルの射程距離はどれ位なの？」

龍田が聞いてきた。

「ざっと140キロ程です。しかし、低空では空気抵抗が大きいので射程距離は少し短くなります」

皆が仰天したような顔をした。

「スゲーな…ハハハツ…オレたちはもう要らないようだな…」

天龍が言う。きつと他の者も同様に思っているだろう。しかし、今のヴェラ・ガルフには彼女たちの力が必要だった。

「そんなことはありません。まず、ハーブーン一発ではよほど当たりどころがよくない限り空母を沈める力はありません。今回も沈むかもしれないませんが、おそらく航空機の発艦を阻止する程度の損害しか与えられないでしょう。」

それに、ハーブーンは資材を持つていくことが予想されます。重巡や軽巡、駆逐艦なんかに撃ち込むのは効率がいいとは言いがたい」

彼女は一呼吸置いてから言った。

「そこで、あなた方に突撃して貰いたいわけです」

『え？』

全員が同時に言った。

「つまり何だ、オレたちに当たって砕けて来てくださいって言うつもりか？」

天龍から、微かな憤りを感じたヴェラ・ガルフは慌てて言った。

「いえ、もちろん砕けて来いとは言いません。私も援護させてもらいます」

「何で援護だけなんだ？」

天龍の怒りがひしひしと伝わってくる。言い方を間違えたと思ったが後の祭りである。このまま続けるしかない。

「知つての通り、私は未来の…もつとも、今の時代から考えると少し過去の艦ですがあなた方が生まれた時よりも未来の艦です」

全員が頷くのを見た彼女は、先を続ける。

「あなた方が感じたように、あの戦争の終結後戦艦と言う艦種は消滅します。砲の時は終わり、航空機、そして精密誘導兵器の運用に戦争の形態は変わりました。

戦後に生まれた艦は、装甲が徐々に少なくなりやがて機銃弾を防ぐ程度の装甲になりました。つまり、あるだけマシって言う感じですよ。当然ながら、大口径の砲弾を食らえば当たりどころが悪ければ一発で轟沈、なんてこともあります。艦娘は、大破してなければ沈まないからですから一発轟沈は無いにしても、砲撃戦ともなると流石にまずい。

残念ながら、現代艦艇は砲撃戦を想定していません」

しばしの沈黙の後、天龍が言った。

「装甲が薄いのはまずいな……。どれくらいなんだ？」

「格納庫の上面は1インチの装甲が貼られています。ケブラーを使用してるそうですよ。ちなみに、後は艦橋に貼られてくらいで後は非装甲に等しいみたいです」

ヴェラ・ガルフはまるで他人事のように言った。

天龍はため息を吐き、諦めたように言った。

「確かに、これじゃ突撃なんてできないな」

「すみません……。ですが、全力でサポートをさせていただきます。まず、突入時は当然奇

襲であることが望ましい。そこで、私に搭載されたECMを使用します」

「ECM?」

白雪が尋ねてきた。彼女は、気になることがあるならしつかり聞いてくるタイプらしい。

ヴェラ・ガルフは答える。

「電子対抗手段。敵の電子兵器、つまりレーダーやら通信機やらの使用を妨害する兵器です。妨害と言っても、第二次大戦当時の艦艇をもしている相手なら完全に使用不能にすることも容易でしょう。」

これで、こちらの攻撃に気付くのは目視距離に到達した時、運が良ければ攻撃開始まで気付かれないかもしれませんが

「航空機はどうするんですか?」

白雪が問いかける。

「その辺りも問題ありません。対空ミサイルと単装速射砲、それにCIWSで大半は落とせます」

「なんだかよく分からない単語が結構出てくるが、まあ問題なえだろう。よし、ヴェラの言う通りにしてやる。ただし、しつかりサポートはしてくれよ」

「任せてください」

天龍の言葉に、ヴェラ・ガルフは力強く頷き言った。

彼女に搭載されたSPY—1Bフェーズドアレイレーダーがかすかに反応し、脳内に光点を映し出した。

彼女は笑みを浮かべ、言った。

「敵艦隊を捕捉」

ECMを起動すれば、今後基地との連絡が困難になるおそれがあったため、敵艦隊捕捉の報をすぐに泊地に送った。

邀撃作戦の概要を伝えたヴェラ・ガルフは、渋っていた江田を説き伏せて作戦の認可を引き出した。

無線を切ると、彼女はすぐに行動を起こした。第二艦隊の面々に、ECMの起動を告げると、彼女は自身に搭載されているSLQ—32を作動させた。

これにより、SLQ—32の有効圏内の全ての電子兵器が沈黙した。

この海域における電子兵器を使用できるのはヴェラ・ガルフただ一人となった。舞台は整った。

戦闘は静かに始まった。

ヴェラ・ガルフは、ハーブーンを誘導するためにSWG—1 HSC LCSを作動させる。ハーブーンに諸元入力し終わると後は目標に向けて撃つだけになる。

入力完了。

彼女はハーブーンを発射する。

4連装のMk. 141ハーブーンランチャーから、3基のハーブーンが白煙を噴きながら空に向かって行く。

ハーブーンは、慣性誘導に従い『深海棲艦』艦隊に飛翔する。目標は、もちろん空母である。

マツハ0.85で飛翔するハーブーンは、やがて艦隊を捕捉する位置についた。その段階でハーブーンは自身のレーダーを起動し、目標を定めた。

反射波の大きい空母に狙いを定めたハーブーンはアクティブレーダーホーミングに従い、シースキングで急速に接近する。

これに気付いた輪形陣の最外にいた駆逐艦ハ級は、自身の5インチ砲でハーブーンを撃墜しようとした。

が、気付いた時にはもう遅くハーブーンはポップアップし上昇。その後45°の急角度で空母ヲ級の格納庫付近に命中した。

炸裂した440キロの炸薬は、付近の艦載機の誘爆させる。悪いことに、発艦準備が整い発艦させようとした矢先の出来事であったため、被害は拡大の一途を辿った。

それと同様なことが、艦隊の空母全てで起こっていた。1隻目のような悲劇はないに

しても、もはやパラオ空爆の任務を遂行することはできないだろう。

数分後、最初にハーブーンを食らったヲ級が海底に没した。

それ以外の2隻は大破し、発艦させていた直掩機の着艦すら不可能な状態だった。

このような出来事のせいで、彼女らはレーダーや無線機ぐ使用不能になっていることに全く気付けなかったのである。

レーダーとソナーで『深海棲艦』に損害を与えたことを確認したヴェラ・ガルフは、次の行動に移った。

「龍田さん、現場での指揮をお願いしたいのですが?」

龍田はしばらく考えたような表情を浮かべ、またいつも通りの笑顔を見せて言った。

「指揮は天龍ちゃんに任せてもらえるかしら」

「何故です?」

ヴェラ・ガルフの疑問に、龍田は穏やかに答える。

「あの子の方が、戦場での指揮が上手いのよ」

そう言うなら、仕方ない。

「天龍さん、お願いできますか?」

天龍はこれまで見た中で、1番いい笑顔で言った。

「もちろんだぜ。奴らをしっかり叩いてやる」

やることは済んだ。

ヴェラ・ガルフは、脳裏に浮かぶレーダー画面と海図を見た。そろそろ頃合いだ。

「それでは、私はここで離脱します。危険を感じたらすぐに教えてください。できる限りの対処をします」

「ECMはどうするんですか？」

吹雪が聞いてきた。

「奇襲の成功が確認できれば、戦闘海域付近の解除を行います。しかし、それ以外の海域は解除しません。他に疑問点がありますか？」

無言が返ってくる。

ヴェラ・ガルフは真剣な顔で言った。

「それでは、ご武運を」

第二艦隊は増速し、天龍型の最高速度である33ノットに達した。ヴェラ・ガルフは、徐々に引き離され、やがて完全に落伍した。

彼女は、本隊を見届けた後に転舵した。

すでに発艦させていたSH-60Bからの映像が、LINK16を通じて彼女の左目に映されている。右目には、現在彼女のいる光景が見える。

さらに、目を閉じるとそこには大画面のレーダーディスプレイのような光景とこの海

域の海図が見れる。

普通の人間はもちろん、艦娘ですら彼女の見ているものを見れば頭が混乱するだろうが、彼女の情報処理能力を持ってすればさほど苦にならないのだ。

敵艦隊の上空に直掩機ぐ数機、確認できる。奇襲を仕掛けようとしている本隊にとって脅威であるし、シーホークにも危険な相手だ。

彼女は、瞬時に判断しSM-2がMk. 41 VLSより発射される。

ちようど、命中は本隊の攻撃開始時間とほとんど同じになるようだ。

戦いの火蓋を切るには御詠え向きなデモンストレーションになるだろうと、彼女は人ほくそ笑んだ。

徐々に暗くなる空。

どこかもの悲しい5月の空を、数本の白煙が綺麗な直線を描きながら進んでいる。よく見ると、その白煙の先に細長い筒のようなものつまりSM-2スタンダード対空ミサイルが凄まじいスピードで蔦進しているのが見える。

SPG-62イルミネーターレーダーに誘導される10発のSM-2は、目標として指定された敵機にマツハ2で飛翔し続ける。

やがて、目標が見えてきた。

SM-2は、敵機に目がけて突っ込み爆砕。

『深海棲艦』の直掩機は、空で火の玉と化した。

突然の爆発に、『深海棲艦』は再び驚いた。その中でも、先ほどの攻撃で旗艦であるヲ級が撃沈されたため急遽旗艦となった重巡リ級は誰よりも驚いた。無理もあるまい。先ほどの槍が今度は自分に飛んで来るのではないかと思うと、まともな思考ができないのだ。

そして、この冷静さに欠ける対応が最悪の結果に繋がってしまった。

直掩機の全滅によりやく対策を練ろうとした彼女らに、さらなる攻撃が始まった。

ヴェラ・ガルフの言う通り、第二艦隊の接近は気付かれていないようだ。これならば、行けるかもしれない。

正直なところ、ヴェラの言っていることはあまり信じられなかった。技術的に可能なのかと言う疑問と、あまり言いたくはないがヴェラがアメリカの艦であると言うことも信じられないもの一つだった。

もちろん、そんなことは過去の話であって今は味方であると言うことは頭では分かっているのだが、やはり気持ち的には受け入れ難いと言うのも事実である。

だが、今となってはその考えが間違っていたことは明白だ。

敵空母から発生していると思われる黒煙が、すでに目視できる距離だ。

もし、『深海棲艦』がレーダーを使用できるなら重巡からの砲撃がすでに始まっている

はずだ。それが無いということは、ヴェラの言ったようにリーダーが無力化されているからに他ならない。

「もう攻撃を始めてもいいんじゃないかしらあ」

龍田が早く始めたいとばかりに言った。

「いや、もう少し行ってから始める」

天龍は断固とした調子で言った。

龍田は首を傾げつつ言う。

「あらく、いつもの天龍ちゃんならもう撃ち始めていると思うんだけど？」

「今回はいつもと違ってもっと進んでも上手くいきそうだからな」

「天龍ちゃんが言うなら別にいいけど…」

そう言うのと、龍田は離れていった。

天龍は目を前に向ける。

そうこうしているうちに、敵が見えて来た。

もう十分に接近した。

天龍は言う。

「用意はいいか？」

全員が頷く。

天龍はそれを見て笑みを浮かべ、そして自身の刀を鞘から抜き、叫び声に近い声を出した。

「Charge!!？」

何故英語なのかは分からなかったが、それでよかった。

どのみち、戦うことに変わりはないのだから。

鬨の声が聞こえた。

驚いた『深海棲艦』たちは、その声の方向に顔を向ける。

凄まじい形相の艦娘たちがこちらに向かってきている。

そこでようやく自分たちのリーダーが使用不能になっているのに気付いた。あまりにも、リーダーに頼りきっていた彼女らのツケだったが今は後悔している場合ではない。事態は動いている。

このような予想外の事態に最も必要なものは、冷静な判断力と的確な指揮、そして経験である。

不幸なことに、現在の艦隊旗艦であるリ級はそのどれも持ち合わせていなかった。

この時、リ級が発した命令は各員の判断で攻撃せよである。

この場において、最も言うてはいけない命令だろう。

統制の取れていない砲撃が当たるとは思えないし、混乱を大きくするだけだ。

が、命令は命令である。

彼女らは破滅への道を辿りつつあった。

一方の第二艦隊側は、冷静さを欠いておらず経験豊富な天龍が旗艦を勤めており、しっかりと統制が取れていた。

突撃は、日本のお家芸で明治時代には師団規模の突撃があつたと言う。もつともその時は夜襲であつたようだが。

統制された突撃は混乱している相手に脅威であり、同時に恐怖でもある。

単縦陣で突入した第二艦隊は、薄い弾幕を掻い潜り接近戦を開始する。

魚雷と砲撃が入り乱れ、『深海棲艦』たちは最早被害の確認すら困難を極めていた。

海面はすっかり血の色に染まっていた。

そこから30キロほど離れた海域に、ヴェラ・ガルフはいた。

レーダーとSH-60Bからの映像を交互に見ながら、分析を進める。敵が混乱していることは、反撃から見て取れた。

攻撃はバラバラで統制が取れているとは思えない。これなら、十分に殲滅も可能だろう。

この調子なら、後続の味方に仕事はないだろうと考えつつ敵艦の動きに目をやる。

ふと、レーダーに動きの鈍いブリックがあることに気付いた。攻撃前にマークしてお

いた味方だ。

艦隊の陣形はほぼ崩れていたが、その光点が龍田を示すことは分かっていた。

彼女は、ECMを停止させ龍田に連絡をする。

「龍田さん、聞こえますか？」

しばしの沈黙。ヴェラが再び言葉を発しようとしたその時、返答があった。

『何かしら〜？』

息が乱れているのは、戦闘中だからか負傷しているからか。

「少し動きが鈍いようですが、損傷しているんですか？」

『まだ大丈夫よ。肉を切らせて骨を断つ、がモットーですもの』

つまり、彼女は負傷しているということだ。ならば、することは一つ。

「龍田さん、戦闘を中止して戦域を離脱してください。離脱後は、友軍の援護をお願いします」

龍田は不満の声を上げた。

『私はまだやれるわ。今戦力を減らすのは得策じゃないと思うけど…』

ヴェラはきつぱりと言つてのける。

「あなたが離脱しても戦闘に支障はありません。戦闘は今回だけではありませんし、いざ必要な時に動けないのでは元も子もありません」

返答はない。微かな息遣いが無線が切れていないことを表した。やがて、答えが返ってきた。

『分かったわ。今、目の前にいるのを片付けたら離脱するわ』

「ご理解いただき、感謝します」

無線が切れる前に、何か肉が切り裂かれる音が聞こえたがそれが何かは考えないようにした。

龍田の戦線離脱がレーダーで確認できた。後のことを考えると恐ろしいが、正しいことをしたはずだ。

《こちら海鷹2、聞こえていますか？》

艦載機からの連絡に我に返ったヴェラは返答に少し手間取ったが言った。

「こちらヴェラ・ガルフ。なんですか、海鷹2？」

《1隻だけ、ほとんど砲撃せずに回避に専念している艦がいます。LINK11でそこに送りましたので、確認してください》

「分かりました。無線は切らないでください」

攻撃をしていない艦？もしかしたら…。

彼女は右目を閉じ、左目だけ開ける。

そこには、少し画質が悪いがジグザグに航行する艦がいた。その艦は、ただ回避行動

を取るだけで砲撃を全くしなかった。

損傷している様子もなく、『深海棲艦』が弾薬不足に陥ることも考え難い。つまり、こいつは自らの意思で攻撃をしていないということだ。

この乱戦の中、攻撃をしないということは自らの存在をできるだけ隠したいと言う意思の表れだろう。

つまり…。

「海鷹2」

《何ですか？》

「よくやってくれました。敵の旗艦を見つけましたよ」

突然の無線は、軽巡を真っ二つに切り裂くと同時にきた。

『こちらヴェラ・ガルフ。天龍さん、聞こえますか？』

天龍は自身の刀に付いた血糊を払いながら返答した。

「ああ、聞こえてるぜ」

『早速本題に入ります。先ほど、敵旗艦らしき艦を発見しました。そいつを叩いていた方がいいのですが』

「そいつは良い。で、その大将首はどうだ？」

『重巡です』

天龍は肩透かしを食らったように言った。

「重巡つったて2隻いるんだぜ。どっちの奴だ？」

『どうせ殲滅してもらうんですから2隻とも叩いていいですよ』

「んな無茶な」

『冗談ですよ。今、シーホークがスモークを投下しに向かっています。もうそろそろのはずですが…』

彼女の視界の端に、何やらオレンジ色の煙が立ち昇るのが見えた。

「あれか？」

『あなたの言っているあれが私の言っているものかは分かりませんが、オレンジ色の煙ならそれです』

「見つけたぜ。今から叩きに行く」

天龍は無線を切り、その煙の元へ向かった。

砲弾が入り乱れる中を彼女は走り抜ける。

目の前に現れた2隻の駆逐艦を1隻は14センチ単装砲で、もう1隻は右手に持った刀で仕留め、猛然とリ級に襲いかかった。

突然の攻撃に驚いたり級は、自身の持つ8インチ連装砲で反撃するが狙いがうまく定まらず砲弾はあらぬ方向に消えていった。

次弾を装填し、再度砲撃を行おうとしたリ級は顔を前に向ける。

そこには、眼の血走った天龍が刀を振り上げた状態でこちらを見ていた。すでに回避ができる距離ではない。

「運がなかったなバケモノ。あの世で自分の無能さを後悔しろ」

そう言うと、天龍は刀を振り下ろす。

その刃は、リ級の首をはねた。

糸の切れた操り人形が崩れ落ちるように斃れたり級を冷たい眼で見た天龍は、顔にかかった返り血を拭いながら無線で連絡する。

「こちら天龍。敵旗艦を撃破した」

指揮系統が回復不可能なまでに破壊された『深海棲艦』たちは、撤退以外に自らが生きる道はなかったがこの乱戦の中では退くことすら困難になっていた。

この時残っているのは、重巡1隻、駆逐艦2隻のみである。この3隻はそれぞれバラバラに戦っていたため、全艦が孤立していた。

このままでは、各個撃破されるのがオチだが最早共に戦うという考えさえ彼女らの頭には浮かばなかった。

やがて、駆逐艦も沈みついに重巡り級ただ1隻となってしまった。あれほどの威容を誇っていた機動部隊は最後の1隻となってしまった。

リ級は、何故こうなったのかを考えていた。身体中に砲弾を受け、魚雷に被雷し満身創痕の体でこの敗北の原因に頭を巡らせる。

足に直撃弾を受け、海面に膝をつく。

最後の力を振り絞り、リ級は自分を撃つた相手をつまり、自分を殺す相手の顔を見た。自分よりはるかに小さい少女がそこに立っていた。おそらく駆逐艦だろう。その駆逐艦は、自身の主砲である5インチ連装砲をこちらに向けている。その少女の目には慈悲の念が見て取れた。

突然、抑えがたい衝動にかけられリ級は言った。

「何故……ダ？」

『深海棲艦』からの突然の疑問に、白雪は大いに驚いたが目の前の虫の息の重巡に何かしらな答えを返さなければならぬ義務感を感じ言った。

答えにはなっていないが、彼女に言える精一杯の返答だった。

「私にも……分かりません」

求めていた答えとは違っていたが、どこか清々しい気分を得たり級は最後に笑みを浮かべた。

意識が急激に遠のき、リ級はその生涯を閉じた。

リ級の瞳から光が消えたのを見てとった白雪はその骸に軽く手を合わせ、冥福を祈

る。

それが済むと、彼女は味方たちの元へ向かった。

黄昏時。

沈む夕日が海を照らす。橙色に近い色のはずだが、今日の海の色が普段より黒く見えるのは光の錯覚ではないだろう。

それからしばらくして、救援の部隊が来た時には至る所で上がる黒煙の中を数人の艦娘が立ち、沈む夕日を静かに眺めている光景があった。

その場にいた艦娘は6人で、全員が少なからず負傷していたが大事にいたる可能性のある者はいなかった。

救援部隊到着から数分後、ヴェラ・ガルフが無傷で艦隊に合流した。

ヴェラ・ガルフ最初の実戦は、敵艦隊撃滅、友軍の被害軽微という結果に終わった。

パラオ泊地にとって久方ぶりの戦果であった。

第10話 『アカエイ』と『不沈海龍』

ヴェラ・ガルフたち第二艦隊と、救援に駆けつけた第一艦隊が帰投したのは、その日の夜遅くであつた。正確には、21時20分頃である。

負傷した第二艦隊の面々はとりあえずドックに向かい、損害のないヴェラは江田の元に報告しに向かつた。

報告すべき内容のある程度は、帰投するまでに連絡していたので話すことはさほど多くない。

しかし、詳細を報告する必要はあるため彼女が執務室から出るのにはかなり時間がかかるだろう。

微かな空腹を感じたが、彼女はそれを無視して執務室の扉を叩いた。

「随分と暴れたようだな」

ヴェラ・ガルフの報告が終わると、終始黙って聞いていた江田が言った。ヴェラは、同意の頷きを返し言った。

「それが、私たちの意思でしたから」

「なに、別に咎めているわけではない。諸君らは良くやってくれたし、あれだけの敵を相

手にこれほど少ない被害で勝利したのだ。これで、上もこの重要性を理解しただろうし、次の資材の催促は上手くいかもしれない」

江田は、ニヤリと笑ったがそれも一瞬ですぐに顔を引き締めた。

「問題はそこではない。今回の件で、上が何かしらの作戦に我々を引き込むかもしれん。別に悪いことではないのだが、捨て駒にされる可能性がある以上、素直に喜べん」

「…」

ヴェエラは無言を返す。これが何を表すか、この男はすぐに分かるだろう。

案の定、江田は椅子にふんぞり返って言った。

「ふむ、なるほど。そんなふざけた命令は無視しろと。だか、分かっていると思うが軍隊は上の命令が絶対だ。それが、どんなに馬鹿馬鹿しく意味のない作戦であっても従わなければならぬ。…普通は、な」

やはり、この男は海江田に似ている。

思想や性格、口調や行動は似ても似つかないがその根底にあるのは同じものだ。

つまり、何かに対し反抗したいという思いだ。

しかし、私を沈めたあの男はもつと先を見ていたように感じた。戦ったのはほんの少しの間だけだったが、それでも十分に感じ取ることにはできた。

この反抗の気持ちは、いずれ世界を変えるほどの何かになるような気がした。

この男も、そうなのだろうか？

いくら見ても、江田の表情からは心の内は読み取れない。

顔を見続けたことに不信を持ったのか、江田は聞いてきた。

「…どうした、顔に何かついてるのか？」

ヴェエラは首を振り言った。

「何でもないです」

「ふむ、そうか。悩み事があるなら聞くが…」

「今の私に悩み事があるように見えますか？」

「全く見えんな」

「そう言われるとなんだか気に食わないですね…」

「そう言うな。さて、さっきの続きだが…」

江田は、壁に掛けてあつた時計に目をやり、その目を見開いた。

「おっと、もうこんな時間か。疲れているのに長々と喋らせてしまったな、すまない。もう行つてもらつて結構だ。」

明日は1日休むといい。どうせ次の出撃まで時間があるだろうからな」

「はい、分かりました」

彼女は江田に軽く会釈して執務室を後にした。

江田の考えは間違っていた。

5月14日

快晴。

空は晴れ渡り、どこまでも青々と広がっている。

雲ひとつない空。

太陽の光はこの南の島に強く照りつけている。

この島、パラオは遥か以前から多くの国に支配されていた。16世紀にスペインの植民地として始まり、ドイツ、日本、アメリカ、そして国連による信託統治領と言うように続く。

その後、独立の声が強まったことにより1994年10月1日に独立した。

また、日本とは歴史的に密接な関係にあることから、インドネシアと共に世界一の親日国である。

国防海軍と艦娘の海外派遣を最初に受け入れてくれたことを見ると、どれほど友好的な関係か分かるだろう。

一部の州では未だに日本語が公用語として利用されている。

南の島らしく年中を通して雨が多く、特に7月と10月は多い。

また、台風が上陸することはほとんどなく、平均気温は27度と温暖な気候で湿度は

82%と高い。

ちなみに日本との時差はない。

平時なら観光客が溢れるこの島は、現在ではすっかり前線の基地となっており民間人はすでに島外に脱出している。

また、政府は未だにこの島に留まっているが、国防海軍の撤収と共にパラオから脱出する決まりになっていた。

つまり、今この島には少数の現地人がいるだけで実質的には日本人の方が多い状態である。もつとも、戦争が始まった時にすでに予想できたことだが。

閑話休題。

このリゾート地と言っても過言ではない島でせっかくの休みをもらったヴェラ・ガルフは、普段通りの生活を送ろうとしていた。

朝はランニングをして体力作り。終了後は、食堂でさつさと食事を済ませ自室に戻り今後の戦術をイメージする。

そんなことをしていると、気付けば昼食の時間になっている。

彼女は頭の中で出来上がった戦術を支給されているノートに書き込むと、食事を取りに向かった。

食事を済ませたヴェラ・ガルフは昨日の夜、気になった事を知るために資料室に向

かった。

資料室は泊地司令部に入っており、これまでの戦闘記録から所属艦の詳細、そして、彼女が求めている泊地司令官の記録がある。

彼女はこの基地を統べる男たちの資料の中から、江田の物を見つけ出しそれを埃っぽい机の上に置き読み始めた。

江田 四郎。42歳。現在、国防海軍中將。

1975年に鎌倉で生まれた彼は、中学生の時を瀬戸内海の小さな島で過ごした。その自然豊かな島で過ごしたことにより、海に対する憧れが湧き高校を卒業後防衛大学校に入學し、防大きつての秀才と呼ばれるようになる。

防大卒業後、海上自衛隊横須賀基地に配属。潜水艦で活動しサブマリナーとなるり、35歳の時にそうりゆう型潜水艦のネームシップ、そうりゆうの艦長に抜擢され二等海佐に昇進する。

『深海棲艦』出現後は各地で防衛活動に従事し、南方での活動途中に損傷した艦娘を発見し救助にあたる。その時に提督としての素質（現在では戦力増強のために多数の提督が存在するが、艦娘出現当初は素質のある者だけが提督となることが出来た）が見出され呉に帰港後、提督に任命され艦娘たちの指揮にあたる。この時、二階級の特進により彼は少將の地位（この時、自衛隊は国防軍へと名称及び法制度が変わり旧軍と同様の階

級に戻っていた。この時は多くの反対の声が上がった様だが『深海棲艦』に対する脅威論が反対派を押し切った。これは後に13年安保闘争と呼ばれるようになる）を得た。

江田はわずか37歳で将星を手に入れたのである。もともと、江田本人は求めていたものではなかったようだが。

その後、呉にて提督として活動を開始。凄まじい勢いで戦果を挙げ始め、僅か数ヶ月で呉鎮守府でトップクラスの提督となる。

4年後、これまでの成果から中将に就任。40代始めでの異例の大出世である。

そんな江田が、そのキャリアを棒に振るようなことをしたのは昇進から僅か2ヶ月後のある会議でのことである。

その時に議題に出ていたのは『ワゴン・ホイール』作戦と呼ばれる反攻作戦であった。『ワゴン・ホイール』はほとんど賭けのような作戦で、まさに机上の空論のようなものであった。これに、江田は反論したのである。

不運なことにこの作戦を考え出した相手（大手産業会社に行った国防軍のOB）が悪く、彼は軍の上層部の怒りを買ってしまった。

結果、『ワゴン・ホイール』はお蔵入りとなったが江田はお決まりの転落コースを辿ることになる。

それが、パラオ派遣である。

国防軍内では、パラオ派遣はまさに島流しの様相を呈していた。資材は乏しく、派遣できる戦力も少なく、そして本土から離れている。これを島流しと言わずなんと言おう？

そして、ヴェラがここに来る数ヶ月前、盛大な軍楽隊の合奏と海軍大臣の見送りを受けながら江田とパラオ派遣艦隊は呉を後にした。

この時、江田に与えられた艦娘たちは他の基地で無能のレツテルを貼られた札付きたちばかりだったが、この無能というのは彼女らを運用していた指揮官であったことは言うまでもないが、そんな言葉が意味を持たないことはパラオに送られた彼女らには充分すぎるほど分かっていた。

こうして、パラオに派遣された江田と艦娘たちは少ない資材をやりくりするさながら稼ぎの少ない家庭の家計簿のような運用を開始したのである。

それ以降、ヴェラの知っている内容だったので彼女はその資料を閉じた。

なかなか激しい人生のようだ。それが、ここまで読み終えた彼女の最初の感想だった。しかも、まだその荒々しい人生はまだ続きそうなのだ。もつとも、軍人になった以上まともな人生が送れるとは思っていないだろうが。

しかし、それを鑑みても江田の人生は刺激に溢れている。幸運な意味でも不幸な意味でも。

ふと、窓の外を見る。

この部屋に入つて来た時はよく晴れていたが、今では強い雨が降り続けている。

雨音から予想するに、強くなる一方のようだ。

彼女はため息をつき、窓の外を眺め続ける。この埃っぽい部屋からさつさと出たいが、傘を持っていない彼女には強すぎる雨が降っている以上この部屋から出れそうにない。

頭の隅に、提督の執務室に行くという考えが出たが彼女はその考えを振り払う。彼女が行つて江田の仕事を邪魔するのは申し訳ない気がしたのだ。特に、この資料を読んだ今は。

彼女は止みそうにない雨を見ながら、憂鬱な気分になり続けた。

それから、ヴェラ・ガルフは資料室の資料をひたすらに読み漁る作業に没頭した。始めは雨が上がるまでの暇つぶしのつもりだったが、気付けばこの埃っぽい部屋でかれこれ4時間は資料を読んでいる。

その中には、『深海棲艦』に関する興味深い内容もあった。

『深海棲艦』。

その生物が現れてすでに5年になるが、分かっていることは少なく、その存在のほとんどが噂によって成り立っている。

その中で、もつとも有名な噂は『深海棲艦』は、轟沈した艦娘の成れ果て」と言うものだ。

確かに、一部の『深海棲艦』は艦娘に似ているところがある。この部屋で、多くの艦娘や『深海棲艦』の写真を見たがその念は募るばかりだ。

だが、それはあくまで噂。そのような事実はなく、政府や軍はもちろんのこと、研究者すらその噂を否定している。

その根拠は今の所トップシークレットらしく、その内容を見ることはできない。なんとなくは察しがつくが。

しばらくの間はここに入り浸るのも悪くないかと考えていたその時、部屋の天井付近にあるスピーカーが耳障りな音を立てた後、呼び出しを始めた。

『第三艦隊所属艦、及びヴェラ・ガルフは至急、提督執務室に出頭してください。繰り返します…』

突然の呼び出し。

呼ばれた理由は予想がついたが、あまりに早過ぎないか？

彼女は次の仕事の内容に僅かな不安を抱きつつ、資料室を後にした。

10分後、全員が集まるのを待つてから江田は話し始めた。

「さて、休暇中にも関わらずすまない。諸君ら呼んだのは他でもない、本国のお偉方が

新作戦を始めたがっているからだ」

一瞬、部屋がざわついたが江田が手でそれを制し、続けた。

「作戦名は、『レッド・ステイニンググレイ』。アカエイ作戦だ。全くもって悪趣味なネーミングだが、それはこの際無視してほしい。

さて、本作戦は米軍との共同作戦になる。参加部隊は、現在こちらに物資輸送の護衛を行なっている米太平洋艦隊とアメリカ、アイダホ州のマウンテン・ホーム空軍基地の第366航空団だ。

日本側からは、我々が主力として参加する。これまでまともな扱いをしてこなかった割に凶々しいが、軍隊とはそう言うものだ。

諸君らは今、疑問に思っているだろう。「何故、全員参加のブリーフィングを行わない？」と。

もちろん、理由はある。本作戦目標は、現在敵の勢力圏にあるサイパン・テニアン島の奪還作戦なのだが、この両島及び近海の敵情が把握されていない。この時点で作戦を立てるということ自体信じられないが、それはこの際置いておく。

つまり、この作戦を実行するためにはどうしても偵察が必要であるわけだ。

そこで、我々に白羽の矢が立った」

ヴェエラの予感は的中しつつあった。全くもって不幸としか言いようがない愚かな作

戦を押し付けられそうなのだ。

そして、江田の口から嫌な言葉が飛び出してきた。それも、予想よりはるかに嫌な言葉だ。

「諸君らは、敵情偵察のために威力偵察を行ってほしい、との事だ」

威力偵察。

敵情偵察の方法の一つで、実際に戦闘を行い敵の強度を偵察する方法だ。打撃力はさほど重視されず、機動力のある部隊でヒットアンドアウェイによる攻撃を行い、速やかに離脱する。

偵察方法の中で、最も確実な方法と言えるだろうが今いる軽巡2隻に駆逐艦が4隻、そして実質的に戦闘にまともに参加できない重巡1隻で行う仕事ではない。

しかし、これ以外に実行できる偵察がある訳でもない。

一番に思いつく偵察衛星による方法も、ハワイ占領後何故か使用不可能になってしまったし、航空偵察を行うにしても目標海域は『新海棲艦』に制空権を握られており白昼偵察はおろか夜間偵察さえも困難な状況であるという。

また、無人偵察機も『憂慮すべき事柄に対する直接的行動』のために派遣されていて機数が足りていないという状態である。

このような状態である以上、威力偵察以外に適切な方法がないと言えるが、それを命

じられ、実行しなければならぬ方にはたまったものではない。

この部屋にいるほとんどの者が、彼女と同じようなことを考えているに違いない。

江田が安心させるように言った。

「もちろん、君たちだけに行かせはしない。こちらに向かっている輸送船団の護衛についている第3艦隊の一部が、諸君らの援護に回ってくれる。

知つての通り彼らもここ最近、戦果を挙げている優秀な部隊だ。十分に援護してくるだろう」

そういう問題ではないことは、江田もよく分かっているだろうが仕方がなかった。

拒否はできない。軍隊では、上からの命令が絶対だ。

こちらが何の反応も見せないでいると、江田はため息をつきつつ言った。

「乗り気ではないだろうが、やってくれ。それと、今回は臨時編成を取ることになってい。第三艦隊にヴェラ・ガルフと瑞鳳を加えた機動部隊を編成する。

出撃は明後日だ。今日と明日の内に、必要な事は済ませておくように。

何か質問はあるか？」

「第3艦隊はいつ来るクマ？」

球磨が質問する。

「おそらく、少し遅れると思われる。戦闘にはほとんど参加できないだろうが、撤収の際

は援護してくれるはずだ」

「つまり、自分たちだけで戦えつてことクマ？」

「残念ながら、そう言うことだ」

嫌な空気が流れる中、江田は言った。

「他に質問のある者は？」

誰も答えない。江田は頷き言った。

「では、ブリーフィングを終了する。難しい任務だが、しっかり頼む。解散」

全員が出て行き、部屋には江田と瑞鳳だけが残った。

江田は瑞鳳に話しかける。

「不満か？」

瑞鳳は首を横に振り、言った。

「そんなことないですよ。無茶なことと言われることには慣れてるもん」

瑞鳳の言う『無茶』が何を指すかは分からないが、彼女の沈んだ時のことを言っているように思えた。

「それなら、なおさらだ。もう少し粘ればもつと規模の大きい部隊を派遣できたかもしれない……」

「過ぎたことを悔いるのは良くないですよ。それに、提督は十分に仕事をしてくれてい

る。私には、それで十分です」

ああ、なんと言うことだろうか。彼女は、戦場で生きるにはあまりにも優し過ぎる。江田は微かに哀しみ覚えたことに気付かれぬように、感謝の言葉を述べつつ話を変えた。

「しかしこの作戦、妙だとは思わないか？」

瑞鳳は首を傾げる。

「これだけの部隊を動かす作戦だ。外国の軍との共同作戦は、お互いの都合に照らし合わせて立てる必要がある。特に、米太平洋艦隊は太平洋の航路を守る重要な役割を担っているし、第366航空団は『おつとり刀』的な展開ではなく、速やかに紛争地域に展開しアメリカの『意思』を示すために派遣される部隊だ。最近紛争が少なくなっているとは言え、そう簡単に動かすことはできない。」

つまり、僅か1日で決めれるようなものではないと言うことだ。少なくとも、2ヶ月は必要だろう」

「それじゃあ、ずっと前からこの作戦は決まっていたってこと？」

「そう考えるのが妥当だろう。ここで問題になるのは、2ヶ月も準備期間があつたにもかかわらず、何故偵察をしてこなかったのかと言うことだ」

瑞鳳はしばし考えて、言った。

「最新の情報が欲しいのかも…」

「それならば、何故そうと言わない？上が言ったのは、偵察をする時間が無かったと言った内容だった。何故、最新の情報が欲しいと直接言わないんだ？」

瑞鳳は分からないと言いたげに首を振り、考え込むように手を顎のあたりに当てた。「何かしらの力が働いているのか？」

「力と言うと？」

「我々の事を邪魔に思う勢力…なんてな。そんな小説めいたことなんてナンセンスだ。

さて、多分君の言った通り最新の情報がほしいのだろう。きつと私の考え過ぎだ」

そう言つて、江田はこの話を打ち切つた。が、どうにも腑に落ちない点が多すぎる。

彼は自分の考え過ぎであることを密かに願つていた。

もし、彼の考え過ぎでないならそれは味方にすら敵がいるということになるからだ。

そして、それは今後の戦闘で破滅的結果をもたらしてもおかしくない事態でもあつた。

もし、そうなつた時、自分は彼女たちを守りきれぬだろうか…？

不安は、募るばかりだった。

東京の国防省は、市ヶ谷にあつた防衛省の建物をそのまま利用している。その地下には、多くの施設があり国防海軍軍令部の会議室もその内の1つだった。

その場所は、多くの将官が集まる国防海軍の意思決定機関でもあった。

すでに、20時を過ぎているがまだまだ長引くであろうことはこの室内にいる者たちは皆、分かっていた。

今、議題が上がっているのはもちろん『レッド・ステイングレー』作戦である。未だに欠点の多いこの作戦の詳細を詰めているのだが、いかんせん情報が少な過ぎる。敵情偵察を怠ったのが、この情報不足のそもそもの原因だ。

なぜこのような事態になったかは、すでに皆が知っていた。時々、将官たちはその原因を睨みつけている。

彼らの視線の先にいるのは、どこか上の空の表情を浮かべている軍令部総長である大谷 義史大将である。

大谷大将も、自分が部下に睨まれていることに気付いていたが無視していた。そろそろ来るであろう連絡が気になってその様な態度に苛立つ余裕はなかった。

アラーム音。

彼の携帯が鳴ったのだ。大谷は、電話の相手を見た。

非通知。間違いなく、目的の電話だ。

彼は席を立ち、部下たちの冷たい視線を受けながら部屋を出た。

彼は近くにあったガラス張りの部屋に入り、扉を閉めた。と、同時に先ほどまで透明

だったガラスは瞬時にスモークガラスに変わり、彼の姿を見にくくする。さらに、室内は電子的に密封され盗聴器による盗み聞きを不可能にする。

そこでようやく、大谷は電話に出た。

『上手くやったか?』

挨拶もなしに相手は本題に入った。主導権を奪われたことに苛立ちを感じたが、大谷はそれを押し隠し言った。

「ああ。部下たちは疑問を持っているようだが、問題はない。あんたの求めていることはやった」

『よくやってくれた。例の件は、手配しておく』

取引は上手くいった。これ以上は、入り込んではならないことになっているが、好奇心はそう簡単に抑えられるものではない。

「あんたの言う通り、パラオの部隊に威力偵察をさせるように仕向けた。何故パラオなんだ?」

電話の相手が苛立つのが感じられたがすぐに消え、再び余裕のある声が帰ってきた。

『我々にとつて邪魔な存在だからだ。正確には、パラオにいるヴェラ・ガルフと言う巡洋艦が、だ』

「…あんたたちの目的はなんだ?」

危険を承知の上で大谷は聞いた。

電話の向こうで微かな笑い声が聞こえ、相手は答えた。

『溺れかけの『不沈海龍』を再び浮かび上がらせるのだ』

それだけ言うと、相手は電話を切った。

大谷はしばらくの間、携帯を耳に当てたまま立ち尽くしていたが、やがてそれを下ろし、呟いた。

「『不沈海龍』…か」

つまり、『リヴァイアサン』。

これが何を意味するか分からないが、分かることが一つだけあった。

彼の軍歴は、『レッド・ステイングレー』の終了と共に終わるということだ。

第11話 『レッド・ステイングレー』、動く

ヴェラ・ガルフと第三艦隊の面々は、江田の執務室を出てから即、食堂での会議を始めた。ある程度のことは予想していたが、やはり実際に聞くと衝撃を覚えるものだ。おそらく、このようなことを言われるとは思っていなかったであろう第三艦隊の面々にはただ。

会議、と言っても話すことはそう多くない。あつても旗艦を誰にするかとか、どんな敵がいる可能性があるか、それに対する対処法など重要ではあるがさほど急いで話合わねばならないようなものばかりだったが、やはり何かしらの愚痴は言いたいということの言い訳に過ぎなかった。

彼女たちは夕食を共にとりつつ、話を始める。

「それじゃあ、第一回愚痴り会を始めるにやー」

多摩の音頭により会が始まった。

どうでもいいが、ヴェラと第三艦隊の面々はすでに顔を合わせている。ヴェラがこの基地に来た後の体力測定と基礎知識テストを行っている時にたまたま出会ったのだ。

その話はいずれするとして、話題はやはり先ほどの作戦と呼ぶには穴の多すぎる作戦

の話しになった。

「やっぱりおかしいですよ。これほどの規模の作戦を立案するのに偵察の一つもしないなんて」

ヴェエラは言った。彼女は賛同の声を期待したのだが、その言葉に対する反応はあまりなかった。

「きつと新しい情報が欲しかったのよ」

如月が穏やかそうに言った。その口調には、有無を言わせぬ響きがあったがもちろんヴェエラは駆逐艦の言葉に屈するような者ではない。

「それにしてもです。ここにきて以来、この辺りに展開している米軍の無線を聞いたり国防軍の無線を聞いたりしていますけど、米軍からの催促の無線がかなりありました。どれも、『レッド・ステイングレー』の偵察情報をさっさとよこせと言っています」

「米軍の無線って暗号掛かってなかったクマ?」

「暗号は解読するためにありますから」

「いや、答えになってないクマ」

「私のシステムの前ではどんな暗号も平文みたいなのです」

「結構解読の仕方を教えて欲しいクマ」

「あいにく、私の専売特許です」

しばらく、食事の音がするだけになる。ヴェラは咳ばらいをして話しを戻した。

「とにかく、これまで一切偵察をしていないと言うのが妥当でしょう」

「じゃあ、なんで偵察をしないにや?」

多摩の疑問に対する答えは実に簡単だった。

「当然、私たちを陥れるためですよ」

皆、啞然とした顔でこちらを見ているのは、先ほどの言葉が思いのほか刺激的だったからに違いない。

当然だろう。まるで映画か小説のような突拍子のない事を言われたのだから。だが、彼女にはそれが正しい考えだと自信をもって言えた。

「馬鹿馬鹿しいとお思いでしょうが、私にはこれが正しいことに思えてなりません」

「何が根拠にやしい?」

「にやしい」についてヴェラは大変興味を抱いたが、再び話が逸れることが予想されたため、彼女は興味を押し殺して根拠を述べた。

「あまり言いたくはありませんが、提督は本土のお偉方に嫌われています。それだけで充分な根拠だと思いますが……」

全員から不快の視線が飛ぶが、彼女が述べたことは事実であると皆が知っていた。しかし、やはり江田のことを悪くは言って欲しくないのだろう。

が、事実は事実である。それを消し去ることは、どんなに自分たちが願おうと本土のお偉方が決めることである以上不可能に近い。

卯月が果敢にも反論する。

「でも、『深海棲艦』の脅威が高まって今身内で揉めてる時間はないはずだぴよん」
ヴェラはその反論を否定する。

「むしろこういう時だからこそ、内輪揉めをしているんですよ」
「？」

全員が疑問の表情を浮かべる。それを見たヴェラは説明を始めた。
「こういう緊急時は多くの人々にとつて出世のチャンスになります。一方で、ここでミスをすればこれまでのキャリアを一瞬で棒に振る事態も起こる諸刃の剣となります。それなりの地位に就いている人物は当然、リスクを回避したくなるものですが、まだまだまだ上に行きたいと願うのが権力者です。」

今回は、私たちを利用しようとする者たちとそれの邪魔をしようとする者たちの2つの勢力、そして江田提督自身を邪魔に思っている者たちの勢力がせめぎ合っている状態です。

おそらく、私たちを利用しようとしている勢力を他の2つの勢力が手を組んで潰そうとしているのでしょう。今回の明らかに異常な立案方法もそれである程度は納得がい

きます」

第二艦隊の面々は感心したような表情をしている。彼女はその表情に微かな満足感を感じたが、直ぐにそれを胸の内にした。こういう感情は表に出やすい。

彼女はさらに続けた。

「しかし、それはある程度に過ぎません。確実に納得するには、もう一つの勢力が必要で
す」

「それで、その勢力っていうのは何ぞ?」

再び睦月が尋ねる。相変わらず、特殊な喋り方をすると考えながらヴェラは自動的に返答した。

「海外勢力です」

「海外?」

「そうです。最近の情勢からアメリカと見てほぼ間違いないと思います」

「でも、今はこの国も『深海棲艦』撃破のために協力してるにや」

ヴェラは思わず笑ってしまった。多摩は、ムツとした表情を浮かべている。その動作はどこか猫のようだ。

「何がおかしいにや!」

「…いえ、すみません。確かに、各国は『深海棲艦』撃破のために協力し合っています。

しかし、それを全て鵜呑みにはできませんよ。

あくまで、『深海棲艦』への対処だけでそれ以外は平時となんら変わりありません。今、これまでの秩序が崩壊しつつあります。『深海棲艦』はこの世界に新秩序を生み出すはずです。たとえ、奴らが全滅したとしてももう過去と同じ世界、秩序が復活することとは二度とありません。

ではその新秩序の元で、誰が次の覇権を握るかを決める必要が当然あります。今、その覇権にもっとも近いところにいるのは、この戦争でもっとも戦果を挙げている国、つまり日本です。

現在の覇権であるアメリカは、当然阻止したいはずですが、なぜなら、一度覇権を握れば今後握り続けたいと願うのが人間だからです。

今回の件は、そんなアメリカの思惑と日本の勢力の思惑が一致したためになつてしまったのでしょうかね」

「そんな…」

睦月が信じられないと言いたげに言った。

ヴェラは冷ややかに答える。

「人類存亡の危機であつたとしても、国家という体制が決して心一つにすることはありません。少なくとも、国同士では…」

嫌な雰囲気ができてしまった。なぜ、こう人と話すのが苦手なのかとヴェエラは考えた。こんなことなら、リーダーを見ながら敵と戦った方がよっぽどマシだ。

この気まずい雰囲気を崩したのは、これまでほとんど話していなかった弥生だった。「そう言えば……ヴェエラさん走ってるんだってね……」

すかさず卯月が茶々を入れてくる。

「駆逐艦より体力が無かったことがよっぽど恥ずかしかったんだぴよん」

ヴェエラは顔が赤くなるのを感じた。

「ほほ、凶星のようですね」

今度は睦月が茶々を入れる。

「うるさいですね、別にいいじゃないですか！」

ヴェエラは怒りの声を上げたが、僅かに上擦ってしまった。こんな声で怒られてもさして怖くないし、むしろそれをネタにさらに追撃を仕掛けることが可能になってしまった。

「ヴェエラさん、声の上擦ってますよ」

如月からの追撃。

きつと先ほどの会話の復讐だ。

その後も色々と言葉による追撃により彼女の精神（と言うよりプライド）はズタズタ

にされたのは言うまでもない。もちろん、先ほどまでの高論ぶった説明が原因である以上、身から出た錆ではあつたが。

ヴェエラは顔を赤くしたまま、体を縮こませて言葉の空爆を塹壕内の兵士よろしく堪え忍ぶしか無かつた。

猛爆はそれからしばらく続いたが、やがて真面目な話に切り替わり明後日の作戦の詳細を詰める作業を始めた。

その作業が終わる頃には、駆逐艦娘たちの消灯時間が近付いていたのでそこで今回の愚痴り会はお開きとなつた。

ヴェエラは第二艦隊の面々とは宿舎が違つたため食堂で別れた。

彼女たちが立ち去つた後、しばらくは何をするでもなく食堂内の人々（この食堂には艦娘以外にもこの基地に配属されている兵員の多くが食事に来る）を見ていたが、やがて立ち上がり自分の宿舎に戻ろうとした。

が、ちょうど入つてきた瑞鳳とバツタリと会つてしまった。食堂はこの時間になると暇を持て余している非番の兵員たちのためにバーに早変わりする。このバーには艦娘たちの飲酒も許可されていた。

この時間に来るのは、飲むために決まっている。

案の定、ヴェエラは瑞鳳に誘われ仕方なく同席することにした。

カウンターに座った2人の少女は、この男臭いバーでは異質な存在に違いなからう。少なくとも、日本本土でこんなことをすれば店から追い出されるか警察のお世話になることだろう。

が、ここは本土から遠く離れた南の離島。それも艦娘の存在をよく知っている兵員たちなので異質であっても、もはやなんとも思わない状態であった。

ここで、このパラオに派遣された兵員たちのことを紹介しよう。

彼らパラオ派遣軍がこの地に来て最初に行ったのが、司令部施設の建設である。

建設作業に当たったのは機動施設隊を発展させた機動設営隊である。やっていることはさほど変わらないが、海外での活動を重視した部隊となった機動設営隊は数週間のうちに司令部施設を作り上げてしまった。それと同時に艦娘の運用に必要なドックに工廠、出撃施設などを僅か2ヶ月で全て完成させてしまった。彼らの仕事は目に見張るほどで、まるで中国のビル建設を見ているようにも思えた。

しかし、彼らと言えど艦娘たちの宿舎や食堂その他の多くの施設を作りきることはできず、現地の建物を徴発するしかなかった。

彼ら機動設営隊が本土に帰還するのと入れ替わりにやって来たのが現在もこの基地の防衛及び警察力を提供している海兵旅団第三大隊B中隊である。

海兵旅団は、国防軍がまだ自衛隊と呼ばれていた時期に何度か取り沙汰された部隊構

想である。その主な内容は自衛隊内に実戦部隊を生み出すというものだったが、結局資金不足と国民感情を考慮して中止されていた。ところが、自衛隊法及び憲法第九条の一部改正により再び日の目を見ることとなったのだ。

この地に来ているB中隊は、旅団の中でも特にガラの悪い所謂『極悪中隊（バッドカンパニー）』と呼ばれる（お分かりかと思うが、B中隊のBはB a dのBではない）連中である。

当然、江田は艦娘たちと彼らの接触による問題を危惧したが、これがどういう訳か杞憂で済んでしまった。

B中隊からすれば艦娘たちは女性と言うより娘に近いものだったらしく、この離島に配属され気持ち沈んでいた彼女たちを元氣付けようと多大な努力を行った。

その結果、B中隊と艦娘たちの間に奇妙な絆のようなものが出来上がっていた。このことに江田が気付いたのはヴェラがこの地に来る僅か一ヶ月ほど前だったらしい。

このように、艦娘たちと兵員たちの関係は非常に良好である。他の基地ではそう簡単ではないようだが、境遇が似ている者同士協力していこうというところだろうか。

話を戻そう。

ヴェラはカウンターに置いたグラスを見ると、瑞鳳が話しかけてきた。瑞鳳はグラスを回しながら言う。

「提督が、この作戦は妙だと言っていました」

「江田提督が？」

「はい」

別に驚くことではあるまい。軍隊に少しでもいたことのある者なら誰でもキナ臭く感じるだろう。

「どう言っていましたか？」

瑞鳳はしばしためらったが言った。

「私たちを…陥れようとしている輩がいる…と」

やはりあの男もそう感じたか。想定済みとは言え改めて自分の立ち位置をよく心得ている男だと、ヴェエラは感じた。

「それを聞いて、あなたはどう思いましたか？」

瑞鳳は再びためらう。そして、ヴェエラに聞こえるか聞こえないかギリギリの声で言った。

「私は、提督の言うことを信じてる。信じているけど…」

「あまりにも突拍子が無い…と」

「はい…」

ヴェエラはカウンターのグラスを持ち、仰いだ。少し温くなった液体が、彼女の喉を通

る。

それから考えたように黙ったあと口を開いた。

「私も、江田提督と同意見です」

瑞鳳は驚いた表情を浮かべ、目を見開いている。正気かとも言いたげな表情だ。ヴェラはその表情に可笑しさを覚えながらも真面目な顔で言った。

「先ほども第三艦隊の皆さんとそのことを話してたんです」

ヴェラは先ほどの愚痴り会の内容を詳らかに話した。もちろん、ヴェラに対する言葉の空爆の内容は除いている。

「…そうだったんだ。確かに、ヴェラさんの考えにも一理ありますね…」

「しかし、所詮は一民間人（艦娘は国際法で民間人として扱われる。提督という仕事も、指揮はするものの名誉職に近い内容で艦娘たちへの命令はあくまで『要請』であり、艦娘たちには拒否権もある。しかし、基本的にはこの『要請』は拒否することはできず、艦娘自らの命が危険にさらされる『不合理な要請』のみに拒否権が生じる。艦娘の立場はどちらかというと軍属に近い）の戯言ですから」

「それでもヴェラさんの考えは筋が通ってる。もしかしたら本当にそうかも…」

沈黙が2人の周りを包む。

突如として、汗の匂いが鼻腔をついた。2人は隣を見る。

そこには、1人の男がグラスを持ちながら笑みを浮かべながら座っていた。軍服の襟章は少尉を示していた。

2人共、この少尉のことは知っていた。海兵旅団第三大隊B中隊第二小隊長仲林 亮平。

中隊きつての札付き将校。この部隊に配属される前に上官を殴ったり嫌味つたらしい上官を戦車で轢いたなどなど、信じられない噂の絶えない男だ。さらにタチの悪いことに、この男その噂を否定することをしない。

こう聞くとあまり好感の持てる男ではないが、いざ話してみるとこの男が非常に気さくな人間であることが分かる。

今回もこちらに寄って来たのは何やらあまりいい話をしていないことを聞きつけてのことだろう。

案の定、仲林は陽気そうな調子で言った。

「よう、お二人さん。何しけた話してんだ？ここではそんな陰気クセエ真面目な話はご法度だぜ」

言葉だけ聞けば少しばかり怒っているようにも聞こえなくもないが、彼の顔に浮かんでいる表情はどことなくこの会話を楽しんでいるように見える。

2人は素直に頭を下げて話題を変えることにした。

「それもそうですね。そう言えば、今日は加古さんと呑んでないんですか？」

ヴェラの問いに仲林は困ったように言った。

「俺もそのつもりで来たんだが、今日は手が離せんようだな」

「それじゃあ、一緒にどうですか？」

瑞鳳の言葉に仲林は待つてましたとばかりに飛びついた。

「喜んで同席させていただきます、女王陛下」

そう言うのと、仲林はニヤリと笑い仲間を2人の元に集め始めた。ヴェラは、今日は寝れないことを瞬時に悟ったのだった。

同日山岳部標準時6時33分。アメリカはアイダホ州の州都ボイシより州間道路84号線をおよそ50マイルつまり約80キロ砂漠を進み、そこからさらに脇道に入り10マイル、約16キロ進んだところに『機関砲野郎(ガンファイツ)のふるさと』であるマウンテン・ホーム(峠のわが家) 空軍基地がある。

この基地の司令部施設はガンファイツ大通りに沿った基地／航空団司令部ビルディングだ。

その二階に第366航空団司令であるジョージ・エリオット准将のオフィスがある。

彼の朝は早く、毎日5時頃には目を覚まし10キロほどのジョギングと基地内のジムで体を動かしたのち、濃く火傷をしてしまいそうになるほど熱いブラックコーヒーを飲

みながら一日の仕事を始めることを好んだ。こうすることで、何かとストレスの多いこの仕事を穏やかに始められるからだ。

しかし、今日の彼は穏やかとは程遠い気分でした。

彼の目の前にある命令書は明白であると同時に極めて厄介なものだった。

3日後に部隊を纏めてパラオに送れだど？まったく正気の沙汰ではない。

もちろん、できないことはない。

しかし、少なくとも1ヶ月は先になると言ったのはどこのどいつだ？だいたいまだ偵察情報もないにも関わらず、ここまで話を進めたこと自体がおかしな話だ。

エリオットはため息をついた。苛立っていても始まらない。時間はほとんどないのだ。

彼は机にある電話の受話器を手に取り、相手が出るのを待った。1回目のコールで相手は出た。

『はい、准将』

彼の補佐官であるアンドリユー・ガルシアス軍曹が眠そうな声を発した。エリオットはその声に愉快的気分になった。朝の早い指揮官の補佐官は苦労が多いのだ。

エリオットは笑みを浮かべながら言った。

「アンディーか？仕事を頼みたい」

『はこ』

軍曹の声はすでに張りのあるものに変わっていた。

『レッド・ステイングレー』が予想より大幅に早まった。3日後にパラオに「FAST——」を送れるように運用群のレベッカ大佐に展開計画を作成するように言ってくれ。それと、休暇中の要員を全員呼び戻してくれ。あと、今日の飛行計画を全て変更し『レッド・ステイングレー』用の訓練計画に変えるように言っておいてくれ』

『分かりました。他に何か用件は？』

彼はしばらく考えたのち言った。

「他には特にない：いや、待て1時間後にブリーフィングをしたい。それまでに展開計画の概要をまとめておくように言ってくれ」

『分かりました。以上でいいですか？』

「ああ、それでいい。それじゃあ、頼むぞ」

エリオットはそれだけ言うのと、受話器を置いた。

そして、しばし考え再び受話器を持ち上げ次の通話に移った。

時間はいくらあっても足りなかった。

サウスダコタ州エルスワース空軍基地に存在する第28爆撃航空団に所属する第34爆撃飛行隊（BS）はマウンテン・ホーム空軍基地の広さの問題により、書類上は第

366航空団所属にも関わらずこのエルスワース空軍基地にいた。

B-1Bランサー6機で構成される『サンダーバース』の飛行隊長パトリック・マクミラン中佐は、士官クラブでのポーカーに興じていたが彼を呼びに来た軍曹のおかげでせつかくの勝ち戦を放棄することになってしまった。

彼を呼びつけたのが、この基地の司令官であるクルーガー准将でなければマクミランはその呼び出しをししばらくの間無視できたが、クルーガー准将は時間に厳しい人物である以上それは叶わなかった。

准将のオフィスに入ると、彼を呼びに来た軍曹はすぐに外に追い出された。それほど重要な話かと他人ごとのように考えたマクミランに、准将は言った。

「先ほど、マウンテン・ホームから君に連絡があった。すぐに荷物をまとめてこつちに来いとのことだ」

マクミランは頭を高速で回転させなければならなかった。

マウンテン・ホームに戻れ？それも今すぐに？どういうことだ。

疑問の表情が出ていたのであろう。准将は答えを提供してくれた。

『レッド・ステイングレー』が早まったらしい。全部隊が5日後にはパラオの基地に降り立つとのことだ」

ずいぶんと急な話だが、彼にとっては嬉しいことだった。ここでは、どうもお客さん

のように扱われているように思えたからだ。

マクミランは准将にサツと敬礼すると言った。

「了解しました。第34爆撃飛行隊、命令に従いマウンテン・ホーム空軍基地へ移動を開始します」

准将は笑みを浮かべ頷くと言った。

「行つてこいパット。クソツタレ共を叩き潰してこい」

マクミランは准将の口から出た汚い言葉にニヤリと笑い答えた。

「任せてください准将。この基地の連中に獲物が残るように祈っててください」

「ああ、そうさせて貰おう」

マクミランは再び敬礼し、准将のオフィスを出て部下たちの元に向かった。これから忙しくなることが予想できたが、彼にはそれも悪くないように思えたのだった。

第12話 威力偵察

5月16日

太平洋上を航行する第3艦隊に横須賀にいた第7艦隊の一部が合流した。彼らは、『レッド・ステイングレー』作戦中手薄になるパラオ泊地を防衛すると同時に、これから輸送船団を離れるレイク・エリー、マツキャンベル、アーレイバーク、ステザムの4隻の穴を埋めることを目的としていた。

レイク・エリー艦長テレス・C・カーバー大佐は、腕時計に目をやり、部下たちに命令を出す。

「そろそろ時間だ。各艦に連絡、予定通り艦隊を離脱し Fleet Girls を援護しに行く」

部下たちから、了解の声が返ってくる。

艦首が向きを変え、後続の3隻もレイク・エリーに続く。

4隻は簡易的な輪形陣を組み、第3艦隊を徐々に離れていく。カーバーは、この4隻が無事第3艦隊に戻って来ることができるか少し不安になった。

確かに、我々は奴らに手痛い被害を与えた。

しかし、大勢に影響を与えるかという点で残念ながら否と断言しかねなかった。

『深海棲艦』全体からすれば、先の損害など取るに足らないものだろう。『深海棲艦』は、まるで養殖でもしているかのようにはわんさか出てくる。叩いても叩いても現れる奴らにまともな損害を与える事は極めて困難だ。

普通、戦争というシステムにはどこかに必ず『重心』が存在する。つまり、作戦を左右する戦略的な価値のあるが打たれ弱いものである。

『重心』はその場合によって変わり、燃料であったり戦略的希少金属（レアメタル）であつたりする。

一方、今回の危機の原因である『深海棲艦』には『重心』が存在しない。もちろん、『深海棲艦』にも輸送艦はいるがそれを撃沈したからといって戦力が低下することは今の所確認されていない。

人間が相手ならこれほど厄介であることはなかったはずだ。もちろん、人間同士の殺し合いも気が滅入るものにはあるが、適切な火力で適切な場所を叩き潰せば早期に戦争を終わらせることが可能だ。

しかし、『深海棲艦』は違う。奴らとは交渉することもできないし、おそらく交渉が可能でも相入れる存在ではないだろう。

それは、これまでの戦闘から見て取れた。ほんの少しでも奴らと接すれば、価値観すら違うことが見えてくる。

：いかん。こんなことを考えるのはいいことではない。現場の軍人が決めれることはさほど多くない。我々は決められたことをすることが求められているのであって、勝手に敵の正体を見極めることは求められていない。

彼は部下に見られないようにため息をついた。

取り敢えず、今彼にできるのはこの4隻を無事に帰し、今前線で闘いを始めようとしている少女たちの背中を守ってやることだけだった。

第三艦隊は海上にいた。軽空母瑞鳳を中心とした輪形陣を組んだ彼女たちは、瑞鳳の放った偵察機とヴェラ・ガルフの放ったSH-60B、そしてこれまたヴェラの高性能なSPY-1Bフーズドアレイレーダーによって、空と海中を警戒していた。

これまでの所、『深海棲艦』の偵察機は見当違いの場所を警戒しているようで、こちらに向かつて来ることはなかった。

また、海中に潜む潜水艦もシーホークのソナー、そしてヴェラ本人のソナーにも反応は見られず、今までの所予定通りに進んでいるようだった。

当然、無線封鎖中であるため泊地から連絡が来ることはあり得ず、基地の者たちは今も悶々とした時間を過ごしていることだろう。

「ところで、いつまでこんなことやってるつもりだクマ?」

球磨が声を張り上げて聞いてきた。

ヴェエラも同様に声を張り上げて返答する。

「夜になるまでですよ」

彼女たちの今回のプランは非常に単純だ。通常、威力偵察は昼間に行われる。そうでなければ、どれほどの敵がいるか正確に判断できないからだ。

第三艦隊のメンバーだけで行っているだけなら、セオリー通りにするだろう。

しかし、今この場にはヴェエラがいる。彼女の搭載するシーホークは、夜間でも飛行が可能で優秀な夜でもよく効く目を持っていた。

彼女たちはレーダーに物を言わせ昼は敵の目を掻い潜り、夜間ECMを全力運用することで敵の最後の目を欺き夜戦を敢行。その映像は赤外線カメラを備えたSH-60が撮影する。

その後、十分にことを済ませたと判断した段階で敵が混乱している間に全速で戦域を離脱。シーホークを回収し、彼女たちの撤退の支援をするためにこちらに向かってきている米第3艦隊と合流。おそらく復讐に燃えているだろう『深海棲艦』の追撃を阻止しつつ、速やかに撤退する。

これが、昨日この威力偵察に参加する全員で話し合った結果考え出された最善のプラ

ンだった。

上手くいく可能性をほとんど運に頼っているプランだが、これ以上の作戦は全く思いつかなかった。

「ちよつと暇だにゃ」

多摩が欠伸をしつつ言った。相変わらず猫のような動作だ。ヴェラはあの艦娘が猫とのハーフではないかと疑いだしていたが、それを口に出すほど馬鹿ではなかった。

「もう、多摩さんはもうちよつと緊張感を持つてください」

瑞鳳がたしなめる。旗艦としての仕事をこなしつつ、他の者たちに気を配る様はさすがは秘書艦かとヴェラは一人感心する。

多摩は頬を膨らませて不満を示すが、やがて諦めたかのように肩をすくめた。

瑞鳳はそれを見て、周りを見渡した。どうやら、他の面々も暇を持て余しているかのようだ。

索敵や対潜哨戒は全てヴェラと瑞鳳に委ねられておりすることがないのだ。

瑞鳳がヴェラの元に近寄り言った。

「確かに、あまりにやることが少なすぎるみたい。みんな敵の接近がなくて緊張感が少なくなってる」

「私も同意見ですが…あいにく打開策はありませんね。他の皆さんは退屈でも、こつち

は色々してますから……。ですが、何か手を打たないといけませんね」

2人はしばらく黙って考え込んだ。やがて、ヴェラが一つの案を思いついた。

ヴェラから小声で説明を受けた瑞鳳は眉をひそめて難色を示したが、やがてその案を承諾した。

ヴェラはすぐに作業を開始し、あるプログラムを起動した。

暇を持て余し、すっかり緊張感を失くしたメンバーに喝を入れるのにぴったりなそのプログラムは、ヴェラの演技力も重要になる。

ひとつ息をついたヴェラは数分後にやって来るであろう『敵』が、彼女のセンサーにかかるのを待った。

来た。

彼女の脳内に映っているディスプレイに一つのブリップ（光点）が現れた。

方位208、距離1200、深度は不明、彼女に登録されている味方のキャビテーションノイズと一致せず。

戦時下での撃沈に必要な要素は十分に揃っている。

つまり、これを敵と認識し警告なしの撃沈が可能であるということだ。

彼女は周囲の者に聞こえるように言った。

「敵潜発見。方位208、距離1195、深度不明。5ノットでこちらに向かっていま

す

ヴェラは精一杯冷静さを装っているように努めた。ここでこの存在しない『敵』による『架空』の接敵、つまりヴェラの演習プログラムによる訓練であることを悟られてはならない。

これで、皆に緊張感を再び与え警戒を怠つてはならないと言うことをよく理解させなければならぬ。

それに、いくら架空の敵とはいえそれを沈めたとなると彼女たちの自信にもなるはずだ。

予想より演技が上手くいったようで一気に空気が張り詰めるのを感じた。

まず、一つ目の目的は達成した。次は、これが演習だと気付かれないようにしなければならぬ。

「敵はこちらの位置がわかってるようですか？」

瑞鳳が切羽詰まった調子で聞いてきた。ヴェラは笑いそうになるのをこらえる。なかなか迫真の演技だ。

「いえ、ですがすぐに気付くでしょう。こつちはそれなりの速度で動いています。いくら耳がそれほど良くないやつでもすぐに気付きます。」

その後のことは分かりません。無線で通報するかもしれないし、魚雷で攻撃してくる

かもしれない。確率は五分五分つてところですね」

瑞鳳は考え込むような表情をしたのち言った。

「先制攻撃を仕掛けます。私の艦載機とヴェラさんの艦載機が敵を足止めしている間に爆雷を投下して撃沈します。攻撃は、球磨さん、弥生さん、卯月さんの3隻でお願いします」

「了解クマ」

「分かったよ…」

「はーい、了解でつす！」

「後の皆さんは周辺警戒をしてください。群狼戦術でもされたら厄介ですか」

瑞鳳はそれだけ言うつとヴェラの方に顔を向け言った。

「えーと、しーほーく？を引き返してもらえますか？」

ヴェラは笑みを浮かべて言った。

「喜んで」

ヴェラは少し離れた所で声を潜めて会話を始めた。

「こちらヴェラ・ガルフ。シエラ（Sを意味するNATOのフォネティックコード）10

1きこえますか？」

《「こちらシエラ01」》

「こちらに戻ってきてください。敵潜です」

《見落としてましたか…》

シーホークの妖精が悔しそうな声を発したのでヴェラは急いで訂正する。

「違いますよ。ちよつとこつちの事情で演習をしているんです。もつとも、知っているのは私と瑞鳳さんだけですけれど」

《…なるほど、ちよつと引き締めてやろうつてところですね。すぐ戻ります》

「分かりました。通信終わり」

ヴェラは無線を切ると、瑞鳳に向かって言った。

「すぐ来るそうです」

瑞鳳はほつとしたような表情を浮かべ言った。

「分かりました。それじゃあ、始めましょう」

そう言うと、瑞鳳は矢を弓に番え放った。

放たれた矢はしばしの飛翔の後に、数機の航空機に分裂し旧式の九九艦爆に変化した。

九九式艦上爆撃機は言うまでもなく愛知航空機の生み出した航空機である。本機は、最盛期の帝国海軍を支えた爆撃機で、最も多くの連合軍艦艇を沈めた航空機である。

対潜攻撃をする機体ではないが、どういう訳か妖精さんの力で可能になっている。

当然、SH-60の短魚雷のような精密誘導兵器を投下する訳ではないので命中率は限りなくゼロに等しい。が、敵の通信そして攻撃を阻止するには十分な能力を有している本機は、あくまでも敵潜の妨害に徹するのだ。

《こちらシエラ01、ETA（到着予定時刻）は5分後、以上》

ヴェラのシーホークが、到着時間を伝えてきた。彼女はその報告に合わせて攻撃開始時間を設定し、瑞鳳に伝えた。

「シーホークの到着まであと5分ほどあります。それから準備をして攻撃開始までさらに数分かかります。攻撃可能になるのは約10分かかる見通しです」

「それまでに敵が攻撃してこないといいけど…」

戦闘のイニシアティブ（主導権）は、基本としては先に攻撃した者が握る。瑞鳳が不安がり、早く攻撃したがっているのはこれが原因だろう。

ヴェラとしても、攻撃は早めに行いたい。そのため、ヴェラは瑞鳳に一つ提案をしてみた。戦争は常に思い通りには行かないものだ。

「シーホークの到着前に攻撃を始めたらどうですか？」

「でも、それじゃ完璧に妨害しきれないかも…」

「それはそれで仕方ないです。それに、お分かりだとは思いますが…」

「分かってる。相手は存在しないし敵が攻撃してくることもない。だけど、作戦だと……」
「いいですか？ 作戦なんて物はその時の状態に応じて内容を変えるものなんです。あらゆる事態に冷静に対処する。それが戦いですよ」

瑞鳳からしてみれば、そんなことは言われるまでもないだろう。だが、ヴェエラはそれをあえて言ったのだ。自分へ冷静だと思っけていても他人から見ればそうではないこともある。今の状況がそれだ。

「……分かりました。あなたの意見を受け入れます」

ヴェエラはホツとした表情が出るのを押し隠した。瑞鳳がヴェエラの意見を受け入れてくれたおかげで、2人の小さな対立は終局した。だが、現在の状況が終局した訳ではない。貴重な数分間がこの間にも減っているのだ。

そのことは、瑞鳳にも分かっているらしく遅れた時間を取り戻すように素早く仕事を始めた。と、言っても九九艦爆に攻撃を始めるよう指示するだけだが。

瑞鳳の艦載機はヴェエラの伝えた地点に向かい爆撃を開始する。九九艦爆は、どういう訳か搭載している対潜爆雷を数発ばら撒く。

深度が全く分かっていないため、爆雷の起爆深度はどれもランダムに設定してある。爆雷は設定された深度に到達するまで重力に従いその黒い姿を沈めていく。

そして、予定の深度に到達すると同時に、炸裂。凄まじい爆圧が海中を駆け回り、そ

のエネルギーは海面に向かって上昇しやがて水上に水柱として噴き上がる。

それがあらゆる地点でほとんど同時に起こる。それは、壮観の一言であろう。ある人が見たら、まるで間欠泉が噴き上がったようだといつかもしれない。事実、見た目は確かにそんな感じである。

だが、海上にいる彼女たちはそんなこと御構い無しに次なる攻撃を仕掛ける為に動きだす。

と、ちょうどその時シーホークが到着し、ミキサールされる海中が収まるのを待つてソノブイをばら撒く。

パッシブ式のソノブイはヴェラの演習システムに従い、擬似目標から発する架空のキャビテーションノイズを捕捉し、機上の妖精に伝える。

その情報は、さらにLINK11と妖精からの通信でヴェラに伝えられ、ヴェラはそれをその地点を航行している球磨たち対潜部隊に伝える。

「敵潜を捕捉。あなた方の場所から方位013、距離500、深度は45です」
「了解クマー！」

球磨たちはヴェラの示した地点に向かい爆雷を投射する。ほとんど完璧に深度と方位、距離が把握された潜水艦が生き残る道は、ほとんどゼロに近い。

その場を全速で離れるか、息を潜めて敵が諦めて去るのを待つか、敵を全滅させるか

しかない。

しかし、そのどれもが現実的でないのは言うまでもない。特に洋上に高性能のソナーを持った艦がおり、上空に対潜に特化したヘリが飛んでいてはなおさらだ。

やがて、爆雷が炸裂し再び水柱が立ち上がる。ヴェラのソナーは掻き回され、ノイズだらけになったが辛抱強くそれが治るのを待った。

数分後、ノイズの消えたソナーには何の反応も存在しなかった。彼女の艦載機のソナーにも反応は存在していないとのことだ。

つまり…。

「目標の反応消失。状況から判断して、撃沈した模様」

空気が僅かに緩むのをヴェラは感じた。皆、極度の緊張感の元で戦っていたためその簡単な報告ですら彼女たちの張り詰めた緊張を解きほぐしたのだ。

ふと、多摩が気になったのか言った。

「そう言えば、浮遊物を見てないにゃー」

穏やかな空気が一瞬で凍る。

潜水艦を撃沈した場合、浮遊物や脂が海面に浮いてくる。これで敵を沈めたか仕留め損ねたかある程度判断できる。少なくとも、浮遊物が浮いてこないと撃沈判定を出すことは難しい。

当然ながら、今海面には浮遊物は浮いていない。当然だ。相手は架空の敵。その存在は、ヴェラとシーホークのデイスプレーにしか現れない。

そのため、瑞鳳を除く全員があたりを不安そうに見回した。

瑞鳳がこちらを見て訴えてきた。ヴェラも頷く。そろそろ潮時だ。

ヴェラはあまり乗り気でないように事実を皆に知らせたのだった。

この後、しばらくの間ヴェラの信用がガタ落ちしたのは言うまでもない。

陽は落ちた。

暗闇が迫る中、瑞鳳の艦載機が彼女の元へ戻ってきた。その一方で、ヴェラの艦載機は給油を受けて再び空に舞い戻る。ほとんど休みなく飛んでいる妖精の表情や声にも疲労の色が覗いている。

しかし、シーホークにしかできない仕事が多すぎて妖精たちに休みを与えてやる暇はなかった。こういった雇用(?)環境では、士気が下がってしまいがそれをどうこう出来るわけでもない。唯一、やれることがあるとすればこの作戦をさっさと終わらせて、妖精たちをゆっくり休ませやる。それだけだった。

「と、言うわけでこれから敵泊地突入作戦について最終説明を行います」

おく、と言う声とパチパチという拍手の音が広がる。

ヴェラはその音が収まるのを待って続けた。

「作戦と言つてもそんな大それたことじゃありません。敵の哨戒を避けて、泊地に殴り込み、速やかに被害を与えるだけ与え、全力で逃げる。ただそれだけの非常にシンプルかつ馬鹿げたプランです」

ヴェラ自身喋つていてまともではないと思つたが、先ほども言つたようにこれ以上のプランを考へるのは残念ながら無理だつた。

全員が厳しい表情を浮かべ、決意を込めて頷く。

ヴェラはそれを見て自分も頷き、瑞鳳に後を任せた。

瑞鳳はメンバーに激励の言葉を放つた。

「皆さん、これは大変重要な任務です。当然、困難が予想されます。ですが、これまでの訓練、経験を活かせば必ず成功します。」

私は、この作戦で何の役にも立てませんが私の力が無くてもきつとやってくれと信じています」

瑞鳳はそこで一息ついて、出会つてこのかた見たことのないほどゾツとする表情を見せて言つた。

「奴らに目の物を見せてやりましょう。以上」

夜陰に乗じた第三艦隊は、敵の監視を予想しつつもサイパン海峡を抜け『深海棲艦』の泊地となっているラオラオベイに向かい進んでいた。

ヴェラのECMにより、敵のレーダーはジャミングされておらずだがいつまでも気付かれないとは思えない。やがて、このレーダーの異常が空電ノイズではなく人為的なもの、つまり敵の作り出した影であると気付かれるのも時間の問題である。

ここまで来ると、最早重要なのは隠密行動ではなく、いかに素早く敵の懐に潜り込むかによって決まってくる。

瑞鳳が最前線に出て砲撃戦に参加する訳にはいかないのです、2隻の駆逐艦（弥生と卯月）を護衛に付けて離れた地点で待機している。

そのため、この夜襲に参加できる艦艇はさらに減少したでさえ難しい攻撃をより困難なものに変えてしまった。

敵戦力をできる限り削らなければ、撤退中に手痛い損害を与えられかねない。運が悪ければ全滅の可能性もあり得る。

その戦力不足を補うため、砲撃戦を想定していないヴェラまでこの作戦に参加する必要があった。当然、12.7センチ単装砲が2門では砲撃戦においてほとんど役に立たない。それが、毎分16発から20発の砲弾をぶつ放せるMk.45であろうと関係は無い。通常艦ならいざ知らず相手は『深海棲艦』。まともに戦えるとは思えないが、艦娘の力ならばどうにかなるかもしれない。と、言うよりどうにかしなければ生き残れない、と言う方が正しいか。

頭に浮かぶレーダーディスプレイに慌ただしい敵艦隊の動きがあった。どうやらバレたらしい。

ヴェラはその旨を味方に告げると、敵にロックしておいたハーブーンを発射した。

ハーブーンは夜戦において空母より危険で、なおかつ硬い目標である戦艦に狙いを定め、各艦に2発ずつ突っ込んだ。

通常の炸薬の2倍の威力を持ったヴェラのハーブーンは通常のハーブーン4発分の威力に敵戦艦は瞬時に沈黙した。この攻撃により、ラオラオベイに展開していた4隻のル級フラッグシップのうち1隻が沈み、1隻が大破した。また、この攻撃の余波により駆逐艦2隻がル級の爆発に巻き込まれ沈み、軽巡1隻を含む数隻が損傷した。

これにより、『深海棲艦』の反撃に僅かな遅れが生じた。言うまでもなく、この僅かな遅れは致命的被害を彼女たちに与えることになった。

このハーブーン攻撃のドサクサにまぎれ、ヴェラたち第三艦隊ラオラオベイ突入部隊は砲戦可能な距離まで接近した。

ヴェラのMk. 45が先陣を切り、砲撃を開始する。レーダー、センサー等を駆使した射撃管制システムにより驚異的命中率を誇る現在の単装速射砲は、航空機やミサイルなどの飛翔物体を撃破するために作られている。当然、艦船に命中させることなど造作もないことなのだ。

ヴェエラの放った砲弾はあらゆる環境特性、敵の動きを完璧に予想したコンピュータの計算通りの地点に撃ち込まれ、予想外通りに動いたへ級フラッグシップに命中した。12・7センチ砲弾ではさほどの損害は与えられないが、間髪入れず被弾箇所を再び撃ち込まれば十分な被害を与えられる。3発目の砲弾で、へ級は特に反撃することなく海に沈んでいった。

この頃になると、味方と敵の砲弾が入り乱れる乱戦となっていた。

敵のり級フラッグシップから放たれた20・3センチ砲弾がヴェエラのすぐ目の前に着弾した。瞬時に熱せられた海水がヴェエラの体に降りかかるがそんなものに構ってられない時間はない。

ヴェエラの後方にいた球磨たちが増速し、ヴェエラの横を通り過ぎていく。砲撃を中止した彼女たちは搭載された魚雷を放つために突撃したのだ。

球磨型に搭載された九三式酸素魚雷（何故か八九式熱空気魚雷ではなくなっている）が放たれた。

53ノットで2200メートルの射程を持つこの魚雷は海外ではロングランス（長槍）と呼ばれている。あまりに長過ぎたために、実際の戦闘中に敵艦に回避された魚雷が、射程圏にいた友軍艦艇に命中してしまう事態が発生したほどだ。

また、酸素を利用するため各国の空気魚雷より航跡がない。空気と違い、燃焼に全て

利用されるため排気によって生じる気泡が発生しないためだ。

夜戦において姿の見えない高速の魚雷は大きな脅威であると同時に、恐怖にもなる。恐怖は混乱を煽り、敵が冷静な判断をできなくする大変重要な武器にもなる。今回のような夜襲は小規模な部隊で行うことが望ましい。ゆえに戦力不足を補うために。あらゆるものを武器として用いる必要があるのだ。

そして、今回もこの武器は非常に役立つた。

静かに、しかし高速で接近して来た長槍は、徐々に構築されつつあった艦隊陣形をあっさり破壊した。

『深海棲艦』たちは、味方の被雷に恐れをなしでるだけ味方との間隔を開けようと好き勝手に動き始める。これでは、反撃に出るのにさらに時間がかかるだろう。

球磨たちが魚雷を再装填（どういう訳か、次発装填装置が付いていないにもかかわらず再装填ができている。後で聞いた話だが、艦娘は妖精の力によってそんなこともできるらしい）し、再び雷撃に入る。今回は各艦がばらばらに魚雷を発射していく。

この雷撃は、敵に被害を出すことを目的としたものではなく、敵の混乱をさらに煽るための時間差で放った散発雷撃だった。

これにより、敵にとっていつ来るか分からない目に見えない水面下を突き進む死神ができたも同然である。

これまでの所、ヴェラが必死に考えたプランは順調に推移していた。ここから少し離れた地点でホバリングさせているシーホークも、十分に撮影ができたことだろう。

ヴェラは頭の中にある時計を確認した。交戦開始すでに20分が経過している。散発雷撃により混乱しているが、いざずれ事態を收拾し、反撃に転じるはずだ。その前に撤退しなければならぬ。引際を間違えて壊滅した部隊は枚挙に暇がない。

ヴェラはシーホークに連絡を入れた。

「こちらヴェラ・ガルフ。シエラ101へ」

《こちらシエラ01》

「偵察は完了しましたか？」

《ええ、バッチリです。いつでも撤収できます》

「了解しました。回収地点は予定通りポイント・アルファで行います」

《了解》

「以上です。通信終わり」

ヴェラは一息つくといまだに交戦している友軍に連絡を入れた。

「ヴェラ・ガルフより各艦へ。全艦撤退。攻撃を中止して撤退してください。受領通知を」

すぐに連絡が来る。

「了解だクマ」

「分かったにや」

「は〜い。分かりました」

「分かったわ」

全員からの受領通知が来ると、ヴェエラは『深海棲艦』に背を向け、全力で離脱を開始した。

時々目を閉じて頭の中に展開されているディスプレイを見て、敵の動きを確認する。

ようやく散発雷撃の恐怖から抜け出したらしく、反撃のために艦隊陣形を構築しようとしているが、ヴェエラたちが湾外に出る方が先になりそうだ。脱出まであと5分。逃げ切れる。

が、ヴェエラの希望は儚く打ち砕かれた。

後方よりかん高い音が聞こえたのだ。それが何か一瞬分からなかったが、目の前に巨大な水柱が立った瞬間に分かった。

大口径砲弾が落ちてきたのだ。水柱の高さから推測するに、40.6センチ砲弾だろう。最初に叩いた戦艦群が反撃を開始したのだ。

ヴェエラは小さく舌打ちする。反撃が想定より早い。このままでは…。

すぐ後ろで激しい炸裂音が響いた。

ヴェラが後ろを向くと、球磨が被弾しているのが分かった。球磨の表情は、苦痛で歪んでいる。

ヴェラはすぐに球磨に呼びかけた。

「球磨さん、大丈夫ですか!?」

大丈夫でないのはここから見ても分かるが、それでも言ってしまうものだ。

「大丈夫だクマ……。球磨をこんな姿にするなんて屈辱だクマ……」

その言葉からは怒りの念が感じられた。どうやら、あの歪んだ表情は痛みよりも怒りからきていたようだ。

怒ることができるほど元気なら十分だが、一応、聞いておいた。

「球磨さん、自力航行は可能ですか?」

「なんとか大丈夫クマ。でも、小回りがかなり効かなくなっているクマ。それに、足もかなり遅くなってるようだクマ」

当然だろう。あれほどの被害を受けたのだ。むしろ、自力で航行ができることに驚きを感じる。

ヴェラはすぐに対応策を出した。

「睦月さん、球磨さんの離脱を手伝ってください。多摩さんと如月さんは2人の支援をお願いします。できるだけ早くここから離脱してください」

「それは了解だけど…、ヴェエラさんはどうするの?」

如月が疑問を呈した。

ヴェエラはその疑問にすぐに答える。

「私は殿を務めます」

如月はその行動を止めさせようと口を開こうとしたが、ヴェエラの目に決意の念が浮かんでいることに気付き、説得を諦めた。

彼女たちが離脱していくのを見ながら、ヴェエラは敵の司令塔を探した。数秒で目当てのものを見つけた。

そこにいたのは、これまで交戦したことのない『深海棲艦』だった。

ヴェエラは戦術データ・システムに記憶してあるデータからその『深海棲艦』が何者であるか突き止めようとした。

見つけた。飛行場姫と呼ばれる『深海棲艦』の中でも上位個体だ。

飛行場姫はアイアンボトムサウンド、つまり鉄底海峡付近に存在している個体しかこれまでのところ確認されていないが、第二次大戦時飛行場があった場所であればどこにも出現する可能性がこれまでの研究から予想されていた。

言うまでもないが、第二次大戦時ここサイパン島にはB-29の飛行場、コンロイ飛行場（日本側公称アスリート飛行場）が存在していた。

学者たちの言った、飛行場姫の出現条件は十分に満たしている。

ヴェエラは自分の不運を呪った。

まさかここにそんな奴が展開しているとは思わない。ヴェエラたちは、お偉い学者たちの予想の裏付けを図らずもしてしまったのだ。

もつと味方が多い時に出てこればいいものをと、ヴェエラは独りごちたが、それで今の状況が打開されるわけではない。

先に行くように命じた泊地攻撃のメンバーも、激しい砲撃によりあまり進めていない。

さらにマズイことに、飛行場姫と泊地内にいたヲ級フラッグシップから航空機が飛び立っている。

ヴェエラはイージスシステムをフル活用し航空機に対処するが、多勢に無勢、何十機と飛び立つ航空機全てを一人で叩き落すには無理があった。

状況は芳しくない。いや、時間と共に悪くなる一方だ。

殿として残ったヴェエラに砲撃が集中し始めた。どうやら、先に行った部隊には航空機が攻撃を加えるようだ。

本来ならば、味方のエアカバーをしなければならぬが、今は自分に向けられる砲弾を回避するのに手一杯で、敵機来襲を警告することしかできなかった。

周囲に何本も立つ水柱に囲まれる中、ヴェエラはどうかこの危機から脱出する方法を考えたが、何も浮かばなかった。最新鋭の戦術データ・システムを持つてしても、この状況から自力で脱することは不可能だと判断されたのだ。

ヴェエラはこの馬鹿馬鹿しい威力偵察が失敗しかけているのを悟ったが、ただでやられるほどお人好し出ないことを証明するつもりだった。

ヴェエラは自身の搭載している飛行場姫に有効と思われる強力な対地兵器、ハーブーンとトマホーク全弾を飛行場姫に向けた。

両兵器共、対艦兵器であるが、艦娘の力を使用すれば十分に対地攻撃は可能だ。

ヴェエラは現在も飛行している彼女艦載のシーホーク2番機、シエラ102に飛行場姫レーザー照射させハーブーンを、トマホークは標的地点の座標を入力して発射した。

ヴェエラ最後の希望である8発のミサイルは、白煙を噴きながら飛翔を開始した。

『深海棲艦』艦隊から対空砲火が上がるが、亜音速で飛翔する両ミサイルを落とすことはできなかった。

十数秒の飛行ののち、ハーブーンとトマホークはポップアップし、飛行場姫に向け45°の急角度で突き刺さり、轟然と爆発した。

どのミサイルも通常より2倍の炸薬が入っているため、その威力は計り知れないものになっていった。

ヴェラは微かな希望を見出した。もしかしたら、この攻撃で飛行場姫が撃破できなくても、かなりの損傷を与えられたかも知れない。

もしそうなら、脱出の時間を稼げるかも…。

しかし、現実には常によくはない方に回るものだ。シーホークからの映像には、黒煙の中で蠢く飛行場姫の姿が映っていた。しかも、ほとんど損害はなく、ピンピンしているように見える。

それを見たヴェラは作戦が失敗に終わりかけていると感じた。先ほどの攻撃で僅かに乱れた敵の陣形はすでに回復している。

味方から連絡がくる。航空機の攻撃を受け前に進めず、無傷のものは一人もいないといった内容だった。通信の相手である如月の声には絶望の色が滲んでいた。ヴェラはこの通信の返答として、できる限りの努力をしようと言ったが、それはなんの打開策もないことを告げているのと同じだった。

通信を終えたヴェラは普段は決して使わないような言葉で敵を、そしてこのような無茶な作戦をするように仕向けた軍の上層部の者たちを口汚く罵った。

他の人が聞けば眉をひそめるであろうことは確実な言葉を連呼し続けた。それほど怒りであつたのである。

今の彼女の頭にあつたのは、生きて帰れたら必ず復讐してやる、と言つたところか。

どちらにせよ、ヴェラのその罵りは突然きた無線で打ち切られた。

《こちらエスコート。ストライカー、応答せよ》

ヴェラは驚いた。エスコートとは、米第3艦隊の護衛部隊に与えられているコールサインだ。ストライカーは、ヴェラたちのコールサインである。

ヴェラはすぐに返答した。

「こちらストライカー、旗艦ヴェラ・ガルフ」

《良かった、まだ無事か。こちらはエスコート旗艦レイク・エリー。ポイント・アルファで貴艦隊の空母部隊と接触した。そちらの状況を報告してくれ》

彼女は無事なものかとひと言皮肉を言ってやろうかと思つたが、今はそんなことで時間を潰している暇はないと思ひ直し返答した。

「ストライカーは1隻が大破。本艦以外の全艦が何らかの損害を受けている。支援攻撃を要請する」

《了解した。攻撃目標を伝えてくれ》

ヴェラは彼女を取り巻く状況を見て答えた。

「ネガティブ。こちらからは伝えられない。が、現在飛行中の友軍機から目標の情報は得られるはず。そちらに周波数を送ります」

数秒の沈黙の後、再び連絡が入った。

《目標を確認した。現在、支援攻撃の準備中。使用火器はトマホーク。弾頭は燃料気化弾頭》

燃料気化弾頭だと？ヴェラはその意味を悟ると、回避行動も止めてすぐに海域離脱を図った。

あの兵器の影響圏内にははいたくない。

再び連絡がきた。

《たった今発射した。着弾まで3分》

ヴェラはどうか湾外に脱出していたメンバーに近くの岩陰に隠れるように告げた。

こちらの切羽詰まったような言い方が功を奏したらしく、全員が素直に従ってくれたようだ。

《あと2分》

再びきた連絡にヴェラはさらに急ぐ。すぐ目の前に砲弾が落ちたが、構っていられない。

ヴェラは2機のシーホークに早急に離脱するように命じたが、すでに2機は離脱を図っていた。シーホークの妖精も、サーモバリックの威力を確かめたくはないらしい。

《あと1分》

水平線から1本の光が見えてきた。光は徐々にこちらに近付いてきた。

ちょうどその時、ヴェラは湾外に脱出し味方たちがいる岩陰に勢いよく飛び込んだ。
 《あと30秒》

ヴェラはその場にいる全員に、シヨック体勢をとるように伝え自らがその見本を見せた。

耳を塞ぎ、目をきつく閉じて、口を開ける。この体勢を維持すれば、サーモバリックの衝撃を抑えることができる。

《残り10秒》

そして、永遠にも感じる数秒が続き最後のカウントダウンが始まった。

《5・4・3・2・1……インパクト!!?》

目を閉じていても分かるほどの凄まじい閃光が、夜空を一瞬で真夏の真昼間に切り替えた。

燃料気化兵器。正式にはサーモバリック爆弾は、燃料を目標地点に撒き散らし、それが気化して周囲に広がったのちに点火し、瞬間的に空間を焼き尽くす気化兵器である。

某戦闘機ゲームでもその猛威を振るうこの兵器は、あらゆる目標に有効的だが特に地上の目標に凄まじい効果を見せる。

上空200メートルで霧状に燃料が散布され着火し、直径300メートルの巨大な火の玉を発生させる。この時の温度は2000℃〜3000℃で、この火球に触れたもの

は全て燃えて灰になる。

最初のこの火球で4平方キロメートル以上が焼き尽くされ消滅し、燃料と空気の混合して何度も起きた超過気圧によって7平方キロメートル以内の物体は全て破壊される。もつとも、これは通常の地上目標に対して使用した場合だ。実際にこれだけの被害を与えることができるかは分からない。

しかし、いくら相手が『深海棲艦』といえどこれだけの破壊を受ければ損害被ることは確実だ。

サーモバリックは、生物に特に有効なのだ。この攻撃を受ければ、普通の生物は確実に死滅する。『深海棲艦』として生物である以上、この激しい炎の嵐を耐えられないはずだ。

ヴェラは衝撃波と強い熱波が収まるのを待って、岩陰からラオラオベイを見た。

先ほどまで生い茂っていた木々は1本残らず焼き尽くされ灰となっていた。まだあちこちから煙と水蒸気の幕が空に向かって立ち上がっている。

が、飛行場姫はまだ存在していた。しかも動いている。

しかし、完全な状態でないことはすぐに分かった。いたるところに損害が確認でき、まるで巣を守る雀蜂のように飛び回っていた航空機（一部ではたこ焼きと呼ばれている丸い航空機）は1機残らず消し飛んだようだ。

また、泊地内の艦隊も同様に被害を受けたようだ。

爆心地に近い位置にいた『深海棲艦』の内、まともに生きていたのはル級フラッグシップ2隻とヲ級フラッグシップ3隻のみ。

その周りにいた護衛の重巡や軽巡、駆逐艦はどれもこれも完全に炭に変わってしまったようだ。

爆心地より離れた地点にいたこれらの艦艇は、損害を受けているものの、まだ無事に動いている。

サーモバリックは、想像より威力は低かったが、彼女たちの離脱の時間を稼ぐには十分だった。

ヴェラたちはすぐに動き始め、合流地点に向けて可能な限りのスピードで走り出した。

5月17日

1時間ほど走ると、味方の艦隊が見えてきた。ここからでも、レイク・エリーの雄姿が見える。

ヴェラは久しぶりに姉を見て、ほつと一息ついた。彼女が最後に見た姉の姿は、『やまと』の魚雷を土手っ腹に受けて炎を吹き上げているところだった。

艦隊の陣形は、瑞鳳たち艦娘を中心にした輪形陣で、前方にレイク・エリー、左右に

アーレイバークとステザム、後方にマツキャンベルが配置されている。

護衛の米第3艦隊の4隻は、瑞鳳たちが回避行動で押し潰されないように間隔を大きく開けている。

ヴェラたちはその艦隊の間を縫って中心地点に向かい、瑞鳳たちと二言三言話したのち、パラオ泊地への撤退を開始した。

レーダーには敵の追撃部隊がラオラオベイから出撃してくるのが分かる。数は少ないがそれなりに規模の大きい部隊の筈だ。

さらに、ヴェラたちの奇襲時に泊地内にいなかったいくつかの哨戒部隊も彼女たちの追撃に参加しているようだ。

まだ生き残っていた敵側の偵察機があらゆる方向に向け飛んでいくのが、ヴェラのディスプレイに映る。

今のところ、見当違いの場所を飛行しているが、不規則に旋回しているためどの方向からいつやってくるか正確に予想することはなかなか難しいだろう。

ヴェラは米第3艦隊の各艦とデータリンクシステムで繋がっていた。こうすれば、敵部隊に対する攻撃も容易になるし、それぞれの持つ情報を効率的に戦闘に使用することが可能だ。

艦隊の前方と左右にSH-60Bが飛行し、海中にいる潜水艦に睨みを効かせる。各

哨戒機には敵潜を見つけても攻撃しないように厳命されていた。攻撃をして、こちらの居場所を敵に知らせたくなかったからだ。

航空機に対しても同様で、回避困難な敵機の場合のみ、攻撃を行った。

これだけ徹底しておけば、十分に追撃を振り切れたが、こちらの想定通りにいかないのが現実であり、戦闘である。

どういう訳か、超低空を飛行する偵察機と遭遇したのだ。

ステザムが即座に叩き落としたが、時すでに遅く位置は通報された後だった。

すぐに全艦が転舵し、敵にこちらの行き先を誤らせようとした。

しかし、20分ほどして到達した敵編隊はその欺瞞に全く嵌まらないようだ。40機ほど敵編隊はまっすぐにこちらに向かって接近してくるのが、レーダーで分かった。

護衛の4隻も同様に把握し、攻撃の用意をしている。

各艦が発射するミサイルの振り分けはコンピューターが瞬時に行い、それぞれのCI C内のディスプレイに映し出す。

ヴェラの頭の中にあるディスプレイも同様で、彼女のSM-2の数基に諸元が入力される。

そして。

VLSが解放され、各艦より合計40発のスタンダードミサイルが発射された。白煙

を噴き上げるスタンダードは、徐々に明るくなる空を駆け登り、水平飛行に移った。

その頃になると、すでに発射元からはその姿を肉眼では見えなくなる。それはおそろく目の良い艦娘、中でもヴェラは特に良いが、同じであった。

ディスプレイに光点として表示されたスタンダードは、順調に大気を切り裂きつつ敵機に向けて飛翔する。

戦闘はすぐに終わった。

敵編隊に飛び込んだスタンダードは、寸分の狂いもなく命中していく。敵機が大きな回避行動をとろうと、増速して逃げようと関係はない。

40発のSM-2は、1発残らず命中し、空にいくつもの爆炎でできた花を開かせた。こうして、『深海棲艦』の攻撃部隊は僅か数分で全滅した。

幸運にも、そして『深海棲艦』にとつては不運にも、情報収集が遅れこの攻撃部隊の全滅が判明したのは、それから約2時間後、帰投時間になっても帰ってこない艦載機に気付いてからだった。

『深海棲艦』は血眼になって奇襲部隊を探し回ったが、その頃にはヴェラたちはすでに安全圏に離脱し、迎えに来た米第3艦隊の主力部隊と合流していた。

結局、『深海棲艦』は叩かれるだけ叩かれたのちに、追撃部隊は復讐すらできずに撤収するしかなかった。

こうして、困難を極めた今回の威力偵察はヴェラ以外の艦娘全艦が損傷するも、轟沈艦なしという好結果に終わった。

しかも、偵察自体も見事に成功しており、シーホークが持ち帰ったデータは極めて質の良いものだった。

また、米側も対『深海棲艦』用に装備されたサーモバリック弾頭のトマホークの実戦での使用で良いデータがとれたらしい。

不可能に思われた作戦は再び人類の勝利で幕を閉じたのだった。

第13話 集結 前編

5月18日

微かな音が聞こえ、ヴェラは目を覚ました。

数日前の失敗から学んだ彼女は、頭を二段ベッドの天井にぶつけないように、慎重に起き上がる。

頭を掻きながら、ヴェラは置いてある時計を見た。

時計の針は9時を指している。

普段なら完全に寝過ごしているところだが、今日は1日休みが与えられている……はずである。

なぜ、はずかと言うと、ヴェラに昨日の記憶がほとんど残っていなかったからである。ヴェラは、昨日の出来事を思い出そうと記憶を反芻した。

昨日、米第3艦隊と合流したのち、ヴェラたちは旗艦である空母コンステレーションに乗艦することになった。

燃料の消費削減が目的だったが、ヴェラ個人としては姉に乗艦したかった。もちろん

ん、深い意味はない。

それはさておき。

空母コニーの医務室で手当てを受けた彼女たちは、食堂で朝食を取ることになった。コニーの食事はお世辞にも健康に良いとは言い難い（ある海兵隊員の言葉を借りるならゴミのような）ものだった。

食事が終わると、彼女たちはコニー内を見学することになった。

言うまでもないが、ヴェラにとつて初めての艦内見学である。

キティホーク級であるコニーは、米海軍の高官が言うには人類が設計した物の中で最も複雑な構造をしているらしい。

誇張ではあろうが、事実である可能性を身を以て体験した。おそらく、付き添いがなければそのまま迷子になって行方不明、みたいなことになっていただろう。

この複雑な設計が、本艦の就航前に起きた火災の鎮火を遅らせ、50人の死者と150人の負傷者を出し、7000万ドルに及ぼす膨大な損失を生み出し、就航を7ヶ月も遅らせた要因になったのも分からないまでもないことだ。

しかし、艦内見学は非常に有益なものだった。

広い艦内故にかなりの距離を歩くことになったのを差し引いても、コニーの艦載機運用能力、退役したとは言え、再び現役に戻り新造艦たちに遅れをとらないその性能の良

さは十分に感じられた。流石は『アメリカの旗艦』、と言ったところか。

そうこうしているうちに、彼女たちはパラオ泊地にたどり着いていた。

ヴェラの記憶が抜け落ちているのはこの部分からである。

帰ってきた後、全員でドックに入り：いや、自分と瑞鳳は江田の元に今回の作戦の報告に向かつて、作戦中に手に入れた偵察写真やらを情報部へ解析に回して、その後ドックに入った：のか？

補給はいつやった？着ていた服はいつ洗濯に回した？いや、そもそもいつドックを出て、夕飯を食べて、部屋に戻って布団に入った？

まるで覚えていない。記憶がなくなっているようで気味が悪い。

ヴェラはふと、窓の外に目をやった。

雨が降っている。先ほどの音はこれか。ここ数日は晴れていたのに：。

いや、むしろこれまで晴れていたのが珍しいと言ったほうがいいだろうか。

彼女はしばらく窓の外を眺めた後に、寝巻きを脱いで普段きている制服に着替え始めた。

同じ頃、数年前までパラオ国際空港と呼ばれていた、現在のパラオ航空基地では江田の副官である山岡は冷たい雨が降りしきる中、傘を差して数人の保安要員と共に1機の航空機を待っていた。

3分ほど経った頃、微かなジェットエンジンの音が響き始め、徐々に大きくなってきた。

それからさらに数分すると、米空軍の空中給油機であるKC-110エクステンダーが曇天の空からその姿を現し、着陸態勢に入った。

山岡たちが駐機場の端の方で見ている中、KC-110は降着装置をパラオ基地の滑走路に叩きつけた。

雨で濡れている滑走路は滑りやすく、一瞬、目の前の機体が止まらずにオーバーランするのではないかと思ったが、空中給油機は滑走路を十分に残したまま停止した。

この給油機は、ここまでにずいぶんな長旅をしてきていた。

マウンテン・ホーム空軍基地を飛び立ったエクステンダーは、アラスカ州のエルメンドルフで給油した後、日本の三沢基地に着陸。その後、フィリピンのクラーク国際空港で最後の給油を受け、ようやくパラオにたどり着いたのだ。

このエクステンダーは、第366航空団の「FAST-1」、つまり基地調査チームを運んできた第22空中給油飛行隊（ARS）に所属する6機のKC-110の1機である。

「FAST-1」は、ホスト基地を最初に見て回り、部隊が展開するために必要なものを正確に評価するのが仕事である。その後、「FAST-2」がAOC（航空作戦センター）チームとWICP（航空団初期通信パッケージ）衛星通信装置を積んでやってく

る。さらに、「FAST-3」がC3I (command, control, communication and intelligence) の略称。シーキューブドアイと読む。軍事力を効果的に運用するのに必要な敵に関する情報を知り、それに対応するための自軍の戦力を適切に指揮統制して、軍事目的達成のために機能するシステム) 関係者とそのCTAPS (戦術航空管制システム) 関連機器を搭載し、ホスト基地到着までの飛行中に最初の出撃計画や各種命令を作成する。最後にやってくる「FAST-4」が、整備要員や搭乗員を運び、到着次第航空機の準備を整え最初の任務を始める。また、「FAST-4」の到着と同時に、航空団の第1波がやってくることになっている。

これら一連の流れは、「FAST CONOPS」計画と呼ばれ、航空団が海外で展開する場合必要な手順となっている。

KC-10が誘導路を通り、駐機場までやってくるとすぐにタラップが向かい、機体入口に取り付いた。

数分間の交信が終わると、山岡の待っていた相手が数人の乗員を連れ添って降りてきた。

相手はこちらに気付くと、少し急ぎ足でこちらに向かってきた。

「お待ちいただいたようですね。おっと、私は第366航空団第366運用群のスコット中佐です」

男は山岡の元にきた途端話し出した。

「いえ、そんな事は。私は、本泊地の司令官の副官をしている山岡です。あなたと同じで、中佐です。ようこそパラオへ。長旅でお疲れでしょう。少し休まれてはどうですか？」

「お心遣い感謝します。しかし、我々に休んでいる暇はありませんよ。すぐにこの基地の評価をして、報告しなければ本隊がこれませんから」

それからスコットはしばらく周りを眺めてから言った。

「なかなか綺麗な基地だ。流石は元民間空港と言ったところですか？」

「ええ。我々は外見にほとんど手をつけていませんから。ですが、中の方はそれなりの改装をしなければなりませんでしたよ」

「そうでしょうとも。まあ、詳しくは私自身の目で見てきます。それでなくては、私が来た意味がありませんからね」

スコットはニヤリと笑うと、山岡に案内を頼んだ。

泊地司令部の提督執務室の隣りの部屋にある応接室では、江田と米第3艦隊の司令官であるジョン・ウオード中将が『レッド・ステイングレー』に向けて、面会していた。

すでに部下たちがある程度決めている作戦計画に関しての話し合いという形を取っているが、彼らがやることはもはやほとんど残されていなかった。

ウオードは、江田のことを観察していた。ウオードにとって、初めて会う人間の観察はほとんど日課といつてよかつた。

彼の江田に対する第一印象は、何を考えているかよく分からない知性の満ちている人間、だつた。こんな印象を抱いたのは、ただの一回、当時副大統領だつたテネット大統領その人だけである。

江田の話し方は、軍人のものだったが時々政治家のそれになつた。知らなければ、かなり軍隊に詳しい政治家でも通りそうだつた。

ウオードを最も不安にさせたのは、江田がウオードのことをどう思っているか、全く表情に出さないことだ。

これまでの経験上、どんな人間も必ずこちらをどう思っているかが表情に出た。おかげで、敵が誰で味方が誰かすぐに分かつたのだ。

ところが、江田はそれが全くない。恐ろしいまでのポーカーフェイスだ。

このような男と交渉しなければならぬのは、少し気が滅入るが、上からの命令では仕方がない。

ウオードは、彼に与えられている仕事を始めた。

「ところで、江田提督」

「何ででしょうか？」

「折り入って頼みがあるのですが……実は、ヴェラ・ガルフをこちらに委ねて欲しいのです」

「……それはまたどうして?」

一瞬の沈黙が、相手の不満を示したように思えたが、ここまで来ればやるしかない。ウオードは江田の問いに答えた。

「知つての通り、去年の夏頃から大西洋にも『深海棲艦』が出現するようになりました。現在の戦力では、これ以上の侵攻を阻止するのに手一杯の状態です。このままでは、いづれ損耗し大西洋を完全に失うことになるでしょう。」

我々はそれを避けなければなりません。

しかし、今現在艦娘を持たない我が国では効率的に敵を叩くのは難しい。そのためにも、ヴェラ・ガルフにはこちらに来て欲しいのです」

しばらくの沈黙。それが何を表すかは、ウオードには分からなかった。……別に分かる必要もない。すぐに相手が教えてくれるはずだ。

その考えは正しかったようで、江田はウオードの問いに返答した。

「あなたの意見はもつとです。大西洋を落とされることは非常にマズい事態を招くことになるでしょう。」

しかし、私の記憶が正しければ、貴国と我が国での政府間協議で何人かの艦娘をそち

らに送るように調整しているはずで。

それに、航空勢力は十分にあると聞いています。むしろ、大西洋側の方が多くの空母が展開しているはずですよ。

大西洋艦隊の空母ジョン・F・ケネディ、イギリスでも工期を繰り上げたクイーン・エリザベスとプリンス・オブ・ウェールズ、フランスのシャルル・ド・ゴール、ブラジルで引きこもっているサン・パウロ。出せる戦力は十分にあります。

また、大西洋での作戦は特に考えられていないと聞いています。

先に挙げた戦力があれば、突然大西洋を守る部隊が壊滅した、何てことにはならないはずで。

大西洋の部隊が防御に徹している以上、彼女を引き渡すことはできません。こちらではいくら兵力があっても足りないほどですから」

そう言われてしまうと、もはや何も言えない。

しかし、意外だったのは江田がもっと簡単な拒否の方法を敢えて使わなかったことだ。

艦娘についての扱いを示した国際法、『横須賀条約』では、艦娘が所属する国に関する内容が明記されている。

そこには、艦娘は発見し保護した国に所属することになるとある。たとえば、その艦娘

が日本の艦であろうと、アメリカの艦であろうと関係はない。常に保護した者勝ち、である。

また、艦娘が所属国の変更を希望した場合のみ、現在の所属国と希望国の両政府の許可が必要になるものの、変更は容認される。

許可が必要となると、そう簡単に変更できないように思えるが、艦娘の希望はほとんど無条件で受け入れる必要があると、この条約の他の章に書いてあるため、実際は非常に簡単に変更することが可能であった。

裏を返せば、それ以外で艦娘の所属国を変える方法はほとんどない。

故に今回の件は江田が『彼女は我々が保護したため、我が国の所属にある。よって、貴国の要求は認める訳にはいかない』と、言えばそれでこの話を終わらせることができた。しかし、江田はそうしなかった。

それは、こちらが『横須賀条約』を公式では認めていないことを危惧していることかも知れない。実際、条約に則った返答を返されたらそう言うように上層部には言われている。た。

それも頓挫したわけだ。ウォードは、ため息をついてから答えた。

「やはり、無理ですか」

「ええ。申し訳ありません」

「いえ、私自身も通るとは思ってはいませんでしたから」

「お偉方の要請、ですか？」

「まあ、そんな所です。この階級を貰っても、結局は中間管理職に過ぎないことがよく分かりましたよ。所詮は1艦隊を指揮するだけの職ですからね。」

もつとも、そんな職でも胃が痛くなることはいくらでもありますが」

江田がその言葉に笑う。ウオードは初めてこの男が本心から笑っていることにすぐに気付いた。

「同感ですね。少し頭の固いお偉いさんたちには参ります」

2人はしばらく笑い合った後、話題は再び艦娘の話に戻った。

ウオードは気になっていたことを聞いた。

「江田提督」

「何ですか？」

「ヴェラ・ガルフはこの基地で元気にやっていますか？」

江田は微笑みを浮かべて答えた。

「ええ。しっかり働いてくれています。他の艦娘とも悪くはない関係でやっているようですし。」

私個人としてはもう少し明るくなってもいいと思いますが…。

まあ、元気にやっているのは確かです」

「そうですか……。それは良かった」

ウオードはそう言うとしばらく押し黙り、やがて苦笑いを浮かべた。

「不思議な気分です。彼女のことがるで自分の娘のように心配になっている」

江田も同様に苦笑を浮かべながら答えた。

「私も同じです。彼女たちと話していると、なんと言うか……。そう、保護欲が湧いてくるんです。彼女たちを護らなければならぬ、と。」

守られているのは我々の方だというのに。

彼女たちは本当に不思議な力を持っている。我々人間には計り知れないような力が。

保護欲はきつとその力の作用の一つなのでしょう」

会話はそこで途切れた。窓の外で降りしきる雨音が強く聞こえてきた。

ウオードは、出された麦茶を飲んだ。悪くはない。体に良さそうな感じだ。

なるほど、確かに計り知れない力とやらはあるのかも知れない。この麦茶のように、それなりの年月を生きていても知らないことが幾らでも出てくる。

彼は、今後はコーヒーやオレンジジュースを飲むより麦茶を飲もうと心の中でメモを書き留めるのだった。

現在のパラオ泊地は、第二次大戦以降最も多くの艦艇が投錨していた。

米第3艦隊の8隻、第7艦隊から出張つてきている4隻（タイコンデロガ級巡洋艦レイテ・ガルフ、アーレイバーク級駆逐艦バリ、ラッセン、ルーズベルト）、パラオ泊地を護衛する国防海軍の護衛艦4隻（玄武級護衛艦朱雀、立春級護衛艦立夏、夏至、大暑）、そして『レッド・ステイングレー』作戦終了までこの地に留まる輸送艦3隻の合計19隻が停泊していた。

その中の1隻、第3艦隊の駆逐艦マツキャンベルの艦橋では、ホワイト・サイラス中佐が艦長席に座り、泊地内の艦艇群を眺めていた。

この威容を誇る艦隊を見れば、一般人はまだまだ人類は戦えると錯覚するに違いない。

しかし、サイラスはこの地に存在している8隻のアーレイバーク級がこの世界に存在している同型艦の三分の一を占めていることを知っていたし、3隻の（正確には4隻と言えるが）タイコンデロガ級がアーレイバーク級と同様に、三分の一を占め、空母コンステレーションがアメリカが保有する最後の4隻の内の1隻であることも知っていた。

米国の戦力は極端にまで落ちていた。世界の空を『深海棲艦』や反政府組織、テロリスト、その他仮想敵国から守るために強襲揚陸艦を空母として使用するほどに。

サイラスは、そんなことを思い苦笑いを浮かべ心の中で、所詮は残存勢力を合わせて水増しした張り子の虎か、と呟いた。

しかし、とサイラスは付け加えた。

あの時よりはマシな戦いが出来るはずだ。

『ライジング・ストーム』よりは遙かに。

あの時と比べると、戦力は比較にならないが今の我々には多くの戦いから学んだ戦訓がある。

思考に浸っていた彼は、その後すぐにやってきたリー少佐に呼び起こされた。

「何だ、副長？」

リー少佐は前置きもなく話し始めた。サイラスがそうすることを好んでいると知っているからだ。

「少し厄介なことが起こりました。どうもレーダーの調子が昨日の戦闘以降良くないみたいでして」

サイラスはげんなりした表情が顔に出るのを押し留めた。全く、勘弁してくれよ。

彼は座り心地のいい艦長席から離れ、この時期でも寒過ぎるくらいのCICに向かった。

ヴェラは雨の中傘を差しながら、朝食を取るために食堂に向かっていた。雨は嫌いなわけではなかったが、彼女の気分を下げる効果があった。

彼女は、先ほど起きた悲劇を思い出し、顔をしかめた。コニーで食べたハンバーガー

とフレンチフライは、朝起きた彼女の腹に直撃弾を与えた。服を着替えた後もしばらく宿舎から出れなかったのは、そのためである。

誰が言ったか米海軍の食い物はゴミだ、はどうやら正しかったようだ。

そんなことといつまでも降り続く雨のため、彼女の気分は良くなかった。

艦娘になって初めての経験だった。なるほど、人はこういう時にテンションが下がると言うのか。

ヴェラはそんなどうでもいいことを考えながら歩いていたため、危うく食堂を通り過ぎかけた。

この時間はほとんど人はいないはずだ。すでに多くの人が課業を始めているため、一番の者が少人数いるだけだろう。

が、彼女の考えは外れた。

食堂内は多くの人々で賑わっている。彼女は思考を数秒間停止させたが、やがてそこにいる人々が忘れかけていた彼女の祖国の言葉を話していることに気付いた。

彼らは第3艦隊、第7艦隊の乗員たちだ。

どうやら長い船旅の後、南の島でバカンスをする許可が出たようだ。バカンス、と言つても店は全て閉まっているし、食事ができる所も非常に限られているが、リゾート地であるパラオを十分に満喫できるはずだ。

だが、今日はそうとも言えないようだ。この雨では、せつかくのリゾート地を楽しむこともできそうにない。

ヴェエラが入ってきたことに気付いた途端、ガヤガヤと騒がしかった食堂は静かになった。

皆、物珍しそうに彼女の事を見つめているのを感じたが、彼女は気にする素振りも見せず食事を取りに向かった。

彼女から興味を失った彼らは再び談笑に華を咲かせ始めた。

もう一つの変化に気付いたのは、それからすぐのことだった。

見たことのない女性が2人、話をしている。

ヴェエラは自身の戦術データ・システムにアクセスし、該当するデータを探った。

すぐに出てきた。右側の女性は間宮、左側が鳳翔だ。

彼女は口笛を吹く真似をした。海軍のアイドル（那珂ちゃんではない）と世界最初の空母（の1人）がこんな島流しの泊地に送られるとは。日本のお偉方はこの地の重要性にようやく気付いたらしい。

間宮がこちらに気付き、微笑みを浮かべて会釈した。

ヴェエラはそれにつられて同じように会釈し、2人の元に向かった。

ヴェエラが近づくと、鳳翔がこちらに話しかけてきた。

「ヴェラ・ガルフさん…ですね？」

「はい、そうです。私の名前は誰から聞いたんですか？」

「その方から名前は出すな、と言われておりますので」

「艦娘にプライバシーもヘツタクレもないってことですか」

ヴェラはため息を吐きつつ、2人の自己紹介を遮った。

「存じています。給料艦の間宮さんに軽空母の鳳翔さん。どちらも有名ですからね。少なくとも、私よりは知られているんじゃないですか？」

間宮がヴェラと同じ質問をした。

「一応お聞きしますが、どこで私たちの名前を？」

「自分で資料庫を漁ったのと噂で聞いたんです。それと、頭の中の優秀な記憶媒体のおかげです」

ヴェラは頭を軽く叩きながら答えた。ジョークととったのか2人は上品な笑い声を上げた。

ヴェラ自身は別にジョークのつもりではなかったのだが。彼女の頭には戦術データ・システムがある。その機能は脳と言うよりコンピューターの方が近かった。他の艦娘も自分と同じだと思っていたが…。違うのか？

「朝ご飯、まだですよ。何にしますか？」

鳳翔がヴェラに聞いてきた。ヴェラもそれで、ようやくここに来た理由を思い出した。

「あー、そうですね…適当に見繕ってください」

ヴェラの返答に鳳翔は困り顔で答える。

「それでは困ります。少なくとも、さっぱりしているだとか、がつつりいききたいとか言っていたけるとありがたいのですが」

「それでは、胃に優しいのをお願いします。昨日食べたゴミのせいで今朝から調子が良くない」

「ゴミ??」

間宮が不思議そうに聞いた。

「コンステレーションの食べ物のことです。知りませんでしたよ、米海軍の食事があそこまで不味いとは…」

「そうなんですか？意外ですね、どこの海軍の食事も美味しいと思っていたのですが」
「米軍は特にそうでしょう。陸軍のMREなんかは『エチオピア人でも食わない飯』と言われるくらいですから。」

イギリスの血を引いているからでしょうかね？」

そうこう言っている間、鳳翔が厨房でテキパキと仕事をしている。時々会話にも混じ

るが、基本的に会話は間宮に任せていた。

しばらくすると、食欲をそその香りが漂い始めた。先ほどまで機嫌の悪かった胃が、掌を返したように機嫌よく音を鳴らす。全く、ずいぶんと都合のいい腹だ。

やがて、鳳翔はお盆に味噌汁、白飯、焼き魚、漬物、玉子焼きを持って戻ってきた。だいたいは古典的な日本の朝食と言ったところだ。

普段となんら変わらないはずだが、それを見た瞬間に分かった。

これはよくある冷凍食品などではなく、先ほど焼いたものだ。電子レンジでチンした物ではない。

それに、この味噌汁も出汁からとったものだ。これまでここで出ていた即席のやつではなかった。

漬物もどうやらここ数日の内に漬けたようだ。一夜漬けだろうか。

玉子焼きは：普段と変わらず瑞鳳の作った物のようだ。

大いに結構なことだ。食事の良さは土気に直結する。今後はこの基地もヴェラが来た時と比べると活気が良くなるに違いない。

ヴェラは2人に礼を言い、その場を離れた。

鳳翔が思い出したように口に手を当てて、すでに離れていたヴェラに言った。

「2130時から居酒屋を始めます。時間があれば、来てくださいね」

ヴェラは軽く手を挙げてその言葉への返答とした。

その頃、マウンテン・ホーム空軍基地はまだ5月17日の夜11時を回ったところだった。

司令部ビルディングの地下にあるブリーフィングルームでは、多くの将官が雑談を交わしたり、壁際にある軽食のサンドイッチに手を伸ばしたり、座り心地の良い椅子に座って踏ん返り返っていたりしている。

パイロットスーツを着ていたり、制服を着たりと多種多様な格好をしている彼らだが、全員が数束の資料を持っていた。

皆一様に厳しい顔付きをしている。これから始まるブリーフィングの重要性をよく理解している証拠だ。

そして、その後に始まる戦闘のことも。

エリオット准将は自らの腕時計と、ブリーフィングルームの時計を見た後、よく響く声で言った。指揮官がふと気付けば体得しているあの声だ。

「紳士淑女の諸君。そろそろ始めようか」

小声の雑談が即座に止み、全員がそれぞれ好みの椅子に腰を下ろし、姿勢を正してエリオットの次の言葉を待った。

「さて、聞いていると思うが、我々にパラオに行くように命令が来た。目的は、人類に敵

対する『深海棲艦』を粉碎することだ。

もちろん、すぐに戦うことは出来ない。奴らと戦うには移動する必要がある。

これから展開の手順を説明してもらおう。

詳しいことは今からレベッカ大佐に話してもらおう」

エリオットはそう言うのと、レベッカに合図した。

レベッカは立ち上がり、ブリーフィングルームの壁にある地図の前に進み出た。

「それでは、ブリーフィングを始めたいと思います。

さて、我々は『レッド・ステイングレー』作戦に就くために、パラオ国際空港、現在はパラオ航空基地と呼ばれている場所に向かうことになります。

施設の評価は非常に良好で、最低限の装備だけで十分にこと足りるとのことです。

次に展開手順だが、国務省の連中がなかなかの仕事をしようでグレートサークル（地球上の二点間を結び、最短で、最も経済的なルート）で行けるとのことです。まあ、今のこの状況ではどこの政府も二つ返事と言ったところでしょう。

我々の旅の第一段階はエルメンドルフで給油、の予定だったが低気圧の影響でどうにも使えそうにないようです。そのため、アラスカ沖で空中給油を行うことになります。少し危険ではあるが、できないことはないはずですよ。

第二段階は日本の三沢、横田基地。そこで7時間の休憩を取ります。また、ロシアの

軍航空基地、民間空港の全てが受け入れを許可しています。ロシアでの給油の場合、彼らから外資で燃料の購入が要請されているため、緊急時以外では使わない方向です。

第三段階はフィリピンのクラーク国際空港で給油を行い、パラオに着陸します。普段はかなりの金を要求してくるはずだが、今回は無償での提供です。もちろん、燃料に關しては今がこのような状態ですからかなり高値になります。展開上の許容範囲内です。

以上が、本作戦における展開手順になります」

レベツカは少し後ろに下がり、エリオットの方を向いた。彼女が何を要求しているか、はすぐに分かった。

エリオットは立ち上がり、言った。

「ご苦労だった、レベツカ。さて、この件で何か質問はあるか？」

パイロットスーツを着た男が手を挙げて言った。マクミラン中佐だった。

「向こうに着いた後、演習か何かはありますか？」

「我々としては入れたいのだが、なにぶん時間が無いらしい。向こうに到着した後、次に飛ぶのはおそらく実戦の時だろう」

「それはずいぶんと楽しみですね」

マクミランは皮肉っぽく言った。エリオットもそれに同感だった。

「せっかくのお楽しみをつまらなくしたくはないからな。さて、他に質問はあるか？」
誰も言わなかった。エリオットは頷いて、再び話し始めた。

「諸君。我々の憎むべき敵に対する復讐の時が来た。我々ガンファイターズの誇りを取り戻すためにも何としても成功させろ。以上」

エリオットは解散を宣言した。

皆がきびきびとした動きでブリーフィングルームを出て行く。

機関砲野郎たちはパラオに向けて動き出した。

第14話 集結 後編

5月19日

荒れ模様のベーリング海上空を第366航空団第390戦闘飛行隊（FS）『ワイルド・ボワーズ』所属のF-15Cイーグル8機がそれぞれ4機編隊を組み、高度30000フィートを巡航速度の約860キロで飛行していた。

彼らは、『レッド・ステイングレー』作戦に参加するB+パッケージ第1波の一部だ。彼らの周りには、同じ第366航空団所属の第389戦闘飛行隊のF-16Cファイティング・ファルコン8機、第391戦闘飛行隊『ボールド・タイガーズ』のF-15Eストライク・イーグル8機、第34爆撃飛行隊（BS）『サンダーバーズ』のB-1Bランサー4機、第22空中給油飛行隊（ARS）のKC-10エクステンダー4機、オクラホマ州ティンカー空軍基地の第552空中管制航空団（ACW）に所属する第963空中航空管制飛行隊（ACS）のE-3CセントリーAWACS（空中早期警戒管制システム）機3機、アリゾナ州デーヴィスIIモンサン空軍基地第355電子戦航空団（ECW）に所属する第41電子戦飛行隊（ECS）のEC-130Hコンパス・コール2

機が同様に飛行している。

そして今頃、彼らが向かうパラオ基地に何十機ものC-117輸送機が降りようとしていることだろう。パラオ側はヒイヒイ言っているはずだ。

『ワイルド・ボワーズ』の飛行隊長であるジェフ・《リーパー》・カスケード中佐は、後ろに付く僚機に目を配りつつ、そんなことを考えながら自機を飛行させていた。

カスケードは、僅か1ヶ月前に着任した新人隊長だったが、『ボワーズ』の優秀なパイロットたちに十分認められていた。勤勉な態度、そして優れた空戦能力は部下たちの信頼を勝ち取ることを可能にしたのだった。

彼は今乗っているF-15が大好きだった。ラプターやライトニングIIなどの新鋭機に比べるとよちよち歩きのヒヨコのようなものだったが、イーグルの名にふさわしい鋭い爪を持った大型航空優勢戦闘機だった。

現在のイーグルは、610ガロンの投下式燃料タンク3基、AIM-120AMRAAM4基、AIM-9Xサイドワインダー4基の重装備だった。

どれも非常に強力な武装で、他国の主力戦闘機に全く引けを取らない能力を持つ。

AIM-120AMRAAM（先進中距離空対空ミサイル）は米軍の最新鋭打ち放しミサイルである。

これまでの中距離ミサイル、AIM-7スパローはレーダー誘導による兵器システム

だったが、命中までレーダー波を当て続けねばならなかった。そのため、僅かな隙が死を招く空戦においてスパローの誘導方式は重大な欠点となった。

そこで開発されたのがAMRAAMである。

スラマー（必殺野郎）のあだ名を与えられたAMRAAMは、発射後、自らのシーカーで敵を捕捉し攻撃する。これにより、戦闘機は攻撃後即座に次の行動を起こせるようになったのだ。

スラマーを使用した米軍パイロットは、この兵器をこのように表現した。

「赤ん坊のアザラシを棍棒で次々叩き殺すみたいだ……ゴン、ゴン、ゴン、ゴンってね」

このようなショッキングな例えが出るほどこの兵器は性能が良かった。

もちろん、スラマーも万能と言うわけではない。

AMRAAMは、最大射程で発射した場合その命中率は極端に下がる。スラマーが本物の必殺野郎になるには絶対必中圏まで接近し発射する必要がある。

もつとも、どの誘導兵器にもそのことが言える。実戦において誘導兵器を命中させるには少なくとも最大射程の半分ほどの地点で攻撃しなければならぬ。

しかし、この高性能なミサイルが使われることは少なくとも今はないだろう。

彼らの敵である『深海棲艦』は強敵であるが、各国の猛禽たちにとつて格別の脅威ではなかった。空の戦いにおいて、人類は幾度となく勝利を収めてきた。その最大の理由

は『深海棲艦』側の航空機が人類側の航空機より数世代は遅れていたからだ。

艦娘たちのレシプロ機に落とされるような航空機が、超音速で飛行し、なおかつそれより遙かに速い誘導兵器を持つ現在の主力機に勝てるわけがない。

『深海棲艦』のそのような航空機に対してミサイルを使用するのはコストパフォーマンスの観点から、軍の上層部が渋るほどだった。

馬鹿馬鹿しいとしか言いようが無い。

全く、何故制服さんというのはどうしようもないほど頭が硬く、そして歴史から学ばないのだろうか？

そんな状態で戦闘を始めれば、あのガチガチなROE（交戦規定）に縛られていたベトナム戦争当時の空軍と同様に酷いことになるのは目に見えている。

幸運にも軍の上層部には賢明な人物がいたらしく、この馬鹿馬鹿しい考えは否定されたいが、もしその様な規定がされていればどうなっていたことか…。

恐ろしい限りだ。

カスケードはコックピット内の多機能ディスプレイを見た。無駄な考えをしているうちにずいぶん時間が経っている。そろそろだ。

彼は無線を起動し、エルメンドルフから来ているアラスカ州兵航空隊の空中給油機の無線周波数に合わせ連絡した。

「こちらパンケーキ。ビッグベア応答せよ」

パンケーキは彼らの今作戦におけるコールサインであり、同じくビッグベアは空中給油機のコールサインだ。しかし、恥ずかしいコールサインだ。いったい誰が考えたのやら。

しばしの間空電ノイズが彼のヘルメットのイヤホンから流れ、声が聞こえた。

『こちらビッグベア。パンケーキ、時間通りだな。現在本機は高度18000フィートを飛行中。貴機の方から2—8—5の位置、距離は1200マイル』

「了解ビッグベア。これよりこちらに向かう」

カスケードは編隊周波数で後方の7機の僚機に給油機の位置を伝え、その方角に機首を向けた。

数分後、風の吹き荒れる空にゴマ粒のような点が見えた。ビッグベアだ。

「こちらパンケーキ、そちらを視認した。そちからは見えるか？」

『こちらビッグベア、ああ確認した。こっちは準備OKだ』

「了解だビッグベア。少し待ってくれ」

カスケードは僚機に指示を出す。

最初にジェフのウィングマンを務めるマイク・《アンカー》・グレイシャム大尉がビッグベアことKC—10エクステンダーの給油位置に着いた。強風の中給油位置を維持

することはもちろん、位置に着くことも至難の技だが、マイクは巧みな操縦技術でいとも容易く行つてしまった。

通常は1番機から始めるべきなのだが数時間後には低気圧がまだ比較的穏やかなこの空域に悪さをするほどになるとの予報だった。

全機給油するにはどうしても1時間ほどはかかってしまう。給油は最後に近付くごとに天候が悪化し困難さがより増す。

そのため、隊長である彼が最後を務めることにしたのだ。

グレイシヤムの機体が給油を終え、サツと離れて行く。それと同時に、隊の中で最も経験の少ないアーロン・《ホットタン》・バスチャン中尉が位置に着こうとする。が、1回目の接近は失敗した。無理もない。この天候では腕のいいパイロットでも苦戦するはずだ。

バスチャンの機体が再び接近した。今度は上手く行き、しっかりとプローブが受給口に挿入された。

その後はさほど風の影響を受けることもなく、バスチャンは給油を終えることができた。ジェフはため息を吐いた。バスチャンのことは心配だったが、その気遣いは無用だったようだ。

彼は自分のことに集中することにした。彼の給油は非常に難しい作業になるはずだ。

1時間10分後、給油は順調に進み予定より僅かに遅れただけで済んだ。

天候は予報通り荒れ始め、これ以上風が強くなると給油が不可能になる。つまり、彼がこのこと帰らなければならなくなる事を意味する。それだけは避けなければならぬ。

カスケードは機体を動かした。イーグルは機嫌よく動いたが、風のあおりを受け小刻みに震える。

「へい、ちよつと落ち着いてくれよベイビー。すぐに腹一杯食わせてやるからな」

カスケードは小さく呟きつつ慎重に、時に大胆に操縦する。

1分ほどの格闘の末、彼はその戦いを制しエクステンダー後方の給油位置に着いた。

エクステンダーのブーマーがプロープを操作し給油口に突っ込む。

何度も空中給油を受けたことはあるが、未だに不思議な気分になる。馬鹿でかい元旅客機と、その元旅客機と比べると非常に小さい戦闘機が空中で1つの機体になるのだから。

プロープで接続されたため、KC-110と有線での会話が可能になった。エクステンダーのブーマーが言った。

『ビッグベア・ガススタンド&バーへようこそ。お客さん、何にしますか？安い酒しかないですが』

アラスカ訛りで、かなり聞き取りにくい英語だった。カスケードは答える。

「出来ればビールでも飲みたいが、あいにく今は仕事なのでね」

『そうですか、それは失礼しました。おや、お客さんの相方は随分とがぶ飲みしてますね？』

カスケードは笑みを浮かべつつ答える。

「ここ最近休みがないんでね。こいつもたまには羽目を外したいんだろ」

『奇遇ですね、ウチもなんですよ。おたくはどこで働いてんですか？』

「空軍株式会社ってところだ」

『お客さん、そこはブラック企業で有名なところですよ。大変ですねえ、こんなクソ天気が

悪い時に』

「それはアンタもだろ？」

『ええ、その通りです。悪い世の中ですよ全く』

アラスカ訛りのブーマーはけたたましい声で笑った。しばらく笑い続けた後、カスケードに話しかけた。

『ところでお客さん。今からなんの仕事ですか？』

どうやらこのブーマーは最後まで田舎のバーの店員で通すつもりらしい。

「太平洋に蔓延ってるゴミのお掃除だ」

ブーマーは口笛を吹いた。

『ヒューツ。そいつはすごい。それでどのくらいのゴミが片付くんですか?』

「さあね。だが、太平洋の汚染が綺麗になる重要な一歩だ」

『期待してますよお客さん。おっと、そろそろ店じまいの時間だ。またのご来店をお待ちしております。グッドラック』

それだけ言うと、ブーマーはプロープの接続を解除した。

再び2つに分かれ、K C 110はホームランド（アメリカ本土）に機首を向け、カスケードのイーグルは西に向かった。

「グッドラック、か…」

幸運も重要だが、彼らが本当に必要としていたのは幸運などではない。ゆつくりと睡眠を取ることだった。

まだまだ、道は長い。

5月20日

パラオ航空基地のターミナルビルは少々変わったデザインをしている。赤茶色の三角屋根で、空港というよりコテージである。この建造物は2003年、日本政府の無償支援により改築されたものだ。

パラオ国際空港のは2006年にロマン・トメトウチエル国際空港に名称が変更され

ている。

この空港は2000メートル級の滑走路が1本あるだけだったが、国防軍に貸し出された段階で、機動設営隊が睡眠時間を割いて4000メートル級の滑走路に拡張されていた。

これにより、大規模な航空部隊を迎え入れることが可能になったのだ。

ここ数日は物凄い数の輸送機がやってきていた。ヴェエラはその数を数えていたが、20機を超えた時点で止めた。その後も2、3倍の数の輸送機が降りてきて、大量の物資を下ろし再び空へと帰っていくのだった。

ヴェエラは管制塔の無線の一部を傍受していたが、管制官はてんてこ舞いの状態で気の毒に思えるほどだった。

「なあ、ヴェエラ先輩」

深雪がヴェエラの肩をつついた。

ヴェエラはため息を吐いた。どういう訳か、米軍の航空部隊に興味を持った駆逐艦娘たちの付き添いで、彼女はここにやって来ていた。正確な位置を言うと、パラオ航空基地北側の小さな未舗装道路である。

「なんですか?」

「なんか見たことないのが降りてきたけど、あれ何?」

ヴェラは自分がレーダーに意識を向けていなかったことに気付いた。深雪の指差し機体を見る。

尖がった機首、滑らかなフォルム、可変式の主翼、大型航空機でありながら戦闘機のようなアフターバーナー付きのジェットエンジン、真つ直ぐ真上に突き立てる垂直尾翼。

「あれはB—ランサーです。パイロットたちからはボーンと呼ばれています。超音速のステルス爆撃機で、デープストライク（遠距離侵襲攻撃）を行うために作られた機体です。

正確に言うなら、ロシア内陸部の核施設に低空を超音速で突入して、吹っ飛ばしたりする機体です。

もつとも、最近では近接航空支援の仕事でテロリストやらを吹っ飛ばすのが本職になりつつあるようですが」

「ふーん。なんでボーンって呼ばれてんの？」

「B—ONEでBone」

「あー、そゆこと」

そうこう言っているうちに、最初のボーンがパラオの地に降り立った。さらに、後続のボーンが着陸を行おうと旋回を開始した。

今やパラオの空は爆音で覆われていた。

空にさらに数種類の航空機が現れた。単発の小型戦闘機と大型双発の戦闘機2種類である。

単発機はF-16Cファイティング・ファルコン。双発機の内、1つはF-15Cイーグル。もう1つはF-15Eストライク・イーグルだ。

最初に降りてきたのはF-16Cだった。ヴェラはその機体の説明を駆逐艦たちにした。

「今降りてきたのがF-16Cファイティング・ファルコンです。パイロットたちの俗称はヴァイパー。これは、アメリカ国内で放送されていたSFテレビドラマの『宇宙空母ギャラクティカ』の艦載機に似ていることから付いたあだ名です」

「現在の装備はなんですか？」

相変わらず勉強熱心な白雪が聞いてきた。

「私の見た限りでは、AGM-88HARMが2基にAN/ASQ-213HTS(HARM目標指示システム)ポッド1基、ALQ-131妨害ポッド1基、AIM-9Xサイドワインダー2基、AIM-120AMRAAM2基、370ガロン燃料タンクを2基積んでるみたいです。普段の展開任務と同じような武装です」

白雪は熱心にメモを取っている。どうやら、後で調べるつもりらしい。

吹雪がおずおずと聞いてきた。

「あ、あのく、いいですか？」

「ええ、どうぞ」

「その、ハームってなんですか？」

「HARM。高速対レーダー・ミサイルを意味します。イスラエルのある将軍の言葉、
「世界で最もすぐれた対電子対策は、ミサイルの追跡レーダーのアンテナに500ポンド爆弾を投下することだ」を体現するための兵器です。敵のレーダーの電波を追って、そのアンテナの中央部に12000個のタングステン鋼の金属球をばら撒いて無力化する兵器です。」

また、こう言った兵器の弱点とも言える「レーダーを切られたら敵を追跡できない」を克服するために、マツハ4近くの高速で飛行することができます。HARMのHの部分はこのハイピードを表しています。最近では慣性誘導で攻撃出来るようになったため、レーダーを切られても敵に命中する確率は上がっています」

「じゃあ、敵のレーダーを無力化できるってことですか？」

「基本的には。この兵器のおかげで、SEAD（敵防空網制圧）任務がより楽になったそうです」

真剣そうな表情で吹雪と白雪は頷いた。深雪は次の機に目を向けていた。深雪は、そ

の機体を指差して言った。

「今降りてきたのは？」

「F-15E ストライク・イーグル。F-15を複座にして対地攻撃に特化した機体です。もちろん、空戦能力は十分に残した状態です。」

特殊な武装としては、現在装備しているGBU-28デープ・スロートです。通常、バンカーバスターと呼ばれる兵器で驚異的貫徹能力を持っています。やろうと思えば、ミサイルサイロも破壊できるみたいです。

兵器庫に文字通り転がっていた203ミリ榴弾砲の砲身を元に作製された兵器で、BLU-113/BとペイヴウェイIIIシリーズと同様の誘導キットでできています。

実戦での使用は、湾岸戦争でのイラク軍の大型防空壕『タジ#2』の破壊で使われた2発です。

この防空壕は、強力な貫通力を持つBLU-109/Bですら破壊できないほど強固な物でしたが、このデープ・スロートはわずか2発でその仕事を完璧にこなしました。デープ・スロートは、BLU-113/Bの管状の部分が非常に長いことからつけられたあだ名です。

デープ・スロートの他にAGM-65マールヴェリック、GBU-15、AIM-120とAIM-9をそれぞれ2基の完全武装です。これに630ガロンの燃料タンク

3基を装備しています。

今回は飛行場姫攻撃だけに集中するみたいですね」

「なんで分かるの?」

深雪が言った。ヴェラは当然とばかりに答える。

「どれも対地兵器だからですよ。マーヴェリックは型次第では可能ですがそれ以外はどれも調整が対地専用ですからね」

「どっかの機体はハーブーンが撃てるって聞いたけど?」

「あれは韓国のF-15Kスラムイーグルです。韓国側の要請に従ってマイナーチェンジした物であって、米軍のストライク・イーグルでできるものじゃありません」

「そうでもないようだぞ」

すぐ後ろから、男の声が聞こえた。どこか懐かしい声だった。

一瞬、思考が停止し、再び目まぐるしく動き出す。

まさか、そんなはずはない。

ヴェラは振り返り、相手の顔を見た。

声と同じで、懐かしい顔立ち。間違いない。

「カーバー大佐……ですか……?」

そこには、彼女の艦長であったカーバー大佐が立っていた。

会議のために艦を降りていたテレス・C・カーバーは、ガンファイターズの姿を見ようと彼を乗せていた送迎車の運転手に言つて、パラオ航空基地のすぐ隣の小道に入つて来ていた。

そこには先客がいた。どうやら艦娘のようだ。

せつかくだったので数人の少女たちのもとに近付いていった。

なにやら、1人制服の違う少女が他の少女たちに説明しているようだ。カーバーは日本語がある程度分かったため、話している内容がストライク・イーグルに対艦戦闘は可能か、というものであると気付いた。

説明を続ける物知りな少女は、どこで覚えたことかは知らないがストライク・イーグルのことをよく説明できていた。

が、その少女の情報は少しばかり古くなつていたようだった。カーバーは、その少女に正しい情報を提供するために言った。

「それでもないようだぞ」

これまでの饒舌に説明していた少女は、体を一瞬震わせた。カーバーはこの少女を怖がらせてしまったかと思つたが、そうではなかった。

こちらに顔を向けた少女は、まるで幽霊でも見たというような表情を浮かべた。驚きはやがて喜びに変わったようだが、彼にはその意味がまるで分からなかった。

「カーバー大佐…ですか…?」

少女は聞いてきた。カーバーはより混乱した。この少女に会った記憶は全くないし、まして名乗ったこともなかった。

彼は疑問を感じ、聞いた。

「そうだが…私は君に会ったことはないはずだが…」

その言葉に、少女は哀しみの表情を見せた。希望が一瞬で打ち砕かれ、失望に切り替わってしまったかのようだ。カーバーは何故か罪悪感を感じたが、彼が謝罪の言葉を発する前に少女は硬い表情を顔に貼り付けてしまっていた。

少女は返答する。

「いえ、資料で今回の作戦に参加する艦の指揮官名簿にあなたの名前と写真が載っているのです」

カーバーはそれが嘘であることを見抜いたが、その嘘の原因が自分にあることが分かっていたので何も言わなかった。

「あのく、そうでもないというのはどういう事ですか?」

茶色がかかった髪を二つ括りにしている少女が聞いた。彼は、自分が彼女たちに話しかけた理由を思い出した。

「おっと、そうだったな。君たち、名前は?」

「ヴェラ・ガルフです。タイコンデロガ級26番艦」

「特型駆逐艦1番艦の吹雪です」

「同じく2番艦、白雪です」

「4番艦、深雪だよ」

1、2と来るのてつきり3番艦だと思つたが、表意をつかれた。

「あー、3番艦の娘はどこかにいるのかな？」

吹雪が答えた。

「えーと、初雪ちゃんは宿舎の布団の中で引きこもってます」

「引きこもり？」

「はい。いわゆるヒツキーってやつです」

「ふむ……」

艦娘というのは戦闘時以外はかなりマイペースなようだ。そして、人間のような生活感が溢れている。彼女たちへの見方を変えなければならぬ。

「ヴェラ・ガルフと言つたな」

「ヴェラで構いません」

「それではそうさせてもらおうか。さて、ヴェラ、君の情報は少し古い。常に新しい情報を運用するのが勝利の鍵だ。今から、新しい事実を君たちに伝えよう」

「それでは、私の間違いを訂正してください」

ヴェラと言う少女はすっかりよそよそしくなってしまうといたが、新たな知識を得られることに非常に期待しているようだ。

カーバーはその期待に応えてやるつもりだった。彼は他の艦娘にも分かるように先ほどと同じように日本語で話し始めた。

「さて、知つての通りアメリカ空軍の対艦能力は非常に限定されている。対地兵器での対艦攻撃訓練は行われてはいるが、本格的な攻撃が可能な機体はB-52HとF-35Aの2機種に絞られる。

言うまでもないが、現在の危機の対象は『深海棲艦』、その名の通り艦艇を模した存在だ。それに関しては、実際に何度となく間近で戦っている君たちの方が詳しいだろう。

アメリカ空軍は現在、政府が求めているニーズに合っていない。そしてそれは、我が国の軍事プレゼンスの低下を招きかねない。

空軍は対艦攻撃可能な機体をF-15でできれば安価で調整ができ、そして調整後もまともな運用できる信頼性の高い機体をF-16で求めている。

そこで、ストライク・イーグルに白羽の矢が立った訳だ。

この機体は、F-15Kで対艦戦闘が可能であるという実績があつたし、何よりソフトウエアの調整とパイロットの訓練だけで十分に実戦に耐えうるができる。もち

ろん、機体の改修も少しは必要だがね。

それでも、新型機をさらに生産したり、1から新型機を造つたりするよりは遥かに安価で、機体を無駄にする必要もない。

今日来ている第366のストライク・イーグルはすでに改修が施されている。

今、対艦兵器を積んでいないことについては、5日ほど前に我々が連れてきた輸送艦にAGM-84ハーブーンを積んできていた。

降りてきた機体がハーブーンを搭載していないのはそれが理由だ」

カーバーは自分がずつとしゃべり続けていることに気付き、口を閉じて少女たちの方を見た。

皆、感銘を受けたような顔をしている。どれだけ彼女たちが理解したかは分からないが、少なくとも彼が物知りな軍人だと印象付けたはずだ。

彼は思い出したかのように時計を見た。帰投時間にかなり近付いている。まだ話したいことはいくつあつたが、仕方あるまい。

「すまない、そろそろ戻らなくては。次の作戦でも君たちの護衛をさせてもらう。君たちは自分の任務に集中してくれ。背中には任せろ」

「はい！ありがとうございます」

吹雪が代表して元気よく答えた。カーバーはそれに笑みを浮かべて答え、少女たちに

背を向けて少しぬかるんでいる未舗装の小道を戻って行った。

カーバー大佐が車に乗り、去っていくのを見届けたヴェエラは、盛大なため息を吐いた。この体を得て、感情というものを表せるようになってからもつとも彼女は失望していた。

もちろん、彼女がいた世界とは違う世界であることは分かっていた。カーバー大佐が彼女のことを知らなくてもなんら不思議ではない。そう、理解はしていたし、覚悟もしていた。

しかし、現実はそのようになっていたようにはいかない。現に、ヴェエラはこの現実には失望すると同時に、哀しさも感じていた。生死を共にし、絶大な信頼を抱いていた相手に、初めて会ったように応対されればどれだけメンタルの強い人間でも傷付く。

白雪が聞いてきた。

「もしかして、あの人がヴェエラ先輩の艦長さんだったんですか？」

「そうです。世界でも屈指の操艦能力を持った非常に優れた人です。

私のいた世界ではテレンス・B・カーバーという名前でした。この世界ではどういう名前が知りませんが、少なくともカーバーというファーストネームと大佐という階級は変わらないみたいですわね……」

「……帰りますか？」

吹雪が言った。こちらのことを思つてのことだろう。ヴェエラはその考えにありがたく乗ることにした。

「そうしましょうか」

彼女たちはカーバーが去つた方向とは逆の向きに進んで行つた。

数十メートル離れた滑走路に4発の大型機が着陸した。その凄まじい爆音が、しばらくの間彼女たちから思考を奪つていった。

第366航空団、通称機関砲野郎（ガンファイターズ）。彼らは一般的な部隊と少し違つている。

注目すべきは、戦闘航空団や爆撃航空団などではなく、ただの『航空団』と表されている点だ。

彼らガンファイターズは、戦闘機、爆撃機、給油機などを自前で持つている唯一の航空団なのだ。第366は、事実上の空軍の能力のほとんど全てを持つているミニアメリカ空軍と言える。

このような部隊になつたのももちろん意味がある。

米軍は非常に大きい組織であり、大変強力な力を持つがそれも政治という敵には無力だった。今の時代、大統領が攻撃すべきと考えても、議会は阻止しようとする形が出来上がっている。

そのため、大部隊を送るにはどうしても時間がかかり、おっとり刀的な展開になってしまう。そのため、凄まじいスピードで事態が進む様な危機に対しては、遅れを取ってしまう。そうなれば、迅速に行動していれば消し止められたであろう火種が、激しい大火になってしまいかねない。

そこでSAC（戦略航空軍団）、TAC（戦術航空軍団）、MAC（空輸軍団）のACC（航空戦闘軍団）への大併合時のゴタゴタの最中に組織されたのが、この寄せ集め部隊とも言える第366航空団である。

ガンファイターズは、危機の現場に真っ先に送られ、その危機の当事国、もしくは付近の友邦国のホスト基地から出撃し、危機の対象に米国の力を見せつけ火種を揉み消し、それが困難な場合は増援が来るまでその地に止まり危機が広がるのをできるだけ抑え込むことが彼らの仕事である。

火種が大火になる前に消火し、被害の軽減を図る。

それが彼らガンファイターズという名の『ファイアーファイター（消防士）』型航空団の使命である。

それが人間以外の生物の起こした危機であっても関係ない。

当然、彼らはこの『深海棲艦』に対処しなければならなかった。そして、彼らも自らが行く必要を感じていた。

ところが、当時彼らは中東に現れたテロ組織の掃討作戦に手こずっており、太平洋に向かう余裕はなかった。

彼らが全ての仕事を片付けて、太平洋に目を向けた時にはすでに『ライジング・ストーム』作戦の失敗で人類側はズタズタになっていた。

彼らは悔いた。

もし、自分たちが行っていれば、これほどの大火にならなかったかもしれない。

彼らはガンファイターズとして、ファイアーファイターとして、自らの部隊に誇りを持っていた。自分たちは、米空軍という剣の切っ先で非常に優れた技量を持った部隊だ。そして、優れた部隊であるからこそ自らに与えられた任務を確実にしかも迅速にこなすことができる。彼らは思っていた。

しかし、彼らは一つの危機に手こずるあまりに、もつと重要な、それも人類全体の脅威に対処するのが遅れてしまい、被害を抑えることなど到底不可能な状態にしてしまった。

もちろん、彼らの責任ではない。いや、誰の責任でもない。交戦初期の段階では、彼らがいとも消火に成功していたとは思えない。

しかし、そんな言葉など彼らにとつては情けをかけられているように感じられるのだった。

だからこそ、彼らにとってこの作戦はリベンジだった。

その考えはマズイと、エリオット准将は考えていた。彼の部下たちは気負い過ぎている。全力を注ぐという意気込み自体は悪いことではない。だが、あまりにも気負い過ぎるのは、己れの死を招きかねない危険な考えだ。

エリオットにも、その考えはよく理解できる。彼も、もともと血の気盛んなBUFF（B-52ストラトフォートレスの愛称。デカくて太った醜いヤツの意）乗りだったからだ。

しかし、それでも戦場では冷静でいる必要がある。パイロットは特にだ。

エリオットは不安だったが、パラオ航空基地に着いた部下たちの様子を見て、ホツとした。

自信に満ちた表情を浮かべているが、それはパイロット特有のものであって、死をも覚悟した者の見せる表情ではなかった。どうやら、皆よく分かっていたようだ。

エリオットが補佐官と共にいると、迎えの車がやって来た。後部座席からスコット中佐が降りてきた。

「將軍、お疲れの所申し訳ないのですが、江田提督が呼びです。すでにウォード提督もあちらにおられます」

「分かった」

エリオットたちは、レクサスに乗り込みコロル島にあるパラオ泊地司令部に向かった。

エリオットは自分が呼ばれた理由をある程度予測できた。おそらく、合同ブリーフィングの前に顔合わせをしておこう、と言ったところだろう。

彼らのレクサスをハンヴェー2台が前後を挟んだ。乗っているのは日本国防軍の兵士で、保安要員のようだった。

エリオットは、彼らが自分たちを誰から守っているのか疑問に思った。

彼らの敵は歩兵がどうこうできる相手ではないというのに。

パラオ航空基地に降り立ったパトリック・マクミラン中佐は、この南の島の気候に慣れることなどできないと、すでに気付いた。

湿気が多くジメジメしていて、やたらと暑い。

航空機にとっても最高のコンディションとはお世辞にも言えないだろう。

もちろん、米空軍にとつてジメジメした蒸し暑い気候が初めてという訳ではない。今の気候に最も近いのはベトナムだろう。

当時、米空軍は散々な状態だった。質で明らかに劣る北ベトナムのMiG-21に空軍と海軍のF-4ファントムIIはMiG-1機を落とすのにファントムが数機落とされる、というような事態に陥ったこともあったほどだ。

その主な理由は、米軍パイロットがミサイルに頼り過ぎていてドッグファイトの技量が劣っていたこと、そしてその頼りにされていたミサイルが熱帯の湿気の多い気候のせいで作動不良を起こしたためであった。他にも、ファントムよりMiGが機動力で優れていたことや、ミサイルのエンヴェロップ（限界）があまり知られていなかったなどもあるが、米軍がその気候に手こずったのは確かだった。

ちなみに、映画で有名な『トップガン』ことアメリカ海軍戦闘機兵器学校の訓練コースができたのはこの頃である。

そして、現在。技術こそ進歩したためベトナム戦争時ほど酷いことにはならないだろうが、その危険性がなくなった訳ではない。

しかし、どうすることもできないので、現在の技術に期待するしかない。

着陸後の幾つかの手順を終える頃には、着陸から1時間ほどたっていた。すぐに他の部隊との合同ブリーフィングが予定されていたので、パイロットスーツから正装に着替えていた。

夏用の制服だが、背中はずでに汗で濡れていた。クソ、なんて忌々しい気候だ。

「よお、似合わねえ格好してるな。パット」

後ろから声をかけられた。相手が誰であるかすぐに分かったので、顔を向けもせずに応えた。

「あんたも同じだろ？ セインツ」

マクミランはようやく後ろを振り返った。そこには予想通り正装の第390FS隊長マイク・《セインツ》・クリストファー中佐と、同じく正装の第391FS隊長ジェフ・カスケード中佐、そして第389FS隊長ティール・《ナイフ》・ハラウンド中佐が立っていた。

ニツクはニヤニヤした顔をして言った。

「あんたよりはマシだぜ」

「勝手に言ってる。リーパー、ナイフ、調子はどうだ？」

2人はマクミランより5つは歳下のはずだった。後輩に気にかけるのは先輩としての務めだ。

「問題はありませんよ」

と、ティール。一方のジェフは肩をすくって言った。

「リーパーなんて呼ばないでください。ジェフで十分ですよ。あ、調子の方は悪くはありません」

「分かってるよ、ジェフ。セインツ、エリックのやつはどこだ？」

エリックとは、第22空中給油飛行隊の隊長であるエリック・ブルーダー中佐のことだ。

「奴さんは日本側の連中と話してるみたいだぜ。多分燃料かなんかのことじゃねえか」
「そうか」

マクミランは腕にはめた時計を見た。そろそろ行かなくてはならない。

「仕方ない。やつは置いていこう。後で来るはずだ」

「そうだな。んで、俺らの車はどこにあるんだ？まさか歩いて行くとは言わないだろ？」

「お前だけそうしてやつてもいいぞ、セインツ」

「勘弁してくれよ」

「冗談だ。ほれ、お前さんのお望みの物が来たぞ」

マクミランは2両のハンヴェーを指差した。マイクは蟹めつ面をした。

「エリオットのじい様がレクサスなのに俺らは中古品かよ」

「嫌なら歩け」

「言ってみただけだつーの」

マクミランとマイクは1台目に、ジェフとテイルは2台目に乗った。マイクは走り出した後もずっとブツブツと悪態をついていた。マクミランはそれにひたすら耐えていたが、やがてマイクの頭を殴って黙らせた。

「イテエじゃねえか！」

「お前が悪いんだこの馬鹿たれが」

「ちよつとは不満ぐらい言ってもいいだろ」

「別に構わないが俺に聞こえないようにやってくれ」

「…たく、分かったよ」

マイクはそれ以降、いたって真面目な顔をして何か考え事でもするように窓の外を見た。

こんなやつが士官をやってるんだからウチはもう終わりだな、とマクミランは独り考えた。

パラオ泊地司令部には大きめの会議室がある。

あまり使われていないが、大規模な作戦の要項説明の際に使用される。つまり、今回のような合同ブリーフィングの時に。

正面の壁にはプロジェクター用のシートが降ろせるようになっていて、現在はこの薄暗い室内で稼働しているプロジェクターが唯一の光源だった。

その横で、レーザーポインターを持った瑞鳳が英語で（彼女が秘書艦を務めている一因でもある）説明をしている。

他の艦娘たちは英語が分からないので、ヴェラが通訳を務めていた。

今、この場には2つの海上部隊と1つの航空団の合計3つの部隊の指揮官が集まっていた。江田提督、ウォード提督、エリオット将軍の3人である。

更にそれぞれの幕僚として江田提督は艦娘全員と司令部幕僚、ウオード提督は艦隊幕僚、エリオット將軍は各部隊の飛行隊長と司令部幕僚を伴っている。まさに大規模な合同ブリーフィングだ。

そんな中でも、瑞鳳は全く臆することなく話を始めた。

「それでは、合同ブリーフィングを始めたいと思います。

まず、本作戦、『レッド・ステイングレー』作戦の背景について説明するところでしたが、ここにいる香水の匂いよりも硝煙の匂いの方が似合う紳士淑女の皆さんは十分認識していると思いますので省かせていただきます」

数力所から笑い声が聞こえた。誰が考えた言葉か知らないが、なかなか上手いことを言う。

「次に、敵部隊の規模について説明させていただきます。

まず、確認されている現在の敵は陸上の飛行場姫、海上は戦艦ル級フラッグシップが2隻、空母ヲ級フラッグシップ1隻、重巡リ級フラッグシップ1隻にエリート個体が2隻、軽巡、雷巡、駆逐艦それぞれフラッグシップ、エリート個体多数。主力となる艦艇の数が前回の戦闘のおかげである程度減少しています。

これだけならば良かったのですが、あいにく増援部隊が向かっているらしく、付近を航行していたロサンゼルス級原潜『ダラス』が戦艦夕級フラッグシップ2隻、軽空母又

級エリート3隻、重巡ネ級エリート1隻、同級フラッグシップ2隻、その他大小13隻の部隊を確認し、また提供されたアメリカ国家安全保障局（NSA）のSIGINT情報によれば、空母ヲ級フラッグシップ改が1隻、同ヲ級エリート1隻、その他艦艇多数が増援としてサイパン・テニアン両島の防衛に派遣されたようです。

少なくとも、40隻程の部隊が展開しているものと思われます」

沈黙が流れる。この作戦の困難さが改めてこの場にいる者たちに思い知らされる。

こちらの戦力は多く見積もっても敵の半分ほど。しかも、相手はまだ増える可能性がある。

さらに、水上艦だけでなく陸上には飛行場姫がいる。かなり手こずりそうだ。

「次に、当日の部隊行動について。

まず、最初に米第3艦隊及び日本第一艦隊、第二艦隊、第三艦隊が出撃。艦娘は米空母コンステレーションに乗艦し、燃料の消費を抑えます。

日米両艦隊が先行してから10時間後に第34BSのB-1B4機及び、第389FSのF-16C4機、第390FSのF-15C4機がそれぞれ離陸し、敵艦隊に対し先制攻撃を仕掛けます。

攻撃終了と同時に第391FSのF-15Eが、飛行場姫に攻撃し損害を与え、可能ならば破壊します。この時、コンステレーションの艦載機も直掩機を残し、攻撃に向

かってもらいます。

攻撃後、兵装が残っている機体はあらかじめ設定しておいた空域で給油し、再度攻撃を加え、残っていない場合は一度基地に帰投した後に補給、再出撃します。

艦隊到着後は艦娘が突撃を敢行。残存勢力に対し攻撃を仕掛けます。米艦隊は後方にて艦娘の支援を行います。また、航空部隊も同様に艦娘の支援を行います。

海上からの攻撃と空中から反復攻撃により、敵部隊は撃破できると考えられます」

そうなれば楽なのだが、とヴェラは通訳をしつつ考える。世の中思い通りにはならないものだ。

「敵艦隊と飛行場姫の撃破に成功し、制海権及び航空優勢を確保した後に日本より急行中の強襲揚陸艦ボノム・リシャルを旗艦とした上陸部隊がサイパン・テニアンに上陸し、両島を奪還します。この間、我々は上陸部隊の護衛を行います。

上陸後、おそらく奪還のために来るであろう敵艦隊を撃滅し、マリアナ海域の完全な制海権を握るまでが本作戦の内容となります」

なるほど、上の連中は全部こちらにやらせたいのか。ヴェラはぼんやりとそんなことを考えた。全く、こういうことを考える事だけは上手いやつらだ。

瑞鳳は最後の締め括りをした後、質問を受け付けた。が、誰もしようとはしなかった。全員が、この作戦で演じなければならぬ役を熟知していたからだ。

瑞鳳は頷いて言った。

「それでは、合同ブリーフィングを終了します。各部隊、作戦開始までに必要な仕事を終えておいてください。

以上、解散」

米軍側の士官たちは席を立って外に出て行く。その中で、艦娘たちは全員が残っていた。これから、彼女たちだけでのブリーフィングが行われる。いくつか詳細が知らされていけないことが、この場で伝えられるはずだ。

しばらくして、外で誰かと話していた江田が戻ってきた。彼は、後ろのほうに座っていた彼女たちを前に呼び寄せ話しだした。

「諸君、合同ブリーフィングご苦労だった。これから作戦までゆっくりと休んでくれ、と言いたいところだが、あいにく作戦終了までまとまった休みを取れないことを今のうちに伝えておく。不平は聞かん。他の部隊も似たようなものだから我慢してくれ。

さて、君たちは作戦開始時、米空母コンステレーションに乗艦し、作戦海域に到着した後、海に降りることになっているが、その辺りの調整の結果、少しばかり厄介なことになった」

不安しかない。嫌な予感を感じつつ、江田が続きを話すのを待った。

江田はこちらから聞いてくるのを待っていたが、やがて諦めたように言った。

「空母からタラップで降りてもらおう計画だったが、どうにもそれができないらしい。

そのため、諸君らには艦載機から海に直接降りてもらおうことになった」

予想通り、予感は的中した。不運としか言いようがない。ヴェラは不運ということだ。チラリと扶桑と山城の姉妹の方を見た。2人はこの意味がまだ分かっていないようだ。

ヴェラはため息を吐いた。今に分かる。彼女は、人間の体を恨めしく感じた。艦のままならば、こんな苦勞はしなかつたはずだ。

「それってどう言うこと？」

加古が聞いた。江田はそれに申し訳なきような顔で言った。

「君たちにはコンステレーション艦載機、正確にはC-2Aグレイハウンドに搭乗したのち、作戦海域上空からの空挺降下を行ってもらう」

誰も何も言わない。あまりのことに呆気にとられ、茫然としているのだ。

数秒後、思考が一番最初に回復した瑞鳳が頭を抱えて言った。先ほどまで使っていた英語が口を突いて出た。

「Jesus…」

その一言が、全てを物語っていた。

第15話 『Red Stingray』Rising

Phase 1

5月22日

太平洋洋上の20000フィート上空を、第34爆撃飛行隊『サンダーバーズ』所属のB-1Bランサーが4機、それぞれ2機編隊に別れて飛行していた。

彼らの他にSEAD（敵防空網制圧）任務を与えられている第389戦闘飛行隊のF-16C4機と、それら攻撃部隊を護衛するための第390戦闘飛行隊のF-15C4機が同様に飛行している。

彼ら航空部隊のそれぞれのコールサインとして、第34爆撃飛行隊は「シヨートケキ」、第389戦闘飛行隊は「ガトーシヨコラ」、第390戦闘飛行隊は「パンケーキ」、まだこの戦域にいない第391戦闘飛行隊は「テイラミス」、遠く離れた安全な空域にいる第22空中給油飛行隊は「クリームパフ」、第41電子戦飛行隊は「シユトローレン」、航空部隊の管制を務める第961空中管制飛行隊は「パティシエ」と与えられていた。

パラオ基地から飛び立って3時間。そして、第3艦隊と艦娘たちが出撃してから13

時間。パトリック・マクミラン中佐は、コックピットの窓から明るみ始めた水平線を見た。もうそろそろ、高度を下げて攻撃態勢に入らなければならぬ。

彼ら『サンダーバーズ』は黎明攻撃のために、真夜中の1時に離陸した。Mk-36機雷を84基搭載した敵艦隊の湾内封鎖を目的としたボーン2機と、飛行場姫攻撃のためにJDAM(統合直接攻撃弾)を24基搭載した2機が今回の攻撃に参加している。

JDAMは、無誘導のいわゆる「賢くない」爆弾を、「賢い」爆弾に変えるための特殊な誘導キットを取り付けた兵器だ。

これまでのペイヴウェイシリーズの後継爆弾で、最大の目玉はレーザー標準器やデータ・リンク・ポッドを搭載する必要がなくなることだ。

JDAMを発射する母機に必要なのは目標の位置だけで、発射後はJDAM自らのプログラムに従って目標に命中する。

これは、母機にとっても非常に安全で敵防空網を突く危険を冒す必要もない。そして、これまでレーザー標準器を使うことで位置が特定される恐れがあつたステルス機が、敵に位置を知られずに攻撃できるようになったのだ。

さらにこの優れた兵器のもう一つの特徴として、米軍で使用するあらゆる(特に使用頻度の多い)無誘導爆弾に誘導キットを取り付けられるのだ。

今、マクミランと僚機のボーンに搭載されているGBU-31(V)3/Bで使用す

る爆弾はBLU-109/B装甲貫徹爆弾で、バンカーバスターで知られる兵器の一つだ。これ自体はディーブ・スロートには敵わないものの、イラクの戦術核の至近弾でも耐えられる強化型シエルターを、まるで「ブリキ缶に穴を開ける」かのように破壊してしまえる能力を持つ。

そんな物騒な殺人兵器を48基も、それもたった1体の『深海棲艦』に打ち込むのだからずいぶんと気前がいい話だ。そこに更にディーブ・スロートを抱えたF-15Eが8機押しかける。狙われた方は堪ったものではないに違いない。

マクミランはその光景を思い、身震いをした。少なくとも、俺はそんなのに狙われたくない。

彼は太腿のあたりに止めてある予定表を見た後、時計を見た。

時間だ。

彼は操縦桿を倒した。機体はゆっくりと高度を下げる。

僚機も同様に高度を下げ、海面から30フィートにつく。言うまでもなく、この高度は非常に危険だ。これは、練度の高い飛行隊だからなせる技だ。

目の前は海が広がり、飛沫が機窓を洗う。と、彼らより200フィートほど上をアフトバーナーを噴かせたF-16Cが突き抜けて行く。

F-16のパイロットは、まるでこちらが見ていることを知っているようにバンクを

振ってさらに増速し、空の彼方へと消える。

一番槍を持っていかれるのは気に食わないが、仕方がない。

最早、後には引けないのだ。

第389FS隊長ティール・ハラウンド中佐は、自分が先陣を切るとは全く思わなかった。人類の数年ぶりの一大反攻作戦。どちらに転んでも歴史に残るこの作戦の最初の引き金を引くのが、彼なのだ。

幸運か、それとも不幸か？

それは人によるだろうが、彼としてはあまり嬉しくない。彼は自分が歴史に残ることを望んでいないし、望んだこともない。俺は、歴史に名を残すような偉大な人間じゃない。

しかし、任務の遂行に個人の意思を介在させることは許されない。

戦争において、予定通りに仕事をすることが最も戦果を上げることができるのだ。

彼は機内の左膝の上の部分にある多機能ディスプレイ(MFD)を見た。そこには、H T Sポッドからデータが送られてきていた。

『深海棲艦』のレーダーに関する名称は未だに与えられていない。その代わりと言っ
てはなんだが、そのレーダーを装備している艦艇の種類を特定してくれる。

今、MFDに表示されている物は『T A - C l a s s F l a g s h i p』。日本語で

言えば、タ級フラッグシップだ。

確認されていた増援艦隊の1隻だ。

『深海』側のレーダーは現在の物に比べると玩具のような物で、この距離ではこちらを補足できていないはずだ。しかし、ここから更に近付けば嫌でも見つかるだろう。

そうなる前に、さっさと破壊するべし。

彼はしばらく何もせず飛行した後、距離と方位が分かった段階で、AGM-88HARRM-1基に『RK（距離は既知）』モードに設定し発射に備えた。

タ級の位置が確定すると、HARMに自動的に送られAN/ALR-56M RWR（レーダー警報用受信機）レーダーにタ級がロックされたのを確認した。

マスターアームをオンにする。これで、いつでも発射できる状態だ。

このHARMが、人類の反撃の突撃ラップパになることを思うと不思議な気分になった。しかし、それもほんの僅かな間だった。

ハラウンドはこれまでの訓練、そして何度かの実戦で行った時となら変わらない動きで、引き金を引いた。

ステーション3のLAU-118ランチャーから飛び出したHARMは、サイオコーとハーキュリーズの2社が供給しているTX-481二段式ロケット・モーターを起動し、瞬時に加速してマッハ4に達した。

目標は、約30海里先の夕級フラッグシップのレーダーである。そこまで到達するま
でにかかる時間は、僅かに30秒である。

ターゲットである夕級からすれば、ちよつとした夢でも見ているようだった。

ちよつと航空部隊が襲ってくる方向に顔を向けていた夕級は、明るみ始めた空の彼方
に微かな光を見つけた。

光の数は、4つだ。

何かと思ひ味方に知らせようとしたその時、こちらに何かが近付いていることに気付
いた。

よく見ようと目を凝らした瞬間、すぐ目の前に筒のような物が迫り、彼女は衝撃に備
える間も無く直撃した。

小規模な爆発で彼女はバランスを崩したが、なんとか体勢を保った。

爆発は、彼女だけに起こった訳ではないようで、近くにいたもう1隻の夕級フラッグ
シップと、少し離れた地点にいたル級フラッグシップからも黒煙が上がっている。

彼女は、自身の体に起こった出来事を確かめた。被弾はしたが、さほど被害はないよ
うで、かすり傷程度だった。

彼女がホツとしたのも束の間、夕級は重大な事実気付いた。

レーダーが破壊されている。機能は完全に停止し、再起動しても動き出す様子はない。

い。

ふと、被弾した友軍を思い出した彼女は、周りに目を向けた。

レーダーを装備していた艦艇全てが被弾している。それも、ただやられた訳ではなく、レーダーだけが破壊されたのだ。

これだけで、事態の重要さは十分に分かった。

僅か数秒で、『深海棲艦』の電子の目は完全にその機能を失った。

ハラウンドのF-16CのMFDから、敵レーダーのシンボルが消えた。

おそらく、僚機のMFDも同様だろう。それで十分だ。

ティールは無線で友軍に連絡を入れる。これでもう、隠れる必要はないのだ。

「こちら、ガトーシヨコラー。敵の目は潰れた」

ティールの部隊は完璧に仕事を果たしたようだ。そうでなければ、ボーンのレーダーにはすでに凄まじい数の迎撃機が映ってはずだ。そうでなければ、ボーンのレーダー

はもう間もなく、サイパン島が見えてくるはずだ。そして、見えればすぐに敵艦隊の展

開しているラオラオベイに突入することだろう。

マクミランは編隊の速度を下げ、ウエポンベイを解放する。

マクミランの機とシヨートケーキ2は、自由落下式のJDAMが、後のシヨートケー

キ3と、4には同様に自由落下式のMk-36機雷が搭載されている。

機雷を搭載した2機が、先行し湾の入り口に「玉子」を並べ、その後すぐに「玉子」を活性化させる。

その2機は投下終了と同時にアフターバーナーを噴かせて、全速で離脱する。そこに、マクミランと僚機が突入する寸法だ。

見えた。サイパン島だ。湾内には、灰色の艦艇群が見える。

マクミランの編隊は、1度この空域で旋回する。その間に、機雷を搭載したボーンが仕事を済ませる。

機雷は、投下された後、GPS情報を発信して味方に位置を知らせる。友軍は、その情報を見ることで機雷原を容易に回避することが可能になるはずだ。

2機は速度を落とし、『深海棲艦』の対空砲火の絶好のターゲットになることを全く恐れず、機雷を投下していく。

見る限り、敵からの攻撃はまばらで、空母は迎撃機を上げようと躍起になっている。これならば問題はあるまい。

機雷の投下を終え、2機がアフターバーナーを始動して離脱を開始する。

対空砲火は徐々に激しくなっていく。少し厄介な仕事になったが、中止するほどの危険ではない。

彼は後席に向かって言った。

「これから花火の打ち上げ会場に突っ込む。衝撃に備えておけ！」

後席の兵装士官のジョンソン大尉が叫ぶ。

「そいつは楽しみです、中佐。でも、花火大会は中止にしてやらないといけませんよ。

「近所に迷惑だ！」

マクミランは笑いながら言った。

「俺の知り合いに花火師がいる。そいつにも是非言つてやつてくれ」

「そいつは勘弁したいですね。その知り合いに打ち上げられたくない」

「そうか、そいつは残念だ。しかし、この花火大会は中止させる事には賛成だ。まず

は、打ち上げを指揮してる奴を粉碎してやろう」

マクミランと僚機は、旋回を中止し、対空放火により黒煙が濃くなつていく空に突っ

込んだ。

激しい対空砲火に曝された機体が、ガタガタと揺れる。すぐそこを砲弾や機銃弾が流

れていき、黒煙によって前が見えにくくなる。

すでに爆弾倉は解放され、ズラリとJDAMが並んでいるのが海上からも見えるはず

だ。全ての兵装が、いつでも投下可能な状態だ。後は、敵の姿が見えれば…。

「中佐！見えました、左前方！」

副操縦士のクレイグ少佐が叫んだ。マクミランも、その方向に首を向ける。いた。

特に攻撃をしている様子には見えない飛行場姫が、そこにいた。余裕に満ちた表情を浮かべ、周りの友軍艦隊に指示を出している。

マクミランは即座に指示を出した。

「目標発見！そつちも捉えたか？」

「捉えました！データの入力も終わってます！いつでもどうぞー！」

「投下用意ー！」

「用意」

ジョンソンが復唱する。マクミランは、一息待つて言った。

「投下ー！」

「投下ー！」

と、同時にJDAMがパイロードから切り離され投下された。

飛行場姫は、敵らしき航空機（彼女はこれまでこのような機体は見たことがなかった）が、友軍の分厚い対空砲火を容易に抜けてきたことに驚いた。

数日前、これまでの艦娘などより比べ物にならないほど発達した兵器と戦った。何故、突然このような敵が現れたかはよく分からないが、ダメージはさほど無かったので

危険視することはなかった。

が、今回の敵機の大きさを考えると、少しばかりマズイかもしれない。だからこそ、普段よりも弾幕を厚くさせたのに……。役に立たない奴らだ。

敵機が何かを投下した。おそらく、爆弾だろう。かなりの大きさだ。2000ポンドはあるだろうか？

それが、1基、2基、3基……まだまだ落ちてくる。

彼女は目を剥いた。これまで自分に投下された爆弾の数を上回る数がたった1度の攻撃で……。

彼女は流石に不安を抱いた。もちろん、全てが当たる訳ではない。が、何発か当たっただけでも耐えられるかどうか。

そこで、彼女は気付いた。全ての爆弾が、寸分の狂いもなくこちらに飛んでくることに。

こんなことは、初めてだ。

自分はいかなる敵と対峙しているのか？

ふと、戦争初期の話をヲ級から聞いたことを思い出した。その話をしてくれたヲ級は、かなり前に艦娘との戦闘で撃沈されていたが、その前に艦娘が現れる以前のことをこちらに教えてくれたのだ。

敵の兵器は、驚異的な命中率を誇っていたという。もつとも、その威力は大したものではなかったが、それでも十分な恐怖を与えてきたらしい。

が、艦娘の出現と同時に、その誘導兵器を持つ敵と対峙することはほとんどなくなったというのだ。

今、自分の敵は、戦争初期の敵なのだろうか？

おそらく、そうなのだろう。つまり、そう威力は高くないはずだ。それならば耐えられるに違いない。

彼女は自分にそう言い聞かせた。

もしも、彼女が今落ちてくる兵器が湾岸戦争時、イラク軍の強化型シエルターのほとんど全てを吹っ飛ばし、世界中の強化型シエルターの99パーセントを破壊、もしくは危険に曝すことが出来る兵器だと聞けば、恐怖のどん底に叩き落とされていたはずだ。

幸運にも、彼女にそんなことを教えてくれる人物はいなかった。

飛行場姫は、こちらに落ちてくる巨大な爆弾を凝視した。

そんな物にこの私が吹き飛ばされてたまるか。

甲高く、耳障りな笛を吹くような音がすぐ真上まで近付いてきた。彼女は、着弾に備えて身構えた。

その光景を形容するには、幾つかの言葉があるだろう。例えば、「火山が噴火したよう

な」や「地獄の釜が開いたようだ」とか、「数十機の戦闘機がベイルアウトした跡地」などだ。

今回の状態は、その全ての言葉を足したような状態だ。

飛行場姫に向けて投下されたJDAMは、ターゲットから半径10メートルほどの地点に全て着弾した。ボーン2機に搭載されたJDAMの数は1機につき24基で合計48基。

それだけの物が、僅か20メートルの円の中に落下したのだ。その威力は凄まじく、黒煙と土煙の入り混じった煙と爆炎で飛行場姫が見えないほどだ。

更に、この兵器はただの爆弾ではないことは前述の通りである。BLU-109を使用しているこのJDAMは強力な貫徹能力を備えている。

通常なら、着弾地点は巨大なクレーターが穿たれ何もかもが消し飛ぶはずだが、相手は『深海棲艦』。しかも、非常に硬い姫級だ。だが、被害くらいは与えられただろう。

飛行場姫を撃破できないでも、滑走路の使用を封じることぐらいはできたはずだ。

マクミランはそう期待していたが、自信はなかった。通常の敵ならば自信を飛び越して確信していただろうが、あいにく今回の敵は常識がまるで通用しない手合いであった。

彼は操縦桿に力を加え、高度を上げる。攻撃は済んだ。期待通りの戦果が上がって

るか確認したいが、激しい砲撃に曝されている今それをするなど不可能だ。

これまで幸運にも被弾はしていない。いや、正確には重要区画に被弾していないと言
うべきだろう。すでに機体には幾つもの弾痕が刻まれているはずだ。

そう、これまでは幸運だったのだ。この先それがどこまで続くかは、全く分からない。
さっさと逃げるのが吉だ。

機体を突き上げる激しい衝撃が来たのはその僅か数秒後だった。クレイグ少佐と顔
を見合わせた。少佐の顔は蒼ざめている。きつとこちらも同じような顔をしているだ
ろう。

コックピット内で激しいアラーム音が響き渡る。マクミランはすぐに音の方に顔を
向けた。

左側のゼネラル・エレクトリック製F—101—GE—102ターボファン・エンジ
ン2発の内の1発が火災を起こし、もう1発はエンジンが異常燃焼を起こしているよう
だ。

彼は即座に燃料の流入を停止し、消化剤の散布を開始して火災の消火を図った。ア
ラームはすでに止めている。

緊張感が溢れた空気がコックピットを満たす。後席もこの騒動に気付いているだろ
う。

数十秒後、火災を示していたランプが停止する。消火に成功したようだが、まだ安心できない。マクミランは、僚機にエンジンの状態を見てもらった。煙が出ているが、炎は出ていないという答えが帰ってきて、彼はようやく安心した。他の乗員も小さい声で感謝の言葉を呟いている。

少なくとも、この被弾で落ちることはないだろう。しかし、それは新しい問題を生み出す結果になる。

予定では高度を上げて超音速で離脱することになっていたが、すでにアフターバーナーを噴かせて逃げることは不可能だ。

右側のエンジンも出力を落とした状態で飛ばなければならぬ。このままでは、戦闘空域から離脱する前に敵機に食い付かれてしまう可能性がある。

仕方がない。パイロットの生命は重要で、機体もまた同様だ。まだ落ちるようなまじい状態になっていない以上、護衛を頼むしかない。

マクミランはため息を吐きながら、管制官に連絡を入れた。

「こちらショートキー。パティシエ、左のエンジンをやられた。火災は停止したが、敵機の迫撃があった場合、振り切れない可能性がある。エスコートを頼む」

『了解、ショートキー。今、そちらに護衛を寄越す。少し待ってくれ』

「分かった。なるべく早く頼む」

マクミランは、小刻みに揺れる機体を宥める作業に戻り、最悪の瞬間が来るより先に味方が来ることを願った。

悪いことは重なってやって来る。これを一番最初に言ったのは誰だろうか？

第390FSのジェフ・カスケード中佐は、管制官から与えられる情報を聞きながら考えた。

悪いことの1つ目は、上がってきた敵機の数が増え予想より大幅に多いことだ。

いったい誰だ？20機程度しか上がってこないと言った奴は？明らかに、その倍はいるではないか。

次に来た悪い知らせは、『ボワーズ』の後続隊が遅れているということだ。どうも地上給油と爆装に予想以上に手間がかかったようだった。

うすのろの馬鹿どもめ！何故、余裕を持って行動していないんだ！

カスケードは無線を切った後、酸素マスクの中で毒付いた。そんなことを言っても、敵の数が減る訳でもないし、彼の部下たちが早く着くでもないが、彼は苛立ちをぶち撒けた。ストレスは早めに発散する方がいい。

それが済むと、彼はどうするか考えた。

4機のF-15Cには、それぞれAIM-120AMRAAMとAIM-9Xサイドワインダー2000が4基ずつの合計8基が搭載されている。つまり、彼の編隊には3

2基のミサイルしかない。

一方、『深海棲艦』の敵機の数合計43機。全弾を命中させても、11機残る。カスケードの部下たちはハーバード大学を出てはいないが、この程度の簡単な計算は当然できる。彼らが勝利するには、機銃を使用しなければならぬ。

F-15Cの固定武装である、ゼネラル・エレクトロニック製M61A1 20ミリバルカン砲は航空機に対して非常に有効な兵器だ。毎分4000発もしくは6000発かを選ぶことができ、装弾数は940発である。連続発射時間は2秒だが、引き金を引き続ければ10秒ほどで弾薬切れになる。

その点だけ気を付ければ、この武器は完璧な仕事を可能にしてくれる。

ちなみに、CIWSで有名なフランクス（レイセオン・システムズ）の機銃部分はM61を元に作られている。

カスケードのイーグルのレイセオン・システムズ製のAN/APG-63（V）1レーダーが敵編隊の姿を捉えた。

彼はAMRAMのシーカーにデータを与えようとしたその時、敵編隊の一部が別れて別の方向に向かう様子がレーダーに映った。どういうことだ？ 奴らの好きな餌でもあるのだろうか。

彼の疑問は、すぐに来た管制機から無線で消え去った。

『パティシエよりパンケーキへ』

「こちらパンケーキ。パティシエ、何か用か？」

『被弾したショットケーキのエスコートを頼みたい』

ショットケーキ？マクミラン中佐のコールサインだ。まさか、彼の機が被弾するとは。敵はそれほど優秀なのか？

「了解、パティシエ。すぐに行く。位置を教えてください」

彼は管制機からの情報を聞きつつ計算した。ショットケーキの位置は、敵編隊の一部が向かった方角だ。おそらく、敵さんもショットケーキに会いに行くのだろう。こんにちはショットケーキさん。あなたを食べに参りました。

…そんなことをさせるつもりはない。

カスケードは、管制官にETAを伝え、部下たちに後の30機を任せてアフターバーナーを作動させ護衛に向かった。

『こちらパティシエ。エスコートをたつた今向かわせた。ETAは5分後』

マクミランは内心ホツとしていた。向かっているのはカスケードの機で、彼の腕前は身を以て知っていた。演習で何回カスケードに落とされたことか…。

マクミランは苦笑いを浮かべた。助けてもらえるのは嬉しいが、飛行経験の差を考えると情けない気持ちになる。もちろん、そんな物はつまらないプライドで、命あつての

物種なのだが。

4分後、カスケードのF-15Cがレーダーに映った。

予定より早い。

いくら空中給油機がいるからといって、燃料を無駄に消費するのはあまり褒められることではないが、マクミランは護衛される側だ。口出しできる身分ではない。

が、彼も自分の義務がある。おそらく、向こうから連絡があるだろう。その時に咎めておく必要がある。

『パンケーキーよりシヨートケーキーへ。まだ落ちてませんね?』

「こちらシヨートケーキー。護衛に感謝する。そっちのレーダーにこっちは映ってないのか? そうならそのレーダーは不良品だ。レイセオンの首が幾つか飛ぶぞ」

『大丈夫です。ちゃんと映ってますよ。そちらに何機かストーカーがついて来てます。警察に通報しますか?』

「必要ない。そっちが予想より早く着いてくれたおかげでな。それでどれだけ燃料使ったんだ?」

『すみません。アヒルみたいにチンタラ飛んでたら護衛対象が落とされてた、何てことになったら寝覚めが悪いので』

「まあいい。それより、さっさとストーカー共を追っ払ってくれ。こっちはストーキン

グなんかされるほど良い男じゃないんでな」

『あー、質問です。『追っ払う』は、『殲滅してもよい』と言う意味の認識でいいでしょうか?』

マクミランはため息を吐いてから答えた。

「好きに解釈していい」

『了解しましたショートケーキー。ストーキング趣味の変態共を殲滅してやります!』

全く威勢のいい奴だ。マクミランは、呆れつつもその若いパイロットのことを愉快に思った。

真面目な軍隊にも、これくらいの男の1人や2人は必要だ。

カスケードは、イーグルをぶん回すところが生きがいだと感じていた。そして、この機を翔って戦えることを誇りに思っていた。そして、この機を翔って戦えることを誇りに思っていた。

このようなことを感じたのはいつだったろうか?

それは、彼が初めてF-15Cに搭乗した時だった。通常、戦闘機に乗ることをライド・イン（搭乗する）と言う。が、このイーグルはライド・オン、つまり跨ると表現するのだ。それは、見通しの非常によいバブル・キャノピーのおかげである。

カスケードは、この機体を一瞬で好きになった。まさに一目惚れだった。さらに、この機体を実際に飛ばすことでより好きになった。これより素晴らしい機体に、彼は乗っ

たことがなかった。

それ以降、彼の軍歴はこの機体と共にあった。彼の最初の任務は2011年のリビア内戦における米軍の軍事介入だった。

彼は爆撃を行うF-15Eの護衛として、合計130ソーターの作戦を行った。この間に2機のMiGを撃墜した。これが、彼の初めての戦果であった。

その後、幾つかの紛争地域を転々とし、やがて第366航空団の第390戦闘飛行隊隊長に抜擢された。

そして今、彼はこれまでと全く違う敵と相見えていた。もつとも、一方的な虐殺になることだろうか。

彼は交戦を宣言し、『発射・及びアップデートモード』でAIM-120AMRAAMを2基発射した。

AMRAAMはカスケードのイーグルから与えられた、方位、位置、コース、速度に従いしかるべき地点で、自らのレーダーを起動した。敵はすぐに見つかった。スラマーはIFFで誰何した後、それが敵であることに納得するとそれに向かってマツハ4で接近した。

敵機も必死で回避しようとしたが、無駄な足掻きだった。

『深海棲艦』の戦闘機2機は、AMRAAMの直撃を受け粉々に吹き飛んだ。生き残つ

た他の機は、次の攻撃から身を守ろうと編隊を解き個々に分かれる。

そのような行為はイーグルにとって何の役にも立たない。カスケードは、好きな敵機を叩き落すことができる。それだけの能力が彼と、彼の愛機には備わっているのだ。

が、彼は追撃しなかった。彼の目的は、あくまでエスコートだ。マクミラン中佐には殲滅すると豪語したが、彼も仕事はわきまえている。

敵機が再び結集したら、そこに残ったAMRAAMをぶち込むかサイドワインダーを発射すればいい。

敵機の航続距離を考えると、あと10分ほどの間守り切れれば、こちらの勝ちなのだ。敵機が編隊を組み始める。向こうも、この攻撃がラストチャンスであることは理解している。そう簡単には引くまい。

カスケードは、敵が動くのを待った。来た。

敵は部隊を3つに分け、攻撃してきた。1つは彼の妨害に、後の2つは後方よりボーンに迫る。

彼は舌打ちしつつ、目の前の4機を処理すべく兵装をAMRAAMからサイドワインダーに切り替えた。

AIM-9Xサイドワインダー2000は、レイセオン製のベストセラーAIM-9

サイドワインダー・シリーズの最新型だ。

この赤外線追尾ミサイルの特筆すべき点は、テールパイプの見えない真正面はもちろん、発射母機から60。ほどずれた地点、つまりオフボワサイトの敵にも使用可能なことだ。これにより、より攻撃の範囲が広がったのは言うまでもない。

カスケードは発射前ロックオン（LOBL）で、4機の敵機をそれぞれロックした。

彼は敵機が射程内に収まるまでじつくり数秒間待ち、引き金を引いた。

パイロンから切り離されたサイドワインダーが、マツハ2.5に増速し『深海棲艦』の戦闘機から発される赤外線を追跡し、回避機動に転じた敵機を追撃する。

それぞれ別個の目標を追跡するサイドワインダーは、敵機の激しい機動に紛わされず追いかけて、叩き落とした。

4つの火の玉が輝いたのは、発射から10秒以内だった。

カスケードは、操縦桿を引きつつ右ラダーを踏み、旋回する。高Gが彼の体を押し潰そうとするが、彼は難なく耐える。この程度のGでへばっては、戦闘機乗りとしてやっていけない。

彼は機首を敵機に向ける。

ボーン追撃に躍起になっている敵機は、彼のことを無視し、ボーンを落とすことに集中している。

カスケードは、微かな慄きを感じた。奴らは味方が落とされることはもちろん、自分が落とされることをまるで問題にしていけない。どんな犠牲を払ってでも、確実に落とすという信念が滲み出ているようだ。

カミカゼとは違う、もつと異質な何か。彼はそれに戦慄したのだ。が、それまでだった。

彼は残ったAMRAAMを選択し、最初に発射した時と同じ動作で発射した。

今度の攻撃は、後方からの攻撃になるため射程距離が短くなるが、問題なかった。後ろから迫ってくるAMRAAMを回避することもなく、敵編隊から2機の戦闘機が吹き飛んだ。

「スプラッシュ・トゥー」

ミサイルは全弾命中した。技術の勝利を祝いたいところだが、それは後にする必要がありそうだ。

残りの敵機はあと5機。ボーンが逃げ切るのは難しそうだ。

カスケードはイーグルの兵装をバルカン砲に切り替えた。HUD（ヘッド・アップ・ディスプレイ）にガンサイト、正確にはガンサイト用のシンボルが表示された。

彼はスロットルをいっぱいまで押し上げ、アフターバーナーを点火した。燃料に不安があるが構うものか。

彼のイーグルは瞬時にマッハ1を超え、さらに増速する。前からの強烈なGを受け、体が圧迫される。しかし、彼の視線は前から外れない。

数秒後、彼の視界に入った敵機はHUD上に表示される円錐上の空間に瞬時に入り込んだ。

彼は引き金をほんの一瞬だけ引いた。触れたと言ったほうがいいかもしれない程短い時間の射撃だったが、効果のほどは絶大だった。

PGU-28装甲貫徹／焼夷弾が敵機を貫き、木っ端微塵に破壊した。

彼は次の機体に目を向け、再びガンサイトに敵機を捉えたと引き金を引き絞る。数十発の20ミリ砲弾が右翼の付け根から発射される。砲弾はまるで敵機に吸い込まれるように着弾した。

敵機は粉々になり、破片が空にばら撒かれる。カスケードはその破片を回避しつつ、次の目標に狙いを定める。

残り3機。間に合うか？

すでにボーンは目の前に迫ってきている。最も近い位置にいる敵機は、もう間もなく射程に収めてしまいそうだ。

さらに1機がイーグルの銃撃を受け、黒煙を吹きながら下に落ちていき、爆砕した。

あと2機。無理だ。最後の1機は間に合わない。中佐の腕に賭けるしかない。

カスケードは苦虫を噛んだような顔をして、更にもう1機叩き落としたり。最後の1機は、ボーンへの射撃を開始した。

マクミランは、MFDに表示されるE-3Cから提供される10秒おきのレーダースコープの結果を見ながら、敵機とカスケード機が迫ってくるのを確認していた。

カスケードは手早く敵を潰しているが、思った以上に手こずり、敵がこちらを攻撃する前に全滅させることは無理そうだった。

敵機がどんどん近付いてくる。マクミランは操縦桿に手を当て、回避行動に備える。次のスコープの後に射撃が来るはずだ。

MFDの情報が更新された。敵機は今…。

真後ろ。

マクミランは即座に操縦桿を右に倒す。と、同時に右ラダーを踏む。

機体は瞬時に右への旋回を始めた。

敵機の放った機銃弾は、先ほどまでボーンのいた空間を切り裂いていった。何発かの弾は当たったようだが、重要区画の被弾はない。ほんの数秒、遅れていれば重要区画にも被弾していただろう。

危ないところだった。が、まだ危険であることは変わりない。

彼は機体をそのまま旋回飛行に持っていく。この場合、切り返すのは危険だ。後

方から迫る敵機の射界に入ることになる。

しかし、ボーンより敵機の方が明らかに旋回性能に優れている以上、ほんの僅かな時間稼ぎにしなければならない。

敵もそれに気付いているのだろう。その機動力に物を言わせて、急旋回し、ボーンを射界に収めようとする。

しかし、敵はあまりにも時間を使い過ぎた。そして、マクミランにとってはほんの数秒の時間で十分だった。

敵機がボーンを射界に収め、射撃しようとした瞬間、後方から数十発の20ミリ砲弾の直撃を受けた。機体はバラバラになり、空に散った。

カスケードのイーグルの攻撃で破壊されたのだ。

無線から、カスケードの声が聞こえた。

『フウ、なんとか間に合いましたね』

「間に合っていないぞ、ジエフ」

『はい?』

カスケードの間拔けな声が聞こえ、マクミランはため息を吐いた。

「最初の射撃が何発か当たった。重要区画に当たってたらどうするつもりだったんだ?」

『あなたの腕が無かったってことじゃないですか？もちろん、私の不甲斐なさも原因ですが』

カスケードは、無線を通してマクミランの苛立ちを感じたのか、すぐに訂正する。と、管制機より連絡が入った。

『こちらパティシエ。敵編隊の撃破を確認した。良くやってくれた、パンケーキ』

『それはどうも。うちの編隊はどうなってる？』

『パンケーキ・フライトは敵編隊を殲滅した。損害は無いようだ』

『了解、パティシエ。ところで、燃料に少しばかり不安がある。兵装もほとんど使っちゃまったんで、一度基地に帰投する』

『了解、パンケーキ。ショートケーキ、パンケーキと基地に戻るか？』

『問題ない』

『分かった。無事に戻れることを祈ってるよ』

『感謝する。陸で会おう』

マクミランは機種をパラオに向け、高度を上げた。コックピット内にホツとした空気が流れた。とりあえずは、彼らの役目は終わったのだ。後は、すぐ後ろの編隊位置で飛行している、カスケードたち戦闘機と、海軍、そして艦娘たちの戦いだった。

第391FSのマイク・クリストファー中佐は、F-15Eストライク・イーグルに

『跨り』、飛行していた。

味方の無線と、パティシエからの情報を見る限り、作戦は大筋で上手く進んでいるようだ。

そうではなくては困る。こんな緒戦で手こずっているようでは話にならない。

彼の部隊は、4機ずつの編隊に分かれているが、どの機にも飛行場姫を撃破するために必要なGBU-28が中央のパイロンに搭載されている。パットの部隊が飛行場姫にJDAMを打ち込んでいるため、目標はかなりの損害を受けたはずだ。そこにデューブ・スロートを投下してやるのだから過剰殺戮（オーヴァー・キル）もいい所だろう。クリスは、飛行場姫に同情したくなかった。気の毒に。あの島に航空基地が無かったらこんなことにはならなかっただろうに。

しかし、仕事は仕事だ。可哀想だが、バラバラの肉片になってもらうしかない。

今頃は、この付近の海域まで到達しているコンステレーションから海軍の航空部隊が敵艦隊に攻撃を行ない、クリスの部隊の飛行場姫攻撃をしやすくしてくれているだろう。

もつとも、海軍のオカマ野郎共がまともに仕事をすれば、だが。

見えた。ラオラオベイだ。

湾内のあちこちから黒煙が上がっている。何隻かの『深海棲艦』は海に沈みつつあり、

さらに多くの艦が火災を起こしている。

後席でWSO（兵装システム士官）を務める、サロモン・《アックス》・カーク大尉が口笛を吹いて言った。

「海軍の奴らも、それなりには、やるようですね」

無線越しでもカークが笑っているのが分かる。クリスもそれにつられて笑いつつ、答えた。

「当たり前だ。いくらオカマ野郎共でも、連中は俺たちと同じアメリカ軍だ。この程度の事ぐらいできなけりや、給料なんざ貰えんよ」

「それもそうですね」

カークは答える。

クリスはその返答に頷くと、再び言った。

「ところで、ターゲットはまだ生きてるか？」

「まだ分かりませんね。今の所、目標地点に動きは見られませんけど……」

「フム、一応確認した方がいいだろう。ロッキー、ピース、聞こえてるか？」

『聞こえてますぜ、隊長』

『同じくです』

ロッキーことテイラミス5と、ピースことテイラミス6が答えた。

「お前たち2機でターゲットを目視で確認しろ」

『了解だ、隊長。ピース、行くぞ』

『分かりました。バックアップ位置につきます』

2機のストライク・イーグルが増速して先行し、ターゲットの元へ降下していく。その2機に対する対空攻撃は散漫で、ほとんど害にはならなかった。

『こちらテイラミス5。奴さんを目視で視認。相当やられてるようだが、まだ生きてやがる』

「分かった、ロッキー。ピースと一緒に戻ってこい」

『はいよ。俺たちは無慈悲な隊長の使い走り。好きなように扱われる哀れな使い走り…』

「今度から下でも使い走りにしてやるよ、ロッキー」

『勘弁してくださいよお』

「うるさい。情けない声出しても無駄だ。分かったらさっさと動け」

『へいへい。もう動いてますよ、隊長殿』

皮肉たつぷりの交信の後、無線が切られた。

クリスはため息を吐いた。困ったやつだ。腕はいいのだが、口が悪すぎる。もつとも、自分も同じだが…。

彼はスロツトルを上げ、増速した。背中から突かれるような衝撃と共に、前からのGを受ける。

目標への突入地点に編隊を移動さすべく、旋回飛行に移る。彼は後ろを振り向き、僚機が付いてくるのを見ると、再び視線を前に向けた。

キャノピーの向こうに、黒煙を吹き上げる地上物があった。その物体は、何やら苦しうに蠢いている。

目標の飛行場姫は、J D A Mが48基も命中したため、相当な被害を受けたようだ。

後席のカークが言った。

「間もなくアタック・ポイントです」

「分かっているよ、アックス。あの哀れなターゲットの息の根を止めてやれ」

「了解」

数秒後、攻撃地点を高速で通過したF-15Eの中央パイロンからGBU-28が投下された。

圧倒的破壊力を持ったその凶器は、投下母機から発せられるレーザー波に従い、正確に目標に向かって落下していった。

J D A Mの攻撃を受け、激しい被害を被った飛行場姫は、迫ってくる航空機を恨めしうに見つめていた。

彼女は、自分が今迫っている航空機によって、この世界から抹殺されることが容易に想像できた。そして、それを阻止する術がないことも知っていた。

だからこそ彼女が最後にできることは、傷だらけの身体を起こし、その理不尽なまでの力に決して屈しないことを示すことだけだった。

8機の航空機から爆弾が投下された。彼女は、その8基の爆弾が自分の身体に對した影響を与えないはず、などという幻想は抱いていなかった。

あと数秒で、彼女の存在はこの世から消え去る。いつも考えていた死が、すぐ目の前に迫ってきたのだ。

不思議と、恐怖はない。恨めしい思いも、今は完全に消えていた。どこか清々しくさえ感じる。

理由は分からない。が、それでよかった。

ようやく、ゆっくりと休める。

ただ、それだけのことかもしれない。

飛行場姫は、目を閉じ、笑みを浮かべた。

そして――。

強烈な閃光と共に、消え去った。

土煙と爆炎、そして黒煙が混じり合った物が噴き上がるのが、クリスには見えた。そ

の中で、飛行場姫がバラバラになって吹き飛んだ様子も、同様に彼の網膜を通じて脳裏に刻まれた。

「ヒューツ！最高だ！吹っ飛ばしてやった！」

後席のカークが歓喜の叫びをあげる。

ふと、彼は自分が十字を切っていることに気付いた。

なんてこった。全く俺らしくもない。いったい、どうしちまつたんだ？

「なあ、カーク」

「何ですか？中佐」

勝手に口が動くのを感じながら、彼は言った。

「俺、ホームランドに帰ったら神父様にでも説教してもらおうよ」

鏡に映るヘルメットのバイザー越しでも、カークが目を見開いているのが分かった。

当然だ。信心深いとは言い難い彼がそんなことを言い出したのだから。

カークの眼は、正気かとも言いいたそうだ。

クリスは苦笑した。神父様の名前を出しただけでこれだ。ここで、俺は厳正なカトリックだ、なんて言ったらカークのやつはどんな顔をするだろうか。きっと驚きのあまりに失神するに違いない。

クリスは言った。

「冗談さ。さて、一旦基地に戻って補給を済ませちまおう」

「…了解しました」

カークはまだ不審そうな眼をこちらに向けている。

クリスはため息を吐きながら、無線に連絡を入れる。

「こちらテイラミス1。敵の頭を潰した。会場はしつかり温まつてるぜ」

彼はそれだけ言うと、無線を切り、旋回してパラオ基地に機首を向けた。

途中、2機のC-2Aグレイハウンド輸送機が、護衛のF-35C4機と共にサイパ

ンに向かうのが見えた。

彼は、その機体の中で降下に備えているであろう艦娘たちに、エールを送った。

頑張れよ、お嬢ちゃんたち。おじさんたちは補給の後でしつかり援護してやるからな

…。

彼は、その輸送機たちにバンクを振ると、戦闘空域を後にした。

第16話 『Red Stinging Ray』 Rising

I Phase 2 I

ヴェラ・ガルフはコンステレーションの艦載機であるC-2Aグレイハウンドの兵員区画の座席に座っていた。

空はそろそろ明るみ始めている頃だろうが、窓一つない機内は機内灯がなければ薄暗い。この薄暗さは、これからしなければならぬ任務の憂鬱さと調和して、陰鬱とした空気を生み出している。

彼女の他にも、この機体には何人かの艦娘が搭乗し、ヴェラと同じような様子で他の輸送機よりはマシな座席に座っている。皆、目を閉じて眠っているようだ。疲れている、ということもあるだろうが、それ以上に起きていると面倒な仕事の現実に直面しなければならなくなる。今は、少しの時間でも現実逃避したいといったところだろう。そこまで、艦娘たちを萎えさせているのは、彼女たちが全く想像もしていなかった事だった。

空挺降下。

これまでも何度となく議題になり、その度に放棄されてきた艦娘の運用方法だった。

艦娘は、あらゆる場面で非常に有効的であったが、弱点としてその航続性の悪さが常に指摘されてきた。言うまでもなく、艦娘が疲労するからである。

そのため、その足は長くても基地の近海に止まり、長距離の遠征などはどう考えても不可能だった。

結果、長距離を行く場合は輸送艦、もしくは大型の戦闘艦艇に乗艦して戦域近くまで向かい、そこからは艦を降りて自らの足で向かうという非常に面倒かつ、無駄の多い方法をせざるを得なかった。

つまり、ほんのちよつとしたことでも、大規模な部隊を運用しなければならなかったのだ。

それを一気に解決してくれるのが、艦娘の空挺降下だった。

艦娘は、艤装を展開していない時は人間と変わらない。故に、新しい装備などは一切作る必要がない。それはコストパフォーマンスの面から見ても非常に魅力的な案だった。

これを実際に実行するために必要なことは、艦娘の訓練だけであるということも、このプランが何度となく議論された理由でもある。

また、航空機を運用することによって、その機動力は桁違いにまで跳ね上がり、緊急性の高い海域への移動が容易に行えるという点も、また同様だった。

が、このプランにも幾つかの問題点があった。

問題点の一つが、艦娘を空輸するリスクだった。

このプランを実際に行うならば、当然大型輸送機を使う必要がある。輸送機はもちろん護衛機を付けられるが、大規模な航空部隊に攻撃されれば、護衛機だけでは対処出来ず、輸送機が撃墜されてしまう可能性があった。

さらに、空母を保有していない日本では艦娘を陸上機で輸送しなければならないが、太平洋の大部分の島嶼群を失った今、陸上機の給油の問題も出てきていた。

もちろん、空中給油機を運用すればいいのだが、その給油機にも数機の護衛が必要になる。当然、この機体も撃墜の可能性がない訳ではない。

撃墜された場合、輸送機はどこに移動するのか。そもそも、燃料が持つかどうかかも、その時にならないと判断できない。

艦娘の空挺降下は、多くの魅力を持ったプランだが、それ以上に不確定要素が多すぎた。

結果、解決策が考え出されるまではお蔵入りとなってしまうていた。

そう、ほんの十数時間前までは。

これまで、日本と米国の共同作戦は何度となく行われてきたが、艦娘との合同作戦は一度として行われなかった。

何度か米政府から要請が来ていたが、日本政府が艦娘の能力を米軍に見せたくなかったのだ。

が、今になってそんな悠長な事を言っている余裕が無くなり、今回の作戦にいたった訳だが、思わぬところに解決策が存在していた。

アメリカの空母が、その全ての問題点を解決してくれたのだ。

つまり、着艦場所、海上での空戦に十分に慣れた陸上機よりも数が多い護衛機、不時着水した場合の救助まであらゆる問題点を、だ。

また、中型の輸送機がすでに存在していることも、その後押しとなった。

アメリカ空母は、それ以外の国の空母と比べると比較にならないほど大きく、艦載機が多い。

その分、乗員と飛行要員は桁違いに多く、また1回の軍事行動に使用され資源の量も非常に多い。

特に人員の入れ替えは凄まじい。

その結果、C-2輸送機が生み出された。

このノースロップ・グラマン社製のE-2を改造した機体は、陸上基地と空母間の物資輸送を目的とした機体で、7.7トンのペイロードを持つ。人間ならば、39人の輸送が可能だ。

現在はV-22オスプレイに変更されつつあるが、それでもまだ十分に現役を張れる機体である。

その往年の名機は幸運にも、艦娘という人間の姿をした艦を戦場に送り届けるのにピッタリは機体だった。

もつとも、少しばかり無茶な改修をしなければならなかったが、その辺りは優秀な技術者たちがほんの数時間で改造しきった。

もちろん、リスクが完全に消えた訳ではないが、リスク無くして勝利は得られないというよく使われる言葉の後、GOサインが出た。

忙しかったのはここからだった。

この作戦における指揮官たち、つまり江田提督、ウオード提督、エリオット将軍は、短い時間に空挺降下の基本的動作を教える人材をそれぞれの部隊から探し出した。

その結果、海兵旅団から空挺降下の経験者が数人連れてこられた。

彼らは、艦娘たちに申し訳程度の知識を教え込み、これまたやるだけマシという程度の地上訓練を行った後に、たった1回だけ予行演習と称して実際にC-2からの降下を行わせた。

海兵旅団の隊員たちが自身の持てる全力で取り組んだおかげで、この非常にお粗末な訓練は、どうにか身を結ぶだけの成果をあげる事に成功した。

これは後に、海兵旅団内で伝説として後世に伝えられることになる。一つは、隊員は上官の無茶な命令を成し遂げねばならないという使命として。そして、このような無茶振りをを行うような事態は避けなければならないという教訓として。

こうして艦娘たちは、僅か数時間の間に即席の空挺部隊に変貌したのだった。微かな音で、ヴェエラは現実を引き戻された。

彼女は音の方に顔を向けた。

1人のアメリカ兵が座席から立ち上がっている。確か、カジタ少佐という日系の海軍士官だ。カジタは今回の作戦における機上輸送係（ロードマスター）を務めることになっっている。

カジタは流暢な日本語で言った。これが、今回の任務に彼が選ばれた理由でもある。「そろそろ時間だ。準備をするように」

…そうか。もう、そんな時間か。ヴェエラは隣で寝息を立てている瑞鳳を揺すつて起こそうとする。

「瑞鳳さん、起きてください。時間ですよ」

瑞鳳は面倒くさそうに薄眼を開けて、寝ぼけているのか、こんなことを口にした。

「…ん、提督？まだ、起きる時間じゃないよ…」

ヴェエラはその言葉を聞かなかったことにしたが、江田提督に真偽のほどを確かめてお

かねばと、頭のデータシステムにメモした。

ヴェラは先ほどより大きめの声で言った。

「バカなこと言つてないで早く起きてください。時間ですよー」

流星にこれだけ強く言えば起きるだろうと思つたが、瑞鳳は再び船を漕ごうとしてい
る。

彼女はため息を吐いてから、レーダーを起動して高出力のレーザー波を当てた。

通常、レーザー波は人体にあまり良い影響を与えない。特に、イージス艦のフェーズ
ドアレイ・レーダーは出力が非常に強く、数秒程度で吐き気を覚えるようになる。

そして、そのまま当て続けると人体はオープンで焼かれたように見事に黒焦げになる
のだ。

今、ヴェラが瑞鳳にしていることが、それである。

効果はほんの数秒で出た。

瑞鳳は苦しげな呻き声を上げながら起き上がった。ヴェラはそれを見ると満足して、
レーダーを停止した。

「おはようございます。ご気分はどうですか？」

ヴェラはニンマリとした笑顔を浮かべて言った。

「…嫌な気分」

瑞鳳は仏頂面で答えた。手は前の座席を探っている。エチケツト袋を探しているよ
うだが、やがて諦めた。

「何したの？」

瑞鳳は不機嫌そうな顔をして、ヴェエラを問い詰めた。一部の人間にはその表情は非常に可愛らしいに違いないが、ヴェエラにとっては滑稽そのものだった。

「何もしてませんよ」

ヴェエラはそれだけ返した。瑞鳳はしばらくヴェエラを睨みつけていたが、やがてため息をして言った。

「それで、何で起こしたの？」

ヴェエラは呆れ顔で言った。

「もう、忘れたんですか？もうすぐ、作戦発起時刻だから起こしたんですよ」

瑞鳳はようやく頭が回転したようで、驚いたような表情を浮かべた。

「もうそんな時間？」

「そうじゃないと起こしたりしませんよ」

「んー、それもそうかな？」

瑞鳳はそう言うのと、気合いを入れるように頬を叩いた。

ヴェエラと瑞鳳は、周りでまだ寝ている艦娘たちを起こして回り、作戦開始10分前に

全員が兵員区画のローディングドアの前で並んだ。

カジタは彼女たちに最後の説明を行う。

「Girls 諸君。これから諸君らにはこの機から飛び立ち数十秒の間、鳥になつてもらう。荷物を無くしても届けることはできないのでそのつもりで。

よく注意して、教えられたことをこなすように。以上！」

カジタはそう言うと、コックピットにローディングドアを開くように言った。

ドアが開き始めた。開くごとに機体のターボプロップエンジンの爆音が機内に響き渡り、堪え難い騒音となる。そこに、さらに風の吹く音が混じり合い、何が何だかわからないような轟音となつて、彼女たちの耳に入り思考を破壊する。

「5分前だ！自動索を繋げ！」

彼女たちは兵員区画の壁に走る、技術者たちが即興で取り付けた繫止索に自動索を繋いだ。

隣同士でハーネスの締り具合を確かめ合い、準備が整った。

ローディングドア上部にある、これまたやつつけで取り付けた降下ランプがまたたき、緑のランプを光らせた。

カジタが叫んだ。

「降下開始！行け、行け！GO、GO、GO、GO！奴らを叩き潰してこい！」

ヒステリックとも言えるカジタの声に押されるように艦娘たちは走り出し、ローディングドアを飛び出して、空中に舞っていった。

降下時間はほんの30秒ほどだった。

ヴェラは教えられた通り、海面2メートル上空でハーネスの離脱器（リリース）を手で探り当て、パラシュートから体が解放される。

海面が近い付いてくる中、彼女は冷静に艦装を展開し、着水に備える。着水。

水飛沫が体と艦装を洗うが、気にも留めず自分が降下した位置を探る。予定位置とはとんどズレはない。このまま、味方が来るのを待つとしよう。

すぐ横に誰かが着水した。が、勢いを殺し切れずに海面に倒れてしまった。誰かと思いい、飛沫が収まるのを待って確認すると頭に特徴的な艦橋が見えた。なるほど、これで2人に絞られたわけだ。ヴェラはその相手に声をかけた。

「大丈夫ですか？」

相手は小さく答えた。

「不幸だわ……」

山城は普段となんら変わらない言葉を漏らす。

山城は扶桑型戦艦の2番艦だ。欠陥と、戦う違法建築として有名なパゴダマストで知

られている彼女は、ずいぶん前に書いた通り、パラオ泊地における主力艦だ。今回も、その大火力を存分に奮ってもらう予定だった。

山城を助け起こして（彼女は艀装が大き過ぎて、倒れると1人では起き上がることができない）いると、数人の艦娘たちが駆け寄ってきた。

ほとんどがバラバラに降下したようで、予定地点に降り立てたのはヴェラと山城だけだったようだった。

全員が集まるのに10分かかった。想定より5分遅れていたが、作戦に支障はなかった。

彼女たちが行う任務は、ラオラオベイに突入して敵残存艦隊を撃滅することだった。なんの奇策も、手段もない。力による正攻法で敵を押し潰すのだ。

降下前に伝えられた情報では、飛行場姫は破壊されて湾内の敵艦隊も指揮系統が破壊されたため、浮き足立っているとのことだった。

彼女たちが戦うのは、ほとんど壊滅状態の危険性の低い、いわば牙を抜かれた虎なのだ。

そんな相手だからこそ、正攻法でも十分に勝利できるだろうと、作戦士官は判断した。そして、指揮官たちもその考えに同意した。

だが、いくら牙の抜かれた虎といえど、その足には鋭い爪を持つ。

ヴェエラは出撃前に全員に警告しておいた。その警告が聞き入れられているといいが……。

艦娘たちは2つの部隊に別れた。1つは、敵艦隊に肉薄し魚雷を叩き込む水雷戦隊。もう1つは、水雷戦隊の支援として長距離からの砲爆撃を行う打撃部隊である。

ヴェエラは打撃部隊の旗艦を務めることになっている。その主な理由は、あらゆる戦術に精通しここ数回の出撃で十分な戦果をあげているからである。

買いかぶり過ぎだと言いたいが、断りにくい雰囲気にならないうちに、つい引き受けてしまっていた。

一方の水雷戦隊は、第三艦隊旗艦を務める球磨が指揮をとることになっていた。

彼女たちは、10数キロにまで迫ったラオラオベイに向かいに前進を開始する。

ヴェエラは、目を閉じて戦況を映し出すモニターを見た。彼女たちの後方50キロの地点に、米第3艦隊が展開し終えている。全て、予定通りだった。

彼女たちのすぐ上空を、4機のF-35Cが駆け抜けていった。

その4機は、作戦における主賓の到着を告げるように辺りに爆音を撒き散らす。

『レッド・ステイングレー』は、佳境に入っていた。

空母コンステレーション艦載機F-35C飛行大隊を率いるウォルター・《スキーニーボーイ》・デイル中佐は、大隊の一部隊を率いて降下し、ラオラオベイに向かい始め

た艦娘たちを上空で護衛していた。

彼の部隊の任務は、艦娘たちに向かってくる敵艦載機を迎撃する事だったが、その必要もなさそうだ。

E-3Cからデータ・リンク送られてくるレーダー画像には、敵機が艦隊上空を飛び回る友軍機を落とそうと四苦八苦しているのがよく分かる。

近付いてくる艦娘たちに手を回す余裕はないようだ。

彼は気を抜いていた。もともと、さほど難しい仕事ではなかった彼の任務は、より簡単になっていた。

だからこそ、彼は突如としてE-3Cのレーダー画像に映った凄まじい数の正体不明の航空機に度肝を抜かれた。

なんだ、この編隊は？

彼は、E-3Cの管制官にこの事態はどういうことか尋ねた。

返答は至極簡単だった。

『Enemy』

彼はヘルメットの中でも目をひんむいた。信じられん。一体どこにこんな部隊を隠してたんだ？

思い当たるのは、唯一つだった。

「増援部隊、か…」

彼は、口に出して言った。想定よりかなり早い。

敵の増援が来るなら早くとも上陸部隊到着後と思われていた。しかし、それが楽観的観測だったのは一目瞭然だ。

クソツ、せっかくゆつくりできると思ったのに…。

デイルは舌打ちした後、自身の部隊に連絡を入れた。

「タイラント各機へ、こちらスキニー・ボーイ。新たな敵編隊を攻撃する。タイラント5から13までは現空域に残り、Fleet Girlsを守れ。残りの部隊はそれぞれ集合し、敵編隊に攻撃をかけるように。受領通知しろ」

『2、了解』

『3、了解』

『4、了解』

『5から12、了解』

『13』

『14』

『15』

『16』

数秒で全員からの返答が返ってきた。

彼はそれに満足すると、サイドステイックを倒し、旋回を開始した。

ヴェエラは敵の大編隊、そしてその母艦のいる艦隊を、レーダーで確認した。友軍機が激しい動きを始めたのも、それが原因だろう。

ずいぶんと増援の動きが早い。おそらく、侵攻前に派遣された増援部隊がようやく到着した、と言ったところだろう。

どちらにせよ、撃破しなければならぬ敵が増えたことには変わりない。

ヴェエラは動く必要があるか考えた。

敵増援艦隊は脅威だ。が、作戦にはこのような事態が起こることを想定していない。

ここで動けば、作戦全体に支障をきたすおそれがある。

だからと言って、放置しておくのは危険だ。

ヴェエラは決断した。

「瑞鳳さん」

「なに？」

「部隊の指揮を頼みます」

「……どうしよう……」

瑞鳳は怪訝そうな顔をした。

「私は増援を叩いてきます」

「味方に任せてればいいじゃない」

「いえ、敵はかなりの規模です。通常艦艇では対処しきれないかもしれません。いいえ、対処しきれない」

「別にヴェラが行かなくても…」

「私以外の艦娘は、友軍とデータ・リンクできない。また、私たち全員が動けば作戦に支障をきたします。」

「…ここは、私だけが行くのがベストです」

瑞鳳はしばらく考えた末、ため息を吐いてから答えた。

「どうせ反対しても行くつもりだったんでしょ？」

「ええ」

「もう、知らない。好きにすれば？」

「では、旗艦の任はあなたに…」

「それはダメ。旗艦はヴェラのままでもいいわ」

「しかし…」

「さっさと敵を片付けて戻って来てください」

「…分かりました。20分で戻ってきます」

瑞鳳はさつきと行けとでも言うように腕を振った。

ヴェラはそれに頷くと部隊から離脱し、後方に待機している友軍部隊と連絡を取った。

「こちらヴェラ・ガルフ。第3艦隊、応答してください」

数秒間の空白が続いた後、雑音混じりの声が聞こえた。

『こちら第3艦隊、駆逐艦マツキャンベル。現在そちらに急行中。5分で着く』

「マツキャンベル、こちらに向かっているのは貴艦だけですか？」

『Yes』

「あまり言いたくはないのですが…、少な過ぎではないですか？」

沈黙が続いた後、別の人物の声が聞こえた。

『こちらはマツキャンベル艦長、サイラス中佐だ。本艦だけが送られた理由は、艦隊司令が本艦だけで対処可能と判断したためだ。』

私個人としても、いささか少ないように感じるのだがね』

その言葉の奥には、命令は命令だ、という意味が込められているようだ。

サイラス中佐は続ける。

『さて、君はタイコ級だったな？』

「ええ、そうですけど…」

『それならいい』

そのすぐ後に、LINK16がマツキャンベルと接続された。

ヴェラの頭の中に、大量のデータが流れ込んでくるが、彼女の戦術データ・システムはしっかりとそのデータを吸収し、即座に分析する。そして、ヴェラの頭のディスプレイに多数のブリップやアイコンが表示される。

マツキャンベルのCIC（戦闘情報センター）と、同じ物がヴェラの頭に表示されたのだ。

『スゴいな。本当に艦娘とデータ・リンクできるとは……。今後の戦争のあり方が変わるぞ』

サイラス中佐の、感嘆の声が聞こえた。ヴェラもそれに答える。

「ええ。私も他の艦とのデータ・リンクは久しぶりです。慣れるのに時間がかかるかもしれない」

『それなら、しっかりと暴れながら慣れてもらおう。期待してるぞ、お嬢さん』
交信はそこで途切れた。

すぐ目の前の空で、空戦が始まった。

ヴェラはそれを援護すべく、敵艦隊への攻撃を開始した。

サイラスは艦橋で仁王立ちで前方を睨みつけていた。

この距離では目視できないが、彼は目線の先に十数隻の『深海棲艦』がいることを知っていた。

敵はすでに、味方部隊に向けて大量の攻撃機を差し向けている。

それを迎え撃つのは、1人の艦娘と、1隻の駆逐艦、そして8機の戦闘機、ついでにこの辺りの空域を全てカバーしているAWACS1機。明らかに戦力不足だが、どうにかしてこなさなければならぬ。

全ての迎撃部隊が、データ・リンクにより完全な1つの戦闘機械となっていた。

技術は進歩した。サイラスは、いつも驚かされる。

今日の技術を用いれば、戦闘機が今どれだけの兵装を装備しているかすらも容易に分かるのだ。

だが、その一方で、サイラスは古い考えを持った人間だった。

現在の艦も悪くはないが、彼はどちらかと言うと、帆船で未知の大海原を駆けることを望む人間だった。

あの当時のキャプテンと言うものは、海の上では非常に自由だった。船の上では、国の命令より艦長の命令の方が遥かに強かったのだ。

今のように、政府に、軍上層部に、艦隊司令部に、駆逐艦隊司令部に抑えつけられるようなことを、サイラスは好んでいなかったのだ。

彼は艦橋に立ち、時には自らの腕で操艦した。また、上層部の命令を無視し、独断専行に走ることもしばしばあった。

それ故に、多くの戦闘に参加し、多大な戦果をあげている彼だがこの年齢になっても中佐と、同期たちの中でももつとも低い階級となってしまうていた。

『艦長、攻撃準備が整いました』

CICで指揮を執る副官のケイト・リー少佐が艦内インカムで伝えてきた。

リー少佐は、サイラスとは真逆の人間と言えた。現在の技術に精通し、それを最大限に活用する方法を知るアジア系アメリカ人の彼女は、サイラスと上手くバランスが取れていた。

「分かった、少佐。友軍のタイミングに合わせて攻撃を開始しろ」

『了解です。：艦長、敵編隊の一部がこちらに向かってきています』

「迎撃しろ。発射は許可されている。好きにだけぶっ放せ」

『了解しました。敵共に『イージス』の力を見せつけてやります！』

サイラスは困った顔をした。若くて頭が良く、また美人だというのに：。もう少し、節度を持って欲しいものだ。

50代後半の彼にとって、リー少佐は娘のようなものだった。20代も後半の彼女の男勝りな言動は、彼の不安を助長させていた。主に、彼女のプライベートルな将来につい

て。

目の前で爆音が響くと、艦橋の窓を白煙が覆い尽くした。爆音は、1回、2回と続き、6回目で止まった。

白煙を吐き出したSM-6が垂直に上昇した後に、水平飛行に移行して空を高速で駆け抜けていく。

レイセオンRIM-174 スタンダードERAM(SM-6)は、SM-2にAIM-120AMRAAMの弾頭シーカーを取り付けたトンデモ兵器である。

優れた命中精度を誇る本兵器は、SM-3と共に艦隊防衛、弾道ミサイル迎撃の要となることが期待されている。

サイラスは顔を引き締めた。そうだ、今は目の前の戦闘に目を向けなければならない。
い。

彼は指示を飛ばし始めた。

空の上はすでに戦場と化していた。至る所を機銃弾が飛び交い、ミサイルの白煙が辺りを覆い尽くしている。

デイルは友軍の部隊の状況を確認した。どの機も損傷している様子はなく、順調にスクアを稼いでいるようだ。

困難ではなかった。すでに、彼も7機の敵機を叩き落としている。味方も同様か、そ

れ以上落としといるので、撃墜数は50機以上に昇るはずだ。

しかし、その数はさっぱり減っていないように思える。

それもそのはず。海上の敵空母から、敵機が無尽蔵に湧いてくるのだ。元を断たねば、こちらの弾薬切れになってしまう。そうなれば、マニニューバキルのようなことをしなければならなくなる。

「クソツ、艦の連中は何やってやがるんだ？ そろそろ弾がなくなるつてのに」

そう言いながら、デイルは最後のサイドワインダーを発射した。これでミサイルは1発も無くなった。

後はガンポッドのGAU-22/A 25ミリ機関砲しか残っていない。それすらも、残弾が200発しか（牽制等で発砲し20発は消費済み）ない有様だ。

これでは長くは持たない。彼は、1度母艦に帰投する事を考え出した。

その直後、AN/APG-81レーダーが洋上から6発のミサイルが接近してくる様子が映った。使用兵器は、ERAMらしい。

さらにその後、再び同じ地点から今度はトマホークが放たれた。数は、2発。狙いは敵艦隊の空母だ。

ERAMは、マッハ3の高速でこちらに向かい突っ込んでくる。そして、彼が避ける間も無く彼のライトニングIIの真下を通過して行き、敵機を爆砕する。

デイルはその全てを見る事ができた。F-35はコックピットの風防越しに見える空以外にも、機体の真下、真後ろまで360°。ほとんど死角がない。

空から6機の敵が消え去るのと同時に、今度はトマホークが約600フィート下の海面すれすれを飛び抜けて行った。すでに敵の目視可能域に入っている。

敵が気付き、対空砲や対空機銃で迎撃を行う。

トマホークは、対空ミサイルと違いそのスピードは比較的ーあくまで比較的、であるがー遅い。

そのため、冷静に高密度の対空弾幕を張れば動きの単調なトマホークを落とすことは可能なのだ。

今回の『深海』側の迎撃はそれに該当した。

冷静で、統制の取れた的確な射撃。その高密度の弾幕に入り込んだトマホークは、そのまま通過するように思われたが、突如としてバランスを崩し海面に突っ込んで盛大な水飛沫を上げた後、爆発して巨大な水柱を空に向かって突き立てた。

『深海棲艦』はその時初めてトマホークを迎撃することに成功したのだ。

その光景を見ていたデイルにしてみれば、腹立たしいことこの上なかつた。彼はいくつかの放送禁止用語を叫んだ。もちろん、無線は切った状態である。

が、彼がそんなことをしている間に、事態は動いていた。

残りトマホークは順調に弾幕をすり抜け、1番端にいたヲ級フラッグシップに突っ込み、450キロの高性能爆薬を炸裂させた。

ヲ級は、猛烈な黒煙を噴き上げて傾斜するように海面に屈した。さらに時々赤々とした爆炎が輝く。誘爆しているようだ。

デイルは、そのヲ級がもはや脅威ではないことを悟った。

だが、敵艦隊の脅威はまだほとんど減殺されていない。

デイルは、彼の機体に対艦兵器がないことに腹立ちを覚えた。今度から積ませてやる……。

もつとも、この戦闘を生き帰ればだが。

敵機は友軍艦艇ーデータによればマツキャンベルーを優先的に狙うことを決めたらしく、部隊の大部分を送り込み始めた。

数は83機。イーリス・システムでなら追い続けることは出来るが、全てを落とすことは明らかに不可能だ。

彼はもう1隻、と言うよりもう1人の味方が何をしているのか訝しんだ。こういう時のためのデータ・リンク・システムのはずだ。ヴェラ・ガルフとやらは何をやってるんだ？

その答えはすぐに出た。

デイルのいる地点から約40キロ離れた海上から白煙が噴き上がるのが見て取れた。SM-2スタンダードミサイルがイージス・システムの限界ロックオン数の16発が、順番に発射された。

スタンダードはマツキャンベルに迫り来る敵機に狙いを定め、高速で殺到する。ゾツとする光景だ。デイルはコックピットで身震いした。

しかし、たったの16発程度では敵編隊の数の暴力を止めることなどできなさそうだ。

今度は、マツキャンベルからERAMが12発発射される。さらに間髪入れずに12発発射。ERAMは自前のアクティブレーダーを備えているため、最低限の誘導だけで敵機を攻撃する。

イルミネーターレーダーの使用が最小限で済むため、命中前に連射することも可能なのだ。が、ERAMを装備したから弾数が増えるわけでは、当然ない。通常より早く発射すれば、その分早く尽きる。

それに、やはり敵の数の多さにマツキャンベルは明らかに圧倒されている。

デイルは覚悟を決めた。

「スキーン・ボーイより現空域のタイラント各機へ。友軍艦艇に接近する敵編隊を攻撃する。2〜4は俺に続け。13〜16はヴェラ・ガルフを守れ」

『2』

『3』

『4』

『13』

『14』

『15』

『16』

全機から簡易的な返答があつた。

デイルは頷くと、再び言つた。

「よし。ブレイク・ナウ！」

集まりつつあつた8機の戦闘機は、4機ずつの2つの編隊に瞬間的に分かれた。

VLSの発射音はもう1秒たりとも止まない状態だつた。SM-6がMk. 41 mod 7 VLSから発射され続け、艦橋の窓はほとんど用をなしていない。

操艦の頼りは、ウイング（艦橋横の張り出し部分）に出ているウオッチと艦内インカムを通して聞こえるCICからの指示だけだつた。

時々、砲撃音が聞こえた。Mk. 45 mod 4 単装速射砲が、敵機に対して砲撃を行っているのだ。

防衛線はかなり下がり、ミサイルが運用できなくなる時はすぐに来るはずだ。

サイラスは至近弾の衝撃で負傷した操舵員の代わりに舵を握り、マツキャンベルを動かしていた。

強烈な連射音がすると同時に、艦橋が微かに震えた。ついに、マツキャンベルの最終防衛ラインであるファランクスC I W S が動き出したのだ。

先ほどまで視界を遮っていたミサイルの白煙は鳴りを潜め、今は硝煙のきつい臭いを発する単装速射砲とC I W S の砲撃、銃撃音だけになった。いよいよマズイことになりつつあった。

ヴェラ・ガルフからの遠距離支援は、非常に心強かったが、まだE R A M を積んでいないからか1回の攻撃で飛んでくるのは16発のみ。

それも、最初の内だけでしばらくするとこちらに発射されるミサイルの数は3発に減っていた。どうやら、あちらにも敵機が向かっていているらしい。

彼はE R A M の残弾数を見た。後、12発。それ以降は、従来のS M - 2しかない。

サイラスは舌打ちした。かなり厳しい戦いだ。いくら『盾(イージス)』といえど、たった2隻で、しかも通常より遥かに多い敵を討つことなど容易にはできない。無尽蔵に敵が増えるなら、元を断たねば…。

サイラスはC I C に告げた。

「CIC、艦橋だ。これから対空迎撃を中止し、トマホークを発射する」

リー少佐の驚いたような声が聞こえた。

『中佐！無茶です！空はまだ安全からはほど遠いんですよ！』

「このまま撃ち続けてもこちらの方が早く弾が尽きる。早めに動いたほうがいいんだ。やれ！」

『…分かりました。私は反対したと書いといてくださいね！』

リー少佐は、まるで議会からクレームがくることを想定したような言葉を口にした。今の状態では、それがジョークなのか本気なのかはつきりしないが、そんなことは生き残れたらの話だ。

前甲板と後甲板、それぞれのVLSが停止してMk. 45の砲撃音と、CIWSの射撃音だけになった。VLSのやかましい音に慣れた耳には、あまりにも静か過ぎる。

が、それもほんの数秒だった。真横で猛烈な爆発音の後、艦体が大きく揺れて危うく倒れかけた。周りを見渡せば、何人もの乗員が倒れ負傷していた。その内1人は頭から血を流し、意識を失っているようだ。

サイラスは負傷者を運ぶように叫んだ後、すぐに操艦に戻った。

危機的な状況であるにも関わらず、彼はすっかり高揚していた。彼が求めていたのは、まさにこれだ。硝煙が鼻をつき、海に落ちた爆弾が炸裂し、巨大な水柱が立ち、投

下された魚雷を自らの操艦により回避する。

そうだ、これこそが俺の求めていたものだ！

誰にも邪魔をされない。俺の勤だけが頼りの荒々しい海戦！

それが俺の理想だ。

彼は、C I Cからの連絡を聞きながら魚雷を回避し続けた。艦体を時々何が叩くのを感じた。機銃弾でも受けているのだろう。現に、その度に負傷者の報告が艦橋に上がってくる。

サイラスにも苦々しい思いが湧き出てきた。確かに、現在の状況は理想だ。しかし、彼は彼の部下たちが倒れていくのを見たくはなかった。理想が実現した時によりやく気付くのだ。それが理想のままであつた方が良かったりするところを。

今では、彼の高揚感はずっかり失われていた。

サイラスはトマホークの発射用意が整うのをひたすら待ち続けた。

そして、その時はついに来た。

『C I Cより艦橋へ！トマホーク、いつでも撃てます！』

彼は迷うことなく言った。

「発射しろ」

『了解！トマホーク、発射！』

後部甲板のVLSが開放され、6基のBGM-109 タクティカル・トマホークが順番に発射された。

垂直上昇した6基の巡航ミサイルは、一定高度に到達するとマツキャンベルの艦橋の真上を水平に飛んでいく。

サイラスはこの光景に満足した。

俺の艦、お前たちの艦隊。

お前たちの負けだ、『深海棲艦』。

俺たちは、この海域とあの島を取り替えず。貴様らはそれを防げない。

そしていずれ、世界の海を平穏へと導いてやる。

マツキャンベルの上空に、被弾した『深海棲艦』の爆撃機が飛行していた。今はもうどうか飛行している状態で、もはや帰投は考えていなかった。まだ、爆弾を搭載したままだ。せめて、これを投下せねば死んでも死に切れない。

しかし、爆弾は投下できなかつた。どうやら、故障を起こしたようだ。

仕方ない。斯くなる上は…。

この身を以て、敵に一矢報いてやる。

損傷した『深海棲艦』爆撃機は、腹に爆弾を抱えたまま、マツキャンベルの艦橋目指して急降下した。

「敵機直上、急降下！」

その声に、サイラスは我に返った。すぐ真上で何か落ちてくるような音が聞こえた。

彼はとつさに悟った。逃げきれない、と。

生存本能は逃げると叫んでいたが、もうどう足掻いても逃げ切れまいだろう。ならば、やるべきことは一つ。

彼は舵を握ると、大きく右にぶん回した。

敵機の直撃を受けても最低限の被害になるように、彼は操艦したのだ。

そしてそれが、彼の最後の仕事になった。

艦橋に被弾した『深海棲艦』の爆撃機が突っ込み、猛烈は爆発を起こした。艦橋は一瞬で火の海と化した。操艦に必要なシステムは最後の動きにより破壊を免れた。

大多数の乗員はなんとか逃げられたが、5人の乗員がこの爆発で死亡した。

その中に、マツキャンベル艦長のホワイト・サイラス中佐も含まれていた。ケイト・リー少佐は、すぐ真上で響いた爆発と衝撃を感じ取った。

やられた。

彼女が一番最初に頭に浮かべた言葉は、この一言だった。その後すぐに、もつと重要な問題が頭に浮かんだ。

被害状況、戦闘システムの状態、艦の操舵、レーダーの損傷、死傷者の有無、そして……。

サイラス艦長の安否。

彼女はすぐに動いた。

「CICから、全部署へ！被害状況を知らせ！」

『こちら機関室。衝撃で2人負傷したが問題ない。機関もピンピンしてますよ！』

『こちら艦橋。被害甚大！5人が逃げ遅れた模様。火災が治らないでいる！早くなんとかしてくれ！』

「落ち着きなさい！あなたの名前は？」

『…ボブ・ターナー軍曹であります』

「よろしい。では、軍曹。冷静に対処しなさい。こんな時のために訓練を行ってきたのしょう？そちらにダメコン班をすでに送っています。彼らと共に協力して消化作業に専念しなさい。」

消化し終わったら速やかに損害を知らせること。特に、舵がまだ効くかを早急に知らせなさい。いいですね？」

『Yes, ma'am』

彼女は艦橋との会話を終了し、他の問題に着手した。

イージスシステムの要と言えるSPY—IDフェーズド・アレイレーダー4基の内、2基が機能を停止していたが、幸運にも他の2基は無事に機能していた。また、火器管制レーダーも損傷免れたらしくまだ機能している。LINK16もまだ繋がったままで、失った分の情報をヴェラ・ガルフや上空のF—35、AWACSから得ていた。損害は大きかったが、マツキヤンベルはまだ戦える。

後は、動かさせさえすれば…。

『こちら艦橋。鎮火成功！操艦も可能です！』

リーはすぐに返答した。

『こちらCIC、了解。艦長の安否は？』

『…艦長は…、残念ながら逃げきれませんでした…』

艦内インカムを通しての会話だったため、この事実は艦内の乗員全員に伝わってしまった。

リーは、世界から色が薄れていくのを感じた。

サイラス艦長が死んだ。

彼は、この艦の乗員全員の父親のような存在だった。厳しく、近付き難い人物だったが、常な部下のことを気にかけ、迷った時には的確なアドバイスを与える指揮官の鑑とも言うべき男。

そんな人物が、死んだのだ。

彼女は迷った。

もしかしたら、戦闘を中断し後方に下がる方がいいかも知れない。『深海棲艦』も、被害が大きかったのか攻撃を加えてこないでいる。

一度、仕切り直した方が…。

…いや。このまま続けよう。彼ならばそうしたはずだ。敵は攻撃を中断し、引き上げている。これはチャンスなのだ。

今もまだ、トマホークは飛び続けている。

これは、サイラス艦長が最後に放った武器だ。これが着弾、もしくは迎撃されるのを見届けるのが、あの男から指揮を引き継いだ者の務めだ。

リーはインカムに彼女の言葉を吹き込む。

「全乗員へ、こちらはケイト・リー少佐だ。諸君らも聞いての通り、ホワイト・サイラス中佐は亡くなった。

戦死されたサイラス中佐に替わり、副長である私が本艦の指揮を引き継ぐ。最先任である私の指揮に従ってほしい。

私の最初の命令を伝える。

本艦は戦闘を続行する。これまで同様、冷静な行動を期待する。以上」

彼女はそこまで言うと、ひと息ついてからよく響く声で言った。

「針路転針、方位1—4—0へ」

『針路1—4—0、アイ』

中破したマツキキャンベルは、新たな指揮官のもとゆつくりと左へと転舵した。

ヴェラは、マツキキャンベルに起こった事態を全て見ていた。損傷した爆撃機が、爆弾を抱えたままCIWSの弾幕を突破して艦橋に直撃したのだ。

あの調子では最早戦闘を継続するのは不可能だろう。トマホークの誘導をこちら側に回すべきかもしれない…。

…いや、様子が妙だ。先ほどまで戦域から離脱するような動きを見せていたが、今は…回頭している？

まだ、戦うつもりか？あの損傷で？

あり得ない。一体どこにそんな力が…。

ふと、思い出した。

衝突直前に、マツキキャンベルはほんの少し回頭していた。あの瞬間に、あの艦を動かしていた者がいたのだ。

普通ならば逃げるだろう。例えば間に合わないとしても、普通は生存本能に身を任せて逃げだしたはずだ。

だか、最後のあの瞬間、艦橋にいた少なくとも1人の人間は、自らの命より艦の被害を出来るだけ少なくしようとする者がいたのだ。

命を賭してまで、その人間はこの戦いに勝つことを望んだ。

誰かは分からないが、ヴェエラはそこから執念を感じた。自分にはとてもそんなことは出来ない。

『やまと』と戦いの時は、自分の意志を持ち合わせていなかった。ヴェエラ・ガルフという艦にとつての意志は、テレンス・B・カーバーという人間の意志に他ならなかった。きつと、あの時自分が艦娘であつたならば、あの様な命を賭けた攻撃をすることはなかつただろう。

マツキャンベルから連絡が来た。サイラス中佐の声ではなく、女性の声だった。

ヴェエラは、あの時艦を動かしていた人物が誰であつたか悟り、その人物がどうなつたかも悟つた。

彼女はサイラス中佐の冥福を祈っていた。

『マツキャンベルより、ヴェエラ・ガルフへ。私は、マツキャンベル副長ケイト・リー少佐です。戦死したサイラス中佐に替わり現在指揮を担当しています。』

早速ですが、協力して欲しいことがあります。もちろん、私にはあなたへの指揮権が無いことは承知しています。ですが、それを知つての上で協力して欲しいのです』

ヴェラは思考を中止し、返答した。

「こちらヴェラ・ガルフ。マツキキャンベル、可能な限り協力します。何をすればいいですか?」

『ありがとうございます。感謝します。…あなたにハーブーンを発射して貰いたいのです』

「それはまた何故…」

『そちらも把握していると思いますが、先ほどの攻撃時にトマホークが1基、撃墜されています。』

そのことから、現在飛翔中のトマホークも迎撃されるおそれがあります。

詳しいことは言えませんが、本艦のシミュレーションではこの6発のトマホークが全て命中しないと、今後の作戦展開に多大な影響を与えると出ました』

そのシミュレーションはおそらく正しいだろう。ヴェラの戦術データ・システムのシミュレーターも、似たような結論を出している。もつとも、彼女のシミュレーターは、全弾命中しても厳しいという結果が出ていたが。

『そこで、少し言いにくいのですが、あなたのハーブーンを囮にして貰いたいのです』
なるほど。今からすぐに撃てば、こちらが敵に近い位置にいる分ハーブーンのほうが先に捕捉される。

それを落すことに敵を集中させ、本命のトマホークが撃墜されることを避けるということか。

現代艦ならば、突き崩すことも可能だが、第二次大戦時の艦艇を模している『深海棲艦』ならば、十分に有効な戦術と言えるだろう。

「分かりました。少し待ってください」

ヴェラはそれだけ答えると、出来るだけ重要度が高く対空射撃による援護が受けやすい敵艦を見つけ、それを目標として定めた。

彼女は、脛の辺りにあるMk. 141からハーブーンを発射した。ハーブーンは振れた白煙を引きながら飛翔し、大気を切り裂きつつ敵艦隊へと向かっていく。

「こちらヴェラ・ガルフ。発射しました」

『協力に感謝します』

マツキャンベルからの通信は、それで終了した。

ヴェラの頭のディスプレイ上に、ハーブーンのアイコンが表示される。ゆっくりとディスプレイ上を移動するハーブーンは、順調に『深海棲艦』艦隊に突き進む。画面上ではノロノロ進んでいるように見えるが、実際には時速約860キロというスピードで海面すれすれを轟進しているのだ。

一方のトマホークは、約880キロのスピードで飛翔しているが距離があるためまだ

到着しそうにない。

想定通りに行きそうだった。問題は、『深海棲艦』がこちらの予想通りに行動してくれるかだ。

ハーブーンが目視距離に到達した。『深海』側もハーブーンの存在に気付き、死に物狂いの猛烈な弾幕を展開した。敵も、これ以上の被害を避けたいのは明白だ。

低空を飛ぶハーブーンは猛烈な鉄の暴風の中を突き抜けていく。鉛玉が海面を撃ち小さな水柱が周りにいくつも立ち、炸裂した砲弾の破片がハーブーンの塗料に傷を付け続ける。

黒煙の中を征くその姿は、巨鯨を討つ銚そのものだ。

が、その雄姿もそう長くは続かなかった。

ハーブーンの後方で炸裂した砲弾の破片が誘導翼に命中した。ハーブーンは大きく体勢を崩し、海面にぶつかり力ない水柱を上げた。

もう1基のハーブーンは、目標艦であるヲ級フラッグシップ改の空母とは思えない回避機動に紛わされて、ちょうど近くにいた重巡ネ級を目標にして突っ込んだ。哀れなネ級は回避しようとしたが、無駄だった。

ヴェラのハーブーンは、ネ級1隻を大破させるに止まったが十分だった。

ハーブーンは所詮、前座に過ぎないのだ。

『深海棲艦』が、真打ちの到着に気付いたのは、明らかに迎撃困難な状態にまで接近した時になってからだった。

マツキャンベルのCICは沈黙で覆い尽くされていた。全員が息を殺して、トマホークの行く末を見守っている。

まるで、黙っていればトマホークが撃墜されず命中すると思っているようだった。もちろん、そんなお祈りが通用するとは思えない。

すでに、事態はマツキャンベルの乗員たちの手を離れ、トマホークの弾頭部の誘導システムと、『深海棲艦』の迎撃能力の高さに委ねられていた。

その一方で、リーは全て命中するように思えて仕方がなかった。なんの根拠もないが、まるで未来が見えているように冷静に着弾を待てた。

ディスプレイ上を行くトマホークのアイコンが、敵艦隊のすぐ近くにまで到達した後、ほんの数秒で決着が着く。

ここに来て、時間の経つスピードがいじらしいほどに遅く感じられた。全員の目が、ディスプレイに集中する。

ゆっくり、ゆっくりとアイコンが進み、敵を表す光点と重なった。光点は1度明滅すると、光を失い、徐々に消滅した。その数3個。

しばしの沈黙。

その後、C I C内は歓声に包まれた。隣同士で肩を叩き合い、抱擁を交わしている者もいる。

リーも同じ思いだったが、浮かれている乗員たちに言った。

「諸君！見事な働きだった。が、まだ戦闘は続いている。敵増援部隊の主力群を撃破したはずだが、敵が撤退した訳ではない。

引き続き、敵艦隊の状況に注意するように」

『Yes, ma, am!』

乗員たちは再び顔を引き締めて自分の仕事場に戻り始めた。

見事だ、とリーは思った。

艦長が戦死し、副長が臨時に艦を指揮しているにもかかわらず、乗員たちは冷静そのものだった。

さすがはサイラス中佐だ。ここまで、乗員たちをまとめられる者はそう多くはいないはずだ。

リーは、サイラスにこの光景を見せれなかったことを悔やんだ。もっと早く見せることもできただろうに。

いや、むしろ私が見ていなかっただけで、実際にはこの素晴らしい光景は普段から見えていたのかもしれない。

見る場所が違えば、見えるものもまた違ってくるのだろうか。

「副長、敵艦隊に動きあり。進路を180度変針、海域より離脱して行きます！」
乗員たちの顔が明るくなる。これが、意味するところを分かっているからだ。つまり
…。

「敵増援部隊の到着阻止に成功しました。我々の勝利です！」

そう、勝利したのだ。

多大なる犠牲を払ったが、作戦全体を危機に陥れようとした脅威を排除することに成功したのだ。

「最悪の事態は回避できなようね…」

リーはそう言いつつ考えた。これ以上の戦闘を行えるだろうか。

彼女の答えは、他のところから現れた。

『マツキキャンベル、こちらヴェラ・ガルフ。敵艦隊の撤退を確認しました。上空に残っていた航空機は、タイラント飛行隊と合同で殲滅済みですのでご安心ください。』

後は、我々に任せて後方に下がってください。以上』

その後すぐに、データ・リンクが解除された。

ずいぶんと素っ気ない言葉だが、はつきり言って足手まといなのは分かっていた。

ここは下がる方がいいだろう。

「CICより、全部署へ。本艦はこれより後方へ下がる。皆よく頑張ってくれた。自分たちの成し遂げたことに誇りを持って、少し早い凱旋と行こう。

進路変更、目標。ハラオ泊地」

マツキャンベルの『レッド・ステイングレー』は、こうして幕を閉じたのだった。

デイルは兵装を確認した。期間砲弾が、僅かに残っているだけだった。もはや、現在の状態では足手まといでしかない。

他のタイラント隊も似たような状態だ。1度帰投しよう。

デイルは、友軍に告げるとコニーの元へ戻り始めた。

今回の作戦で、彼と彼の編隊は多大な戦果を挙げた。少し早すぎるが、十分に仕事を果たしたのではないだろうか？

彼は今回はこれで満足することにした。

ヴェラは最大戦速で味方の元へ戻っていた。すでに、瑞鳳と約束した20分を大幅に過ぎていた。

攻撃はもう始まっているだろう。

彼女は不安を感じていた。自分の言った警告は聞き入れられているだろうか…。

彼女は、速度をさらに上げた。

まだ彼女の『レッド・ステイングレー』は、終わっていないのだ。

第17話 『Red Stingray』Rising

Final Phase I

サイパン島。

その島は、パラオと似たような歴史を辿っている。

サイパン島の歴史は、15世紀にマリアナ諸島がスペイン人に発見されたことから始まる。その後、3世紀に渡り占領されていたが、米西戦争によりスペインはこの島をドイツに売却した。

ドイツはこの島を流刑島として運用し、第一次大戦終結後、この島を手に入れたのは当時連合軍側についていた日本だった。

日本はサイパン島の名称を、彩帆島と変更し、砂糖の産地として活用することになる。この島が『深海棲艦』に奪われる前の主は、言うまでもなくアメリカ合衆国である。

1944年6月～7月にかけて行われたサイパン島の戦いにより、アメリカが手に入れたサイパン島は、終戦後の1947年にアメリカの信任統治領となった後、1981年の自治領としてアメリカに留まることを決め、2009年の連邦化へと至る。

『深海棲艦』に占領されたのは、それから4年後の2013年のことで、それ以降の4

年間人類が踏み入ることのできない地となっていた。

そして今、世界で一番平均気温の変わらないことでギネス世界記録に認定されているこの常夏の島は、再び人類の手に戻すための戦闘が繰り広げられていた。

『レッド・ステイングレー』作戦艦隊の水雷戦隊に参加していた吹雪は、自前の10センチ連装高角砲を発砲していた。

艦娘になつてずいぶんと時が経っていたが、これほど大規模な戦闘は初めてだった。

敵が7分に海が3分と言う訳ではないが、それに近い量の敵が辺り一面にいた。適当に撃つても何かしらの敵に当たるのではと思えるほどだ。

吹雪がたつた今撃破したのは、駆逐艦口級後期型。口級の上位強化型で、危険性は上がっているが、もはや気にする価値もなくなっている。

水雷戦隊がここまで来るのには、あらゆる協力が必要だった。

まず、後方で待機している、打撃部隊からの砲爆撃で敵の気を引く。電探射撃によるアウトレンジ攻撃による反撃の可能性もあったが、第389戦闘飛行隊によるHARM攻撃で敵のレーダーを破壊したため、電探射撃の餌食になることもない。

空からの攻撃は、空母コンステレーションのタイラント飛行隊と、空軍の第390戦闘飛行隊『ワイルド・ボワーズ』ことティラミス隊が、攻撃前に叩き落として援護した。

その強力な援護のおかげで、戦艦の主砲が用をなさない接近戦に持ち込んだのだ。

それはまさに地獄の様相を呈した。

砲撃により温水となつて海水が、ほとんど休みなく体を打ち付け、その見にくくなつた海面下の魚雷をギリギリの差で回避する。

辺り一面、硝煙の鼻をつくツンとした臭いと砲煙に覆われ、誰が損傷し、誰が何を撃破したかすら把握できない制御など到底不可能な、阿鼻叫喚の戦場だった。

吹雪も、今や味方からはぐれかけていた。ほんの少し目を離しただけで、目の前から忽然と味方がいなくなり、敵を倒して再び視線を戻すと、味方が予定の位置にいる。そんな、何が何だか分からない戦闘が、かれこれ1時間近くは続いている。

不休で戦い続けた体はすでに悲鳴を上げだしている。主砲を持ち上げる腕は力が徐々になくなり、常に動かしている足は今では棒のようだ。

いくら人間よりも体力がある艦娘とは言え、こんな混戦を続けていれば体力の限界にもなる。

体力の減少は、本来の力が出すことができなくなつたり、注意を散漫にさせたりする。つまり、戦場における破局へと至ることになる。

言うまでもなく、破局とは『死』だ。

ふと、視界が開けた。

が、開けているのは今いるここくらいのものだ。

至る所で黒煙が上がり、断末魔の悲鳴のように赤々とした炎が吹き上がる。そして、彼女の目の前には……。

手負いのル級。それもフラッグシップ。こちらを睨みつけている。その眼差しは憎悪に溢れ、その視線だけで人を殺せそうだ。

吹雪は動けなくなった。これまでに感じたことのない恐怖が、彼女の体を完全に硬直させてしまった。

マズイ、と思った矢先に、ル級が雄叫びを上げてこちらに16インチ3連装砲を向けた。この距離で撃とうとするとは、正気の沙汰ではない。

本来、戦艦の主砲は長距離の敵を粉砕するための兵器であって、近距離の敵を撃つためのものではない。こんな近距離では、誤射すらもあり得る。特に今回のような乱戦では、誤射が当たり前のように起きる。それを避けるためにも、馬鹿でかい砲は撃つべきではない。

が、傷付き、気の立っているル級は野生動物よろしく、冷静さを保てずに生存本能に任せてぶっ放そうとしている。

吹雪はその狂気じみた砲撃の餌食になろうとしているのだ。

顔から血が引け、恐怖に震える。

死にたくない。こんなところで終われない。吹雪は動いた。撃たれる前に撃つてや

る。

が、その動きは余りにも遅かった。ル級は勝利の咆哮と共に照準を合わせ、吹雪に向けた。

無理だ、間に合わない。

吹雪は目を閉じた。

ル級が砲撃しようとした瞬間、一陣の風が真上を通過したように感じた。その時、目の前でル級が突然爆ぜた。

爆発音に紛れて、別の轟音が響き渡った。

上を見上げると、鋭角な機首を持つ大型の双発ジェット機が飛び抜けていった。

すぐに耳元の無線に連絡が入る。

『へい、お嬢ちゃん！ボサツと突っ立つてないで動き回れ！ビビつてると敵に隙を突かれるぞ』

声の主は誰か分からないが、助けてくれた相手であることは分かった。

吹雪は慌てて、感謝を口にした。

「あ、ありがとうございます！助かりました」

『返事の大きさだけは一丁前だな。あんたは俺らの希望なんだ。勝手に死んでもらっちゃあ困るぜ』

その声とは別の声が聞こえた。

『ロッキー！喋ってる暇があったら仕事をしろ！つたく、隙さえ見つければすぐこれだ』
『分かりましたよ隊長！じゃあな、お嬢ちゃん。陸で会おうぜ』

無線はそうして切れた。

吹雪はそのやり取りを笑いそうになりながら聞いていた。緊張が溶けていく。

再び体を動かす決意を固めた。恐怖はもう、心の奥深くに押し込まれていた。

そして、先ほどロッキーというパイロットから言われた言葉を反芻した。俺たちの希望。勝手に死なれては困る。

反撃の狼煙が上がった今、もう自分だけの命ではないのだ。それが、改めて吹雪に突きつけられた。

それなら、私はその使命を果たそう。それが、私という艦娘ができる最大のことならば。

彼女の妹の白雪が、こちらに手を振っている。

吹雪は妹の元へ、急いで駆けて行った。

扶桑は、自身が唯一自慢できる35・6センチ連装砲で砲撃をしていた。もつとも、その砲撃のほとんどが命中していなかったが。

それは、彼女自身も分かっていた。今回の目的は、あくまで砲撃支援による敵の攪乱

なのだ。

砲弾のスコールを浴びせることで、敵の反撃を抑えることを目的としていた。

ついでに、瑞鳳も航空機による爆撃支援を行っていた。

作戦は成功しかけている。敵からの反撃はほとんどなく、近距離で交戦している水雷戦隊の報告では、敵の半数を撃沈したとのことだった。

もちろん、損害が無いわけではない。

天龍と弥生、初雪がそれぞれ大破し友軍機の支援の元、撤収していた。天龍は戦わせろとギヤーギヤー喚いて下げるのに苦労したらしいが、なんとか説き伏せたらしい。

扶桑はその光景をぼんやりとしか見ていなかった。

彼女が考えていたことは、どうしたら自慢の火力を上手く敵にぶつけられるか、だった。

主砲の配置は、艦娘になってからは関係なくなっていた。むしろ、腕の問題なのかもしれない。

しかし、長く砲撃を続けてきたが、どうしても上手くいかなかった。どれだけ正確な射撃を心がけても、何故か外れてしまう。

ああ、この不幸はどこまで私を追いかけ続けるのだろうか？

こういう時、妹の山城はこう言った。

『不幸だわ』、と。

艦娘になっても、不幸型は所詮不幸型なのだほとんど諦めかけていた。

そんな彼女たちを、慕ってくれる艦娘もいる。

吹雪は、その1人だ。

時々、扶桑と山城にアドバイスを求めにきていた。そんな時は、いつも楽しく過ごせていた。

不運や欠陥など関係なしに、これまで経験した戦闘を覚えていくかぎり細かく伝えた。

伝えることは非常に重要だ。たとえそれが、不幸艦の経験談でも。結局はこの経験で聞いた相手はその意味をしっかりと受け取るか取らないかによるのだ。

彼女たちの経験談は、吹雪に大きな影響を与えた。

江田提督との付き合いは長くても、戦闘センスがいいという訳ではなかった吹雪は、今ではすっかりプロフェッショナルの顔をするようになっていた。

そんな彼女の成長を、扶桑は微笑ましく見ていた。昔は、自分もそうだったからだ。

最初は誰でも上手くはいかない。扶桑も、海に立つことが恐ろしかったが、慣れてしまえば呼吸するのと同じように簡単に歩くこともできた。

その一方で、と彼女は考えた。

あのアメリカ艦娘、ヴェラ・ガルフはそうではなかった。

最初からなんの問題もなく平然と海に立ち、初めての出撃で多大な戦果を挙げた。

扶桑はそこに、コンプレックスを抱いていた。

どんなに練習し、どれだけ努力しても当たらない砲撃を、ヴェラ・ガルフはいとも容易く当てていく。

扶桑は、なぜそんなことが出来るのか聞いてみたことがある。

すると、ヴェラはこんな返答をした。

『私の能力ではないですよ』

その謙虚な答えは、ヴェラなりの配慮だったのかも知れないが、残念ながら逆効果だった。

これ以降、扶桑はヴェラに消極的ながら敵意を持つようになった。

さらに悪いことに、吹雪がヴェラとよく話すようになってしまった。それから敵意はより大きいものになっていった。

自分でも、ただの『嫉妬心』であることは分かっていたが、それを正すことはしなかった。

それには、もしかしたらヴェラがアメリカの艦である、ということが少なからず影響していたかもしれない。

負の感情はそれから膨れ上がり続け、その感情の不安定さのために砲撃はさらに外れやすくなる。そこから、さらに負の感情は大きくなり…。

「…姉様、扶桑姉様！」

扶桑は妹からの呼びかけで物思いから抜け出した。山城は、姉のことを心配そうに見つめながら言った。

「どうしました姉様？どこか悪い所でもあるのならすぐに知らせますが…」

「大丈夫よ山城。ごめんなさい、少し考えごとをしていたわ」

「それならいいのですが…」

山城は、まだ不安そうにしているので、扶桑は自分が大丈夫であることを知らせるために砲撃を再開した。

いけない。戦場であんなことを考えるなんて。

扶桑は自分を咎めつつ、砲撃に再び集中した。

しかし、心の奥底ではドロドロとした黒い感情が煮え滾っているままだった。

イ級後期型エリートは死に物狂いだった。

重巡を一撃で大破させることもできる彼女（？）だが、最早その能力を発揮する機会は失われていた。

自身も中破し、兵装が一つとして使えないイ級に戦うことなどできず、ただ逃げ回る

だけに終始していたが、それももう限界が来ている。

あれだけいた味方はほとんどおらず、サイパン・テニアン守備部隊のかつての威容は見る影もない。

また味方が沈んだ。

大口径の砲弾で、水飛沫が収まった後には影も形もなくなっていた。

自分ももうすぐ同じようになるかも知れない。

その恐怖だけで、気も狂いそうになるがそれ以外にもすぐ近くから魚雷をぶつ放してくる艦娘と、空を我が物顔で飛ぶ鋭角な戦闘爆撃機、時々飛んでくるところにいるかも分からない洋上艦から発射される正確無比なロケット弾の恐怖のせいで、イ級はまともな判断ができない状態になりつつあった。

そして、至近弾を受けた瞬間、最後まで残っていた理性が失われ、イ級は後先考えずに湾の出口に向かった。

まだ機関は動く。最大戦速で湾外に出て、敵艦隊を突つ切り安全な場所へ逃げる。そこから、味方の元に戻り修理をした後、再び戦場に戻り敵と戦う。

不可能だとは思わなかった。不可能だと考える頭の冷静な部分などずいぶんと前に無くしていたのだ。

ラオラオベイの出口に近づき、もうすぐ出られると思った瞬間、何かが足にぶつかっ

た。

金属のような鈍い音がしたその時、敵機が機雷をばら撒いていたことを思い出した。戦闘は終わりつつあった。

ヴェラが打撃部隊に戻った頃には、湾内で動いている敵は数えるほどしかいなかった。た。

突然、湾の入り口付近で巨大な水柱が上がった。『深海棲艦』の残存艦艇が湾外に脱出しようとして、ガンファイターズが敷設した機雷の餌食になったのだ。

大きな出来事はそこで終わった。

砲声、爆音、また砲声が5分ほど続いたのちに遠雷のような砲撃音は唐突に止んだ。

やがて、無線が全ての部隊に簡潔な音声を届けた。

『こちら水雷戦隊。湾内の敵部隊の掃討に成功。損傷は大きいですが、撃沈艦は無しだクマ』
戦場にホツとした空気が流れた。

困難だと思われた作戦は、人類の勝利で終わりを迎えたのだ。

後方で支援攻撃を行っていた第3艦隊の旗艦コンステレーションのジャック・ウォード提督が返答した。

『ご苦労だった。支援部隊が到着するまでの間、海域の確保を頼む。あと少しで終わるだ。もう少しの間頑張ってくれ』

『了解したクマ…、クソツ、なんだクマ!』

突然、無線の向こう側が慌ただしくなった。ウォード提督が、焦燥をあらわにして言った。

『なんだ! 状況を知らせてくれ』

『敵空母が1隻出てきたクマ! 陸に上がって隠れてたんだクマ。…艦載機を飛ばして、突っ込んでくる! 特攻でもする気かクマ?』

ヴェラはいてもたってもいられなくなつて無線の会話に勝手に入り込んだ。

『球磨さん! 冷静に回避行動を取ってください。空母は私がやります』

『そうしてくれるとありがたいクマ。すぐに攻撃を…』

無線が突然、猛烈なノイズによつて完全に聞こえなくなった。これが何であるかは明らかだ。

ヴェラは舌打ちしつつ、不安そうな艦娘たちに言った。

『ECM (電子対抗手段) です』

空母コニーの指揮所でも、この突如として発生した電波妨害及びジャミングの対処に、てんでこ舞いだつた。

ECM (対電子妨害対抗手段) を起動したり、使用可能な周波数帯を探し回つた。

今の所、その努力は全て無駄に終わつていた。

あまりにも強力なECMを破る術はなかった。

それが意味する所は至極簡単で、最新の兵器システムで固めた第3艦隊の乗員たちは敗北感に包まれていた。

第3艦隊の支援能力は完全に失われ、第3艦隊という兵器システム群は戦闘不能に陥った。

球磨は、自分がしくじったことに苛立ちを覚えた。彼女は完全に敵を甘く見ていたのだ。それと同時に、固定観念があった。

普通は空母が陸に上がって隠れているとは思わない。だが、それはあくまで艦艇の場合であって、艦娘とほとんど変わらない『深海棲艦』が陸に上がらな訳がない。

なぜなら、艦娘たちも状況次第なら陸に上がり隠れるように教育されているからだ。敵機からの空爆を避けつつ、彼女はヴェラが言っていたことを思い出した。

『決して敵を見くびらないでください。特に、勝利を確信した時は。牙を抜かれた敵ほど怖いものはありませんから』

球磨はそのことを理解していなかったことが証明されてしまった。

旗艦として失格だと彼女は苦い思いを噛みしめたが、とにかく今は部下たちを生還させることが最優先だった。

と、言ってもやれることがあるとすれば、支援攻撃が敵に当たるまで生き長らえるた

め、逃げまくるようを指示するくらいしかできなかったが。

ヴェエラは敵の接近に気付かなかった自分に腹を立て、自分が味方に何もしてやれないことに苛立ちを覚えた。

『盾』などと言っておいて、味方の支援一つできないなどブラックジョークでも笑えない。

だが、腹を立てても意味はない。どのみち、自分にできることは何も無い。

今は、すぐ隣にいる扶桑に賭けるしかなかった。

扶桑は再び自分の運の無さを呪っていた。

このジャミング下でまともに戦えるのは、電子兵器をほとんど装備していない艦娘くらいのものだ。

航空機を今から出してもいつまで保つか分からない水雷戦隊の援護が間に合うか分からないし、重巡たちの砲撃では空母の装甲を破れない可能性があったし、何より即効性に欠ける。

残っているのは戦艦による砲撃だった。

この場合、扶桑と山城の2人による砲撃になるはずだったが、山城は砲弾が尽きていたのだ。

扶桑しか残されていなかった。

彼女は、砲撃の用意を始めた。幸いにも、敵は目視圏内にいるので精密性に欠ける電探射撃ではなく、自身の腕による射撃になる。

敵艦の動きを予想し、仰角と砲の角度を変える。

用意が整った。

彼女は第一砲塔を発砲した。

砲弾は綺麗な弾道を描き、敵空母に向かう。

十数秒後、海面に2つの巨大な水柱が上がった。見た目の派手さだけ見れば、満点だったろうが重要なことはそれではない。

扶桑は着弾地点をジッと見つめた。

ヲ級は、無傷で海に戻りつつある水飛沫の間から飛び出した。

扶桑は再び砲撃の準備をし、発砲した。

36. 5センチの鉛玉は空を飛翔し、指定された場所に落下していき、海面へと落ちた後爆発した。

その砲弾も、ヲ級を傷付けることはなかった。

扶桑は再び自分の不運さを呪い、ヴェラが撃てば当たっていたかどうかと考えた。

レーダーさえ機能していれば、ヴェラは扶桑と違って容易にヲ級を撃ち抜いただろう。

彼女は、心の底から湧き上がる苛立ちを抑えることをしなかった。傍目から見ても、彼女が冷静さを欠き始めたことが分かるだろうが、知ったことではない。

彼女は砲撃を繰り返しては失敗した。怒りと苛立ちが募ると同時に、悲しみも込み上げてきた。

何故できないのか？ 私はこんなこともできないほど役に立たない穀潰しなのだろうか？

ふと、パラオに送られてくる前にいた本土の基地で言われた――正確には、そう言われたことを影で聞いた――ことを思い出した。

『簡単な任務もこなせない役立たずが。あいつは艦娘である価値はない』

彼らの言うように、私には価値はないのだろうか？ 後輩を守ることもできない私には…。

彼女は砲撃を止めた。

体から力が抜けたようだった。今はもう何もしたくない。味方の援護やら、作戦の成否やら、ましてや人類の未来など今の扶桑にはどうでもよかった。

今はただ、現実から逃げ出し、何もせず時間が過ぎることを期待した。そうすれば、穏やかに時間が進み再び自分の不運に躍らされない日常に戻れるとも思っているように。

実際に、その時の彼女はその幻想に縋っていた。

だが、それもすぐに打ち切られた。

「扶桑さん？どうしたんですか？」

ヴェラ・ガルフだ。

また、私の邪魔をする気なのか。

「…私に構わないで」

「そういう訳にも行きません。こうしている間にも、味方は危機的状況にあるんですよ」

「…だから何」

言っではいけない言葉が出て来てしまった。ヴェラが絶句しているのが分かるが、今更後には引けない。

「どうしたんですか、扶桑さん？あそこにはあなたが可愛がってきた後輩がいるじゃないですか！あなたは見殺しにするんですか？」

「私には出来ないのよ！」

扶桑は吠えた。

抑え付けてきた感情が一気に解放される。それを再び抑えることなど、彼女にはできなかつた。

「私はあなたが嫌いなのよ。なんでも卒なくこなすあなたがね」

「そんな…私はただ…」

「あなたには分からないでしょうね。どれだけ磨こうと一向に上手くならない者の気持ちなんて。」

あなたは簡単よ。ただ、砲撃するように念じればいいだけ。そうすれば、プログラムが自動的に諸元を入力して弾を装填する。ただそれだけ。

あなたは、私たちとは根本的に違う。

私たちが人間に近いなら、あなたは機械。ただ敵を倒すためのプログラムに過ぎない。

敵を倒すことになんの葛藤も感じないマシン。

そんなあなたに、私の何がわかるの！」

「今、そのことは関係ありません。私を罵りたいなら後でいくらでも聞きます。だから今は、味方を助ける事に集中してください！」

ヴェエラの言葉はほとんど懇願に近い響きを持っていたが、扶桑は怒りを吐き出し続けた。

「だから、私には出来ないのよ！何度撃つても当たらない！いくら訓練しようが関係なくね。」

それなのに、あなたはそれを簡単にやってのける。

私は聞いた。あなたは何故あんなに砲撃が当たるのか。

その時あなたはなんて言いました？

『私の能力ではありませんよ』？

あなたに能力がないのなら、私はどうなの？

速力もない。防御もない。能力もない。運もない。唯一の自慢すらも満足に活用できない私は？

そんな艦娘に価値などあるの？

答えてみなさいよ！その優秀な戦術データ・システムとやらならこの問題にも答えられるでしょう？」

最後の方の言葉は涙声になりほとんど聞き取れなかったが、扶桑が何に苦悩しているか、ヴェラには痛いほど分かった。

前の基地で言われた言葉がトラウマになってきているのだ。前の上官に、面と向かってではないにせよ、『お前に価値はない』と言われたのだから。

そこで、ヴェラは自分とこの艦娘が同じ悩みを抱えていることを知った。

自分という存在に価値があるのかどうか。

この問い自体は非常にシンプルだ。だが、あるパイロットの言葉を借りれば、『シンプルなこととは常に難しい』のだ。

だからこそ迷うし、苦悩する。

この問いの答えは人生そのものだ。臨終の時に、その答えは分かるだろう。

だから、この問いに答えることはできない。何故なら、この問いに答えるのは他人ではなく、己自身なのだから。

しかし、少しは手助けしてもいいだろう。

ヴェエラは扶桑に言った。

「私の戦術データ・システムはそういう問いに対する返答を持ち合わせていません。ですが……」

ヴェエラは一息入れて、扶桑の目を見つつ言った。

「あなたの後輩、吹雪さんは言っていましたよ。『あなたのおかげで、ここまで生き残ることが出来た。そしてこれからも、生き残っていけると思う。もし、私がマズイことに巻き込まれても、きっとあなたや仲間が助けられると信じているから』、と」

扶桑は黙ったまま、ヴェエラを見つめていた。

「あなたが思っている以上に、あなたの存在は価値があるし、あなたの存在は大きいんですよ」

これでいい。扶桑はもう迷ってなどいない。憎い相手からの言葉でも、彼女は初めて自分の存在に価値があることを聞いた。

それで十分なのだ。

扶桑は、再び前を向いた。ヴェラの言葉には何の返答も、何の反応も示さなかったが、その背中では先ほどよりも力強く感じた。

これならきつと上手くいくだろう。ヴェラの見たところ、扶桑は自分の砲撃に自信を持っていなかった。その自信のなさが、不安となり、砲の照準をわずかに狂わせていたのだ。だが、今はそうではない。

ヴェラは心の中で呟いた。

さあ、その勢いでぶつ放せ。そうすれば必ず…。

扶桑はこれまでのことが嘘であるように、冷静さで動いていた。

認めたくはないが、ヴェラから聞かされたあの言葉のおかげだろう。

その一方で、心の底の疑り深い部分が声を上げていることにも気付いていた。

もしかしたら嘘かもしれない。私を上手く扱うためのまかせかもしれない。

だが、それでもいい。

ヴェラが何を考えているにせよ、私が勇気付けられ、そしてヴェラの優しさを感じ取れたことに変わりはない。私の存在に価値が少しはあると思えた。自分に価値があると言うことは、生きるに値する世界にいるということだ。

確か、アメリカのある映画監督が言っていた。『生きていることは悪いことじゃない

と思える嘘は、悪い嘘ではない。何故ならその手の『嘘』は、『希望』と呼ばれているからだ』

そう、私は希望を持てた。

だから今、再び動いたのだ。

後輩の命を救うため、私の価値を示し続けるため。

主砲、弾種徹甲弾、装填よし。仰角よし。主砲旋回角よし。微調整…終了。全て問題無し。行ける。

扶桑は言った。

「主砲、撃てえっ！」

673キロの徹甲弾は、初速毎秒770メートルの速さで16メートル46センチの砲身内を通り、扶桑の45口径一式35.6センチ砲から撃ち出された。

その巨大な鉄と炸薬の塊は、約20キロの距離を43秒で飛翔し、落角19°で着弾地点に向かい落下した。

絶妙なタイミングでその着弾地点に入ったヲ級は、巨大な2本の水柱の間であおられた。

夾叉弾だ。

ヲ級は回避行動に集中しつつ、初弾でこれほどの近弾を撃ち込んでくる相手のことを

思った。

先ほどの掠りもしない下手くそな砲撃とは大違いだ。

まさか、同じ人物が砲撃を行っているとは、ヲ級は思ってもみなかった。

初弾が着弾してから、12本の熱せられた水柱がヲ級の周りに立ち上がるまでの間は、それほどなかった。

次の砲撃が来た時、ヲ級は艦尾付近を損傷し、航行不能に陥っていた。

更によつてきた次の砲撃は、ヲ級の体をズタズタに引き裂き青い血飛沫と、肉のような金属のような中間の物体に変えた。

『レッド・ステイングレー』における、最後の『深海棲艦』の撃沈は、こうして幕を閉じた。

5月24日

ボノム・リシャルのLCAAC-1の1号艇に乗って第31海兵遠征隊に所属するウイル・ノーレッド一等軍曹は、兵員モジュールで貧乏揺すりをしていた。

彼は恐怖を部下に見せまいとして必死で隠そうとしたが、それが上手くいつているかどうか、正直なところ分からなかった。

彼らの部隊は、『深海棲艦』に奪われた島に上陸しようとしていた。もともと、敵自体は撃破され、島はもぬけの殻だそうだが。

ボノム・リシャールの第7遠征打撃群の指揮官たちは、この上陸作戦で戦闘状態になることはないと言っていたが、それが正しいことを期待するしかなさそうだ。

もし、彼らのあの自信たっぷりな分析が間違っていたら、彼らは全滅することになるだろう。

何故なら、いくら海兵隊が精強な軍隊だとしても、歩兵がどうこうできる相手ではないからだ。彼らの5・56ミリ程度の豆鉄砲では、敵に擦り傷を負わせられるかすら疑わしい。

L C A Cの4基のハネウエルTF-40ガスタービンエンジンの発する馬鹿でかい騒音の中、1人の兵士が近付いてきた。

ノーレッドは、その兵士が 訓練学校を出たばかりのまだケツの青い新兵であると思うに見抜いた。

そいつの襟章が少尉を示すものと見て、彼は僅かに背筋を正した。

「ガニー」

そいつは言った。ノーレッドは黙ったまま、その少尉が話を続けるのを待った。

「私は君の分隊が所属する小隊の指揮をすることになったゲイツ少尉だ。分かっていると思うが私は新人だ。」

先任である君にお世話になると思うが、よろしく頼む」

ノーレットは危うく口笛を吹くところだった。ずいぶんとお上品な奴が上官になったものだ。このクソ溜めのような海兵隊には似合わない。

それに……。部下に自分の弱みを語る士官なんぞは初めて見た。

ノーレットは答えた。

「よろしく願いますよ、少尉。あんたが分からないことはなんでも聞いてほしい。分からないからと言って、適当な指示を出されて死にたくないんでね。」

まあ、今回の作戦で死人が出るようなことはないでしょうから、さほどビビらなくてもいいと思いますよ」

ゲイツ少尉が驚いた顔で言った。

「私の気持ち分かるのか？」

ノーレットはニヤニヤしながら答えた。

「今にも小便をチビらせちまいそうな顔してますから。それに、ビビってるのは誰でも同じですよ」

「君もか、ガニー」

「訓練学校じゃ、ウジ虫と言われてましたがこれでも人間なんでね。ビビったりしますよ」

ゲイツは真面目くさった顔でノーレットをしばし見つめた後、笑みを浮かべた。

「何ですか?」

「安心したよ。君のような人間味あふれる者が部下で良かった。

それじゃあ、失礼するよ」

そう言うと、ゲイツは立ち去っていった。

ノーレッドは小さく呟いた。

「全く、訳の分からねえやつだ」

モジュール内で大音響のブザーが鳴り響いた。上陸準備の時間だ。

彼は部下達の元に向かい、最後の激励を行った。

「さて、女の子ちゃんたち。もうすぐ上陸だ。マスかきしてる馬鹿野郎はすぐに止めろ。

戦闘にはならんだろうが、警戒は怠るな。

もし、くたばりやがったら貴様らのカミさん、もしくは恋人を俺が慰めるついでに

フア〇クしてやる。

それが嫌ならこのクソつまらない作戦で怪我ひとつするな。覚悟しろ!」

『Sir Yes Sir!』

ノーレッドはその返答に満足した。

「それでいい、オカマちゃんたち」

その頃には、L C A Cは速度を落としていた。

やがて、けたたましい音とともにL C A Cは大きく揺れ、サイパン島のチャラン・カノアに上陸した。

1944年6月15日に海兵隊が上陸した時、無数の鉛玉が浴びせられたが、今回の上陸は非常に静かだった。

船首タラップを駆け降りたノーレッドを待っていたのは、地獄のような戦場ではなく、白いビーチと、夏が近付きより強さを増した太陽の輝きだった。

サイパン島を奪還するには、そう時間はかからなかった。

エピローグ 不穩

5月26日

マリアナ諸島での人類の勝利は、瞬く間に世界を巡った。

新聞各紙でも、『太平洋艦隊、サイパン・テニアン両島を奪還』や、『大洋、解放の幕開け』などの耳触りの良い美辞麗句が一面を飾り、テレビ局は視聴率確保のため、特集を組む。

軍令部の執務室にいる軍令部総長の 大谷 義史 大將は、音を消したテレビをつけっぱなしにして補佐官が持ってきた大手新聞社の朝刊を読んでいた。

意思是固まっていたつもりだったが、いざその時になると現在のポストを捨てること
が恐ろしくなった。

恥を背負つてでも、この地位にいるべきかもしれない。

：いや。これは悪魔の囁きだ。

一度決めたことだ。覚悟を決めよう。

しばらく読んであと、彼は突然立ち上がり、その執務室を出て行った。

1時間後、帰ってきた彼は部屋にある数少ない私物を集め、最後にその部屋を一通り見ると、その部屋を再び出て行つた。

彼は軍服を脱ぎ、軍令部を後にした。

突然の軍令部総長の辞任に、疑問を感じないものはいなかったのに対し、彼が辞めることを止める者は1人もいなかった。

大谷は地下鉄のある駅で自宅に帰るための列車を待つていた。通勤時間は過ぎていくが、この時間帯でもまだまだ人で混み合っている。

そろそろ歳なので満員電車で立ちっぱなしはキツイが、1番前に並ぶことが出来たのももしかしたら座れるかもしれない。

アナウンスが鳴り、電車が間も無く来ることを告げた。

彼は電車が来るのを待ちながら、これからの余生をどうしようか考えた。

とりあえず、旅行に行こう。久しぶりに苦勞をかけた家族全員で。
どこがいいだろうか。

そうだ、下呂にでも行こう。ゆっくり温泉に浸かりながら、今後のことを考えるのも悪くない。

電車がホームに滑り込んできた。

と、同時に突然背後から大谷は突き飛ばされた。

彼は体勢を崩し、線路へと落ちる。

最後の瞬間に、1人の特徴のない中年男性がこちらを冷たい目で見ているのが見え
た。

大谷は、自分を押しした相手に憎悪の目を向けつつ、ブレーキをかけるも止まることのできなかつた電車に轢かれ、所轄署の職員が辟易するようなグチャグチャの轢死体となった。

5月27日

ニューヨークの某所で、十数人の男が暗い部屋に集まっていた。それはまるで、互いに顔を見られることを恐れているようにも見える。

1人の男が言った。

「それでは、第24回『リヴァイアサン会議』を開催する」

その男が言ったのち、端の方に座っていた男がおずおずと言った。

「議長、ミラー氏がいらないようですが……。どうしたんですか?」

議長と呼ばれた男が返答した。

「あの男は我々に相談せずに『コト』を起こした。さらに悪いことに、我々に通じかねない重要な証拠を残すようなお粗末な仕事をした。

そのため、我々の安全確保のために、ミラー氏には『休養』してもらおうことにした」

当たり障りのない言葉ではあるが、『コト』が殺人であることは分かっていたし、『休養』が永遠に終わらないことは容易に想像がついた。

議長に意見した男は傍目に見ても分かるほど震え上がった。

議長はその光景を愉快に思いながら言った。

「さて、それでは会議を続けようか」

ヴェラはサイパンに臨時に作られた提督執務室で座り心地の悪い椅子に座って待機していた。

数日前の威力偵察の時に誓った復讐のためだ。

と、いつても抗議の電話を直接かけるだけだが。

こちらにやって来ていた江田が、本土の軍令部に衛星電話を使って電話をかけている。通話を始めてかなりの時間がたっていたが、目的の相手に繋がるような気配はなかった。

江田の目が細められた。

悪い予兆だ。

江田はその鋭い目をしたまま、二言三言話したのち、電話の相手に礼を言つて切った。

江田は衛星電話を置き、しばらく思索した後、ヴェラに言った。

「残念だが、君が抗議する相手はいなくなつたようだ」

「いつ帰ってくると言っていましたか？」

江田はため息をついてから、言った。

「軍令部総長大谷大將は昨日辞任した」

「辞任？ どうしてこのタイミングで？」

「話には続きがある。大谷大將はその後、列車に轢かれ死亡した」

「…キナ臭いですね。捜査の方はどうなっているんですか？」

「警視庁は、事件、事故、自殺のそれぞれで捜査する方針とのことだ。

その一方で、軍はこの件を自分の管轄にしようとしているが、ひどく混乱していて足並みが揃っていないようだな。

おそらく、このまま警視庁のヤマになるだろうな」

「ケイシチヨウ？ 何ですか、それ？」

江田は目をしばたき、次の瞬間には納得して返答した。

「郡警察みたいなもんだ」

ヴェラは理解したことを伝え、さらに続けた。

『『レッド・ステイングレー』の不手際と何か関係あるでしょうか？』

「おそらく、な。どちらにせよ、今後の捜査の進展がない限りなんとも言えないだろう。

…この件は内密に願う。彼女たちを不安にさせるような事案は伏せておきたいから

な」

「分かりました」

話が一段落したちようどその時、ドアを叩く音がした。

「誰か？」

江田が誰何すると、声が聞こえてきた。

「瑞鳳です。研究班から連絡がきています。すぐ来て欲しいとのことですよ」

「分かった。ヴェラ、しばらく待っていてくれ。後でこの件は話そう。それと、瑞鳳にもさっきの話を伝えていてくれ」

江田はそれだけ言うと、部屋を後にした。

ヴェラは一抹の不安を感じていた。何か、この戦争の裏でドス黒い物が渦巻いている。そんな気がした。

江田が研究班の掘建小屋にたどり着き中に入ると、奥の方の部屋に案内された。

部屋のドアに付いていた、関係者以外立ち入り禁止のマークと、警告文が江田の目を惹いく。

彼が中に入ると、米軍側の指揮官たちが勢揃いして待っていた。あらゆる機器が置いてある小部屋に押し込められた指揮官たちは、各々空いた場所を見つけてそこに落ち着いていた。

正確に言えば、エリオット准将が壁際にもたれかかり、ウォード少将と第7遠征打撃群指揮官のクレイグ・バンデンバーグ少将が狭苦しそうな研究員の男の両側に、第31海兵遠征隊指揮官シース・クルーニー准将は大型の機器と機器の間に挟まっているように立っていた。

ドアの開いた音に気づいた軍服の男たちは、サツと姿勢を正して江田にそれぞれのやり方で敬礼した。違う国の中将でも、中將は中將なのだ。

江田も答礼を返し、頭がボサボサの研究員に目を向けた。

研究員はダラダラと立ち上がり、面倒くさそうに頭を下げるとすぐに本題に入った。

「主賓の方がようやく来ましたので、私の方からお呼びした理由を説明させていただきます。あつ、私は『世界深海棲艦総合調査局』第4課主任調査員マクマード・スチムです。第4課は、生態調査を担当しています。」

さて、あなた方をお呼びしたのは他でもありません、『深海棲艦』の正体に繋がる可能性のある物を発見したからです」

5人の聴衆は息を呑んだ。この5年間、まるで分からなかった敵の正体に繋がる糸口が、ほんの数日の研究で見つかったのだ。

スチム主任は話を続ける。

「まず、こちらの画像を見てください」

スチム主任が見ていた。パソコンのディスプレイに、1枚の画像が現れた。何か螺旋状の物が映っている。

それが何であるか、聴衆たちはすぐに分かった。

「DNA……だな」

ウオード提督が呟いた。

スチム主任は楽しそうに言った。

「ご名答。ちなみにこれは、私の、つまり人間のDNAです。一方で……」

スチル主任が再びパソコンを操作すると、もう1枚の画像が先ほどの画像の右側に現れた。

「これは、我らの友人である『深海棲艦』のDNAです。何かお気づきになりませんか？」

5人は目を凝らして2枚の画像を見比べた。ほんの数秒後、エリオット将軍が言った。

「右側の方のDNAは二重螺旋ではなく、三重螺旋だ」

スチム主任は満面の笑みを浮かべていった。

「素晴らしい観察眼です。おめでとうございます！あなた方は歴史が変わる瞬間に立ち会っているんですよ。」

通常、DNAは二重螺旋で構築されています。少なくとも、昨日までに発見された生

物は、ですがね。一方で人間の体は、二重螺旋のDNAの情報では、体のほんの数パーセントしか使用できないのです。

これまでの研究の結果、DNAの螺旋は数が増えることにより多くの今日覚めていない能力を活性化させたりします。

例えば…不老不死などです。

『深海棲艦』の頑強さは、ここから来ているのでしょね。

少なくとも、人間よりも能力は高いでしょう」

バンデンバーグ將軍が言った。

「つまり君は、『深海棲艦』は人間よりも出来がいいというのか？」

「その通りです。間違いなく人間よりも高等な生物と言えるでしょう。…残念ながら」

「なんと言うことだ…」

「しかし、それ以上の問題点が、調査の結果判明しました」

「なんだ？」

江田が全員の気持ちを代弁して言った。

スチム主任は沈んだ顔で言った。

「この『深海棲艦』のDNAですが、この三重螺旋の塩基構造は造られたものであると判断しました」

「つまり、どう言うことだ？」

「簡単な話です。『深海棲艦』は人間の遺伝子操作によって強化された生物兵器だということですよ」

レイク・エリーのCIC（戦闘情報指揮所）に、数人の士官たちが集まっていた。士官たちは、年齢も、性別もそれぞれだったが、全員の共通点として顔に懸念の色を浮かべていた。

『レッド・ステイングレー』作戦の終了寸前に突如として姿を現した敵が残した物を分析していたのだ。

残したものは言うまでもなく、今回使用されたECMの戦闘記録である。

「間違いないんだな？」

レイク・エリー艦長、テレス・C・カーバー大佐はコンソールの前に座る前任士官に聞いた。

前任士官は大きく頷くと、自信たつぷりに言った。その意味が何をもたらずか分かっているため、顔色はよくない。

「はい。間違いありません」

カーバーはため息をつき、副長のトマス・マイクルの顔を見て言った。

「この件は、司令部に報告すべきだな」

「そうでしょうね。…残念ながら」

カーバーは、通信室を呼び出し分析結果を司令部に伝えるように指示した。

これから、より厄介な戦闘になることは明白だ。

何故なら、今回のECMが米軍製の物であることが分かったからだ。

もちろん、米軍の一部隊が反乱を起こしたという訳ではない。通常の艦艇なら、いくらステルス性が高まっているとはいえ、あの距離まで気付かれずに近づける訳がない。

レーダーに映りにくい、なおかつECMを持つ者。

現在のところ、それは艦娘であるヴェラ・ガルフただ一人だが、彼女はあの時他の艦娘たちと共にいた。

つまり…。

新しい艦娘、しかもECMを持ち、なおかつステルス性を考えられた米軍艦娘が現れたということだ。

敵として。

南太平洋。

空は満点の星で輝いている。

人間が放出した化学物質の影響を比較的受け難い海上の空気は、すつきりと澄み渡っている。

その海に、艤装を背負った小柄な少女は、小さな岩礁の上でその美しい星空を見上げながら物思いに耽つていた。

さざ波の音を楽しんでいた少女は、微かな気配を感じて目を閉じ、レーダー画面を見た。

数個の光点が画面上に現れた。どうやら、時間のようだ。

少女はゆっくりと立ち上がり、彼女の味方を見やった。

「よく来てくれたね。僕は……そうだね、君たちにはアンチ・ホープと名乗っておくよ。

これから君たちは、僕の指揮下に入ってもらふことになるけど、よろしくね」

「あんち・ほーぷトヤラ」

「なんだい？」

「貴様ハ艦娘ノハズダ」

「それがどうしたの？」

「何故、我々『深海棲艦』ノ味方ヲスル？」

少女を唇を歪めるように嗤つて答えた。

「僕にとつてその質問は、君たちが何故人間を襲つたのか聞くのと同じくらい野暮な質問さ。それに、理由なんてどうでもいいだろう？」

僕は君たちの力が必要だし、君たちも僕の能力が欲しい。利害は一致しているわけだ

からそれでいいじゃないか」

「…イイダロウ。貴様ノ指揮下ニ入口ウ。ヨロシク頼ムゾ、あんち・ほーぶ」

「こちらこそよろしく、戦艦棲姫さん…でいいかな？」

「結構だ」

「OK。それじゃあ、始めようか」

少女と『深海棲艦』は、ゆっくりと動き出した。

月明かりに照らされた少女の首には、73という数字の入れ墨が彫られていた。

番外編 『やまと被害者の会』 発足

空母M（以降、M）「ハイ！こっからは本編と全く関係ない話になるよおー。あつ、オレは第2部から登場予定の空母Mだ。少し早いがよろしく頼むぜ」

戦艦N（以降、N）「同じく第2部から登場予定の戦艦Nですわ。それよりもM！一体なんですか。この茶番は？」

M 「あ？作者のバカヤローが一回やってみたかったんだとき」

N 「いつからこんなネタを書くようになったのですか？あの『ピー』作者は？このお話は真面目系路線を走っていたはずですわ。」

私も真面目なお話だったから出演をお受けしたのですよ。それなのにあの『ピー』ときたら…」

M 「おい、N。お嬢様キャラがそんな汚ねえ言葉使いすんじゃないやねえよ」

N 「…これは失礼いたしました。反省しますわ」

M 「まあ、いいや。おい、ヴェエラ。ここにいんだからオレたちだけに話しさせてねえでちったー喋りやがれ！」

ヴェエラ（以降、ヴ）「えー。真面目キャラが崩れちゃうじゃないですかー」

M 「諦めろ。ここでは少しばかりキャラ崩壊していいんだ」

ヴ 「…分かりましたよ。やればいいでしょ。やれば。」

はい、私は言わずと知れた主人公のヴェエラ・ガルフです。ここでは、進行役を務めさせてもらう予定です。空気が薄いとか言ったやつは合計20発のMk. 46魚雷が待つてますんで手をあげてください」

N 「ヴェエラ！そんな口の利き方をしてはいけません！あなたが真面目キャラを捨てたら何が残るんですか？」

ヴ 「失礼ですよ、それ」

N 「…」

ヴ 「…」

M 「ハイ、そこ仲良くしましょうねー。つーか、なんでこのメンバーなのよ？」

ヴ 「Mさん、この程度のことは原作読んでたら分かるでしょ」

M 「さつきからちよくちよくメタな発言してるけど大丈夫か？」

ヴ 「別にいいんです」

M 「あつそう。んで、さつきの質問の答え聞いてないんだけど。こういうもんは、察しの悪い人にも優しい話にしないといけねえんだぞ」

ヴ 「…チツ」

M 「お前、今舌打ちしただろ！」

ヴ 「ソソナコトナイデスヨ」

M 「いや、あの音は間違いない…」

ヴ 「ハイハイ。それじゃ、出来の悪い旧式空母さんの意見を受けまして、私たちの共通点を書いていきましようか」

M 「年上には敬意を払って欲しいねえ」

ヴ 「その1」

M 「無視かよ」

ヴ 「全員が米海軍である」

N 「そうですわね」

ヴ 「その2。全員が原作において第3艦隊に所属している」

M 「ああ、そうだな」

ヴ 「その3。全員が『やまと』に撃沈された被害者である」

N 「ちよつとよろしくて？」

ヴ 「何ですか、Nさん？」

N 「私たちの名前、伏せる意味あるのかしら？」

M 「確かに。上に書いた共通点を見りや誰か分かるもんな」

ヴ 「読者の楽しみを取るのはいけないことでしょうか？」

M 「くだらんとおころを配慮してんだな。配慮にほとんどなつてねえが」

ヴ 「やらないよりはマシです」

N 「それもそうですわね。ところで、この茶番劇は毎回するのかしら？」

ヴ 「作者は本編が少ないときにやりたいそうですよ」

M 「いいのか？こんなことしてて？読者の皆様が求めてるのは本編の続きじゃないの

か？」

ヴ「だいたい自己満足のために始めた話ですよ、これ。あの作者がそんなに気が回ると思えますか？」

M「思えないな」

ヴ「つまりそう言うことです」

N「それでしたら、この会合に名前を付けるべきじゃなくて？」

M「それもそうだな。ヴェラ、何か案はねえか？」

ヴ「『撃沈艦の会』はどうですか？」

M & N「却下」

ヴ「それじゃあ、『沈められた間抜け共の会合』は？」

M「何故そこまで自虐的になる。却下だ」

ヴ「それならば真打ち、『やまと被害者の会』！」

N「あら。案外普通でしたわね」

M「最初からこれぐらい普通のやつを出しとけよ」

ヴ「いいじゃないですか、別に。さて、決めることはだいたい決まりましたし、これからどうしますか？」

M「ずっと雑談って訳にもいかねえし、真面目な話もガラじゃねえもんな」

N「…」

ヴ「…」

M「…お開きにするか？」

N & ヴ「そうしましょう」

M「そんなじゃあ、近くで飲んでくか」

N「そうですわね。毎日戦闘ばかりで体がクタクタですわ」

ヴ「ロートルらしいですね」

N「本当に減らず口が多いですわね。M k. 7で穴あきチーズになりたいのかしら？
それとも、トマホークで串刺しになりたいのかしら？あるいは両方？」

ヴ「あなたが私をそうする前に、私があるあなたをダイビングスポット兼魚礁にしてやり
ますよ」

N「いい度胸じゃないの。いいわ、表に出なさい。文字通りバラバラに解体してさし
あげますわ」

ヴ「あなたのような旧式に負けるつもりなど毛頭ありませんよ」

M「…まあ、いいや。付き合いきれねえよ全く。あ、読者の皆様。こんなどうしよう
もねえ茶番劇に付き合ってくれて感謝するぜ。」

あの2人は後で責任を持って罰しますんで大目に見てやってくれや。

そういうや、誰か忘れてるような気が…。

まっ、いつか。忘れる程度のやつってことだしな。

…さて、仕事の前に一服するかねえ」

吹雪（以下、吹）「あの3人は何やってるのかな？」

白雪（以下、白）「何かの会合を作るんだって」

吹「なんだかバチバチしてるけど大丈夫かな？」

白「さあ？まあ、ミッド…もといMさんもいるから大丈夫じゃない？」

吹「白雪ちゃん」

白「何？」

吹「さっきMさんのことなんて言おうとしたの？」

白「白雪ちゃんは知らなくていいの。どうせそのうち分かるから」

吹「ふーん」

白「ほら、あんなのほっというて間宮さんのところに行こ」

吹「それもそうだね。じゃあ、行こっか」

番外編『やまと被害者の会』発足 完

番外編 バカと情報は使いよう

ある日のこと。

いつも通りの時間に食堂に昼食を取りに来た古鷹と加古は、食事を終えてから休み時間をゆつくりと過ごしていた。

食堂にはテレビが一台置いてあり、どうやって受信しているのか、日本のワイドショーが流れていた。

外の情報がほとんど入ってこない南の島、さらに情報から隔離される軍隊ではこのテレビは数少ない情報源だ。

加古は頬杖をつきながらウトウトしだした。それに気付いた古鷹は、すぐにそれを咎める

「もう、加古ったら。まだ仕事があるんだから起きてなさいよ」

「エー。ちよつとぐらい寝かせてよおー」

加古はそう言いながら、大きなあくびをした。

バキヤツ、という嫌な音がしたのはその直後だった。

加古の表情はこわばり、開いた口をゆっくりと閉じようとした。が、それは上手いかなかった。

古鷹もこの異変に気付き、加古に問いかけた。

「どうしたの加古？口が開いたままだけど…」

加古はしばらくの間黙った後、ほとんど聴き取れない言葉を発した。

「あががはがれた」

「？」

古鷹は首を傾げた。

加古は腹立たしそうにどこからともなく紙とペンを取り出して何かを書いた後、ズイツと突き出した。

そこには、『アゴが外れた』というくだらない言葉が書かれていた。

1. アゴが外れた！

「…で、なんで私のところに来たんですか？」

ヴェエラは自室に押しかけてきた重巡の姉妹を呆れ顔で見つめつつ言った。

「ヴェエラならどうにかできるんじゃないかと思って」

古鷹が代表して答える。

「出来る訳ないじゃないですか」

ヴェラはさらりと言った。

2人の重巡はあからさまに嫌そうな顔をしてヴェラを見つめた。

「…何ですか、この空気は？ 私悪くないですよ。どう考えても私のところに来たあなた方が悪いじゃないですか。」

いや、止めてくださいよ、その顔。何で使えねーな見たいな顔してるんですか。おかしいでしょ色々」

ヴェラの抗議の声を無視して、古鷹が言う。

「ここまで来たんだから何か教えてよ」

「…はあ。分かりましたよ、私の雑学を披露したらいいんでしょう。」

題して！『読者の皆様が今後役に立つかもしれないどうでもいい情報』のコーナー！
「結構ノリノリじゃないのヴェラ」

加古が紙に何か書いてから2人に見せた。

『読者つてだれよ？』

ヴェラはそれを無視して話を続けた。

「アゴが外れた場合、お近くの口腔外科に行ってください。プロの先生方が速やかに治

してくれませす。

夜間の場合は、救急医療機関へ受診してください。

その時の状況によりますが、1時間以上待たされるおそれもありますので暇潰しになるような物を持っていくことをお勧めします。携帯電話なんて物は使われないようにしましょう。

なお、1人目のお医者様が失敗しても、2人目、3人目といるので心配ありません。ちゃんと治ります。

無事に治った後も注意が必要です。特に、治った直後は非常に外れやすくなっているので、その日はできるだけ喋らないようにしましょう。また、微熱が出ますが心配する程ではありません。

救急医療機関へ行った方は、次の日に口腔外科に行くことをお勧めしますが、別に行かなくてもさほど影響はありません。

：こんなところでしょいかね」

重巡姉妹は驚いたような顔をしていた。

「どうしました？」

「いや、なんでそんなことまで知ってるのかなって」

古鷹は不思議そうに聞いてきた。

ヴェエラは首を傾げて言った。

「どういう訳か、戦術データシステムに記録されてるんですよ。アゴが外れた時の対処法（日本版）が」

「戦術でも何でもないじゃない…」

加古が話に入ってきた。もちろん、筆談である。

『電波でも受信してるんじゃない？』

古鷹はそれだとばかりに指パッチンして言った。

「それですよ！ヴェエラはきつとどこからともなく電波を受信しているんですよ！」

「何ですか電波って…」

「よくあるでしょ？キャラが知っているはずのないことを突然言いだしたり、初めてあった相手の名前を知ってたりするあれ。」

つまり、ご都合主義」

「なんだかよく分からないんで、その話はいずれ…。」

さあ！私のコーナーは終わりましたし、早く診療所に行きましょう。ねっ、そうしましよ」

「んー、納得いかないけど…まあ、いつか」

『早く行って喋りたいよー』

ヴェエラは2人の同意を確認すると、姉妹の背中を押して部屋から追い出し、診療所の方へ押していった。

診療所の医務室で、ヴェエラは笑いを堪えていた。

気の毒な加古は、かれこれ10分間アゴを治そうとする若い軍医に顔を引っ張りまくられていた。

軍医はすっかり力任せのやり方に頼っており、お世辞にも治せそうにない。そのことが本人も分かっているのか、自身のプライドを取り戻そうとその表情は必死そのものだ。

一方の加古は、ほとんど半泣き状態で顔は真っ赤になっている。こういう表情が好きなのはきつと悶絶ものだろう。

古鷹はというと、心配そうな顔をしているが、時々顔を反らしている。一瞬だけ見えたが、その顔には笑いの表情が浮かんでいた。

ヴェエラは笑みを抑えつつ、加古のことが急に哀れになった。かわいそうに。姉にまで笑われてしまうとは、不憫でならない。

さらに数分間の格闘の末、加古がついに根を上げた。

『もう別の方法を考えてよお』

泣きかけの顔が可愛らしい。

軍医も流石に悪いと思つたのか、軍医長を呼びに行つた。

パラオ泊地における医療行為の最高責任者である軍医長の尾形大佐が入つて来たのはそれから5分後のことだった。

尾形はひとしきり患者を診たのちに言つた。

「アゴが外れた場合の処置は何度もしたことがある。が、何分艦娘は初めてだ。人間とおなじようにいくかどうか、はつきり言つて、分からない。

だが、最善を尽くさせてもらう」

尾形は手に医療用のゴム手袋を着けた。着け方がどこもなくかつこいい。

尾形はその手を加古の口に突つ込み、奥歯の辺りに親指を持つていき奥歯とアゴを手で掴むと、それを力一杯下に引つ張つた。

その力に引つ張られて加古の頭が下に下がる。

尾形は先ほどの軍医に加古の頭が下がらないように持つよう指示して、再び引つ張り始めた。

加古の頭が下がりそうになるが、軍医がそれを阻止する。

加古はかなり痛そうな顔をするが、目を強く瞑つて耐えている。が、やがてそれも耐えきれなくなり2人の男の手を振りほどき、素早く紙に字を書いてからその紙を全員に見せた。

『力任せのやり方はちよつと…』

尾形はその文字をまじまじと見てから、ため息をつきながら言った。

「仕方ありません。奥の手を使いましょう」

「奥の手？」

古鷹が興味ありげに聞いた。

「そうです。奥の手です」

尾形はウインクをしてみせた。医務室に妙な空気が流れる。尾形は慌てた様子で、隣の部屋に繋がるカーテンに向かって言った。

「お願いします」

カーテンの奥から一人の男が出てきた。

尾形を除く全員が口をあんどりと開けた。

そこに立っていたのは、江田提督だった。

「なんで提督がここにいらっしゃるんですか？」

古鷹が驚き顔で聞いた。江田はまるで何がおかしいんだとでも言いたげな顔で答えた。

「加古のアゴが外れたと聞いたから心配できたんだ。提督として、部下の心配をするのは当然だろ？」

「まあ、そうですね…」

「まだ治らないのか？」

江田が尾形に聞いた。尾形は面目なさそうに答える。

「そうですね。両アゴが外れているので簡単かと思いましたが、どうやら間違いだつたようです」

江田は加古を見た。

加古は顔中を引つ張られたり、弄られたりしたせいで真つ赤に腫れている。

「確かに、そのようだな。…よし、少しやり方を変えてみよう。尾形、変わってもいいか？」

「はい？ 江田提督が処置なさるんですか？」

尾形は江田の顔を見た。その顔は真剣そのもので、冗談を言っているようには見えな

い。
尾形はため息をついてから場所を変わり、江田がその場に座った。

加古の顔にはあからさまな不審の表情が浮かんでいた。提督、本当にできんの？と、でも言いたそうだ。

「さて、これまで力任せにやって上手くいかなかったんだな」

江田の問いかけに全員が頷く。

「それじゃあ、これからは力と一緒に頭も使おう」

そう言うのと、江田は加古のこめかみの下のアゴの関節に人差し指と中指を当て、力強く押した。

ゴリゴリと骨と骨が擦れる音がすると同時に、アゴの骨が僅かに下に下がる。

加古も感じたらしく、先ほどまでの不審の表情が期待に変わる。

江田はさらに押して、アゴの骨が元の位置に戻るまで力を加え続ける。

カクンと、何がはまるような感覚があった後、アゴはそれ以上に行かなくなった。

江田は手を離し、加古に口を閉じるよう促す。

加古はゆっくりと口を閉じ始めた。最初は恐々と、最後の方はほとんど自然に口を閉じた。

医務室に安堵の空気が流れた。

「どうやら、上手くいったようだな」

江田は何かとてつもないことを成し遂げた後のような達成感に満ちた顔をした。

「サンキュー、提督。おかげで助かったよ」

「礼はお前のキープしてる一番良い酒を頼む」

「それとこれとは関係ないじゃん」

加古は再び喋れることに興奮したのか饒舌に喋る。

ほとんど空気だったヴェエラは、少し不安を感じた。もちろん、自分が主人公であることに不安を感じたのではない。

あんなに喋ったら、せつかく治ったアゴがまた外れるのではないか？

ヴェエラは警告をした。

「加古さん、そんなに喋っていたらアゴがまた…」

ゴキヤツと、再び妙な音がした。

空気が凍る。加古は凍りついた表情のまま、口を閉じようとしたが、それが閉じることはなかった。

「外れますよ、と言おうとしたんですが…」

ヴェエラの警告は、あまりにも遅すぎたのだった。

アゴが外れた！ 完

「うーみーはー広いーな、大きいーな。つーきーは、登るーし、陽はしーずーむーつびよん」

卯月は楽しそうに童話を歌う。

周りを見渡す限り、歌の通り海が広がっている。幾つもの蒼が入り混じったその海

を、白い航跡を引きながら艦娘たちは哨戒任務についていた。

ヴェラは卯月を見た。いつでも楽しそうな彼女を見てみると、少しばかり腹立ちを覚えてしまいそうだ。

ヴェラは周りを見渡し、同じ艦隊の他の艦娘たちを見た。

第三艦隊は個性の塊だ。その中で、無個性に近いヴェラはこの艦隊にいる間は、ツツコミ役に徹するようになっていた。

まあ、そんなことはどうでもいい。

とにかく今は、ほとんど安全になったパラオ近海の哨戒をしている。

もはや形骸化しているとも言えるこの任務は、艦娘たちのモチベーションを上げ、艦娘同士の親睦を深めるためのちょっとした遠足程度の認識になっていた。

こんなことでは行けないはずなのだが、これも悪くないと思ってしまう自分も平和ボケしているのだろうか。

「今更だけど」

球磨が突然喋り出した。

「ヴェラは体力測定と知識テストの事は覚えてるかクマ？」

ヴェラは一瞬考えたのち、記憶の底からその情報を取り出した。

「ええ、覚えてますよ。体力測定の方は忘れたい記憶ですが」

「知識テストは確か満点をとってたはずだぴよん」

卯月が話に入ってきた。ヴェラは少し鼻高々に言った。

「その通りです。こんな私ですが、これでも艦娘の中では頭がいい分類です」

「あれは、基礎知識とかを超越した高難易度のテストだったニヤー」

「そうクマ！だから今日は、あのテストで満点を取れた訳を聞かせて欲しいクマ！」

「はあ。まあ、いいですけど…」

こうして、ヴェラのお勉強講座が幕を開けたのだった。

2. 馬鹿と情報は使いよう

「確か第1問は酸素魚雷の有効性でしたよね？」

ヴェラの問いにうなづくと同時に、球磨はいつた。

「そこは全員分かってるから次に行くクマ」

「分かりました。第2問は…「ビーム・ディフェンス・ポジション」は、通称なんと呼ばれているか、でしたね」

「答えはなんだにゃ？」

「『サッチ・ウィーブ』。この空戦機動の生みの親であるジョン・S・サッチ少佐の名前か

「らこ呼び名が与えられました」

「おくと、他の艦娘たちから歓声が上がる。

「もしかして、2問目で止まったんですか？」

「ヴェラは驚いて聞いた。睦月が不満そうに言う。

「睦月たちはヴェラさんと違って頭が堅いから仕方ないにやしい」

睦月が代表して答えた。

「ほら、そんなことはいいから第3問を教えるクマ」

球磨にせかされ、ヴェラは次の問題に移る。

「第3問は、ベトナム戦における有名な爆撃作戦を1つ挙げよ、ですね」

「そもそもベトナム戦が何か分からないのよね。南方作戦の一環かしら？」

如月の問いにヴェラは答える。

「ベトナム戦争のことです。1955年から75年までの戦争で、共産主義系の北ベトナムと民主主義系の南ベトナムとの戦いとなっています。」

アメリカにおける『悪夢』とも言えます。

この問題の場合、米軍の北爆の作戦の1つを挙げるようですね。

答えはいくつかありますが、私の場合は『アーク・ライト』作戦を選びました。

いくつかの共産主義諸国からは、死の鳥で知られているB-52による爆撃作戦で

す」

「そんなの知ってる訳ないぴよん。この問題を作った馬鹿野郎に一発打ち込まなきや気が済まないぴよん」

「そんなドスの効いた声でぴよんぴよん言っても意味ないよ…」

卯月の言葉に弥生が妙なツツコミを入れた。

「そんなことより早く次に行くがよいぞ」

次は睦月が先を促した。

「第4問は、えー、あれです、あれ。何でしたっけー。あつ、そうだ。

『宇宙戦艦と言えば？』」

「コンバイラ」

「ヤマトクマ」

「エクセリランにやー」

「アウストラだぴよん」

「ドメラーズⅢ世にやしい」

「ドーントレス」

ヴェエラを含めた全員がほぼ同時に答えた。

「見事に分かれましたね。全員の元ネタを言うと、弥生さんのコンバイラは提督として

も知られる『R-TYPE』。球磨さんのヤマトと睦月さんのドメラーズIII世は言わずと知れた『宇宙戦艦ヤマト』。多摩さんのエクセリオンは『トップをねらえ』、あるいは『ふしぎの海のナディア』。卯月さんのアウストラは『タイタニア』ですかね。

で、私が言ったドントレスは『彷徨える艦隊』です。

卯月さんよくそんなの思いつきましたね。それなりにマイナーですよ」

「うーちゃんの部屋には全巻揃ってるぴよん」

卯月がドヤ顔を決める。何に対するドヤ顔か分からないが、ヴェラはとりあえず空気を読んで言った。

「そのうち貸してくださいよ」

「お安い御用だぴよん。でも、タダとは言わせないぴよん」

卯月が調子に乗り出したので、ヴェラはそこで話しを切って次の問題に移った。

「最終問題は、『イラク戦争における大量破壊兵器の根拠となった人物の暗号名は?』です」

「知る訳ねえクマ! 満点取らせる気のないテストなんてふあいつきらいだクマ!」

「はいはい、落ち着きましようね、球磨さん。総統閣下ほくなってますよ」

球磨は数回深呼吸をしてから言った。

「答えはなんだクマ」

「その前にイラク戦争について軽く説明を。この情報は、泊地司令部の資料室にあるものですので詳しく知りたい方はそこで調べてください。

イラク戦争ら、2003年3月20日から2011年12月15日までの約8年間に及ぶ戦争を指します。

大規模な戦闘は2003年の内に終了していましたが、治安維持を名目に米軍が駐留していました。

2011年の安定化を境に、米駐留軍が撤退することにより戦争が終了したことになります。

開戦の公式の見解は、湾岸戦争終結後の国連決議の違反となつていますが、非公式な見解の中には、軍産企業からのホワイトハウスへの圧力や、石油価格の操作等様々な仮説が考えられています。

この戦争の最大の目的と言えるのは、イラク国内に存在するとされる大量破壊兵器、NBC兵器の発見にあつたとも言えますが、米国側の主張とは反対に大量破壊兵器は発見されませんでした。

ここで登場するのが、最終問題の答えである情報提供者『カーブ・ボール』です。

『カーブ・ボール』は、金を得るために嘘の情報をでっち上げ、それをCIAに売り込みました。ホワイトハウスからすっかり信頼を失っていたCIAは、政府が求めている

情報に飛びつき、間違った情報をホワイトハウスに送りました。

こうして、アメリカは8年間の新しい『悪夢』にうなされるようになる訳です」

「こんなの分かるわけないにやしい。もっと簡単な問題にするがよいぞ」

「私が作ってる訳じゃないですよ…。」

それでも、これはあまりにも難し過ぎます。第二次大戦の艦娘には無理な問題ばかりですからね」

「そう言えば、ヴェラさんは1999年に沈んだって言ってたぴよん。どうして2003年から2011年までの情報があるんだぴよん？」

「んー。私の戦術データベースが優秀だからじゃないですか？」

「答えになってないにやー」

「そう言えば重巡たちがヴェラは電波を受信してるって言ってたクマ。あの時も電波を受信してたに違いないクマ」

「カンニングにや」

「はい？ちよつと待ってくださいよ。なんでそうなるんですか？カンニングなんてしてませんよー！」

「じゃあ、なんで沈んだ後のことが分かるの？」

「それは…」

ヴェエラは口ごもる。そう言われてみればそうかも知れないと、内心では感じていたが、ここでそれを認めるわけにはいかない。

ヴェエラが答えようとしたその時、無線が入った。

『話は聞かせてもらった。まさかカンニングをしていたとはな』

「江田提督？ いや、違うんですよ。これは何かの間違えで…」

『詳しい話は帰って来てからたつぷり聞いてやる。逃げるんじゃないぞ』

無線はそこで切れた。

ヴェエラは呆然と周りを見た。弥生を含む全員がニヤニヤしている。

…どうやら、ここに味方はいないらしい。

ヴェエラはため息をついてから、彼女は前を見た。

腹立たしいまでの青空と、憎らしいまでの深い海の蒼が、目の前に広がる。

その2つの青を見ても、ヴェエラの心が晴れることはなかった。

バカ都情報は使いよう 完

3. 『やまと被害者の会』 第2回会合

M 「やあ、みんな元気かな？ 今日影やm…」

ヴ「アー！アー！Mさんマズイですよ！」

M「あ？いいじやねえか。Hello、読者の皆様。元気してるかい？今回も勝手にやらせてもらってる空母Mだ。ん？本名を出せ？次に出る予定だからもう少し我慢してくれや」

N「M？今日はもつとしなければならぬことがあるでしょう？」

M「…ああ、そうだった。前回の時に名前を出し損ねた新人さんの紹介に来たんだったな。」

と、言うわけでご紹介しよう、原潜K！」

K「時は来たれり。我は深海を統べる海狼の王なり。次元の彼方にいる者たちよ、お初目にかかる」

ヴ「…」

N「…」

M「…」

K「…今のなかったことにできる？」

ヴ「できません」

K「ですよ。…さて！改めましてこんにちは。原潜Kです。よろしくね」

M「すげえな。あれをよくなかったことにできるな」

K 「え？Mさん、何言ってるの？」

M 「：いやなに、すぐに記憶を改竄できる脳味噌はいいなって思ったただけだ」

K 「ふーん、そう。とここでMさん、私の紹介は終わったあとは何するのよ？」

M 「特にすることはないぜ」

N 「何ですって！私も暇じゃないというのに、貴女と言う人はクズのろくでなしですわ！さっさとくたばるがよい！」

M 「そこまでキレる必要はないだろ？あと、お嬢様キャラがブレブレだぞ」

N 「黙らっしやい！」

M 「ヒッ」

N 「今日という今日は許しませんわ！漁礁にして差し上げます！」

M 「：上等じゃねえか、この時代遅れの高速戦艦が。蜂の巣にしてやる」

K 「怖いねー。ロートル同士でいがみ合ってるよ」

V 「こつちに飛び火する前に退散しましよ」

K 「そうね。あつ、読者の皆様。今回もこんな茶番に付き合ってくれてありがとうがとね。また次回、作者の気が向けば会いましょう。

じゃ、バイビー」

『やまと被害者の会』 第2回会合 完

第2部 Operation Double Blue
プロローグ 大西洋 渚にて

6月2日

少女は1人、渚にいた。

どこかは分からなかったが、エメラルドグリーンの美しい海の色と、純白に近いサラサラした砂、風で微かに揺れる椰子の葉を総合して考えるとここは常夏のリゾート地であると予想できた。

もつとも、人っ子ひとりいないが。

少女が初めに考えたのは、ここがどこか以前に、何故生きているのかという疑問だった。

祖国から遠く離れた温暖な海に沈んだはずだが…。

今、こうして生きている。

そもそも、生きているという実感がおかしい。

艦艇である自分が生きているなど、ナンセンスもいいところだ。

が、間違ひなく自分という存在が生きていると確信を持つて言えた。

心臓の脈動、血液の流れ、体から感じられる熱。

どれも、生きている証だ。

「問題は、なんで生きてるのか、だな」

少女は誰に言うでもなく呟いた。

彼女は1時間ほど前に目覚めていた。

彼女は起きてすぐに、自分が人になっていることに気付いた。驚きはしたが、むしろ好都合に感じ、この体に慣れるまでじっくりと時間をかけた。

彼女が1番最初に『見た』のは、信じられないほど澄んだ青空だった。次に、『体を起こす』という妙なプロセスを踏んだのち、彼女は白い砂浜と、透き通った海を見た。

もう少しよく見ようと、『立ち上がる』という新鮮な動作を経て少女は大地に『立つた』。

そのまま、人間として見る景色に見とれて、現在に至っている。

とりあえず、目下の問題は何故人になったかということだが、分からないのでスルーする。

次に彼女が考えたのは、空母だった時のことがどれだけできるか、ということだった。彼女の現在の装備は、右腕に装着しているアングルドデッキ付きの飛行甲板、つまり

改装を終えた状態だ。

飛行甲板の裏の部分に、2丁の古めかしいマスケット銃が固定されているようで、簡単に取り外しができそうだ。

彼女はそれを左手に持った。驚くほど手に馴染む。

さらに飛行甲板を探ってみると、弾倉のようなものが見つかった。

弾には、『ホーネット』や、『イントルーダー』、『シーホーク』、『ホークアイ』など聞き覚えのある航空機の名前が刻印されている。

彼女は、『ホーネット』を装填し、発砲してみる。

放たれた銃弾は、数メートル飛ぶと炸裂し、幾つもの弾子に別れた。そこから更に、それぞれの弾子がF/A-18A ホーネットへと変化する。

なるほど、散弾の弾子が航空機になる仕組みか。

ホーネットは本物とほとんど変わらない力強いエンジン音を響かせながら、彼女の頭上を飛び回る。

指示を待っているようだ。

彼女は普段通りにCAP（戦闘空中哨戒）の指示を出した。

ホーネットたちは了解したらしく、軽くバンクを振ると2機ずつの編隊を組んでそれぞれの哨区へ飛び去った。

彼女はホーネットを見送ると、今度は『ホークアイ』を装填し、発砲する。

弾子はターボプロップの双発機E-2C ホークアイに変化する。ホーネットに比べると、その数は少なくわずかに4機だ。

彼女はホークアイに、CAPの管制と支援をするよう指示を出す。

ホークアイはそのまま飛び去っていった。

最後に、彼女は『シーホーク』を飛ばしてみることにした。こいつを飛ばせばASW（対潜水艦戦）一面の防御が強化されるはずだ。

前回のミスから学ばねば。

少女は、弾をマスキットに装填しようとした。が、弾の大きさが合わないことにすぐに気付いた。

これはどういうことだ？

ふと、飛行甲板の裏に丁度いい大きさの穴が開いていることに気付いた。

試しに、『シーホーク』の刻印がなされた弾をそこに入れてみた。

弾は穴に吸い込まれた。どうやら正解だったようだ。

飛行甲板から機械的な音がしたと思うと、エレベーターが動き出した。上昇しているエレベーターの上には、小さなSH-60 シーホークがちよこんと載っていた。

上昇し終わると、シーホークはローターを回転させ始める。本物となら変わりない

爆音が耳に届いた。

シーホークは飛行甲板に出てから僅か5秒で飛び立った。信じられないスピードだ。その間もエレベーターはフル稼働で動き、ひっきりなしにシーホークが出ては飛び立っていく。

誰が作業しているか知らないが、てんてこ舞いなのは確かだ。

最後のシーホークが飛び立つと、あたりは途端に静かになった。

浜に打ち寄せるさざ波の音と、近くに咲く椰子の木の葉が風に揺られる小さな音だけで、文明を示す音は何一つしない。

いい気分だ。

が、少しつまらない感じでもある。

本来、軍艦である彼女は戦ってこそ、その存在が意味あるものになる。つまり、最低限の敵が必要なのだ。

しかし、ここには敵はおろか文明すら感じられない。

ここは美しい。

だが、ここは彼女がいていいところではない。

少女はゆっくりと歩き出した。

敵を求めて。

少女が歩くこと数十分。

彼女と同じような艀装を背負った少女が、砂浜に座っていた。しっかりと波に濡れず、なおかつ椰子の木の日陰に入っている。

彼女は、とりあえず話しかけてみた。

「そんなところ座つて何を見てんだ？」

少女は横目でチラリと見た後、視線を前に戻して答えた。

「美しい景色を見ていて悪いのかしら？」

「いえいえ、滅相ありません。それはそうと、あんた名前なんていうんだ？」

「名前を聞くのなら、まず名乗つてからがマナーですよ」

「マナー？んなもんは考えたこともねえな。まあ、いいか。」

俺は空母ミッドウェイだ。第3艦隊の旗艦をやつてた」

「ミッドウェイ？あらあら、あの葉巻の大將の旗艦殿でしたの。私はニュージャージーですわ。」

同じ第3所属よ。覚えてらっしゃるかしら？」

「ニュージャージーか。覚えてるぜ。ブラックドラゴンとかいうずいぶんと中二クセエあだ名の付いた艦だろ」

ニュージャージーは冷ややかな目でこちらを睨み、小さく、しかし聞いた相手に最大

限の効果を發揮する声でで呟いた。

「その名前を今度使いましたら殺しますわよ」

ミッドウエイは聞こえなかつた振りをして話を進めた。

「ここがどこか分かるか？」

「さあ？ 南国の島か、赤道に近いビーチか。私が地理学者に見えますか？」

「いんや、見えねえ」

「だつた聞くんじやねえタコが、ですわ」

「全く。ずいぶんと辛辣な奴だな、あんたは。そんなんじやお嬢様を気取れねえぞ」

「気取つてなどいけませんわ。もともとですもの」

「はいはい。…おや、まあ。どうやらここはカリブ海の様だ」

ミッドウエイはホークアイから送られて来た映像を見て言った。

ニユージャージーは片方の眉を軽く上げる。

「カリブ海？ これは一体どういうことですか？」

「知るかよ。取り敢えず言えることは、沖繩沖からカリブ海まで遠路はるばる送られち

まつたつてことだ」

「忌々しいですわね。どうせならロマ辺りにしてもらえれば良かったのに。戻るのが楽

ですもの」

「俺としてはここでも構わないが…何だ？」

突然、救難用の国際VHFから声が聞こえた。

『ー助けてくれ…。こちらアメリカ船籍のエカテリーナ。『深海棲艦』に襲われてる。数は15隻。いつまでもつか分からない。』

誰でもいい！早く助けてくれ！』

「アメリカ船籍？今時珍しいですわね…。それに、『シンカイセイカン』？何者なのかしら？」

「そんなこと言ってる場合じゃねえ。ウチの国の船が襲われてるんだ。どこの国か知らねえが、いい度胸だ」

「まさか、助けに行くつもりですか？」

「たりめえだ。軍が守らなくて誰が他国軍から国民を守るんだ？」

「でも、この体では…」

「心配ねえよ。この体でも、戦闘はできる。」

ほら、モタモタしてねえでさっさと行くぞ。敵は待つてくれねえんだ」

「全く。呆れた人ですわ」

「悪いが、ヒトじゃないんでね」

ミッドウェイは軽く笑うと、ニュージャージーに背を向けて、海に入った。

彼女は、海面に立ちそのまま歩き始めた。

速度を速める。最初は、微速。次に、巡航。そして…。

最大速度で海を駆け始めた。

「ハア。仕方ありませんわね。付き合って差し上げますわ」

ニュージャージーは溜息を吐きつつ、ミッドウェイと同様に海を進み始めた。

10分ほど行くと、硝煙の臭いが鼻についてきた。そして、水平線上に砲煙によって出来たと思われる濃い靄が。

「近付いて来たな…」

ミッドウェイは呟く。彼女の頭の中にある戦況図には、友軍機を表すブリッブの他に、救済対象のエカテリーナ、『シンカイセイカン』と呼ばれる正体不明の敵対勢力の位置を表す光点がE-2Cのレーダー画像と、安全な距離で待機しているSH-60からカメラ映像がデータリンクの支援を得て表示されている。

ミッドウェイはニュージャージーに言った。

「ヘイ、お嬢様」

「何ですの？」

「これから俺が突撃する。支援砲撃を頼む」

「はい？今なんとおっしゃいましたの？突撃すると聞こえたように思えますが…」

「聞こえてるじゃねえか」

「私のような戦艦なら分かりますが、空母のあなたがですか？ 装甲もペラツペラの紙のように真つ平らのあなたが？」

「…馬鹿にしてるか？」

「ええ、その通りですわ。あなたがおつしやつたことは、頭がおかしいとしか言いようがありませんもの」

「人間誰しも頭がおかしいものさ。別にいいだろ？」

「さつきヒトじやないって言っておきながらよくもまあそんなことが…。いいですわ。勝手になさい。」

…支援は、させて頂きますわ

「俺に当てるじゃねえぞ」

「当てませんわよ！ さつさと行きやがれ、この薄ら馬鹿が、ですわ」

「へいへい、そうさせてもらいますよ」

ミッドウェイは適当に返答すると、緩めていた足を再び上げた。

これまで遠雷のようにしか聞こえなかった砲声が、近づくことに大きくなっていく。今回は対艦戦になるのでA—6は必要ないだろう。今、必要なものは…。

彼女自身の打撃能力。

ミッドウェイは何の迷いもなく、まるで最初から知っていたように呟いた。

「艀装、コンバート」

飛行甲板に装着されていたもう一丁のマスキットが勝手に外れ、彼女の右手の内に滑り込む。

と、同時に彼女の頭の中のディスプレイにゲームの選択肢のようなアイコンが現れた。

彼女がそれを見ると、砲撃管制システムが起動し、照準器の様なものがディスプレイの半分を占めた。

使用火器はMk. 39 5インチ単装砲。懐かしの第二次大戦の遺物だ。

銃口がどう見ても5インチでないことは仕様なのだろう。

どちらにせよ、撃てればそれでいい。

航空機部隊が指示を要求してきた。すでに、敵を目視で捉えている。仇なす者を討ち取らせよという雰囲気が無線から伝わってきた。

ミッドウェイは嬉しそうに顔に笑みを浮かべた。俺の艦載機らしく、非常に好戦的だ。

彼女は命じた。

「殲滅せよ。こちらが敵に対し攻撃を始めたら、母艦を守りつつ支援・攻撃を行え」

彼女は一呼吸置いて言った。

「奴らを潰せ」

その顔には残酷な笑みが浮かんだままだった。

音速の世界は、素晴らしい。

いつもそう思う。

ヘルメットのバイザーとキャノピー越しではあるが、青い空はいつでも彼を包んでくれた。

あの時も。

彼、ジョー・《ホリデー》・ローマ大尉は、F-35Cのコックピットの中でぼんやりと考えた。

F-35に乗り始めてからすでに2年が経過していたが、この機体ほど素晴らしい航空機に彼は乗ったことがなかった。

元々は海兵隊のAV-8B+ハリアーIIに乗っていた彼だが、あの時、つまり『ライジング・ストーム』作戦以降の米海軍におけるパイロット不足を補うために海軍に異動して来たのだ。

あの時のことを、彼は時々思い出す。

強襲揚陸艦バターンの艦載機パイロットだった彼は、あの時も空を飛んでいた。突如

としてレーダー上に現れた『深海棲艦』航空機部隊の阻止に上がったのだ。

バターンの右舷から数十メートルの高さの水柱が立ったのは、彼が飛び立つてからの数分後だった。

それを皮切りに、友軍艦艇への魚雷攻撃が始まり、全てが終わる頃にはほとんどの艦が損傷していた。

生き残った数少ない駆逐艦たちは、復讐に燃えていたが沈んだりもう長く持ちそうにない艦から脱出した乗員たちの救助に乗り出していった。

ローマは何も出来ない自分を恨みながらも乗員たちの上を飛び続けた。
海上の将兵たちを励まそうと考えたからだ。

が、いつまでも燃料が続く訳もなく、彼のハリアーIIは燃料切れを起こしかけていた。
周りに広大な飛行甲板を持つ空母や強襲揚陸艦はいない。

かくなる上は。

ローマは機体を動かし、近くにいた友軍駆逐艦に着艦許可を求めた。

駆逐艦の艦長は驚き、渋ったがこちらの切迫した様子が伝わったのか、仕方がなさそうに許可した。

彼は機体をどうにか駆逐艦の後部飛行甲板に持って行き、ロールスロイス ペガサスエンジンの排気口の角度を変えて着艦体勢に入った。

言うまでもなく、ローマはこの機体での駆逐艦への着艦はおろか、他の航空機でも駆逐艦に降りたことがなかった。

それ故に、彼は駆逐艦の飛行甲板がひどく狭く感じられ、極度の緊張状態に陥った。そして、その体の異常は操縦面にも反映された。

ほんの僅かだが、操縦桿を前にし過ぎたのだ。

ローマが戻す間も無く、ハリアーIIは前方に突進し、航空機格納庫に機首を突っ込んだ。

完全にバランスを崩したハリアーIIのコックピットが幾つもの警告を表示し、やかましい警告音を発した。

ローマがそれに対処する間も無く、ハリアーIIは飛行甲板に無残にも叩きつけられた。

煙を上げるハリアーIIをコックピットから見たローマは、イジェクトシートを引き、脱出する。

脱出し、空から見たその光景を、ローマは決して忘れないだろう。

飛行甲板に叩き付けられた愛機と、それに群がり、消火剤をかける友軍艦のダメコン班。

周りを見渡せば、黒煙を噴き上げ沈みつつあるスパーキャリアーたちの最後の姿が。

そして、波間に漂う何人もの将兵たち。

彼はこの戦争が始まって以来初めて、この戦争に負けるのではないかと不安を感じたのだった。

レーダー上に突然現れたコンタクトが、ローマを夢想から呼び戻した。

彼は顔を引き締める。

そうだ。俺はもうあの時の何もできない俺とは違う。今は、後ろに何人もの部下が従う指揮官なのだ。

そんな指揮官が、過去の敗北に囚われていてどうする。

彼はコンタクトが何者か探り始めた。

妙な結果に彼は頭をひねった。

どういうことだ？

コンタクトの相手は、友軍のF/A-18。この辺りでこの艦載機を搭載している艦はいないはずだ。

彼の母艦であるジョン・F・ケネディの戦闘攻撃機は全てF-35Cに換装されている。

一体何者だ？

分かっていることは、彼らと同じ相手と交戦しようとしている、と言うことだ。

ローマが見守る中、正体不明の航空部隊は『深海棲艦』に対し攻撃を開始した。そこで行われた行為を見ていた者がいるなら、それを虐殺とでも言うかもしれない。少なくとも、互角の戦闘には見えないはずだ。

エカテリーナを襲っていた『深海棲艦』を最初に襲ったのは10基のハープーン対艦ミサイルだった。

『深海棲艦』たちは大急ぎで対空射撃を始めたが、間に合うまでもなく全弾が命中した。

夕級フラッグシップとヲ級フラッグシップは何とか耐え切ったが、夕級は砲撃速度と命中率が著しく低下し、ヲ級は艦載機を発艦できなくなった。

さらに悪いことに、周りにいた護衛艦隊を構成するツ級エリート2隻が撃沈され、さらには駆逐艦数隻が沈み防衛網に大きな穴が開いてしまった。

上空を飛ぶホーネットたちはその薄くなった部分を、まさに蜂のごとく激しく攻撃する。

あまりの激しさに、『深海棲艦』たちは空を飛び回る32機のホーネットにかかりきりになってしまった。

そのために彼女らは、高速で接近する脅威に全く気付けなかったのだ。突如としてホーネットは散開した。

『深海棲艦』たちは、呆然とそのホーネットたちを見つめていたが、背中に強烈な殺気を感じて振り返った。

そこには、ホーネットたちを引き連れた一人の艦娘が狂気に満ちた笑顔を浮かべながら立っていた。

ミッドウェイは敵に気付かれたと判断した途端に、Mk-39を模したマスケットを目の前にいる3連装砲を持った妙な敵（レーダー上では戦艦クラス）に向けて発砲した。5インチ砲弾はその顔面に直撃し、大量の血飛沫を撒き散らかす。

彼女はそれを見届けることもせず、次の獲物である小さなことなく可愛らしい足の生えた敵（同じく駆逐艦クラス）の敵に何の迷いもなくぶつ放す。

目標が小さいだけに、その駆逐艦は体の真ん中辺りで真つ二つに切断された。

この時点で、敵も反撃を開始する。

駆逐艦クラスと軽巡クラス、そして重巡クラスの敵が砲撃と雷撃を始める。

ミッドウェイはその攻撃を、この姿になったことで可能になった空母とは思えない機動力で回避していく。

目の前を叩きつける敵弾の水柱の多さを見ると、まるで海戦と言うより歩兵による陸戦のように感じる。

ミッドウェイは実に満足していた。

砲撃時の反動、そこから放たれた砲弾が敵を引き裂く音、それを喰らった敵の断末魔の悲鳴。

どれもこれも彼女をゾクゾクとさせ、彼女の内に潜む何かを刺激する。もちろん、敵もやられてばかりではない。

もはや発着艦はできないものの、敵空母の艦載機はまだ空を飛び回り、重巡の砲撃は装甲の薄い空母にとって未だに脅威だ。

そして、小さいながらも噛み付かれれば大きな傷を負わせてくる軽巡や駆逐艦。

どれも彼女の生存に大きな脅威となる。

だからこそ、徹底的に握り潰す必要がある。

ミッドウェイは自身の心の中に湧き上がる黒い感情を正当化した。

この戦闘は、必要な行為だ。

『深海棲艦』にしてみれば、それは恐怖でしかなかった。

目の前にいる艦娘はこれまで聞いた艦娘と武装面大きく違っていたし、戦闘に関する考え方に至っては、目の前の艦娘は異常、あるいはもはや病気の域に達している。

戦闘？

り級は恐怖を感じながらそいつを見る。

すぐ横にいた駆逐艦が敵弾を受けて、内臓を撒き散らしながら弾け飛んだ。

いや、違う。

周りを見れば、今にも発狂してしまいそうな現場になっている。

これは…。

海の碧は、味方たちの血の青に変わっている。

すぐ横にそいつの気配がした。

冷や汗が全身から噴き出す。

ただの Genocide：虐殺、だ。

耳元で強烈な音がしたのち、リ級の意識は完全になくなった。

海面には、リ級だった頭部の残骸が撒き散らされた。

ミッドウェイは粉々になった重巡の頭に一瞥をくれたのち、辺りを見渡した。

そこには、彼女が喰い散らかした戦場、あるいは死神が殺戮を終えた後のような惨状

があった。

生き残っているのは、彼女と狩り損ねた戦艦が一隻だけだ。

その戦艦は、最初に彼女が砲弾を叩き込んだ相手で、海面を必死に這って逃げようと

していた。

ミッドウェイはそれにトドメを刺そうとマスキットの銃口を向ける。

と、彼女の無線にノイズ混じりの声が聞こえた。

『こちら第4艦隊旗艦空母ジョン・F・ケネディ所属機ジョー・ローマ大尉だ。

友軍艦艇、応答しろ』

ミッドウェイは舌打ちしたのちに返答する。

「こちら元第3艦隊旗艦空母ミッドウェイだ。こっちは今忙しいんで後にしてくれませんかね?」

ローマと言うパイロットは無線の向こうで驚きの声を上げ、よく分からないことを言ってきた。

『と、言うことは、もしかしてFleet girlか?』

「Fleet girlが何かしらねえが、多分そうじゃねえかな」

『他に誰かいるか? 1人か? 複数人いるのか?』

「俺ともう1人いる。戦艦ニュージャージーとか言うお嬢様気取りがいる」

『分かった。今、そっちに向かっている。救援は必要か?』

「不要だ。あんたが来ても、もう獲物は残ってねえぞ」

『不要? ありえん。あんたが相手にしてるのは、この辺りで1番規模のデカイ『深海棲艦』のカリブ方面艦隊の本隊だ。』

まさか、あんたら2人だけで殲滅できる訳が…』

「来たら分かるだろうよ。んじゃ、そろそろ切らせてもらおうぜ」

『待て、戦闘終了後もそこに待機していてくれ。迎えを寄越す』
「へいへい、分かりましたよ。そんじや」

ミッドウェイは無線を切る前にマスケットを発砲した。

戦艦の頭は景気よく吹っ飛び、海面に肉片を撒き散らかした。

ローマは無線が切れる直前に、まるでこちらに聞かせるかのような発砲音を聞いた。

その音を聞いても、彼は『深海棲艦』の全滅を信じなかった。

敵カリブ方面艦隊の本隊は、戦艦と空母、それもフラッグシップクラスを中心とした

強力がかつ大規模な部隊であると、これまでの情報から判明している。

それをまさかだった2人の艦娘で殲滅するなど、不可能でないにしろ極めて困難な

ずだ。

ふと、エカテリーナからの救難信号が途切れているのに気付いた。

沈んだのかとレーダー画面を見るが、その姿はくつきりとレーダーに映っている。

まさか…。

本当に殲滅したのか？

数分後、ローマの機体が戦場に到達した。

驚いたことに、レーダー上には2つの反応があるだけの戦場が広がっていた。

ローマは危険は覚悟で僚機たちを待機させて単機で降下し、戦場を目視で確認する。

その海上だけ、妙な青色をしている。

さらに降下すると、灰色の海上目標がいくつもあることに気付いた。

それが何であるかは、見た途端に分かった。

『深海棲艦』の残骸だ。それも、凄まじい数だが、数える必要もなかった。

彼は母艦に連絡を入れた。

「アルバトロスよりJFKへ」

『こちらJFK。アルバトロス、どうした?』

「敵カリブ方面艦隊本隊の全滅を確認した。こっちに1機輸送機を送ってくれ。艦娘が2人いる」

『待て、アルバトロス。カリブ方面艦隊がなんだつて?』

「敵本隊は艦娘の手により全滅した、と言ったんだ。すぐに輸送機を送ってくれ。あの2人をなんとしても『保護』しなければ…」

『了解した。輸送機のETAは1時間後だ。それまでもつか?』

「もたせてみせるさ」

『分かった。JFK、交信終わり』

無線が切れた。

ローマは小さく息を吐くと、下にいる2人の艦娘に連絡を入れた。少しの間、待つて

もらわなければならない。

1時間後、到着したCV-22 オスプレイが、アメリカ艦娘ミッドウェイと、ニュージャーシーを『保護』。

F-35Cの護衛を伴いながら、再び1時間の道のりを戻り、第4艦隊と合流を果たした。

空母ジョン・F・ケネディからの着艦許可はすぐに下り、オスプレイはゆつくりと飛行甲板に脚をつけた。

こうして米軍初の艦娘は、無事にJFKに到着したのだった。

第1話 Next Navy

空母ジョン・F・ケネディに降り立ったミッドウェイとニュージャージーはCV-2
2 オスプレイから発せられるダウンウオッシュに追い立てられるように広大な飛行甲
板からアイランド式の艦橋へ向かった。

ハッチの近くで男が1人待っていて、2人が近付くと敬礼をした。

2人も見よう見まねで答礼を返す。

通過儀礼のようなこの行為が終わると、男は要件を伝え出した。

「第4艦隊へようこそ。私は本艦の副長を務めているウィルソン・ゴールド中佐だ。

早速で申し訳ないが、本艦隊の司令官がぜひ会いたいと君たちに言っている。

来てくれるとありがたいのだが……いいかな？」

「構いませんわ。ねえ、ミッドウェイ？」

「ああ、好きにしてくれていいぜ。こつちも聞きたいことがあるしな」

「ありがとう。では、付いて来てくれ」

そう言うと、ゴールド中佐は艦橋のハッチをくぐって中に入って行った。2人もそれ
に続いて、ハッチをくぐる。

艦橋内は、飛行甲板に比べると比較にならないほど狭苦しかった。ゴールドはその狭い艦内を通るこれまた狭く細い通路をずんずんと進んで行く。

2人も後を追うが、経験の差が進むスピードが非常に遅い。

ゴールドがふと気付いたように後ろを振り向いた。

その時にはすでに2人の姿は何人もの海軍将兵たちの中に紛れ込んでいた。

数分後になんとか脱出してきた2人を、ゴールドは隔壁にもたれて待っていた。

2人が近づいて来るのを確認すると、ゴールドは今度はゆっくりと歩き始める。

2人が追い付くと、ゴールドは話しを始めた。

「君たちが敵を叩いてくれたおかげで、私たちは早く帰れるようになった。第4艦隊はすでに、ノーフォークに向けて進路を取っている。」

現在の速度で帰還は4日後になる予定だ」

どちらも何も答えないので、ゴールドは次の話題に入った。

「君たちが助けた輸送船エカテリーナだが……」

2人に微かな反応があった。ゴールドは話を続ける。

「無事に我が勢力圏に入った。パナマに展開している第4艦隊の分遣部隊が護衛に着いて、あと2日ほどで運河に入るらしい。」

あの船の船長を含めた船員たちから感謝の言葉が君たちにくくつも来ている。

大手柄だな」

ミッドウエイが口を開いた。

「感謝されるようなことはしてねえよ。自国民を守るのは当然の義務だ」

「それで結構だ。しかし、政治的にはそうもいかないようだな」

「政治的に？」

「そうだ。詳しいことは、デビアス司令が教えてくれる……ここだ」

ゴールドは1つの扉の前で止まった。

綺麗な装飾が施された扉の案内板には作戦室と書かれている。

ゴールドはその扉をノックすると、答えも聞かずに扉を開けた。どうやら、最初から

決めていた動作らしい。

2人も後に続いて中に入ると、2人の先客がいた。

2人ともワーキングカーキの常装だが、それぞれの襟についている襟章には大佐と少将を表すものが付いている。

大佐の襟章の男は東洋人のようで海図が置かれた机のドアから見ると左側におり、少将は同じく机とドアの真正面に陣取っている。

おそらく、今日の前にいる男がデビアス司令だろう。

デビアスはミッドウエイたちを見てとると、笑顔を浮かべて言った。

「よく来てくれたな。私は本艦隊の指揮官、ケリー・T・デビアスだ。そして、こちらの男は……」

「アレン・G・ナガブチ大佐。この艦の艦長を務めている」

東洋人——名前から日系人のようだ——は、静かにそれだけを口にした。

ミッドウェイは自己紹介に答える。

「はじめまして、ミリオンダラー・マン司令官殿。それにキャプテン。知ってると思うが、俺は空母ミッドウェイだ。元第3艦隊旗艦。」

悪いが口調を直す気はない。少なくとも、そっちを指揮官相当と認識するまではな」

これだけ砕けた調子で言ったのだ。ミッドウェイは多少の叱責を予想したが、結果は彼女の予想と違ったものだった。

デビアスは嫌そうな顔を全く見せず、むしろ笑顔をより大きくしていた。

デビアスは表情を変えずに答えた。

「影でよく言われているよ。本当に偶然とは実に恐ろしいものだ。私自身は全く金満家ではないのだがね。」

さて、そちらの上品なお嬢さんは？」

「アイオワ級2番艦ニュージャーシーですわ。同じく第3艦隊の所属でしたの」

「ニュージャーシー……私の祖父が乗っていた艦だ。感慨深いものだ。私の祖父のこと

は知っているかな？」

ニュージャージーは少し考えるように首を傾げ、やがて顔をパツと明るくして言った。

「ええ、覚えていますわ。当時はデビアス坊やとよく呼ばれていましたのよ。懐かしいですわね。」

あの坊やは時々、乗員たちの食事を摘み食いしていましたわね」

「素晴らしい。祖父も昔話でよくしてくれていたよ。もちろん、摘み食いの話もね」

まだ話が盛り上がりそうなので、ミッドウェイが会話に割り込んだ。

「あー。昔話で盛り上がりつてるところ恐縮なんだが、本題に入ってもらえねえかね」

「…ああ、すまない。まず、どこから入ろうか…：そうだ、君たちが何者であるか説明しよう…」

デビアスはゆっくりと話し始めた。

この世界が、どのように歪んでいるかを。

全ての話が終わる頃には、すでに夜になっていた。

長い時間をかけた甲斐があつてか、ミッドウェイとニュージャージーは、自分たちが艦娘—Fleet girlsと呼ばれる少女たちの一員であることが分かり、数時間前に交戦した奇妙な敵が『深海棲艦』と言う正体不明の敵性勢力であることも知った。

また、この世界が彼女たちのいた世界とは全く別の物であることも理解した。

そして、栄えあるアメリカ合衆国海軍が過去の栄光に過ぎず、世界の海の守護者を日本国海上自衛隊の後継組織と言える国防海軍とやらが、その任を担っていることも。

別に日本が嫌いというわけではない（沈められたとはいえ、戦闘艦である以上撃沈される可能性は高くて当然だ）が、やはり疑問を持つてしまう。

世界唯一の超大国アメリカにできなかつたことが、世界第3位の経済力を持つているとはいえ極東の小さな島国に務まるのか、と。

この疑問の答えは、辛うじてイエスであることは、デビアスの説明で把握しているが、長期的に可能かというやはりノーであると言えるだろう。

彼女たちがこの世界に来る11日前に人類は勝利を得たものの、未だ困難な状態にあることは変わりなかつた。

パックスアメリカーナに比べると非力な、軍事力による新たなパックスジャポニカを存続させるには、矢継ぎ早に作戦を実施し、勝利を得続けるしかない。

彼女たちは、そのために戦うことが命令されるだろうと半ば予想していた。が、そうはならなかつた。

「残念だが、君らはまだ我が軍に入れんのだ」

「は？あんたらは、俺らが雇えねえつてことか？俺ら戦闘艦の仕事は敵を潰すことだ。

それなのに戦わせないと、軍も頭がおかしくなったのか？」

ミッドウエイは、デビアスに詰め寄った。デビアスは困ったような顔をして返答する。

『横須賀条約』の条文に載っているのだ。『艦娘に戦闘に参加するよう『命令』してはならず、もし艦娘自身が戦闘を望んだとしても、明確な意思を確認するために最低1日の猶予期間を設けなければならない』とな」

「どこのバカだ？ そんなアホらしい条約を考えたのは」

「最初にこの条約を作るよう促したのはF I D H（国連人権連盟）だ。それから一気に世界中の団体やマスコミを通して、国民や政府に普及していき、最終的には日本を中心とした数カ国によって締結された。

我が国がこの条約に加盟したのは、ほんの数日前のことだよ」

「ハッ、国連が考えそうなことだ」

「が、重要な条約だ。艦娘を運用するにはこの条約に加盟してからでなければならないという暗黙の了解ができているほどな」

「ふーん、面倒クセエことしやがるんだな人間は。…そういや、ウチが加盟したのは最近だっけいったな」

「そうだが」

「なるほどねえ。つまり、俺らがいなくても艦娘の運用を始めようとしてたわけだ」

「その通りだ。1週間ほど前の日本の首相と大統領との電話会談で突然決まったらしい。大西洋も取り返す必要があるとな」

「この話からすると艦娘は…」

「そうだ。日本側で手の空いている艦娘を10人ほど送って来るとのことだ。まあ、ちよつとした人材派遣だな」

「なるほど、艦娘が政治と切っても切り離せないわけだな。んで、日本側への見返りは？」

「いくつかの新兵器の技術提供と、安保理の新常任理事国入りの後押しだそうだ」

ニュージャージーが眉を細める。明らかに不満なようだ。

「彼らを入れるのは正しい考えではありませんわ。まだ、前大戦から70年しかたつていませんもの。もう少し後でも…」

「ニュージャージー、我々は政治に口出しするためには存在するのではない。政府が決めたことを確実にこなすことが使命なのだ。それを忘れて貫つては困る」

ニュージャージーは何も答えなかつたが、十分に理解した様子だった。

デビアスはさらに続ける。

「そして、現在の状況では日本無くして世界の安全保障など成し得ないのだ。…残念な

がらな」

デビアスは、言い終わると時計に目をやった。時間は8時を示している。

「長くなつたな。2人とも疲れただろう。今日はもう休むといい…大佐」

「はい」

「2人を食堂にでも案内してやってくれ。艦娘になつて初めての食事だ、いいものを食わせてやるといい」

「分かりました」

ナガブチは2人付いて来るよう促して部屋を出る。ミッドウェイとニュージャー
ジーはナガブチに続いて出て行つた。

1人残つたデビアスは、少女たちの評価を頭の中で考え、新部隊の指揮官に推薦するつもりでいる男との相性を考えた。

そして、結論を下した。

新艦隊―第9艦隊の指揮官は、ナガブチしかない。

部屋を出た3人は、狭苦しい鋼鉄の艦内を苦勞しながら歩いた。途中、乗員たちの敬礼に応えるために何度も答礼を返した。

ひと一人通るのがやつとの通路を歩きながら、ミッドウェイはぶつくさと思痴つた。

「クソツタレめ…。何だつて艦の中はやたらと狭いんだ？もつと広くすりやあいん

だ。そうしたらスッキリするのに…」

ナガブチが軽く後ろを見てから言った。

「そう出来ない理由は、君も知っているだろう？」

それに、この戦闘艦ほど合理的に作られたものはないだろう。常に完璧な行動を要求される戦闘艦にとって、不必要な物はあるだけで害になる」

「分かっているよ、キャプテン。その辺のことは、俺ら艦娘の方がよく理解している」

「ふむ、要らぬ世話というわけか。しかし、私個人としてはもう少し広くてもいいと思うのだがね」

「やっぱりそうか、俺もずっと前からそう思ってたんだよ。そうだ、勝手に改造して広くしちまえばいい」

「確かにな。次にドック入りした時に頼んでみるか…」

ニュージャージーが慌てて止める。

「そんなことできるわけないでしょう！もし、そんなことをすれば納税者たちにタコ殴りにされますわ！」

ナガブチ艦長、あなたも乗らないでくださる？」

「これは失敬。冗談が過ぎたな」

「俺は別にいいと思うんだけどな…」

ミッドウェイが小さく眩くと、頭に何か尖ったものが押し付けられた。彼女が振り返ると、顔を青ざめさせた。

どこから取り出したのか、RGM-84 ハープーンを握り締めて（余りの強く握り締められているのか、ハープーンは今にもへし折れそうだった）物凄い形相で睨みつけているのが目に入ったからだ。

ニュージャージーは捻じ曲げた口から言葉を漏らした。

「それ以上喋るな、まな板」

その余りのドスの効き具合に、さしものミッドウェイも素直に従った。ついでに謝罪もした。

「…はい、すみませんでした」

この一言で、ニュージャージーは一瞬で態度と表情を軟化させ、ハープーンをどこかにしまおうと言った。

「分かればよろしくてよ」

ミッドウェイはこの間、何も言わなかったナガブチを睨んでいった。

「あからさまな脅しを受けてる可憐な少女を放置するとは、あんたは悪魔か？」

ナガブチは鼻を鳴らして笑うと、返答した。

「さっきのはお前が悪いだろう、ミッドウェイ？ それに…」

「それに？」

「可憐な少女とは一体誰のことだ？ 私には、口の悪い空母とお嬢様を装っている戦艦しか見えないのだが」

ナガブチのニンマリとした笑みに舌打ちをしながら、ミッドウェイは押し黙った。

ニュージャージーも不満そうだが、何も答えなかつた。

ナガブチはそれを見て満足すると、先ほどと同じようなペースでゆっくりと艦内を歩き始めた。

それから数分後、ミッドウェイたちは下士官たちが集まる食堂に辿り着いた。

ミッドウェイは再び愚痴る。

「なんだよ、士官食堂で食えると思ったのに」

「今日は乗員たちと飯を食う予定だったのでな、敢えてこちらを選ばせてもらった。

それに、お前たちもこの空気に多少なりとも慣れていた方がいいだろうからな」

「ということは、これからしばらくはここで食べるとおっしゃるのかしら？」

「その通りだ。新艦隊に編入されても同じような感じになるだろうな」

ニュージャージーはあからさまに嫌そうな顔をした。その顔は、こんな汗臭いおっさんたちと飯が食えるか、と言っているように見える。

ナガブチは冷たく言い放った。

「そんな顔しても無駄だ。我が艦隊にいる以上、規律はしっかりと守ってもらおう」

ニュージャーシーは同意したらしく、小さく頷いた。

3人が食堂の奥に行くにつれ、食堂内が徐々にぎわめき出した。小さな囁き声がミッドウェイの耳に届いた。

「あれがFleet girlか？人間とまるで大差ないな」

「あれで『深海棲艦』共を潰せるのか？信じらんねえな」
などなど。

その中でも、やはりむさ苦しい艦隊勤務故の性か…

「なんだよ、結構可愛いじゃねえか」

「よせよバカ、あの娘らに手を出したらとんでもないことになるぞ」

「分かってるよ。別に愛でるぐらいイイじゃねえか。減るもんじゃなし」

「それだから、テメーは彼女ができねえんだよ」

「バカ！言うなよ恥ずかしい…」

などと、たわいもない会話をしている。

ナガブチにも、この会話が聞こえているらしく微かに顔を歪ませた。

上官たちの機嫌に敏感な水兵たちは、この表情の変化を瞬間的に見てとり、押し黙った。

ナガブチが言った。

「申し訳ないな。何せ陸を離れてからだいぶ時間が経っている。欲求不満が溜まっているのだろうが……」

ミッドウエイはヘラヘラと笑いながら答えた。

「いいってことよ。連中の言う通り、減るもんじゃねえしな」

そう言うと、ミッドウエイは食堂全体に響く声で言った。

「おい、水兵ども！俺に手を出しても構わねえ！が、それで骨の一本や二本、あるいは目玉の一つや二つなくなってもいいならな！」

一瞬の沈黙。その後、水兵たちから歓声が上がった。

もちろん、この歓声はお触りOKの許可が出たからではなく、未知の存在と言えた艦娘から出たちよつとしたジョークに親近感を抱いたからだ。

ミッドウエイはドヤ顔を決めると、ナガブチの方を向いて言った。

「これが、人心把握術ってヤツだ」

ナガブチは呆れた顔をした。

「それは人心把握術などではない。ただの向こう見ずなバカだ」

「バカで結構。それに、結果的に上手く行ったんだからいいじゃねえか」

「確かにな。だが、そんなやり方では越えられん壁もあるんだぞ」

「どうとでもなる。心の持ちようだな」

やたらと馬鹿でかいテーブルを前に、座り心地がかなり悪い背もたれの無い椅子に座って待っている、ナガブチが数人の男たちを連れて戻って来た。

男たちの手には、異様な大きさのハンバーガーとむやみやたらに多いベトベト油のフレンチフライ、そしてゲンナリさせられそうなほどタツプリのコーラがトレーに乗せられている。

ナガブチは笑顔を浮かべて言った。

「我が艦オリジナルレシピのハンバーガーだ。少々、胸焼けするがなかなかの物だぞ。たらふく食べるといい」

ニュージャージーは死んだ目をしながら言った。

「いえ、見るだけでお腹いっぱいですわ」

「そう言うな、育ち盛りだろう?」

「これでも年齢と言うより艦齢?は、あなたより上ですわ!」

「はいはい、取り敢えず食べてみる」

ニュージャージーは助けを求めるように、ミッドウェイを見た。ミッドウェイは首を左右に振って諦めるように促した。

ニュージャージーはうなだれたが、やがて小さな口でハンバーガーに噛み付いた。

ゆつくりと咀嚼し、飲み込む。そして、テーブルを拳で叩くと声を絞り出した。

「こんなジャンクが美味しいと感じるなんて……！悔しいですわ……」

そう言い終わる前に、ニュージャージーは目の前にあるジャンクに再びかぶりついた。もはや、お嬢様のお上品さはかなぐり捨てられている。

ミッドウエイはその光景を目の当たりにし、目の前にあるへヴィーなカロリーの塊にちよつとした興味が湧いた。

ミッドウエイは、そのハンバーガーを掴み大口を開けて食べた。

予想通りの脂っこいパティと申し訳程度の玉ねぎ、その辺のスーパーで売っている大量生産された安物と大して変わらないバンズが口の中に入ってきた。

そして、それらが何故か見事に味の調和を醸し出していた。なるほど、ニュージャージーが喰る理由がよく分かった。ついでに、腹立たしい理由も。

とにかく安物の食材を使っているにもかかわらず、それが一体どんな調理をしたかは知らないが、全てが互い短所を補い長所を生かし合い、それどころか高めているように感じられ、非常に美味しい。

ミッドウエイは言った。

「ちくしょう、なかなかの物を作るじゃねえか。気に入ったぜ」

周りの水兵たちは、まるで自分が褒められたかのように誇らしげな表情をしている。

1番前のグループの水兵がデカい声で言った。

「たりめえだ！何せこの艦の飯は我が海軍一だからな！」

「こんなジャンクフードが1番では、海軍はもう終わりだな」

ミッドウエイの言葉に、その水兵が答えた。

「否定できねえな！」

バカ笑いが食堂ないで沸き起こった。

艦娘たちは、すっかり汗臭い男たちと馴染んでいた。

6月3日

ミッドウエイは胃のむかつきを覚えて目を覚ました。

チクシヨウめ、あんなジャンクを遅くに食ったせいだ。

彼女は腹と口を押さえながら起き上がり、割と上質なベッドの横にあるサイドテーブルの上の時計を見た。

時刻は午前5時25分。まだ、日も出ていない深夜だ。

が、彼女は与えられた部屋（空いていた将官用の部屋だ）を出て、薄暗い艦内をゆっくりと歩き出した。

途中、数人の水兵に道を尋ねたり昨日の夜に話した相手と談笑したりしていたので、目的地である飛行甲板に出る頃には、日の出になっていた。

彼女は甲板の端の方に歩いて行き、作業の邪魔にならない所を見つけるとそこで艀装の収納スペースで保管されていた小さなヒュミドールを取り出し、葉巻を一本手に持った。

彼女はそれを吸おうとするが、ふと、シガーカッターを持っていないことを思い出し、仕方なく噛みちぎった。

よく考えると、この行為はランシング少将がよくやっていたことと全く同じだ。

彼女は苦笑した。あの男の性格を引き継いでいるとは……運がない。

そんなことを考えつつ、彼女はシガーマツチで葉巻に火を点け始めた。初めてのはずだが、体が覚えているような感覚で、葉巻をゆつくりと回しながら火で炙った。

火が点いたことを確認すると、彼女をそれを吸い始めた。

口の中でゆつくりと燻らせ、その味を楽しむ。もちろん、噛みちぎっていたし、なおかつ保存方法もさほど良くないため、この葉巻の本当の味を楽しめてはいないが、彼女には今のままでも十分だった。

なるほど、ランシングがハマるのも頷ける。

ふと、背中に視線を感じて、後ろを軽く振り返った。そこには、ナガブチ大佐がいた。ナガブチはゆつくりと歩いてきて、彼女の隣で立ち止まり話しかけてきた。

「どこの銘柄だ？」

「さあね、こいつは初期装備のようだな。まあ、俺にとっては銘柄なんかはどうでもいい。吸えりやあな」

「そうか」

「…何しに来た？世間話をするために来たわけじゃねえだろ？」

「なんでもお見通しということか。まあ、その方がこちらが楽でいいか」

「勿体ぶつてねえでさつさと話せよ」

「ふむ、上官にはもう少し敬意を払って欲しいものだな、ミッドウェイ」

「アン？」

「先ほど、上から命令が来た。私に新艦隊の指揮官になれとのことだった。新艦隊とはもちろん…」

「艦娘部隊か」

「正確には艦娘部隊を加えた部隊だ。現在、東海岸側のドックがフル稼働で艦娘を運用するための施設艦と指揮艦に改造しているとのことだ」

「つまり、海上を移動する基地を作ろうって魂胆か」

「その通りだ。現在のプランでは揚陸指揮艦を改造した指令艦と、強襲揚陸艦を改造した艦娘の出撃、補給、整備、工廠施設艦、護衛のイージス巡洋艦と駆逐艦で構成された機動部隊になるらしい」

「なるほど。指揮官はその全てに責任を持つ。トンデモない仕事を任されたな、ナガブチ大佐？」

「なに、いずれなりだと思っていた役職だ。それに、よく分からない少女たちの部隊が一つ加わるだけの話だ」

「だけ、ねえ。それで、艦隊名は？」

「第9艦隊だそうだ」

「欠番艦隊…か。なかなかいい名前だ、気に入ったぜ。で、いつその部隊の準備が整うんだ？」

「まだ少し時間がかかるらしい。早くても、3週間後で遅くなれば一ヶ月後になるだろう」

「ふーん。楽しみだな、一ヶ月後が」

彼女は葉巻を指先で弾いた。と、同時に艀装を展開し、マスケットを左手に持つと、宙を舞う葉巻に向けて発砲した。

銃弾は正確に葉巻を撃ち抜き、バラバラの破片になり強風に吹き飛ばされた。

彼女は満足気にその光景を見ると、登り始めた太陽を背に艦橋に戻り始めた。

背を向けて去っていくミッドウェイを見ながら、ナガブチはぼんやりと考えごとをした。

あんな人間離れした少女たちを、これからたった一人でまとめなければならぬのだ。

ミッドウエイの言う通り、とんでもない仕事ではあるが…。

「やるしかあるまい」

ナガブチはすっかり水平線から離れた太陽に顔向けた。

再び訪れた朝を、彼は決意の目で見守っていた。

第2話 ANTI HOPE

6月10日

深い青色の南太平洋を、10隻の船団が航行していた。

船団は輪形陣を構築しており、中央に3隻の輸送船と駆逐艦1隻、その周囲を護衛の艦艇6隻が取り囲んでいる。

さらに、その船団から数十海里先行して数機の対潜ヘリが海底の敵に耳をそばだてていた。

船団の目的は、『深海棲艦』により封鎖されたオーストラリアへの物資輸送。

言うまでもないが、周りは大量の敵であふれている。

そんな中を行く彼らの恐怖はいかほどのものか、推し量ることはできないが、この船団の護衛を任せられ、輪形陣の中央後方の位置にいる新型駆逐艦スターレット級駆逐艦2番艦フィラデルフィアの艦長マイキー・ヒッツ中佐は少なくともこの仕事が嬉しくなかった。

全くなんだってこんな貧乏くじを引いちまったんだ？

あの尻軽女と会ってから良いことなすだ。チクシヨウ、帰ったらあんな奴部屋から追

い出してやる…。

しかし、いいこともある。

彼にとつて幸運なこと、それは最新鋭の戦闘システムと優れたステルス性を持つこのファイラデルフィアに乗っているということだ。

スターレット級は、あのやたらと高額な建造費のために量産化が困難だったズムウォルト級の船体を小型化し、なおかつステルス性を下げることにより低コスト化を実現した後継艦だ。

さらに、ミニアーセナル（アーセナルシップ構想を小さくしたもの。正確には、アーセナルシップにおける最大の問題点だった他艦へのシステム依存を自艦に組み込むことで、必要最低限の戦闘は可能にし、自衛火器の強化等を行ったもの。アーセナルシップに比べ建造費は増加したものの、個艦戦闘能力の向上により生存性が増している）と呼ばれるシステムにすることで、乗員の人数を抑えることにも成功している。

そのため、この艦には僅か35人の乗員（航空要員を加えるならば50人）しか乗艦していない。

指揮官にとつて部下の数が少ないことは、負担が少ないことに直結する。そして、あまり言いたくはないが、被害が出たとしても最小の損害で済む可能性が高い。

その辺りは、他の艦のあるいは輸送船の指揮官たちよりほんの少しストレスが少なく

済むだろう。あくまで、フィラデルフィア一隻だけならば。

彼はこの船団の全てに責任を持っていた。当然、輸送作戦の失敗のあかつきには彼がこの最新鋭艦の艦長から降ろされ、後方の何も起こらない淋しい僻地に送られか、苦勞の割に合わない成果しか出すことのできない機雷除去部隊の指揮官にされるだろう。

彼は気分が悪くなった。

上層部は俺を左遷するためにこの仕事に付けたに違いない。そうじゃないと空母一隻も付けないで敵の哨戒網を突破する輸送作戦を考える意味がない。

この作戦を考えた奴はきつと軍事のことなどまるで分かっていないと素人だ。

もつとも、最近この航路で『深海』側の襲撃がほとんどなく軍も安全と判断したという理由もあるだろう。

が、彼に言わせれば狡猾な『深海棲艦』は小さい獲物を襲わないことで人類側を油断させ、彼らのような大部隊を狙った罠でしかない。

まあ、唯一の救いは、あの輸送船の中に上陸部隊を満載しているわけではないことくらいだろう。

彼は、艦橋の艦長椅子に座り視界の悪い窓の外を見ながら、彼の予想が杞憂であることを祈った。

その祈りが、届くことはなかった。

アンチ・ホープは、その船団を数時間監視し続けていた。

12ノットで突き進む10隻の船団は、時々進路を変え潜水艦に襲われる可能性を避けようとしている。

少女は、その光景を滑稽に見ていた。

この辺りには彼女たちの部隊しかない。奴らのやっていることは全くの無駄骨だ。さて、どう調理してやろうか…。

アンチ・ホープは数秒考えた後、小さく頷くと行動を起こした。

艦娘はレーダーに映りにくい。多少なりとステルス性が考えられている彼女は尚更のことだ。

じっくり時間をかけて接近し、そして…。

首を狩る。

彼女はゆっくりと動き出した。

ヒツツは行程の3分の2を終えたことで、少しだけ安心していた。

敵の索敵機はおろか潜水艦のキャビテーションすら拾っておらず、どうやら上の予想した通り『深海』の連中はこの辺りの封鎖活動を行っていないようだった。

緊張感が緩くなり、楽観的な考えが広がっていることが時々聞こえる当直要員たちのジョークから分かった。

指揮官として、それを咎める必要があったが彼は特に何も言わなかった。

いつまでも緊張しっぱなしでは士気が下がるし、ミニアーセナルのために乗員が大幅に減っている中で1人ダウンすれば戦闘に影響が出かねない。

部下たちに対する責任が減ったのはいいが、部下たちの健康状態の責任が強くなったのはあまりよろしくない。

艦長の責任を緩くするのが目的の筈なのに、人員削減が新たな責任を生んだのでは元も子もない。

帰ったらこの件の報告書を書かねばとぼんやりと考えていると、副長のアリス・スレイター少佐が彼に話しかけてきた。

「艦長、よろしいですか？」

ヒッツはスレイターの顔を見て答えた。

「なんだ、ガバナ―？」

「その呼び方はやめて下さいと何度言えば分かるんですか？」

スレイターは呆れた声で言った。このあだ名は彼と同じ名前の登場人物を演じたあの俳優が州知事だったことから来ている。

ヒッツはニヤニヤしながら返した。

「何度言われても分からないな」

「それならあなたは指揮官に向かないと報告せざるを得ませんね」

真顔でスレイターは言った。

「好きにすればいいさ。それで、何の用だ？」

スレイターは思い出したように切り出した。

「もう30時間も仮眠なしでしょう？そろそろお休みになられたらどうでしょうか？」

「俺はまだまだやれるぞ。そういう君はどうなんだ？」

「私は3時間前にあなたに言われて仮眠を取りました。覚えておられないのですか？」

ヒツツは数秒間考えた後言った。

「そうだったな」

「やはりお休みになつてください」

「しかし……」

「言うまでもないですが、指揮官は必要な時にまともな指揮ができる状態でなければいけません。今のあなたは、まともな指揮ができるとは思えません」

ヒツツは自身の副長が発した言葉にカツとなり、怒りの声を浴びせようとしたが、彼がスレイターを選んだ理由を思い出し、考え直した。常に最善の意見を口にしてくれる部下はそういない。

スレイターの言う通りだ。

ヒッツは仕方なく言った。

「分かった。ただし、何かあればすぐに知らせてくれ」

「もちろんです、艦長」

「それでは、後を頼む」

スレイターは敬礼をして答えた。

「頂きました」

ヒッツは椅子から立つと、自室に戻って行った。

彼が仮眠を始めてから僅か10分後、彼は喧しい電子音に叩き起こされた。

彼は苛立ちながらも、マズイことが起こったことを確信しながらインターコムに声を吹き込んだ。

「何があつた？」

『敵襲です！我が部隊の西方30キロメートルの位置、ミサイルと思われるレーダー反応を捕捉し、迎撃命令を発した所です。すぐにこちらにお戻りください！』

インターコムの向こう側にいるスレイターが早口にまくし立てた。

ヒッツは瞬間的に状況を把握し、すぐ行くとだけインターコムに伝えて自室から走り出た。

彼がSMC (Ship's Mission Center) に着いたのは僅か30

秒後だった。

彼は冷房の効いた室内に入るなりすぐに尋ねた。

「状況は？」

「ディスプレイに映っている通りです」

スレイターは簡潔に述べた。

ディスプレイにはハーブーンと表示されたブリップ4基とSM―6スタンダードERAMと表示されたブリップが8基、彼らの船団を表す光点の塊、敵の予想位置を示す光点が映し出されていた。

それら、特にハーブーンとERAMはリアルタイムでジリジリとディスプレイ上を進んでいく。

画面上ではゆっくりと進むハーブーンであるが、実際にはマツハ0.8という亜音速で彼らを殺すためにすつ飛んできていることを、ヒッツはもちろん知っていた。

一方の彼らが放ったERAMはマツハ4でハーブーンに迎い、自らと敵弾を破壊するために突き進む。

ヒッツは疑問に思った。なぜハーブーンがこちらに襲いかかってくる？この辺りに味方はいないはずだ。

つまり…。

報告にあつたアンノウンか…。

彼がその結論に至るまでの間にも、ブリップは進み続ける。

S M Cの全員が息を詰めてその光景を見ていた。

突然、強烈な衝撃と共にデイスプレーにE R A Mがさらに2基発射された。フィラデルフィアのシステムが1基仕留め損なうと判断したのだ。

ハーブーンのブリップとE R A Mのブリップがゆつくりと近付きそして、くつついた。

ブリップは一瞬だけ光るとそのまま消滅した。

「ターゲット3基を撃墜。1基抜けず、第2波インターセプトまで40秒。…更に4基のハーブーンを捕捉！E R A M発射、インターセプトまで1分10秒」

フィラデルフィアの戦闘システムが自動的に迎撃を行う。

人間はそれをただ黙って見るか、淡々と報告するしかすることがなかった。

ヒツツはシステムの進歩に驚嘆したが、同時に恐怖も覚えた。そう遠くない未来では、人が死なない戦争が当たり前になるかもしれない。

それは、彼らの仕事がなくなると同時に、開戦するに至る沸点の低下を招き戦争の起こりやすい世界にしてしまうことになる。

それは、世界にとって不幸なことであるのは言うまでもないだろう。戦争は、起こる

たびに憎悪を生み、その憎悪を取り除くために戦争を起こすという悪循環を作りやすい。

戦争が起こりやすいということは、新たな憎悪作りやすく、人々が分かり合う世界を一層遠ざけてしまうことに繋がるのだ。

そして、タチの悪いことに機械とは時に失敗する。

「第2波回避されました！敵弾予測目標、輸送船レイジー・ジェニー！」

ヒッツは命令を発した。

「ジェニーに退艦命令を発令、各対空火器は全力迎撃！」

彼の命令が届く前にフィラデルフィアのC I W S（ズムウォルト級よりステルス性が低くても構わないので搭載された）が銃撃を開始した。

さらに周囲を囲む艦艇たちも単装速射砲やC I W Sで対空迎撃をかける。

「着弾まで10秒」

距離はすでに10キロを切っている。

やかましい銃声がSMC内にも響き渡り、外の緊迫した状態が嫌でも感じられる。

毎分4500発の20ミリ弾が7隻の護衛艦艇から火線を引きつつ放たれるが、ディスプレイ上をジリジリと進むハーブーンは一向に落ちない。

SMC内に焦燥感が湧き出した。たった1発のミサイルが何人もの人間の命を奪う

ことを、彼らは止められそうになかったからだ。

着弾までの秒読みがヒッツの耳に入ってきたが、彼はそれがまるで他人事のように歪んで聞こえた。

ハーブーンを示すブリップが信じられないほどゆつくりと動き、ジェニーと重なった。

重なった後、数刹那は何も起こらなかった。S M C内に敵弾が不発だったのではないかと言う儚い希望が生まれた。

それは次の瞬間に起こった爆発音と、衝撃波で踏み躪られた。

「ジェニー大破！」

言わなくても分かる報告を聞いて、彼は怒りを感じた。もちろん、報告をした部下ではなくこの忌々しい攻撃を行った『深海棲艦』に対してである。

艦橋からの連絡も入る。

『艦橋よりS M C、ジェニーが被弾！傾斜角はもう30°を超えています』

「すぐに救助隊を送れ」

『もう編成を始めます』

「分かった、出来るだけ急げ」

ヒッツは艦橋との連絡を終え、各艦に救助の指示を出す。

その一方で、彼はディスプレイを見つめていた。

他のハーブーンは、ERAMに叩き落とされていた。次弾が飛来する様子もどうやらなさそうだ。

が、まだ警戒を続ける必要がある。

彼が指示を出そうとしたその時。

ソナー要員が悲鳴に似た報告をした。

「ソナーに感あり！数は…10以上、方位は360。全方位、囲まれています！」

「距離は！」

「ごく近く、10キロ圏内です！」

ヒツツは舌打ちした。これでは、『ライジング・ストーム』の二の舞だ。

潜航中では攻撃も行えない。今、この状況で攻撃を行えば、ジェニーの乗員たちは爆圧でグチャグチャのミンチになるだろう。

彼は浮上と同時にジェニーの乗員に注意して攻撃するように指示した。と、同時に輪形陣をできるだけ維持したまま回避行動を取るように指示をだした。

これ以上の指示ができないことに、彼は腹を立てた。

彼はスレイターにSMCを任せ、自身は艦橋へ向かった。

『深海棲艦』が浮上し終わると、彼らの船団は地獄と化した。

すぐそこに現れた敵に向けて主砲が放たれる。

当然だが、現在の艦艇はこのような近距離戦闘を考えられていない。目視圏外でのミサイル合戦を繰り広げることを想定しているため、その艦体は薄い装甲で覆われている。

第二次大戦時の艦艇を模した『深海棲艦』はその一方で遠距離戦では弱いが、このような近距離ではその分厚い装甲、強力な主砲と魚雷がその真価を発揮する。

彼が指揮する船団は、360。全ての方角に現れた『深海棲艦』に襲われ、1隻また1隻と鉄の吐息を吐きながら海中に没していく。

ヒツツは艦橋の風防越しにその光景を見ていた。

何もかもがどうしようもなかった。

彼は乗艦を何としても守ろうと指揮を取り続けたが、その頭の中ではいくつもの疑問が渦巻いていた。

いつから追尾されていたのか。

あれだけ警戒していたにもかかわらず、何故奇襲などされたのか。

俺は一体どこで間違えたのか。

答えの出ない疑問が頭を巡り続ける。

疑問の堂々巡りが続くなか、突然攻撃が止んだ。

彼の船団は、もうフィラデルフィアだけになっていた。

異様な沈黙が、先ほど地獄のごとき状態だった戦場を覆う。

最初は、小さなノイズが聞こえただけだった。

それが徐々に大きくなり、やがてフィラデルフィアの艦内のスピーカーから声が響いた。通信室で受信した音声を艦内に流しているのだろう。

『こんにちは、人間の皆さん。私は、アンチ・ホープです』

ふざけたような口調だが、ヒッツは何故かその声に背筋が震えた。

声が続ける。

『これは、『深海棲艦』からの正式な宣言です。よく聞いてください。』

『ここに『深海棲艦』は、『人類』に、そしてそれを擁護する全ての者に正式に戦線布告するものである。』

交渉にも対話にも我々は一切応じない。我々は、『人類』を抹殺し終えるまで決して戦闘を放棄しない。

我々が滅ぶか、『人類』が滅ぶか。

雌雄を決する時が来た』

以上です』

ヒッツは啞然とした。コイツは一体何を…。

スピーカーから再び声が發された。

『生存艦へ告ぎます。貴艦が生かされたのは、この事実を世界に知らせるためです。今回だけは、生きて港に帰ることを許します。』

ですが、次にこの海原に出てきた時は…決して容赦しません』
声はそこで途切れた。

S M Cからの連絡で、それまで周りに展開していた『深海棲艦』が1隻残らず姿を消したことが分かった。

ヤツらは宣言通り、フィラデルフィアへの刑の執行を猶予したのだ。
ヒッツは唇を強く噛んだ。血が流れ出るが、構わなかった。

『艦長、どうなさいますか?』

スレイターがS M Cから指示を求めた。

彼は齒の間から絞り出すように言った。

「艦隊司令部に連絡。内容は『我、敵ノ攻撃ヲ受ケ本艦ヲ残シ壊滅』だ。上の判断を仰ぐ。もつとも、答えは分かっているがな。」

…生存者はいるか?」

スレイターも、他の乗員たちも何も答ええない。それが何を示すかは、ヒッツもよく分かっていた。彼らに、今救える命は存在しない。

ヒツツは言った。

「180。転針。…撤退する」

彼は自身への嫌悪と、屈辱を噛み締めながら針路を変えるフィラデルフィアの風防からゆっくり転回する海を眺めた。

その日の同時刻。

各国の政府関連省庁、行政府、各議会のホームページに大規模なサイバー攻撃がかけられた。

それらのホームページは、『Hello Humans, Good-bye』と言う文言が書き込まれただけだったが、それが意味するところは誰も分からなかった。

日米両政府は、このサイバー攻撃を中国軍の61398部隊の仕業ではないかと考えていたが、中国政府のホームページも同様に書き換えられていたためにその可能性は否定された。

次に容疑者として考えられたのは国際的ハッカー集団『アノニマス』だったが、彼らがこのような行為をする動機が全くなかったため、これもまた除外された。

結局、この言葉の意味は分からず、騒ぎ立てていたマスコミも新しい事件にその報道を移した。

一部の陰謀論者は、この言葉を『新世界秩序』が行動を起こす暗号ではないかと話題

になったが、それもやがて消えていった。

この文言の真の意味が分かったのはそれから2週間後のフィラデルフィアの帰還後であった。

そこで人々は初めて気付いたのだ。

あの言葉が、自分たちに向けられた明らかな敵意であり、宣戦布告であったことに。

真の意図が分かった時には、もう遅かった。

『深海棲艦』による徹底時な人類抹殺作戦は、すでに始まっていたのだ。

第3話 深海の王

7月4日

冷たい海は嫌いだ。

少女はいつも考えていた。

私は温暖な海の方が好きに違いない。

違いないとは、どういうことか。

何故なら、彼女にとって暖かい海は架空のものでしかないから。

彼女は、生まれてから北の氷海で監視を続けていた。

ドックと北極海を往復するだけの生活。

それが、彼女の全てだった。

そんなつまらない、しかし、彼女という存在にとってかけがえのない生活が突然崩壊した。

『やまと』。

それが、彼女から全てを奪った敵だ。

あの訳の分からない潜水艦は、彼女のささやかな幸せを奪っていった。

忘れたいが、決して忘れられないだろう記憶。

彼女はゆっくりとその記憶を反芻し始めた。

シーウルフ級2番艦キングは、姉のアレキサンダーと共にお偉いさんが勝手に決めた『オペレーションA（オーロラ）』なる作戦のために、北極海に派遣されていた。

目的は、『やまと』ことシーバットを強制浮上、それが不可能なら2隻で撃沈することだった。

彼女は、心の奥底で『やまと』を舐めてかかっていた。

第7艦隊を翻弄したり、レッドスコープピオンを損傷させたり、第3艦隊にかなりの損害を与えたり、東京湾のサイレント・サーヴィスの包囲網を突破したりしていたが、所詮は旧式艦相手。

私たちシーウルフと、それを操るベイツ兄弟に勝てるわけがない。

案の定、最初は余裕だった。

『やまと』は、こちらの手の中で踊り、こちらの策にまるで気付けなかった。

やはり、間抜けだ。所詮、合衆国、いや世界最強の原潜2隻の前ではモビーディックなど取るに足らない存在に過ぎない。

しかし、ツインズ・ホーンを抜けてから突然、彼女は不安に苛まれ始めた。

何故かは分からない。ただ、艦である彼女に有るはずのない第六感とでもいうものが

不安にさせていた。

不安というものは、よく当たる。杞憂で終わることは滅多にない。

今回も、それが適応された。

彼女は、『やまと』が放ったまるで彼女のキャビテーション・ノイズに付いてきているかのように見える信じがたいほどのプログラミングが施されたMk-48魚雷を喰らってしまった。

彼女の艦体に大量の海水が流入し、そのまま沈んでいく。

艦内の乗員は氷点下の海水に曝され、おそらく即死だっただろう。

しかし、彼女の死はそう簡単に訪れない。

彼女の体はHY-110高張力綱で出来ていたが、その体が耐えられる深度は610メートルだ。

当然ながら海はそれより深い。彼女たちが戦っていた北極海の平均深度は、1330メートル。

圧壊危険深度を遥かに超える。

彼女は最初、その圧倒的水圧に耐えた。

この程度の力で、私が破壊されてたまるか。

しかし、やがてその強力な水圧に耐えらなくなってきた。体が締め付けられ、少しずつ

つ、その体が捻じ曲がり始める。

やがて、彼女の体の何かが切れた。

これまで経験したどのような苦痛よりも激しい痛みが体を突き抜け、彼女の意識は完全に消えた。

消えたはずの意識は、体がなくなった今もどこかよく分からない空間を漂っている。

体を優しく包み込んでくれるその空間は、暖かく、どこか懐かしい印象だった。

彼女はそのまま過ごすことも悪くないと考えた。

その途端、彼女は突然、その夢見心地な空間から現実の世界に呼び戻された。まるで、彼女がそこには困ると誰かが急いで彼女を元の世界に引っ張るように。

彼女は一つずつ気付き始める。

漂っていた空間は、実は海中であり、彼女が欲していた温暖な海であるために暖かかったことに。

彼女は、目を開けた。

そこは、北極海より少し濁っているが、多くの生物が住む世界だった。

キングは、それから暫くの間海中を漂っていた。

妙なことに、体は鋼鉄製ではなく乗員たちと同じく有機物によって構成されているようだ。

しかも、さらに奇妙なことに、兵装や各種センサー、システム等は全ての艦だった時と同じで、全てが運用可能だった。

一つ、彼女がこの体を得て気付いたことがある。

人間の体とは、あまりにも繊細であることだ。

鋼鉄に比べると、あまりにも貧弱。機械と比べると、あまりにも複雑過ぎる筋神経。センサーと比べても、ほとんど差を感じさせない鋭さ。全てが繊細でありながら、それを難なく動かしてしまうその頭脳。

艦艇だった時は、決して感じる事ができなかつた感覚だ。

彼女は考える。

この姿を得た意味は？

何者かの意思か。それとも…

「私の意思…か」

彼女は呟いた。

小さな泡が海面に向かって登っていく。

彼女が発した言葉は、彼女の耳にクリンな音声で届いた。まるで、地上で発したようだ。

どうやら、ただの人間ではないらしい。もつともそれは、この海の中で酸素ボンベも

持たずに長時間潜り続けていることから分かつてはいたが。

彼女のソナーが反応したのはそれからすぐだった。

正体不明の水上移動体が複数。

彼女は本能のままにその移動体の情報取得に努める。

方位0—3—5。距離9海里。数は8。速度は12ノット。音紋照合：友軍、それ以外の艦艇に該当なし。

つまり、全く正体が分からない連中が8隻、ノコノコとこちらの雷撃範囲に入ってきたわけだ。

潜望鏡を上げて観察したい所だが、この距離では見つかる危険性がある。今は何もしないほうがいいだろう。

ゆっくりと進む移動体は彼女の前方1海里の地点を斜めに移動していった。

彼女は息を潜める。

この距離だ。いくら無反響タイルコーティングを施した艦体とはいえ、ほんの僅かな雑音でも発見されるだろう。

彼女は沈黙を守り続けた。

数十分後、安全な距離になると彼女はようやく一息ついた。彼女の口から気泡が2つ登っていく。

取り敢えずのところは安全だろう。

彼女は潜望鏡を上げ、先ほど通過した移動体たちの観察を始めた。

黒と白と灰色を基調にした人型の何かがそこにいた。

あれはなんとという化け物だ？

彼女は観察を続ける。

先ほどの通過で入手できたデータと、実際に見た情報を照らし合わせた結果、真ん中な人に近い形のヤツが大型艦で、周りのよく分からないヤツが小型艦であるという認識を得た。

もつとも、周りの小型艦の方が中央のヤツより明らかに見た目が大きい。

どうやら、見た目の大きさとデータ上の大きさは比例しないらしい。

観察を続けること1時間。

あの妙な連中は水平線の向こう側へ行ってしまった。

取り敢えず得られた情報を、自身のシステムに記録し、次に備える。

彼女はその出来に満足すると、まるで床に寝転ぶような姿勢を水中でし、眠りに就いた。

キングが目を覚めたのは、眠っていなかったセンサー類が彼女を起こした為だった。

彼女はざっと4時間ほど寝ていたらしいと、彼女のおそらく人間の物より正確であるう体内時計が伝えていた。

彼女はセンサーが得た情報を確認する。

正体不明の潜水目標が6つ。

速度は5ノットほどの極低速。馬鹿でかいガタピシ音を発する旧式艦のようだ。

彼女はデータベースからそれらの音紋を探る。

てつきり、ロシアのキロ級かと思つたが、そうではないようだ。

彼女は音紋を発見した。

しかし、キロではない。いや、それどころか現代艦ですらない。

発見した音紋は、ベイツ艦長がどこからか拾つてきた第二次大戦時の音紋で、なんとか聞き取れるものだったが、それでも判別できた。

伊―19、伊―168、伊―58、伊―8、伊―401、伊―26。

それが、今彼女の目の前にいる潜水艦たちだ。

妙なことになった。

これで今の時代がさっぱり分からなくなつてしまった。

私は沈むまで199X年にいた。

しかし、気付けば人の体になっているし、変な化け物が遊弋しているし、第二次大戦

の潜水艦が目の前に現れた。

全くもって理解し難い。

彼女はしばし考えたのち、理解することを捨てた。

今必要なのは、単純な答えのみ。

敵か、味方か。

少なくとも、さっきの化け物ども都比べれば友好的に接してくれそうだが…。

どちらとも言えない。

向こう側が気付いた。

こちらが何者か探るようにゆっくりと動き、包囲しようとしている。

第二次大戦時の日本艦にしては珍しい群狼戦術だ。

少なくとも頭は使えるようだ。

それならば…。

試してみる価値はあるだろう。

彼女はしばらく考えてから、たどたどしくピンを打ち始めた。

さて、これで状況はどちらに転ぶか…。

サイパン・テニアン両島の奪還の後、日本国防軍及び米軍は両島に幾つかの部隊を展開させた。

この島は、今後の太平洋攻略のための重要な拠点となるからだ。

そのため、国防海軍は急遽日本国内の各鎮守府、泊地、警備府から艦娘及び艦艇を集め、小規模ながらも派遣部隊を編成したのだ。

この新マリアナ守備隊は、艦娘部隊4個艦隊、通常艦艇による護衛艦隊、国防陸軍の第二師団より2個大隊、米海軍第7艦隊の一部部隊、米海兵隊1個大隊によって構成されている。

この内、艦娘部隊の1つは全員が潜水艦娘によって構成された潜水艦隊だった。

彼女たちは、この数ヶ月マリアナ付近の海域の哨戒をして回っていた。

そして、7月4日の今日。

彼女たちは約3日ぶりの母港への帰港に胸を躍らせていた。

いつになく会話が弾む中、彼女たちはゆっくりと進み続ける。

そんな穏やかな航海は、突然ソナーに現れた正体不明の潜水目標によって終わりを迎えた。

6人は警戒しつつ、動こうとしない1つのターゲットを包囲すべく散開する。

向こうも潜水艦なら、こちらの動きを捉えているはずだ。

しかし、相手は動かない。

伊—401ことしおいは首を傾げた。もしかして、潜水艦じゃないとか？いや、それ

はないはず。あんな大きさの奴にこんなに近付くまで気付けないわけがない。

何かしらのソナー対策をしているに違いない。そんな金のかかることをする奴は潜水艦以外に考えられない。

『深海棲艦』に、『金』と言うシステムがあるか知らないが。

とにかく、相手は潜水艦だ。

それなら、何故動かない。敵から探針音が放たれまくってるのに。

ピンが来たのはそれからすぐのことだった。

全員が身構えたが、そのピンが定期的に打たれていることに気付くまで時間はかからなかった。

探針音を使ったモールス信号だ。

彼女は内容を聞き取る。

『我、米海軍所属艦原潜きんぐ。貴艦隊ハ本艦ノ攻撃圏内ニ侵入シテイル。所属ト航行目的ヲ伝エヨ』

米海軍の：原潜、ということは原子力潜水艦のことか。しかし、キングと言う艦名は聞いたことがない。

新型艦にしても、多少の情報が入るはずだ。それが無いとなると…。

最近よくある『転生艦』だろう。それも、艦娘の。

水中無線を通じてゴージャが指示を求めてきた。

しおいは指示を出す。

「焦って攻撃しないで。こつちから向こうにモールスを打ってみるよ」

『了解でち』

しおいは、早速モールスを打ち始める。

『コチラハ、まりあな守備隊第一潜水戦隊旗艦、伊―401。現在、哨戒任務ヲ終工、さいばんニ向ケ帰投中ナリ。』

貴艦トノ接触ヲ希望スル。許可サレタシ』

キングは、401からの要望の答えを考えた。

接触を拒否する理由もないし、情報が得られるなら接触もやぶさかではない。

問題は、その後どのように扱われるか、だ。

今の姿が珍しいことならば、モルモットのようになされる可能性もある。

だからと言ってここで逃げるのは、向こうに不信感を与えるだろう。そうなれば、向こうは攻撃を仕掛けてくるし、増援を要請したりするに違いない。

彼女にとっての『最悪』は、撃沈、つまり彼女の死だ。

増援が来たら逃げればいいが、それはやがて来る確実な死から少し離れるだけのことだ。

つまり、彼女に選べる道はただ一つだ。

彼女はモールスを打つ。

『ソチラノ要望ヲ受け入レル』

しおいは返答を聴くと、散開していた部隊を再び集め、キングの元に向かう。

もし、罠だったらと考えなかった訳ではないが、返答までの間がこれが罠でないことを示しているように彼女には感じられた。

しかし、警戒は解かない。相手はまだ『正体不明艦』なのだ。

自称原潜キングが見えてきたのはゆっくりと進むこと20分のことだった。

見た目は、自分たちとなんら変わらないが、その見た目に惑わされてはならないことは、これまでの経験からよく理解していた。

もし、キングが本当に原潜であるならば、潜水艦にとって最も危険なサブマリン・キラーとなる。

ここからが重要だ。

しおいは気を引き締めて、キングと対面した。

キングは、やって来た相手を見て心底ホツとした。

自分と同じ見た目をした、少女たちだったからだ。どうやら、この世界では私と同じような存在はよくあることのようにだ。

彼女は少女たちに話しかける。

「始めまして、とても言っておこうかな？ 私はシーウルフ級2番艦キングです。どのくらいの付き合いになるか分からないけど、よろしくね」

出来るだけ好意的に話したつもりだ。もつとも、少し緊張した声が出てしまっているかもしれないが。

キングは少女たちの様子を見守る。

相手の顔にもホツとしたような表情が浮かんだことで、キングの言葉が上手く伝わっていたことを表してくれた。

彼女は再び安心する。敵対する相手は少ない方がいい。

旗艦らしき日焼けをして小麦色の肌の少女が応える。

「私はマリアナ守備隊第一潜水戦隊旗艦伊—401です。しおいつて呼んでください。周りにいるのは左から伊—58、伊—8、伊—19、伊—168、伊—26です」

少女たちが自己紹介を始める。

「伊—58です。ゴ—ヤって呼んでもいいよ」

「伊—8です。はちと呼んでください」

「伊—168です」

キングは眉をひそめた。

「言い難いね」

伊—168がこちらを少し睨んでから仕方がなさそうに言った。

「呼び難いならイムヤでいいよ。間違っても、イロハなんて呼ばないでよね」

「分かったよ」

キングは返答し、次の人物に進めるよう促した。

「伊—19なの。イクって呼んでもいいの!」

「あたし、伊号26潜水艦ニムだよ!よろしくね!」

キングはその自己紹介の力強さ、と言うより元気の良さに押された。潜水艦がこんな騒がしくていいのか?

彼女は呆れつつ少女たちを見つめた。

「しおいが何事かとも言いたげにキングを見る。

「何ですか?」

「あつ、いや、賑やかだなーって思ってる」

その答えにしおいは嬉しいそうに言った。

「そうでしょ、そうでしょ。いい艦隊でしょ」

「どうやら彼女はキングの返答を良い方向に取ったらしい。

ふと、しおいは何かを思い出したかのようにキングに言った。

「そうだ。キングさんはどこの所属ですか？ 転生前じゃなくて、今現在の所属です」
キングは少し考えた。『転生前』というのは、この姿になる前、つまり艦船だった頃のことだろうか？

もしそうなら、今はどこにも所属していないことになる。

彼女は返答した。

「所属してないよ。なんせ、あなたたちが初めて出会った味方だから」
「味方？ 敵に会ったてことなの？」

イムヤが話に割り込む。

「多分だけどね。モノクロみたいに変な連中だったんだけど」

「そいつらは『深海棲艦』に違いないの！」

今度はイクが割り込む。

「『深海棲艦』？ 何それ」

「5年前に出現した正体不明の敵性生物です。現在までの所、私たち艦娘と似ていると言ふこと以外は分かっていない連中で、通常兵器はあまり効きません。もともと、最近は効くみたいですけど」

しおいの話でキングは直ぐに理解した。

「なるほど、それで艦娘の出番ってことね。私たちの攻撃は奴らに効果的だと」

「そうでち。だからゴーヤたちは、こうやって哨戒活動してるんでち」

ゴーヤが言う。どうでもいいがやたらとキャラが濃い連中ばかりだ。唯一キャラが薄いの伊ー8ことはつちちゃんだけ…。

「さて、そろそろ戻ってシュトーレンでも食べましょう」

…前言撤回。なかなか濃ゆい。全く、この潜水艦たちはみんなこうなのか？それとも、ここにいる6人が平均よりも濃いのか？あるいは…。

キングが考え事をしていて、しおいがその思考をぶち壊した。

「さあ、キングさん。一緒に行きましょう」

「えっ、私も？」

「そうに決まってるよ。行くところないんでしょ、キングさん？」

ニムも同調して言う。確かに行くところはないが…。

「じゃあ、行く？」

ゴーヤが有無を言わさぬ口調で言う。他の潜水艦娘全員からも同じような意味合いの視線が向けられる。

これは、従うしかないようだ。

キングはため息を吐いてから言った。

「じゃあ、行きますか」

こうしてキングは、半ば強引にマリアナの基地に連れて行かれたのだった。

第4話 次なる目標は

その日の夕方。

キングたちはサイパン島に上陸していた。夕焼けに輝く海面はさざ波により乱れて見えたが、その自然にしか作ることができない景色は、息を飲むほど美しい。

もつとも、そう感じているのはキングだけで他の艦娘たちは世間話を楽しそうにしながらコンクリート製の波止場を足早に歩いていく。

彼女たちにとっては見慣れた光景のようだ。

キングはその少女たちのことを羨ましく思った。贅沢な生活を続けていれば、その贅沢も贅沢に感じられなくなるのと同じように、当たり前前の日常の中にあるかけがえのないものは、普通に生活しているだけでは気付くことは少ない。

そして、それを失ってしまったその時に気付いたのでは遅過ぎることもある。

そう、あのくだらない監視任務すら、今の彼女には懐かしく忘れることのできない貴重な『日常』。もう二度と戻ることのできない『日常』だ。

キングは微かな憎しみと哀しみを思い出して、その場に立ち止まりその穏やかな景色を眺めた。

少しずつ冷静さを取り戻していく。

大丈夫だ。私はやっていける。

ふと気付くと、先を歩いていた少女たちが心配そうにキングのことを見ている。

そうだ。ここには、自分と同じ者たちがいる。

彼女は笑顔を浮かべて、少女たちの元へ歩み寄った。

キングたちが波止場をしばらく歩くと、一台の高機動車が走って来た。キングは身構えるが、陸に揚がった河童に何が出来るかは何分でもよく分かっていない。

幸運にも、これが杞憂に過ぎないことはすぐに分かった。

周りの艦娘たちは特に警戒している様子はないし、むしろこれを歓迎しているようにさえ見える。

高機動車は彼女たちの目の前に止まった。車体には日の丸と『マリアナ守備隊』と書かれている。

彼女は眩暈を感じた。よもや、この島が再び日本の手により統治される日が来るとは。

そんなことを考えるキングをよそに、しおいは日本製ハンヴィーとでも言うべき高機動車の運転手と何やら話した後、全員に乗り込むように言った。

艦娘たちは嬉々として車内に乗り込んで行く。

キングもしばしたためらった後、仕方なく高機動車に乗り込んだ。

高機動車の車内は彼女の知る（彼女は米軍で使用する軍用車両の基本的なデータを全て把握している）ハンヴィーとは違い、座席が広く、大人数が乗れそうだと。

すでに他の艦娘たちは硬い座席に座っている。キングは空いていた二ムの隣に座ると、同時に高機動車は発進し、まだしつかりと座っていないかつたキングは危うく頭を金属製の柱にぶつけそうになった。

いや、ぶつかつた。確かに妙な音がした。ガツ、と言うおおよそ普通の生活をしている限り聞くことはないだろう音が。

しかし、その音が他の艦娘たちに届く前に高機動車は喧しいエンジン音を発しながら進み始めたため、キングの負傷は気付かれることはなかった。

数秒経たずに、キングは左側頭部に鈍い痛みを感じ始めた。彼女は手で患部を触つた。

どうやらたんこぶができてきているようだ。

キングは突然、自分が情けなくなつた。人の体を得て初めての負傷がこれなどとは。世界最強の潜水艦の名が廃る。

彼女はまだ知らない。

かつて、世界最強の洋上艦と呼ばれた艦娘が、彼女と同じようにどうでもいい負傷を

したことに。

この事実気付いた時、彼女は随分とホツとすることになるのだが、それはまた別の話である。

高機動車に揺られることおよそ10分。

キングたちが来たのは埠頭から少し離れた飛行場だった。

場所を考えるとおそらく、サイパン国際空港、つまり第二次大戦当時米軍はイズリー飛行場と呼び、日本軍はアスリート飛行場と呼んだ施設だろう。

基地の門にはただ『サイパン飛行場』としか書かれていないのを見ると、日米両国にとつて問題のない名前が選ばれたようだ。

サイパン飛行場は空軍と海軍による共同運用がなされているようで、両軍の司令部が作られている。

さらにそこに米海軍の施設が入っているので、この基地には少なくとも3つの指揮系統があることになる。

実に複雑だ。

幸運にも、陸軍と米海兵隊はチャラン・カノアに司令部を置いているのでまだマシと言えばマシではある。

どちらにせよ、この施設で迷うとかなり厄介なことになるだろう。ほんのちよつとし

たミスで基地全体を巻き込む大騒動になりかねない。

「いや、もう何か起こっているようだ。」

やたらと将兵たちが走り回っている。

車内の艦娘たちはもちろん、運転手と助手席の男たちも何やら困惑しているようだ。

と、突然施設の横道から現れた保安要員らしき兵士数人が高機動車を取り囲んだ。

助手席の男が、保安要員の指揮官らしき人物に何事かと問いかけた。

指揮官は簡潔に説明を済ませる。助手席の男はしばし考えたのち、指揮官に何か伝えた。

指揮官は男に敬礼すると、部下の一人に何かを伝え、行くように指示をした。

助手席の男が、こちらを向いて言った。

「施設内で不審物が発見されたらしい。詳細は不明だが、危険物であることも考えられるため、施設を封鎖したらしい。」

取り敢えず、君らは通してもらえそうなんで迎えを寄越してもらった。

迎えが来たら付いていくといい」

「おいが感謝の意を伝える。」

「ありがとうございます。お手数をおかけしてすみません」

「なに、いいってもんよ。お嬢ちゃんたちに戦わせてるんだ。これくらいはしないとな」

先ほど立ち去った保安要員が1人の男を連れて戻つて来た。

ニムとイクの2人は、その男が見えた途端車内を飛び出して男に体当たりを喰らわせるように飛び付いた。

男はそれを予想していたように、ヒラリと躲すと2人に軽くチョップを喰らわせる。

中間管理職を思わせる小太りの男は軍人には見えないが、着ている服は紛れも無い軍服で、襟には少将を表す襟章が見える。

車内に残っていた艦娘たちも高機動車を降りて男の方に向かって行く。

最後に残ってしまったキングは、ここまで送ってくれた2人の男に代表して（と言うより誰も言わなかったので仕方なく）礼をしてから降りた。

男は帰つて来た少女たちが無事に帰つて来たことに心底ホツとしているようで、嬉しそうに会話をしている。

ふと、キングの存在に気付いたのか、男は頭を少し掻きながら近付いてきた。

「君か？しおいたちの言ってる『スゴイ新人』って言うのは？」

キングは少し考えたフリをした後答えた。

「ええ、多分そうだと思いますよ。シーウルフ級原潜2番艦のキングです。あなたは？」

「私はマリアナ守備隊の艦娘たちの指揮をしている上野渥巳だ。よろしく頼む。よろしく、太平洋解放の最前線へ」

上野と名乗った男は穏やかな笑みを浮かべながら、キングに手を差し出した。

キングはどう応えるべきか迷った。

握手をすべきなのか、否か。

キングの迷いを察したのか、上野は肩を竦めながら言った。

「そう畏まらないでくれ。軍人ではない私にそのようなものは無用だよ」

キングは困惑する。軍人じゃない？ どういうことだ？

彼女の疑問を察してか、上野は続けた。

「私は民間の人間でね。最近是一般人も素質があれば徴用されるようになっていいる。嫌な世の中だよ、全く」

「つまり、あなたは素質があると言う理由だけでここに来たと？」

「まあ、そうなるが、軍歴？ ってのはそれなりに長いぞ。もつとも、正規のものではないが」

キングは再び困惑した。頭痛がする。色々と訳の分からないことが連続して起こったせいで頭は完全にパニック状態だ。

ちようどそこへ、しおいが話に入ってきた。どんな話をしていたかも理解しているようで、キングに補足説明をしてくれる。

「上野提督は元々民間軍事会社の幹部をしていたんだって。なんでも、名の売れた会社

だったとか」

「PMC?」

「正確にはPMSCだ。それも、随分と昔に辞めたからな。ざっと、10年ほど前だったか」

なるほど、確かに正規のものではない。1980年代に誕生し以来、『国家』に代わってテロとドンパチする『企業』と言えるPMSCは、国家による、冷戦で肥大化した軍隊の削減の煽りを受けた退役軍人の受け皿となり、戦うことで生計を立てていた多くの人々を吸収し、その数を増やしている。しかし、日本人が『それ』をするのは珍しい。何かあったのだろうか?

「過去のこととはいえ。さて、そろそろ行こうか」

キングの疑問をよそに、上野は少女たちを引き連れて歩き出した。

上野は特定の相手に言うでもなく、独り言のように話し始めた。

「しかし、パラオからお客さんが来てるってのに……面倒を起こしてくれたもんだな。これじゃあ、ここの基地の面子も丸潰れってやつだな」

「お客さんって誰のことですか?」

上野は右へ左へ駆けて行く將兵を半ば嘲笑気味に見つつ答えた。

「もちろん、パラオの英雄殿さ」

江田はサイパン飛行場横の海軍司令部の応接室で盛大なくしゃみやみをした。

彼はズルズルと音をさせつつ、共にパラオから来ていたヴェラ・ガルフに呟く。

「誰か噂話でもしてるのかもな」

ヴェラは冷めて目で彼を見つめて答える。

「そーかもしれないですネー」

「随分な棒読みだな、お前」

「すみません、少しイラついているので」

「何にだ？」

「もちろん、長々と私たちを待たせてるこの施設の人間にです」

江田はため息をつく。そこには、ある程度の同意と、サイパン基地の将兵たちの苦勞の理解が滲み出ていた。

当選、ヴェラも彼らの苦勞を理解しているし、ある程度なら温厚(?)な彼女も我慢できる。

が、それにしても2時間も全く人の出入りが無いことには流石に我慢しきれない。

仮にもこちらは客、しかも一応は太平洋奪還の流れを作った英雄である江田が来ていると言うのに、この扱いでは。

それとも、上はまだ江田の事をどうでもいい男と見ているのだろうか？

もし、まだそう思っているのであれば、そのつまらない考えを正してやらなければならない。

もちろん、力尽くで。

彼女のその考えは、幸運にも実行されることはなかった。

応接室の扉がノックされたためだ。

「ようやく来たか」

江田が小声でヴェラにだけ聞こえるように呟いた。

彼女も、それに頷いて返答する。

江田が誰何の声を出す。

「誰か？」

「護衛の者です。もう間もなく上野提督が参ります」

「分かった」

江田は簡潔に答えた。

ヴェラは長時間椅子に座っていて凝り固まった体を伸ばしつつ言った。

「やっと来ましたね」

「ああ。どうやら、お外のゴタゴタは一段落したらしいな」

江田も肩を鳴らしながら立ち上がり、テーブルの上に置かれている数枚の地図を見な

がら喧いた。

「さて、仕事の時間だ」

数分後、ドアをノックする音が聞こえた。

そのドアは中の者の許しも得ずに開かれた。

ヴェエラは開いたドアを睨み付ける。全く、礼儀知らずにもほどがある。

入って来た男は、小太りで軍服がお世辞にも似合っているとは思えない。どちらかと言うと、何処かの中華料理屋でも働いていそうな見た目だ。

が、男から独特な雰囲気が発せられていることに、彼女はすぐに気付いた。

そう、『こちら側』と同じ雰囲気だ。

元民間人だと聞いていたが、ただの民間人ではないようだ。

男は入って来るなり、頭を掻きながら憎めない笑顔を浮かべながら言った。

「いやいや、お待たせして申し訳ない。何分、最近は物騒でしてね。少し神経質になって調べていましたので遅れてしまいました」

「いえいえ。少しも待っていませんよ、少しもね」

ヴェエラは皮肉混じりに言う。

男は特に何も感じていないように彼女の皮肉をスルーして、江田に手を差し出すと言った。

「上野渥巳です。お目にかかれて光栄です、江田提督。噂は聞いていますよ」
「悪い噂ばかりでしょう？」

「いいえ、とんでもない。頭の固いお偉方が扱いに困つていふと言う愉快な噂ですよ」
「でしようね。あなたの噂も聞いています。元はあの『クラックス』の幹部だったとか」
ヴェラは話の中に出て来た単語を聞いて目を見開いた。

『クラックス』だと。

あの民間軍事会社のことか。

『クラックス』はオーストラリアで誕生した世界最大の民間軍事会社だ。主な仕事は、テロリストの制圧、麻薬カルテルの制圧、過激派の制圧、要人の護衛、果ては害獣駆除までと、PMSCの仕事とは思えないようなことまでしている。もちろん、金さえ払えば何でもしてくれると言う訳ではない。

テロや、麻薬と言った反社会的行為には一切手を出さないと社長自らが宣言している。

そう言う意味では真つ当な会社と言えるだろう。

しかし、そんなこの世界にいる人間ならば知らない者はいないほど有名な企業に日本人がそれも幹部としていたとは驚きだ。

ヴェラのこの思考の間にも話は進んでいた。2人の男は互いに相手を探っているよ

うだ。

「昔のことですよ。…そうだ、先ほどウチの子たちが1人艦娘を保護しましてね。どうやら、転生艦のようでした」

転生艦。ヴェラたちのような存在の総称だ。普通の艦娘と分けるための命名らしく、現在にヴェラを含めた4人が確認されている。

いや、今この瞬間から5人か。

上野はさらに話を続ける。

「彼女にもここに来てもらっている。ちょうど、転生艦の1人がいるようですしね」

上野はヴェラの方を見る。その眼にはこちらに対する親しみが込められていた。が、さらにその奥にはいくつもの修羅場を見てきた者特有の諦観にも似たものがあつた。

上野の過去に何があつたのか気になるものがあるが、それも上野が呼んだ艦娘の名前を聞くまでだつた。

「キング。入ってくれ」

キング？まさか…。

1人の少女が呼びかけに応じて部屋に入つて来た。米海軍潜水艦クルーの制服にドルフィン・マークを胸に付け、これまた米海軍の制帽を被つた出で立ちだ。

艦娘の見た目は艦だつた頃の艦種によってある程度特徴が出てくるというが、彼女が

元潜水艦であつたことは疑いようがない。

そして、現在の米軍に潜水艦と言へば原子力を動力とした艦はない。

また、原潜でキングと名の付く艦は、当然ながら唯の1隻だけだ。

ヴェラの考えが正しかったことは、少女自らが教えてくれた。

「シーウルフ級2番艦、キングです。よろしくお願いしますね」

ヴェラは思わず口走る。

「狼の片割れが、なんで…」

キングがヴェラの方を見て、何やら観察を始めた。が、それも数秒で終わり、キングはヴェラに話しかけた。

「私のこと知ってるってことは、あなたもあの世界にいたってことだよな?」

「ええ、私はヴェラ・ガルフ。知ってるとは思いますが…」

「もちろん。『鉄の爪』に実際に会えるとは思ってなかつたわ。あの『クソ原潜』のせいでね」

キングの言う『クソ原潜』は明らかに『やまと』のことだろう。そして、『クソ原潜』の部分に凄まじいまでの憎しみが込められたところを見ると…。

「あなたも、私と同じですか」

「そうよ。ヤツに沈められたわ」

これで、『やまと』による被害者（あるいは被害艦？）は4隻に増えたと言う訳だ。
ふと、ヴェラは思い出した。

「アレキサンダーは？」

「…姉さんは多分生きてるわ。多分ね。私が最後に置き土産を残してやったけど、あいつに勝てるとは思えないわ」

キングの憎々しげな口調で答えた。

「さて、ただでさえ遅れてるんだ。そろそろ始めようか」

嫌な空気になり始めたことに気付いて、江田が話を本題に戻す。

「そうですね。それでは、早速始めましょう」

上野も江田の考えと同じらしく、机の上にある地図のところに向かう。

キングは一瞬だけ不満そうな顔をしたが、現在の情勢を知るためにここは引くことにしたようだ。

ヴェラもこの話をこれ以上掘り下げることはあまりいいことでないことに気付いていたのと、この仕事をさっさと片付けたいという考えから机の元へ向かう。

4人が集まると、すぐに情勢の説明をヴェラが始めた。この時のために最近の情勢は全て頭の中に入っている。

しかし、なぜ客である自分がしなければならないのか？

まあ、やるからには完璧にしよう。それが、私の主義だ。
「えー、それでは説明に入らせてもらいます。」

約3週間前に『深海棲艦』による『正式』な宣戦布告後、各方面で『深海棲艦』による被害が続出しています。

特に、これまでほとんど行われていなかった沿岸部への襲撃回数が急増し、各国軍も酷く混乱している状態です。当然、日米も例外ではありません。

この3週間の被害は、死者1058名、負傷者3226名と開戦当初とほぼ同等の増加を見せています」

「軍も沿岸部の防衛に戦力をほとんど割いていないのが現状だったからな。今回のこの犠牲者数も、そのツケが回って来たと言ったところだろ」

江田が呟く。ヴェラもその呟きに頷きつつ、さらに進める。

「はい。沿岸部の襲撃は開戦直後の数回しか記録がありませんので、上層部が沿岸部防衛を軽視していたことはある意味では仕方ありません。」

しかし、彼らの行動パターンの変化はあまりにも大き過ぎます。まるで、指揮官が変わったように」

「その件ですが…」

上野の発言に全員が反応する。

「むしろ、これまでが異常だったと考えるのが妥当なように思えます」

確かにその通りだ。沿岸部への襲撃は、戦争における常套句。特に、『深海棲艦』のよ
うに圧倒的優位にある者は敵に精神的なダメージを与えると言う意味ではよく実行に
移される。

第二次大戦終戦前の米軍による日本本土への艦砲射撃等がその好例と言えるだろう。

しかし、『深海棲艦』はそれをしなかった。

まるで、民間人への被害を恐れているかのように。

そして、この3週間で『深海棲艦』たちは、打って変わって沿岸部への襲撃を開始し
た。

異例とも取れる行動から、定石への転換。

その全ては、3週間前のあの日から始まった。

『Hello Humans, Good-bye』。

あえて訳すなら、『こんにちは、人間共。さようなら』だろうか。このさようならは、
この星から消し去られる人間に対する別れの挨拶だろう。

つまり、『深海棲艦』から『人類』に対する明確な、そしてこれまで発表されなかった

『正式』な宣戦布告だ。

ここで出てくる疑問は、『では、これまでの戦闘は何だったのか』ということだ。

どこかのSF小説のように『深海棲艦』は、『人類』とではなく『機械』と戦っていたのか。それとも、別の者の意思で戦わされていたのか。

結論を出すにはあまりにも情報が足りなさ過ぎる。

江田が静まり返った場で発言した。

「ヤツらが何を考えているかは重要ではあるが、今は必要ない。今必要なのは、これ以上の犠牲が増える前にヤツらを倒すことだ。

そのために、そちらは我々を呼んだのだろうか？」

その問いに、上野は答えた。

「その通りです。これ以上被害が出る前に、こちらから手を出します」

さて、ようやく本題に入った。すでに、上は新作戦案を準備し終え各部隊に通達済みだ。

当然、その通達先の中にパラオ泊地も入っている。

今回、ここに来たのはそのためだ。

パラオとサイパンは共同でこの作戦に当ることになっている。

両部隊の指揮官による会談は、相互理解に繋がり、実戦の際はそれが役に立つだろう。

「今回、我々に下されたミッションは『ダブル・ブルー』作戦の前段階、敵本拠地襲撃前の陽動作戦です。

我々、つまりサイパンとパラオに展開している艦娘、及び通常艦艇、米軍部隊による大規模攻撃を行い、敵の防衛部隊を分散させることが我々の目的です。

これにより、本隊による敵目標の撃破を容易にならしめることができると考えられます」

上野は一気に言った。

随分と重要な役を任せられたものだ。

大役を任せられるのは悪くはないが、その代わりに大きな被害がでることはあまり嬉しいことではない。

その時、ほとんど空気になりかけていたキングが手を挙げて発言した。

「あゝ」

「どうした?」

江田が首を傾げてキングを見る。

キングは少しモジモジした後言った。

「陽動作戦って、どこを攻撃するんですか?」

そう言われてようやく、3人はキングが何の情報も持っていないことに気付いた。

上野が頭を掻きながら言った。

「あゝ、すまん。忘れていた。君にも参加してもらおうかも知れんからな。∴場所はソロ

モン方面」

上野は一息ついてから言った。

「鉄底海峡。英語で言うところのアイアンボトムサウンドだ」

第5話 昔話

7月5日

月明かりが海を照らす。

さざ波すらない海面は月を鏡のように映し、現実味のない世界を演出する。

現に、キングはそのように錯覚していた。

他の艦娘たちは宿舎に戻って既に眠っている。

彼女は、与えられた宿舎から抜け出し、初めての夜を満喫していた。正確には、艦娘になつて、だが。

当然、基地の外に出るのは容易ではなかった。夜間の艦娘の外出は禁止されている。

が、彼女は艦娘ではあるが、あくまでもまだ部外者として扱われている。部外者が勝手に外に出ることは許されないが、許可さえ取れば簡単に出れる。

キングは、執務室で書類仕事をしていた上野提督から許可を得て堂々と基地を出た。

サイパン基地、さらに正確に言うとサイパン飛行場のすぐ近くには、オブジャン・ビー

チと呼ばれる全長約2キロに渡る長大なビーチが広がっている。

平時であれば、空港のすぐ近くと言うこともあつて観光客に人気であるが、有事である今は、人っ子一人いない。

しかし、そのビーチは観光客がいなくなることで、むしろゴミが減り美しさがより感じられるようになっていいる。

海の中も、やたらに騒ぎながら泳ぐ人間やジェットスキーと言つた騒音を撒き散らす機械たちがいないおかげで穏やかそのものだろう。

結局のところ、自然にとっては人間など邪魔な存在なのかも知れない。

ふと、誰かが近づいてくるのに気付き、キングは警戒した。

こんな時間にここに来る者など普通はいないはずだ。巡回中の保安要員に見つかったと言うなら、まあ別だが。

あるいは…敵か？

結果はすぐに出た。

近づいてきた相手は、キングに向けて語りかけてきた。

「どうです、人の目で見える海は？」

「悪くないわね。海風も今の体だと気持ちいいくらい」

ヴェラ・ガルフはキングの側に来ると、そのままビーチに座り込んだ。

「どうやって出てきたの?」

キングは小柄な少女に尋ねた。少なくとも、今日の前にいるその少女からは『世界最強の洋上艦』のイメージは感じ取れない。

「もちろん、勝手に」

「いいの?それで」

「江田提督から許可は貰ってますから」

「指揮系統が別ならそれでよし…:か」

「まあ、そんなところです。それに…:」

「それに?」

「あなたが艦娘として人類側に付く前に話したかったことがあったので」

「なるほどね。今、ここにいるあなたは日本国防海軍所属のヴェラ・ガルフじゃなく、

一人の艦娘、ヴェラ・ガルフということね」

「はい」

「で、話って何?」

ヴェラ・ガルフは暫く水平線を見つめた後に、立ち上がってキングの顔を見つめながら言った。

「あなたは艦娘になる前のことをどれだけ覚えていますか?」

意外な質問と言えば意外だったが、冷静に考えればその質問は予想できたものだった。

今後、実際に戦っていくにあたり過去にどのようなトラウマがあるかを把握しておいた方がいいのは当然の話だ。

が、ヴェラ（彼女がそう呼んで欲しいと言った）の言っているのはそう言うことでないことは明らかだ。

ヴェラは、同じ世界から来たキングと過去を共有したいと考えているのだろう。

ならば、言うべき答えは簡単だ。

「もちろん、しっかりと覚えてる。しっかりとね」

「それなら、聞かせてもらえますか？あなたの生涯を」

キングは少し考えたあとに答えた。別に隠す必要もない。

「ええ。それじゃあ、最初から始めますか」

私、シーウルフ級2番艦キングは、アメリカはコネチカット州グロトンのジェネラル・ダイナミクス・エレクトリック・ボートに発注され1998年の就役した。

グロトンは潜水艦の故郷と呼ばれる土地で、姉のアレキサンダーはもちろん他の著名な潜水艦たちもこの地で生まれていることが多い。

特に、世界初の原子力潜水艦SSN-571ノーチラスの進水した場所として非常に

有名だ。

また、この施設には潜水艦クルーたちの学校、海軍潜水艦学校が存在し多くの人々が日々ドルフィンマークを得るために切磋琢磨している。

それが、グロトンだ。

私の母港は生まれてから一度も変わらずグロトンのすぐ近くのニューロンドン海軍基地。

そこを海を行ったり来たりするのが私の日常だ。

就役と言ったが、実際に海軍の戦力として正式に動き出したのは1999年のことだ、この間に私の評価がなされる。いわゆるPSA（公試後有用性）期間というやつだ。

この時、私に乗艦する就役艦長は私が海軍の一翼を担えるかを確認する試験官の役割も持つ。

この就役艦長の名前はジミー・マーシャルのはずだ。彼は、色々な意味で濃い人物だったと覚えている。

原潜を預かる人間でありながら、命令無視はざらで、機械類よりも自身の勤を頼りに行動し、感情に任せた操艦を行うと言うおおよそ艦長として相応しくない人物だった。

が、彼は少なくとも部下からは絶大な信頼を寄せられていた。

無茶苦茶な操艦の裏に隠された緻密な計算は、私の性能を最大限に引き出し、世界最

強の原潜として生み出された私を完璧に使いこなして見せた。

また、彼は何方かと言えば古い時代の指揮官だった。

厳しくも常に部下たちの身を考え、的確なアドバイスでクルーたちの能力を向上させていく。

まさに理想の上司像と言うやつだ。

もつとも、上の人間からすれば使いにくいとしか言いようがない人物だったようだが。

現に、彼の階級は中佐止まりで老練の彼が今後昇進することは無いだろう。

「階級なんざどうでもいい。生涯戦場に居続けるのが私の目標だ」

彼は私にーと言ふより艦長室の壁に向かってーそう独り言を呟いていた。

そう言いつつも、彼は常にそろそろ昇進したいとゴネていた。今にして思えば、人間味のある艦長だった。

そんな生活が1年ほど続いた後に、彼は2代目の艦長と変わるために私の元を去っていった。

…言い方が悪いだろうか？まあ、とにかく私から降りた。

その後にやって来たのが、私の最後の艦長であるノーマン・キング・ベイツ少将だった。

彼はマーシャル艦長と真逆の性格だった。

命令に忠実で時間にうるさく、呆れる程数字をよく覚えていて、クルーたちですらない異様に専門的な数字をスラスラと口から出していた。

操艦も、まさに模範的なものだったが、マーシャル艦長の操艦を経験した後では物足りなさを感じた。

ただし、近くに艦長の義理の弟であるジョン・アレキサンダー・ベイツ艦長が指揮する私の姉、アレキサンダーがいればその限りではない。

ベイツ・サーカスとも呼ばれる2人の連携はまさに驚異の一言に尽きる。

私は潜水艦であつて戦闘機ではないと言つてやりたいくらいだ。

キング艦長に変わつてから3ヶ月が過ぎた頃、『シーバット』が反乱を起こすと同時に、独立国家『やまと』の誕生が宣言された。

最初はくだらない考えだと思つていたが、いつまでも問題を片付けられずにいる第3、第7の連中を不甲斐なく感じ始めた。

これまでのところ、まともに被害を与えられたのがヴェラ・ガルフ以下イージス艦3隻だけとはどういうことか？

いつからか私は自分が出ることを期待し始めていた。

今考えれば、随分と傲慢な考えだ。

だが、その時の私は自分の力を完璧に過信していた。

そしてその代償を、私は命を持って払うこととなった。

私は死に、アメリカの頭上で輝くはずだったオーロラは忌々しいことに『やまと』の頭上で輝いた。

「…まあ、後のことはお察しの通り。私は『やまと』に沈められて、多分奴はアレキサンダーも打ち倒して先に進んだと思う。

奴の目的が何かは知らないけど、奴がニューヨークに入るのはほぼ間違いないでしょうね」

ヴェエラは何も答えず、暗い海を眺めている。

その目は目の前の海ではない、もっと別の海を見ているようだ。

「思い出しているの？あなたも」

ヴェエラはこちらを見ることなく答えた。

「似ているんですよ。この海」

「何？」

「私が沈んだ沖繩の海に」

特に何でもなさそうに呟く。まるで、他人事のようにだ。

が、その奥には何か真意がありそうだ。

キングの口から思わず疑問の声が出た。

「どうして、あなたは日本の側…いえ、人間の側に付くの？」

ヴェラはその質問に答えず、キングに聞き返した。

「逆に聞きますが、あなたは何故そんな事を聞くのですか？」

キングは答える。

「あなたは自分が何に沈められたか覚えていてるでしょう」

「ええ」

「あなたは『やまと』に、日本人に沈められた。多少なりとも憎しみはあるでしょう？」

「…ええ。言いたくはないですが、あなたには言いましょう。確かに私は彼らを憎んで

います。正確には『あちらの世界』の日本人をね。

ですが…」

「なに？」

「憎んだところで何の意味もないでしょう。だいたい、私たちは戦闘艦。戦場で沈むの

なら本望。そうではないですか？」

キングは答えに窮した。だが、それでも…。

「それでも、私は憎むことをやめられない。愚かなことだとは思っている。けど…」

あの海で、私以外にも多くの人間が死んだ。今でも簡単に全員の名前を思い出すこと

ができる。私は彼らが大好きだった。私の短い人生を彩ってくれた彼らが。

だからこそ私を殺した以上に彼らを殺した『ヤツ』を：

「許すことなどできない」

隠そうと思っていた憎悪が臆面もなく出てしまった。

キングは慌ててヴェエラに言う。

「……めんなさい」

「いえ、あなたのその感情は私にもよく理解できます。私も、もしかしたらそうなっていたかもしれないかもしれませんから」

「何か特別なことがあったと？」

キングの問いに、ヴェエラは微笑みながら答えた。

「すぐに分かりますよ、あなたにも」

ヴェエラはそれだけ言うと、キングに軽く会釈して闇の中に消えていった。

残されたキングは、それからしばらく水平線を見続けた。

月明かりに照らされた水平線と空の境はほとんど分からないほど同化している。

大気が比較的綺麗な太平洋の空は都会よりも綺麗な星空が見えると言うが、どうやら

本当のようだ。

彼女は心が鎮まって行く気配を感じながら、一人呟いた。

「私にも分かるかな?」

闇に沈んだ海は何も答えなかった。

少女たちが夜の砂浜にいる頃。

上野渥巳は執務室で書類を片付けていた。

秘書艦の曙はすでに床に就いている（書類くらいちやつちやと片付けやがれと散々罵倒された）ので、今は1人だ。

昼間の出来事の事後処理や江田提督との会談、それに転生艦であるキングの対応などで忙しかったため、普段の業務が後回しになったのは仕方がないことだろうが、それだけの言い訳に過ぎないことを彼はよく理解していた。

彼が今さばいている書類の大部分は昼間の不審物の件だ。

最初の報告で、爆発物でないことは把握していたが、それ以降のことを把握したのは今から数時間前のことだ。

報告書に書かれていたのは、大まかに言うと以下の通りで、

1. 微量の放射線を発している。
2. 放射線を発しているものの、人体に影響はなく、危険性はない。
3. 不審物は金属製（その金属の詳細は不明であるが恐らくは鉛であると予想される）であり、『何か』が入っている（『何か』の中に放射性物資の可能性も含まれる）。

4. そしてその『何か』を見るための設備はこの島にはない。

と、ここまでで改めてみると、放射線を発していると言う以外は特に重大な問題ではないように見えた。

が、不審物の中の『何か』が、彼にはどうしても気になった。

そもそも、この不審物の詳細は分かってきたものの、その出現経路が未だに判明していないことも気になる。

いくら数千の軍人や軍属の人々がいるとは言え、こんなものを持ち込める人間はそう多くない。

そのため、だれが持ち込んだかは直ぐに分かると思っていたのだが……。

不審物の発見から数時間が経った現在も保安部からの報告は来ない。

まるで、突然その場に現れたようだ。

彼には確信があつた。

これはただの不審物ではない。

彼の確信はよく当たる。

それは、彼が子供の時から才能で、それは観察力によつて生み出されたものであつた。

と、言つてもその才能が開花したのはそれから少し時間が経つてからだったが。

少年、上野渥巳は1953年に兵庫県姫路市で産まれた。快活な少年で、観察力に長けた彼は、この時から周りからの評価も高く、クラスのどころか学校じゅうの人気者だった。

彼の父親は時代が時代故に元軍人で、満州から命からがら帰って来た帰還兵の内の一人だった。

そんな父親に育てられたためか、彼はいつからか世界を知りたいと考えるようになっていた。

そして、1975年。大学を卒業した後に見聞を広めると言う名目で海外へと飛び立った彼は、そこで世界の現実を見た。

いわゆる第三世界と呼ばれる発展途上国に行った彼は、日本がどれほど恵まれているかをよく理解した。

アフリカでは多くの人々が飢えに苦しみ、当時はまだアパルトヘイトが根強かった南アフリカでは毎日のように警官隊と黒人との対立が続ぎ、何十人もの死者が出ていた。

しかし、彼が最も衝撃を受けたのは、これらの事件（あるいは虐殺とも取れるこの警官や軍人の過剰な対応）が、日本や他の欧米諸国でほとんど、あるいは全く報道されていない点だ。

第一世界とも称されることがある先進国は、自国の権益にしか興味がないように見え

るこの現状に、彼は微かな失望を感じていた。

1979年。4年間いたアフリカから東南アジアに向かった彼は、そこでも日本にいた頃には知り得なかつたいくつもの事実を知った。

イスラム過激派たちによる独立運動である。

自由アチエ運動やモロ民族解放運動に代表されるこれらの闘争は、やはり日本ではほとんど聞くことのない話だった。

当時の日本での海外ニュースの報道はと言えば、スリーマイル島原発事故やイギリスでのサッチャー首相の就任、朴正熙大統領の暗殺、ウイーンでの第二次戦略兵器制限条約（SALT II）の調印、ソ連のアフガン侵攻などで、第三世界のニュースなど全くと言っていいほどない。

1980年。

彼は日本に帰国した後、第三世界に支援を行なっているNGO法人に入った。

それが、彼のそれからの運命を決めたと言えるだろう。

NGO法人へと入った彼は、再び東南アジアへと飛んだ。

少年、上野渥巳は青年へと成長していた。

持ち前の観察力の高さはこの頃も健在で、同僚たちや現地の人々から随分と重宝されていた。

彼が活動していた国は、ほんの数年前までは地上の地獄のようだったカンボジアで、当時はカンプチア人民共和国と呼ばれていた。

ポル・ポトによる原始共産制によつて多くの知識人はもちろん、大人たちまで失つたカンボジアは疲弊しきつており、倒されたとは言え、まだまだ影響力の大きなポル・ポト派の残党勢力によるゲリラ戦により復興は遅々として進んでいない状態だった。

当時のカンボジアは控えめに言つても危険しかない国だった。

そもそも、カンボジア・ベトナム戦争によつて誕生したヘン・サリムを国家元首とした親越の新生カンボジア政府は、国際社会からは認められていないと言つても過言ではなく、日本政府も前政府である民主カンプチアアーつまり、ポル・ポト派に代表されるクメールルージュを正当な政府として認識していた。

国際的支援などは、ほとんど、あるいは全くと言つてないそんな国で彼は活動を続けた。

危険であるからこそ、自分たちのような支援者が協力していかなければならないと、彼は半ば錯覚していた。

彼の当時の精神状態は、今にして思えば異常をきたしていたように感じる。

世界の現状を目の当たりにし、それを変えたいと彼は若いなりに考えたのだ。

それが、恵まれた国に生まれた者特有の傲慢さであることなど、彼は全く思っていない

かった。

カンボジアでの活動は、2年続いた。

きつと、あの事件がなければ彼はまだカンボジアの発展に貢献し続けようとしただろう。

1982年の6月18日。

2年間この国で生活したが、この蒸し暑さに慣れることはないだろうと、考え出したのはいつからだろうか。

もうそれが分からないほど、この考えがいつも頭を過っている。

そして、それでもこの国で暮らし続けるのは意地なのだろうか？

今、彼ー上野 渥巳がいるのはカンボジアの首都プノンペンから北西に130キロほどの地点の未舗装の田舎道をどこのメーカーかすら分からないほどオンボロで改造が施された継ぎ接ぎだらけのトラックの幌に囲われた荷台だ。

座り心地がかなり悪く、トラックがよく跳ねるせいで尻がかなり痛い。

彼の正面には同僚の鈴木 茂が隣の現地スタッフと談笑していて、彼の隣には進駐しているベトナム軍の兵士が、ソ連から給与AK-47を肩に担いで座っている。

トラックの前を見れば、ベトナム軍のUAZ-469輸送トラックが重機関銃で辺りに睨みをきかせ、トラックの後方を見れば彼らの乗っているオンボロトラックと同様の

車両があと2台あり、最後尾にはウラル―375D輸送トラックが20名のベトナム兵を乗せて突っ走っている。

この国の治安の大部分は、ベトナム軍によって保たれている。

保つ、と言うのはあくまで都市部のみの話で、ここのような田舎はと言うと周辺のジャングルに隠れるポル・ポト派のゲリラ兵たちの恐怖にいつも晒されている。

ましてや今走っているのは物資を満載しているトラックの車列だ。

襲われないと考えるほうがおかしい。

ベトナム軍が彼らの護衛に協力してくれたのは、彼らがカンボジアに支援してくれる貴重な人材だからだ。

上野たちの存在は、カンボジアにとって重要なものとなっていた。

彼はそれをとてつも誇らしく思っていた。日本にいた時は決して得られない感情だ。

だから辞めるわけにはいかない。帰るわけにはいかない。

彼の意思は固かった。

運転手のベトナム兵がなにやら喚き始めた。鈴木隣のカンボジア人の現地スタッフが小窓を開けてなにやら応対している。

鈴木が不安そうにないこちらに尋ねてくる。

「何かあったんですかね？」

「さあな。この国じゃよくあることだ」

「落ち着いてますね。こっちはビビって小便漏らしそうなのに……」

鈴木は三ヶ月前に前任者と交代でやってきた新人だ。若いながらもよくやってくれているが、この通り不安を簡単に吐き出してしまふ少々頼りない一面もある。

「2年もいりゃあ慣れてくるんだよ」

上野は軽く返答したが、内心はかなり不安だった。何度もこうやって物資を運搬していたが、これまで護衛の者があんなに興奮してまくしたてるのは初めてのことだった。

現地スタッフは運転手との話を終えてこちらに説明を始めた。

「先遣のバイク部隊からの連絡です。この先の橋が数日前の大雨の影響で落ちてしまつたとのことですよ」

「橋が落ちた？」

鈴木が悲鳴に近い声を上げた。

この辺りがポル・ポト派のゲリラ兵の巢になっていたのは有名な話（まあ、このよ
うな田舎は大体そうなのだが）だ。

上野は冷静な声を装って尋ねた。

「で、先方の結論は？」

「後2キロほど進んだところに迂回路があるそうです。そこから落ちてない橋の所まで

行くそうです」

「橋の場所は？」

「ここからですと20キロほどだと思えます」

「その20キロの行程はまさか……」

「残念ながら、ゲリラ地帯を通過することになります」

鈴木が見て分かるほど顔を青くしている。隠しているつもりだが、上野自身も青くなっているかも知れない。

どちらにせよ、最悪の事態であることは変わらない。ただでさえ危険な物資輸送がさらに危険になった。

鈴木があんな顔をするのもよく分かる。

トラックの車列は砂埃を巻き上げながら田舎道を駆け抜ける。

突風が砂塵でトラックを覆った。

20分後。

先遣のバイク部隊が、橋に到着した旨を伝えてきた。

「で、橋までの安全確認は？」

上野は現地スタッフに尋ねた。

「少なくとも彼らが通過する間、襲撃はなかったそうです」

「先遣隊を襲撃するバカはそうはいないだろう?」

「確かにそうですが…」

彼が言わんとしていることは分かる。ここまで来た以上、引き返すわけには行かないのだ。

それからさらに数分後、彼らの列車は予定されていた迂回路へと入った。

列車は時速80キロに増速し、それまでかなりのほほんとしていたベトナム兵が緊張感のある表情へと切り替わった。

それと同時に、鈴木顔は一層青くなり、傍目から見ても心配になるほど呼吸が早くなっていた。

現地スタッフの体も、微かに震えているように見える。

現在のスピードではゲリラ地帯を通過するのに約40分かかる。きっと人生で最長の40分になるだろう。

迂回路に入った後は誰も喋らなくなった。聞こえてくるのはオンボロトラックの騒々しいエンジンが叫ぶ音と、それによって駆動する4つの車輪が路面を削りながら走る走行音くらいだ。

息が詰まる恐怖の時間を過ごしながら、上野は妙に冷静な自身の頭に疑問を感じていった。

恐怖はある。いつ飛んでくるかも分からない銃弾の恐怖はもちろん感じているし、銃弾を受けて感じる苦痛に対する恐怖は尋常ではない。

だが、頭は冷静そのもので、どのタイミングで襲撃を受ける確率が高いかを真面目に考えている。

10キロほど、つまり道の途中での襲撃か？あるいは橋が近付いた瞬間か？それとも、橋を渡っている途中か？

まるで他人事のように考えている。

1つわかることがあるのは、襲撃が間違いないあると言うことだ。彼の予想はよく当たると。

悪いことは特にそうだ。

「今回は外れてくれよ……」

小声で呟いたその刹那。

過去何回か聞いたことのある珍しい風切り音が聞こえてきた。

彼がそれに気づき、対応しようとしたその時、後方を走っていたウラル・トラックが火を吹き、爆発を起こした。

爆発による衝撃波を受けて上野の体は宙に浮きそうになったが、初動が早かったため、なんとかトラックの手摺に捕まることができた。

が、同乗者はそこまで対応はできなかつたようだ。

鈴木は叫び声を上げながら宙を舞い、現地スタツフは恐怖に顔を歪めながら同じように宙に浮く。

ベトナム兵はどこかに頭を打ち付けたようで額から血を流している。

時間はゆつくりと動いているように見えたが、それも一瞬だ。

時間が再び動き出し、鈴木と現地スタツフが荷台の床に体を打ち付け、ベトナム兵は苦痛に呻きながらも何とか立ち上がった。

上野自身も、床に体を投げ出された体勢になっている。

上野は立ち上がり、後方を見た。

炎上するウラル・トラツクから生存者たちが脱出していく。生存者と言っても火達磨になり悲鳴を上げる者ばかりで襲撃に対応できる兵士は一人もないようだ。

前方のU A Zの重機関銃が重々しい発砲音を発し始めた。12.7ミリ弾をジャングルにばら撒いている。

重機関銃が発砲するとほぼ同時に、ジャングルから銃声と共に何十発もの弾丸がこちらに向けて発砲された。

上野が伏せると同時に幌を貫いて弾丸が飛んできた。

運悪くそのタイミングで立ち上がり、銃弾を受けた鈴木が苦悶の表情を浮かべながら

床に倒れ込む。

外からベトナム語で何やら怒号が聞こえ、反撃の銃声が始まった。それを聞いた車内のベトナム兵が幌をナイフで切り裂き穴を開ける。

その兵士が厳しい口調で何事か叫ぶ。

出ろ、と言っているのはすぐに分かったので取り敢えず無事な現地スタツフに先に行くように合図する。

相手はすぐに領き、幌の穴から急いで脱出していく。ベトナム兵がこちらにも脱出するように指示しているようだが、上野は先に行くように顎で刺す。

ベトナム兵は一瞬考えた後、何事か言うと言から抜け出して行つた。

出ていくのを見た後、彼はすぐに鈴木の前へ向かつた。

鈴木は荷台の真ん中あたりで倒れていた。

「鈴木！無事……」

彼はそれ以上言えなかつた。鈴木は瞳孔はすでに開いていたからだ。

彼は急いで手を合わせ、簡単な祈りを済ませた後、彼の遺品になりそうなものを回収し、トラックから脱出した。

U A Zが爆発したのは彼が脱出し、近くの岩場に隠れたすぐ直後だった。

木つ端微塵に吹つ飛んだトラックの残骸が、炎を帯びた弾丸となり、彼のすぐ横の地

面を抉る。

その間も銃声は止まることを知らず、それによって増える負傷者の悲鳴や呻き声が銃声の合間に聞こえる。

上野が潜んでいる岩場に、ベトナム軍の通信兵が転がり込んできた。

通信兵はこちらを見て驚き、56式自動歩槍を構えかけたが、こちらが誰かすぐに気付いてホツとしたように岩にもたれた。

「無事でしたか……。よかった」

「あっちはどうなってるんだ？」

「マズイことになってます。私がここに来たのは、この場から離れて味方に襲撃の証拠を証明するためです」

通信兵がビデオカメラを取り出した。

上野はそれを聞いて頷きかけたが、すぐに気付いた。

「この場から離れる？」

「ええ、この場から逃げるんです」

通信兵は苦悩に満ちた表情を浮かべた。が、それでもその目には決意が浮かんでい

る。通信兵は岩陰から少し顔を出し、道路での戦闘に少し目を向けた後、上野に言った。

「すぐに味方は鎮圧されます。急ぎましょう」

「急ぐって言ったって、どこに行くんだ？」

「戦闘終了後に奴らがこの辺りを見回るかもしれない。そうなたらもう間に合わない。そうなる前にかく離れるんです」

「しかし…」

上野がなおも食い下がるので通信兵は少し厳しい口調で言った。

「彼らの犠牲を無駄にしないためにも逃げなければなりません。あなたが1人ということとは、鈴木さんはもう亡くなっているのでしょうか？」

「…」

「彼の死を、日本のご家族に伝えるのはあなたしかいないことをよく自覚してください」
「…分かった」

通信兵はその言葉を聞くと、再び周囲を見渡し、上野に後についてくるように指示を出した。

彼はその指示通りに通信兵の後をついていく。

銃声が鎮まりつつある道路を背に、2人はカンボジアのジャングルの奥地へと足を踏み入れていった。

襲撃から3時間後。

襲撃現場にたどり着いたゴ・ヴァン・タン大佐は焼け焦げたウラル・トラックを見て苦々しい思いを感じていた。

物資輸送に従事していた30人のベトナム兵と10名のカンボジア人、1人の日本人を喪い、積んでいた医療品や食糧が根こそぎ奪われていけば、誰でもそんな想いになる。彼は舌打ちしながら部下に尋ねた。

「生存者はいないか？」

「残念ながらこの場にはいません。襲撃者の詳細は不明ですが、おそらくポル・ポト派のゲリラ兵であると予想されます」

「そうだろうな。…この場はいないとはどう言うことだ？」

部下の妙な言い回しに気付いたゴは、相手の顔を見て言った。

「上野氏とミン兵一の遺体がありませんでした。それと、道路脇の岩場からジャングルに向かって足跡が確認されています。これらを総合的に考慮した結論として、この2名の生存が予想されます」

「そう言ったことは下士官レベルでして欲しくないのだが…。まあ、いい。その足跡が敵の偽装工作である可能性は？」

「可能性は十分にあり得ます。ですが…」

「なんだ」

「今回の襲撃はお粗末極まるものです。この襲撃者がそこまで頭が回るとは思えませんが」

ゴは、部下のこの考えを吟味した。悪くない考えではある。説得力があるし、現場状況とも整合性が取れている。だが…。

これ以上、部下を失うようなことがあればこちらのキャリアにも関わる。畏である可能性を考慮すれば、簡単に部隊を動かさない。

だからと言って生存者がいる可能性を捨てることもできない。
ならば。

「…クラックスとか言う傭兵部隊が確かいたはずだが？」

「はい。この辺りで活動中のはずですが…」

「彼らに生存者探しをして貰おう」

「よいのですか？我々が動かなくて」

「諸君らを危険に晒す訳にはいかん。が、しかし生存者も見捨てる訳にも

いかん。それなら、彼らのような金で動く者たちを使うのが利口だ」

「…分かりました。クラックスに生存者の救助を依頼します」

「そうしてくれ」

ゴは、それだけ言うと部下の元を離れ、目の前に広がるジャングルを見つめた。彼の

頭の中にあるのは、本国での安全な後方勤務に就く未来の自身の姿だけだった。

ベトナム軍内に侵入している『鼠』からの連絡により襲撃が不首尾に終わったことに気付いたクアン・ユーは苛立ちながらその報告に対する対応策を考えていた。

だから素人に仕事をさせたたくないのだ。奴らはすぐに適当な仕事で済ませようとする。

生存者が存在するとなると非常にマズイ。我々がこの襲撃に関わっていることが知られることは良くない。特に、日本人をこの襲撃に巻き込んだことは。

現在日本政府は、我々民主カンプチアを正当な政府と認識しているが、かつて行った知識人の粛清をよく思っていないマスコミたちが、少しずつではあるが日本国内でこの事実を報道しつつある。

あの国の人間は人権や人命とやらにやたらとうるさい。そして、日本の政府は国民感情に左右されやすい。

そこに日本人がこちらの襲撃で死亡した証拠が出ようものなら日本政府の大々的な政策変更が行われかねない。

それだけは避けなければならない。何としてでも抹殺せねば。

「…ユアク」

「何でしょうか？」

部下のユアク・ヤシスが陰から姿を現した。クアンは彼に指示を出す。

「生存者を排除する。あの辺りで活動中の部隊はいないか？」

「穴熊が活動しています。彼らにやらせますか？」

「ああ、彼らなら問題ない。指示を出してください」

「分かりました」

ユアクは頭を下げるとすぐに部屋を出て行った。

それを見届けたクアンは、中国の古いタバコを取り出して火を着けようとしたが、マッチがないことに気付いてやめた。

掘った小屋の窓から見えるジャングルは濃霧に包まれつつあり、霞んだ緑色にしか見えなかった。

自動車の通行により轍が出来た道を、V-100 コマンドウが疾走していた。車体にはどこの国に属しているかを示す国籍マークの代わりに4つの端が光り輝く十字架を啜えたオウムが描かれている。

車体の色は何度となく塗り替えられた跡がある。それは、この車両が何度となく、あらゆる場所で活動していたことを表していた。

現在のカラーリングはジャングルに合うグリーンの迷彩色だ。

カンボジアの田舎道を通り走るコマンドウの車内には陽気な空気が流れていた。

持ち込んでいるラジオからはこれまた陽気な歌が流れており、車内の空気をさらに穏やかにする。

狭い兵員収容部分で他の乗員と共に体を縮こませながら座っていたグレラ・マーティは、ラジオから流れる歌に合わせてリズムを取っていた。

グレラはカンボジアに展開しているクラックスの部隊長を勤めていた。

クラックスは、オーストラリアに拠点を置く傭兵集団である。コマンドウの車体に描かれている南十字星を啞えたオウムのマークは、彼らクラックスのシンボルだ。

クラックスのリーダーを務めるオールド・ドッグことベルズ・オービスはオーストラリア軍に所属していた退役軍人だ。

第二次大戦を経験した老兵は大戦中と違い、限られた軍事費が原因でつまりは現在の戦力を維持できなくなったために、退役を余儀なくされた。

もちろん、彼はその事を恨んでいるわけではない。彼の愛した祖国の判断は合理的で正しい。彼が上層部の人間でも同じことをしただろう。

だが、彼はもう普通の生活に戻れる人間ではなかった。彼の人生は軍歴とほとんど同じで、彼の根底を構成するのは硝煙漂う戦場の空気に他ならなかった。

故に、彼は普通の生活に馴染めず、やがて祖国を離れ傭兵として生活するようになった。

いくつもの戦場とその後方を行き来していた彼に、やがて仲間ができた。彼はその仲間とともに後にクラックスと呼ばれるようになる傭兵団、サウス・クロスを立ち上げた。彼らは雇われる都度に評価を上げ、それと同じように人員が増え、資金が増え、信頼を得た。

グレラがこの傭兵団に入ったのはちょうどその頃だ。彼女もまた、オーストラリア軍に一時期所属しており、その時からオールド・ドッグの噂は聞いていた。

彼女は軍規に縛られない自由な兵士達に憧れを抱いていた。そしていつか、彼らと共に戦いたいとも思った。

もちろん、現実はそのなにごとでもない。彼らは、彼女が思っているほど自由ではないし、とにかく危険が多かった。

が、グレラは傭兵という響きにある種の幻想を抱いていた。

そして、その幻想を持ったまま、すでにクラックスに名称を変えていた傭兵団に入ったのだった。

喧しい通信機の音で、彼女は現実へと引き戻された。

部下の1人が、通信機に返答する。

「こちらクラックス」

通信機からかなり音質の悪い声が聞こえてきた。

『クラックス、こちらHQ。追加のオーダーだ。エリアビクターにて救出案件が浮上。ベトナム兵1名と日本人1名の救助を要求する』

救助要請だと？そんなものをこちらによこすとは…。彼女は部下に変わり返答する

「こちらクラックス。現場指揮官のグレラ・マーティだ。詳しい状況を説明しろ」

通信の相手は一瞬黙った。女が返答したことに驚いたようだ。グレラは口角を上げて笑みを浮かべた。

こういった反応を彼女はこれまでに何度も経験していた。最初こそ腹を立てた彼女だが、やがてこの業界ではこれが当たり前のことであることが分かったので、彼女はむしろこの反応を楽しむことにした。

残念なことに相手はすぐに立て直し、彼女が楽しむ機会はすぐに失われてしまった。

『3時間17分前にエリアビクター・ポイント4でポル・ポト派残党と思しき部隊による襲撃があった。襲撃されたのは日本人支援者による物資輸送部隊。積荷は医療品及び食料。兵員輸送トラック2台と武装トラックで護衛していたが、全滅したらしい。が、襲撃者は多くの証拠を残しているため、そこまでの手練れではないと上層部は考えているとのことだ。』

また、日本人とベトナム人の2人が生存している可能性がある。

クラックスへのオーダーはこの2名の救助だ。

報酬は言い値で構わない。了解したか？」

通信士はひと息に説明した。聞きたいことは山ほどあるが、時間がないようなので一番重要なことだけを聞いた。

「追っ手はいるのか？」

『不明』

彼女は抑えることもなく舌打ちをした。それでは手の打ちようがない。彼女は仕方なく次の質問をした。

「救助対象はどの方向に移動したと思われる？」

『ビクターからウイスキーへ向かった模様。予想位置はエリアウイスキー・ポイント10』

彼女は隣で待機している部下に地図を出すよう指示した。

地図にはあらかじめエリア分けされ、なおかつ複数の数字が書かれている。この無線が傍受されていても、この地図を見なければ正確な場所が分からないと言うわけだが、そんなにうまくいかないことを彼女はよく知っていた。

襲撃位置から予想位置まで5キロほどだ。

素人たちにしてはペースが速い。ジャングルを歩くことに慣れた人間なのだろう。それに、1人はベトナム兵だという。ならば、多少は偽装工作をして移動しているだろ

う。追っ手がいたとしても追いつくのは時間がかかるはずだ。今から動けば十分間に合う。

彼女はある程度のプラン建てを頭の中でし、無線の向こうにいる相手に言った。

「了解した。報酬は成功後に交渉する」

『前金は良いのか?』

全く、何と無礼な奴だ。彼女は舌打ちの代わりに言った。

「我々の仕事に不満があるか?」

『い、いや、そう言うわけでは…』

相手は焦ったように言葉を発した。

彼女は焦った相手の姿を想像し、笑みを浮かべた。ざまあみろ。

「我々は確実に仕事をこなす。それだけの実績は残したつもりだが…?」

彼女はそれだけ言うと言信を切った。話はもう十分だ。

隣にいたゼン・アングル・グランサーが聞いてきた。

「良かったのか、グレア?」

彼女は頷きながら老練な部下に答えた。

「勿論よ、アングル。私たちにやれないことなんてないわ」

老兵は苦笑したようだった。

「何がおかしいの?」

「いや、なに。あんな小さい子だったのが随分と成長したと思つてな。いいだろう、リーダー。命令を出してくれ」

グレアは不満そうな顔をしたが、すぐに動いた。

「聞いた通りよ。次の道を左折、エリアウイスキーに向かう」

『Yes ma, am』

襲撃地点から2キロほどのジャングルの中に、数名の男たちが潜んでいた。彼らはポル・ポト派に所属する軍人たちだった。

彼らの仕事は——仕事というほど真つ当ではないが——ありとあらゆる非合法な行為だった。強奪、拉致、殺人、密売、拷問などなど、少なくとも普通の人間ができる行為ではない。

しかし、彼らはそれを仕事にしている。

感情が無いわけではない。叫び声を聴けば耳を塞ぎたくなるし、命乞いをされればそれに応えたくもなる。

だが、彼らはそれをしない。

無慈悲に、そして確実に仕事をこなす。それが、彼らに与えられた命令だから。それが、彼らの仕事だから。それしか、彼らは知らないから。それしか、彼らはできないか

ら。

感情を押し殺し、慈悲を踏み潰し、人間らしさを削ぎ落とした。

それが、彼ら『穴熊』だった。

『穴熊』リーダーのヴィスク・ガルマラップはその中では比較的人間的であったが、部下たちと同じくらい仕事に忠実だった。

今日の仕事は村の襲撃だった。最近、医療品が届いたばかりの小規模な村で、自警団程度の警察力しかなく、生き残るために必死なポル・ポト派の彼らがその村を襲わない理由はなかった。

仕事は短時間で終わった。彼らが、63式自動歩槍を見せるだけで村の人々は医療品や金品を差し出して来た。

弾を使わずに仕事が付くのはいいことだ。弾を無駄にせずに済む。

それらの戦利品を回収した彼らは、村人をさらに脅し追いかけて来たり、連絡をしないように釘を刺し、それがただの脅しでないことを証明するため、近くにいた男の足を撃ち抜いた。

村人たちが震え上がる光景を、ヴィクスは愉快的な気持ちで見ている。彼にとっては、それも戦利品の一つだ。

それだけすると、彼らは撤収した。時間をかけず、最高の成果を挙げる。

ジャングルの中を静かに駆け回る彼ら『穴熊』の真骨頂だ。

彼らの元に、次の仕事か舞い込んで来たのはそんな一仕事終えてからほんの10分後であつた。

「生存者の抹殺?」

『そうだ。相手はベトナム兵と日本人の2名だ。予想位置は君たちが襲撃した村から南に3キロほどの位置だ。やれるな?』

彼らの指揮官であるクアン・ユーの部下ユアク・ヤシスが、無線越しに無茶な要求をして来た。

予想位置が非常に大雑把で、はつきり言つて見つかりそうにない。しかし、相手が求めていた言葉は、正直な返答ではない。

「やれます」

ヴィクスは答えた。その返答以外に選択肢はない。

ヤシスはその返答に満足したらしく、重要な情報を付け加えた。

『敵の装備は自動小銃だけだが、どうやら救出部隊がそちらに向かつているらしい。クラククスと呼ばれる傭兵部隊で、中々の手練れのような。奴らより先に標的を見つけ出して始末してくれ。以上だ』

クラククスの噂はよく聞いていた。優秀な指揮官に率いられた歴戦の強者たちの部

隊だと聞く。

そんな相手とやり合えというのか。

いや、あくまでも奴らより速く生存者を仕留めればいいだけの話だ。

地の利は我らにあるのだ。恐れることはない。

彼は、後ろにいる部下たちを見た。特に何も感じることはないようで、全員が無表情

で待機している。

彼らは無言だが、言いたいことがヴィクスにはすぐに分かった。

『命令を』

彼はその要求に応えた。

「仕事だ。ベトナム兵と日本人を始末する」

『了解』

部下たちの返答は至極簡単だったが、ヴィクスに対する絶対的忠誠が感じられるものだった。

ヴィクスは部下たちに軽く合図をし、ジャングルの木々に紛れて消えた。

蒸し暑いこの気候をここまで恨めしいと思ったことは一度もない。

上野はジャングルの中を歩きながら考えた。

襲撃からすでに3時間半。つまり命辛々逃げ出し、前を歩くベトナム兵を追いかけて

このクソ暑いジャングルを草をかき分け、何百匹もの虫を払いのけ、何度となく細い川に足が浸かり、追手の恐怖を常に感じながら味方との連絡を一切取らずに3時間半歩いたことになる。

一応、抗マラリア剤は打っているものの、それ以外にも蚊が媒介する病原菌は幾らでもある。蚊に刺されるのはこれ以上避けたいところだが…。

現状ではとても避けられない。

取り敢えずの所、彼らはゲリラの支配地域を抜け、何とか治安の安定している場所を目指していた。

治安が安定していると言うことは、この国にとってベトナム軍がいると言うこととはほとんど同義であることは言うまでもないことで、だからこそ彼らはそこに向かおうとした。

が、彼らの逃避行が簡単に終わるものではなかった。

まず、そもそも治安の安定している都市自体がかなり遠かった。

首都から130キロも離れたこの辺りは僅かな地方都市と、それを取り囲む村々で構成された地域が多い。

村の1つ1つに、ベトナム軍が進駐するわけにも行かないので、村の多くは自警団以上の警察力はないも同然で、安全もクソもない状態だった。

そのために、彼らは襲撃地点から数十キロ先の地方都市へ向かわねばならなくなつた。

それも、ただの数十キロではなく、ゲリラによつて支配されているジャングルを徒歩で向かわなければならぬのだ。

あまりにも困難な道のりだ。はつきり言つて現実的ではない。

が、彼らとしてはやるしかない訳だ。

生きている以上、簡単にくたばつてやる気はない。

それに、彼らには生きる理由があつた。上野は鈴木之死を家族に伝えるため、ベトナム軍の彼、ミン兵一は襲撃者の素性を明かすために。彼らは生きて帰らなければならぬ。

そうでなければ犠牲者たちに申し訳が立たない。

また川を渡つた。水音がジャングルに響く。

「もう少し静かにお願いします」

ミン兵一が上野の方を見て顔をしかめつつ言つた。

上野は小さく謝罪するだけしたが、ミンの顔に疲労の色が浮かんでいるのが分かつた。

この3時間半の移動中に、2人はそれぞれのことを話し合つた。

ミンはベトナムの北部、中国との国境付近の小さな村で生まれたという。家族は祖父と両親そして4人の兄妹がおり、ミンはその次男にだった。長男は村の畑を継ぐ予定で、次男であるミンは家庭の収入源となるために村を出て、陸軍に入隊した。

祖父は、英語が堪能でミンにそれを教えていた。今思えば、軍に入ることを想定してのことだったのかも、ミン自身は回想している。

どちらにせよ、彼の英語はある程度役に立った。通信兵となつているのも、その辺が関係しているだろう。

ミンが軍に入ってから2年後、カンボジア・ベトナム戦争が開戦した。彼の配属されていた部隊も、その動きに合わせてカンボジアに進駐し、幾つかの戦闘を経験し、現在に至るといふ。

一方の上野も、それに勝るとも劣らない人生を歩んで来た訳だが、その話を聞いたミンは半ば呆れながら聞いていたらしく、時々、「馬鹿だな、あなたは」と小さな声で漏らしていた。

2人の距離感は、この3時間半でかなり近くなった。共に協力し合う戦友、とまでは行かないが、それに近い関係が築けていた。

先程の注意も、その賜物だと言える。それまでは、もつと命令に近いものであったことを考えれば十分な進歩だ。

が、それ以上にこの2人がここで来れたのは、やはり2人ともジャングル慣れしているからだろう。

ミンは深いジャングルであるベトナム北部の生まれであり、幼い頃からその辺りを散策していたので、こう言った場所はよく慣れていたし、上野も世界中を回っていた頃にいくつものジャングルを歩いて来た。

そう言う面では、彼らはこの逃避行に極めて向いていたと言えたが、流石にそろそろ限界が近くなって来た。

あたりも少しづつ暗くなって来ており、これ以上歩くのは本来極めて危険だが、今の彼らは旅行者でも遭難者でもない逃亡者である以上、簡単に休むとは言えなかった。

それから更に30分歩いた頃、ミンが立ち止まった。

「どうした?」

上野は彼に聞く。

ミンは無言で少し先の岩場を指差した。上野はその方向に目を向ける。

ミンが何を指差していたかはすぐに分かった。

岩場にはちようどいい大きさの洞窟があった。それも、この場所からでなければ岩や樹木たちが邪魔をして見えないような場所にある。

ミンが言わんとしていることはすぐに分かった。

「あそこで休むのか?」

「そうです。あそこなら外から簡単には見つからないし、見張りもしやすい。休む場所としては絶好の場所でしょう」

2人はそれ以上何も言わず、その穴を目指して岩場を登っていった。

疲労が溜まった身体にはキツイ登りだが、10分ほどの格闘でその穴まで来ることができた。

その穴は水の浸食によつてできた洞窟のようで、外のジャングルより湿度が高いように感じられたが、中は非常に涼しかった。

後から入つて来たミンが、洞窟の外を眺める。どうやら、安全かどうか確認しているようだ。

ミンはいくつかの方向から見た後、満足したようで奥の方に入つて来た。

「ここなら一晩くらいは安全に過ごせるでしょう」

「そうだといいがな」

「…心配なのは分かります。私も同じですから。ですが、ここより安全な場所なんて簡単には見つかりませんよ」

ミンの言葉はおそらく正しい。この洞窟以外にも、いくつそれに類するものを見て来たが、どれも安全に過ごせるとは言い難いものばかりだった。

ここは、ミンの言うことを信じて一休みする方がいいだろう。

上野はちようどいい高さの岩を見つけてそこに座った。ズボンに結露した水滴が染み込んで来る。

彼は慌てて立ち上がったが、すでに手遅れであることはシミのついたズボンを見て分かった。

舌打ちする彼を尻目に、ミンはポケットに突っ込んであった地図を取り出しそれを吟味し始め、やがて上野を呼び寄せた。

「私たちがいるのは、ここです」

指差された位置はWと12の交点から少し離れた位置だった。ミンの指はそこから動き、やがてクメール語で書かれた都市に行き着いた。

「私たちの当初の目的地であるプルサットがここ。距離にしてザッと40キロで、ポル・ポト派のゲリラ地帯の向こう側です」

「嬉しくない情報ありがとう」

上野はミンに嫌味を言ってみたが、ミンはそれを難なく受け流しながら続けた。

「いえいえ、知っていないと困る情報ですから。それは置いておくとして、我々の今後の動きを考えなければなりません」

「そうだな」

「まず、お分かりかとは思いますが、我々がベトナム軍に助けを求めに行くことは現実的ではありません。たった2人で、しかも1人は正規の訓練を受けたことのないド素人の2人で、経験豊富なゲリラ兵数百人が隠れるジャングルを突っ切るなんて正気の沙汰じゃない。」

とは言え、何もしいままここにいるのはもちろん論外です。

我々は動き続けなければなりません」

「ならどうするんだ？」

「敵には我々がまだプルサットに向かっているとと思わせておき、ジャングル内でうちよろし、敵に見つかる前に味方に発見してもらおうと言う計画で動きます」

「それは計画じゃなくて自暴自棄って言うんだ」

上野の呆れた顔と言葉に、ミンは真面目な顔で答える。

「正直なところ、これ以上の策はありません。これが我々が生き残るための唯一の方法です」

「…」

「とは言え、本当にいるかどうかも分からないモノに期待するのは些か心配ですから、可能な限りプルサットの近くまで移動して行くことになります」

「それだと艀装の意味がないんじゃないか？」

「ええ。ですから、大きく迂回しながら向かいます」

「迂回と言うとどれくらいだ？」

ミンは地図に記した自分たちの位置から大きな楕円を描きながらプルサツトを示した。

「ザツとこれくらいですかね？」

ミンはこちらに笑顔を浮かべながら言った。

ミンの描いた楕円は、40キロの距離のおおよそ2倍の距離はあつたはずだ。

「…馬鹿か？」

上野は不満や呆れ、恐怖といった感情を混ぜた一言を口にした。

ミンはさらに笑顔を大きくしながら答えた。

「あなたと同じくらいには」

その目は、全く笑っていないかった。

第6話 Yesterday

1982年 6月19日

グレラ・マーティは、部下たちを連れ、カンボジアのジャングルの中に分け入っていた。

彼女達をここまで運んできたV-100コマンドウは部下の1人に別の場所に移動させており、彼女たちが帰る方法はベトナム軍のヘリに来てもらうか、歩いてジャングルを抜け、道に出るかの2択になっていた。

「ちようど救助対象と同じ状態ね」

グレラは誰に言うでもなく小さく呟いた。

部下たちは数メートルの間隔を開けてゆっくりと移動しているため、足音はほとんど聞こえない。

が、部下たちが背後から彼女のことを見ていることに気付いていた。

今や指揮官の位置にいる彼女ではあるが、彼女がその地位にいることが好ましくないと感じている者は多い。

今この場にいる部下たちは彼女に好意的ではあるが、1つのミスでそれが真逆の感情

に変わることを彼女はよく知っていた。

彼女は握り拳を挙げた。停止を示す合図だ。

彼女は部下たちの動きを確認することもなく、ゼン・アングル・グランサーを呼び出す。

アングルは直ぐに彼女の元に来た。

グレラはアングルに指示を出す。

「地図を」

彼は何も言わずに持っていた地図を差し出した。

グレラは地図と現地の地形を見比べ、やがて呟いた。

「予想ではこのあたりだけ……」

「いる気配はありませんね」

アングルが彼女の言葉の先を口に出した。

グレラは頷きつつ、答えた。

「彼らの動きが予想より速いか、あるいは遅いか。いえ、遅いはいわね。彼らは優秀だから」

「しかし、優秀とはいえ彼らが危険であることには変わりません。出来るだけ早く見つけなければ」

「分かってるわアングル。動くわよ」

最後の言葉は部下たちへの指示でもあった。

彼らは再び前進を開始した。

その後方約3キロの地点に穴熊たちは静かに、しかし非常に速やかにジャングルを抜けて来ていた。

クラックスたちの姿を見ることはなかったが、移動した跡をいくつも見かけていた。

奴らの方が先行している事実は彼らを僅かに焦らせていた。

が、奴らがいると言うことは、標的がその先にいることでもある。

遅れは簡単に取り戻せる。問題は、クラックスの奴らとほぼ確実に交戦状態になると言うことだ。

人数はこちらと同数だが、奴らの装備の方が優秀だ。が、しかしこちらには相手に対して姿を晒していないというアドバンテージがある。

また、こちらにはこのジャングルを知り尽くしていると言う最大の有利性を持っている。数名は殺られるかもしれないが、最終的には我々が勝つはずだ。

が、甘い考えを持つのは良くない。かつて、その甘さが原因で大敗北を期した戦闘は枚挙に暇がない。

もちろん、ヴィスク・ガルマハラップはそんな敗北を味わう気は全くなかった。

彼らは与えられた任務を確実に遂行してきた。『穴熊』の名はそうやって得た一種の称号に他ならない。

今回も、その名に見合う成果を挙げるつもりでここまで来たのだが、一抹の不安がある。

クラックスに対しての不安ではない。むしろ、今回のターゲットに関してだ。

情報にある日本人の男。

いくらお粗末な仕事とは言え、ほぼ完璧なタイミングの襲撃だったはずだ。それに生き延びることが出来たと言うだけで、その男は評価に値するだろう。

そして今、我らの追撃を未だに回避し続けている。

ただの男ではない。

ガルマハラップはふと、疑問に感じた。

何故これほど不安を感じるのか？

普段通りの仕事をすれば、なんの問題もないはずだ。

それなのに……。

水溜りに足を突っ込んでようやく、彼の思考は中断された。ジャングルに水音が響き、ガルマハラップの心臓が大きく跳ね上がる。

部下たちが珍しくしくじったボスを見て、困惑の表情を浮かべると同時に、周囲への

警戒を強める。

1分ほどそうした後、ガルマハラップは安全と判断し再び前進を開始した。すでに不安は捨てている。

目下のところ、彼が考えなければならぬのは、ターゲットをどうやって抹殺するか以外になかった。

上野は自分がまだ歩き続けていられることを不思議に思った。体力の限界を超えてなお歩き続けているのは、ひとえに生存本能のなせるわざ、つまりは追ってくる敵に対する恐怖と、こんなところで死にたくないという恐怖によるところが大きいだろう。

こういう時に恐怖は味方であるように感じるが、それが幻想に過ぎないことを、彼は知っていた。

現に、彼らの精神はすっかり擦り切れてしまい、くだらないミスを繰り返している。鳶に足を取られる、水溜りに盛大に突っ込む、木の根に躓く、木の枝に頭をぶつけるなどがその好例と言える。どれも気を付ければ簡単に回避できるミスだ。

そろそろ、終わりか。

上野はそう感じた。

限界を優に超え、精神的にもギリギリな状態が長時間続いているのだ。

そういう考えに至るのも無理はない。

しかし。

諦めるわけにはいかないのだ。

死にかけたことなど、何度も経験している。南アフリカでは、白人と黒人との民族闘争に巻き込まれ、東南アジアではイスラム過激派に車列を襲撃された。

ただの日本人なら簡単に死んでいるような修羅場を、彼はいくつも潜り抜けて来た。今回も潜り抜けてやる。

彼らは偽装しつつ迂回を続けながらプルサットへ向かっていた。

地図でいうと、エリアウイスキー・ポイント14の北側だ。

勿論、救援に分かるような目印を残しているが、それでも来るかどうかは五分五分どころから5分の1くらいの確率だろう。

いや、追っ手が見つけるということを考慮すれば、それは更に下がるかもしれない。

どちらにせよ、彼らはすでに困難なことから目を背けることに躊躇しなくなっていた。

いちいち気にして、対処法を考えていては歩みはすぐに止まってしまっただろ。

逃げ切る可能性を僅かでも上げるために常に動き続けなければならぬ。

ミンが突然足を止め、こちらに伏せるようにジェスチャーで指示した。

上野は疲労しているにもかかわらず、自分でも信じられないほどのスピードで、なお

かつほとんど音を立てずにジャングルの湿つ氣た地面に伏せた。

目の前に似たような体勢で伏せているミンは、息を潜めて聞き耳を立てているようだ。

2人は、数時間前までいた洞窟内でいくつかのジェスチャーを決めていた。

1つの音が命取りになるこの逃避行において、こういった声を出さない意志表示は極めて重要になる。

そして、先程のジェスチャーが指す意味は、『敵』だ。

その場に伏せて1分後、微かに湿氣た枯れ葉を踏む音と、少々荒い息遣いが聞こえてきた。

上野は僅かに視線を上げる。

そこには5人ほどの男がいた。男たちは農民風の格好をしているが、肩にかかる63式自動歩槍が、ただの農民ではないことを表している。

この辺りでうろついている武装した勢力といえばポル・ポト派のゲリラしかない。

恐らくは、こちらの生存に気付き追っ手を差し向けたのだろう。今、こちらに近付いて来ているのはその命令を受けて探索をしている追っ手の一部、だと思われる。

近付いていると言ったが、ただ近付いて来るのではなく、真つ直ぐこちらに向かつて歩いて来ている状態だ。

マズイことこの上ない。

上野は体を出来るだけ地面に密着させ、祈るように頭を下げた。

別に信仰している神がいるわけではない。彼はどちらかと言うと無神論者だし、日本人の多くが特定の宗教を信仰しているわけではないだろう。

しかし、日本人の多くは、新年には初詣をしに神社に行くし、人が亡くなれば葬式を開く。バレンタインにチョコを贈ったり、節分で豆をぶん投げたり、お盆に墓参りに行ったり、クリスマススを祝ったりなどなど、最初とは変わった行事もあるが、年間を通して宗教的な行事が行われている。

そういう面を見れば、日本人は無神論的であると言うより宗教に関して非常に寛容であると言えるかもしれない。

が、その時々により祈る対象を変える変わり身の早さは褒められるものではない。

もし、神という存在がいるとしたら、そんな相手よりもっと熱心な信者を優先するだろう。

神は平等ではないのだ。

現に、追っ手は立ち止まりも、向きを変えることもなくこちらに向かっている。

上野の頭に死という文字が思い浮かんだ。

それと同時に、ミンが突然立ち上がり、ゲリラに向かって発砲を始めた。

ジャングルに響いた銃声は、グレラたちの耳にも入った。それはつまり、救助対象がすぐ近くにおり、なおかつ襲撃を受けていることを意味した。

銃声からどちらの発砲かまでは分からないが、どちらにせよ戦闘が起こっていることに変わりはない。

出来るなら今すぐに駆けつけて加勢したいところだが、ここはグツと堪え、発砲音の右側面に回り込むように移動する。

こういう時にこそ焦らず、静かに移動し、戦況を俯瞰して見なければならぬ。

数分後に側面についた彼女たちは、そこでようやく戦闘の状況がある程度分かっていた。

彼女たちから見て左側、つまり彼女たちがやって来た側に2人の人影が見えた。人影は、近くにある倒木を遮蔽物にして相手の攻撃から身を守っているようだが、弾薬が足りないから、はたまた遮蔽物があまり役に立っていないせいかもしれないが、反撃はごく短時間、それも滅茶苦茶な狙いで撃っているようだ。

一方の反対側、つまりグレラたちから見て右側にいる連中は、付近の木に隠れつつ同じく滅茶苦茶に乱射しているようだ。

統率も取れている気配はなく、ただ敵らしき相手がいる方向に63式自動歩槍らしき銃を発砲している。

戦闘、と言つていいか分からない銃の撃ち合いが彼女たちの目の前にあった。

この場合、先に理性的になった方に軍配が上がることは言うまでもない。

が、しばらくの間はどちらも冷静さを取り戻す事はなさそうだ。

丁度いい。

グレラは部下たちに指示を出す。3人の部下を63式を持つている連中の後方に送り、待機させる。

奴らは前方に集中し過ぎていよう、後方を見ようともしない。

グレラは半ば呆れつつ、部下たちに指示を出す。

彼女の作戦は単純だ。

後方から奴らに対し発砲し、混乱状態を生み出す。そして、その隙にグレラたちが横から攻撃する。ただそれだけだ。

普通なら上手くいくとは思えない作戦だが、相手が相手なだけに、上手くいくはずだ。ああいう奴らにはあまり手の込んだことをしないに限る。

「撃て」

彼女の一言で、攻撃が始まる。

先に指示していた通り、後方にいた3人が発砲を始める。

突然、真後ろから撃たれたゲリラたちは驚いて銃口を後ろに向ける。

横を気にする様子は微塵もない。

あとは簡単だ。

残った4人で、パニックになっているゲリラを仕留めればいいだけだ。

何回かの銃声が響いた後、戦闘は終結した。ゲリラたちは1人残らずジャングルの木々の中で倒れている。

グレラは立ち上がって部下たちに指示を出す。

「みんな、苦労様、周辺警戒を続けて。アンクル、私と来て」

ゼンは無言で彼女の後ろを付いてくる。

2人が向かった先には2人の人物が、つまり救助対象の日本人とベトナム兵がいた。

2人は若干現状を飲み込めていない、要するに呆けたような顔をしている。

取り敢えず、本人かどうか確認しなければならぬので、グレラは尋ねる。

「アツミ・ウエノとミン兵一？」

2人はやはり理解しきれていない顔をしたが、おそらく日本人（グレラからすればアジア系の顔はどの国も同じに見える）の方が一足早く理解したようで、彼女の質問に答えた。

「あ、ああそうだ。えーと、あんたらは？」

「私はグレラ・マーティス。クラックスのベトナム派遣隊の指揮官。こちらの彼はゼン・

グランサー。ウチの隊の副隊長。

私たちは、ベトナム軍の依頼であなたたちを助けに来た騎兵隊ってどこかしら？」

「騎兵隊？ああ、救助ってことか。良かった！助かったよ」

日本人の男が、心底ホツとしたように言った。

グレラは申し訳ない気持ちになりながらも、ウエノと思しき男に言った。

「申し訳ないけど、まだ助かったわけじゃないわ」

ウエノは困惑の表情を浮かべる。一方の現状を理解したミンは何かを悟ったようにため息をついている。

グレラは話しを続ける

「この辺りがゲリラ地帯であるのは理解してくれてるわよね？」

ウエノは頷く。そして、何かに気づいたかのように顔をしかめた。

「危険地帯にへりは送れないってことか？」

「理解が早くて助かるわ」

ウエノは舌打ちをしたが、やがて諦めたように肩をすくめながら言った。

「助けてもらうんだ。多少の苦勞は受け入れるさ」

グレラは僅かな罪悪感から彼に言った。

「私たちが護衛する。これまでの移動よりはマシな逃避行になるわ」

彼女は、それを言った瞬間にそんな言葉が気休めに過ぎないことに気付いた。

ウエノはこちらに目を向けた後、疲れた笑みを浮かべつつ言った。

「そいつはありがたいね」

上野は疲れた体を引きずるようにジャングルを歩いていった。助けが来た時は、それこそ信じてもない（そもそも存在自体を信じていない）神に感謝したが、そこで突きつけられた現実には警戒心をほんの少しだけ解くことができる程度のものであった。

もちろん、救助はとても助かる。クラックスに關しての噂はよく聞いていたし、グセラ・マーティの能力の高さ、そして彼女が率いるチームの力はクラックスの戦歴から簡単に推し測れた。

複数のゲリラ地帯を制圧し、多くの物資輸送を成功させているクラックスの存在は、上野たちや現地住民、治安維持をしているベトナム軍にとつても信頼がおけ、なおかつ強力な戦力だ。

しかし、ただでさえ苦難に溢れた逃避行がさらに続くという現実は、彼にとっては受け入れたくないものだった。

もつとも、その辺りは完全に諦めがついてはいたのだが。

彼は、疲労感に溢れ表情であたりを見回す。警戒の意味もあるが、新しい同行者たちへの興味の意味合いの方が強い。

クラックスのチームは、指揮官であるグレラ・マーティ、その副官にして部隊の最年長ゼン・アングル・グランサー、中国系オーストラリア人のオラニエ・アイ、ガタイのいい分隊支援火器担当のジョーズ・ボンバ・ヘリング、細身で手にしている自動小銃の似合わないジョワン・ロースマン、いつでも陽気そうな顔をしているピーカー・オルーク、油断なく周りに目を光らせる最年少のデンス・ラルフレッドの7人で構成されていた。

現在はアイとラルフレッドが先行し、前方の安全確保と道を作る役割を果たし、上野とミンは他の5人に護衛されながら前に進んでいつている。

すつかり大所帯となった彼らは、地図を頼りに比較的安全な地点であるはずのベトナム軍勢力圏を目指していた。

その為にも、マーティたちが乗って来て現在は別地点で待機している装甲車と合流しなければならず、ひとまずは近くの道路に向かっていく。

彼女は、すでに無線線で装甲車の方に連絡を入れていくらしく、特に迷う様子もなくジャングルを突き進んでいる。

クラックスとの合流前の戦闘以降は、特に追手の気配を感じることはなく、比較的穏やかな逃避行が続いている。

隣を歩くミンも、少し緊張を解いた様で、時折鼻歌を歌いながら力強く前に進んでい

る。

上野はふと、その鼻歌のフレーズを何処かで聞いたことがあるような気がした。ちようど良かったので彼はミンに話しかける。

「ミン」

「なんです？」

ミンは鼻歌を止められたことに少し不機嫌そうだったが、答えてくれた。

「その歌は誰に教えてもらったんだ？」

「祖父です。昔の戦争の時に教えてもらったとか言っていました」

「昔の戦争？」

「ベトナム戦争ですよ。祖父はベトナムだったんですが、戦争中期にアメリカ軍に拘束されて捕虜になったんです」

「無事だったのか？」

ベトナム戦争時の（おそらく現在もまるで変わっていないだろうが）米軍の捕虜の扱いはとても褒められるものではない。むしろ糾弾されて然るべき行いをしていることで知られている。

ミンは答える。

「幸運にも、祖父が拘束されていた施設ではそう言うことは行われていなかったようだ。

むしろ、英語を覚えさせたり、歌を教えてさえいたらしい。

もちろん、本当のことかは分からない。祖父が、自らの身を守るために生み出した妄想かも知れない。

でも、祖父が英語を教えるくらい上達したのは確かだし、僕に教えてくれたこの歌があの国の歌であることも確かだ」

それだけ言うと、彼は小声で歌い始めた。昨日までは良かったと歌うその曲は、今でも色褪せない魅力を持っている。

『Yesterday』：か」

上野は呟く。日本でも知られている不屈の名曲を、このカンボジアの地で、しかもベトナム人の口から聞くことになるとは思わなかった。

「本当に、人生何が起こるか分からないな」

ミンは、上野のこの一言を聞くと歌うのをやめ、答えた。

「ええ、そうですね」

この穏やかな空気は、そう長く続かなかった。

ふと、妙なざわつきを感じた。

マーティから数分後に合流地点に到達すると言われたその矢先のこの感覚。

嫌な予感がした。

ここまででは上手くいっていたが、むしろ上手くいき過ぎている。追跡して来ているはずの敵の気配を未だに感じられないが、それでも彼には確信があった。

気配はなくとも、いることは分かる。

上野は、警戒し始める。

ミンが、上野のこの変化に気付いたようで困惑の表情を浮かべて聞いてきた。

「どうしました？上野さん」

「ん、辺りに目を配ってるだけだが？」

「それは分かっています。何故、そうしているかですよ」

「そろそろ、奴らが襲ってきそうだからだ」

「奴ら？」

「追跡者」

ミンは緊張した表情を浮かべ、周囲に目を向ける。しかし、それもすぐにやめやはり困惑した顔をしつつ上野に聞く。

「私には何も感じないのですが…」

「勘だよ」

「勘、ですか」

「そう、勘だ。よく当たるんだよ、俺の勘は。特に悪いことはな」
「お二人さん。一体何の話をしているの？」

二人の話し声が聞こえたのか、マーティが彼らの元に近付いてくる。

「グッドタイミングだ。マーティさん、周囲への警戒を強めてくれないか」

上野のこの言葉に、マーティは少し考えこんだような表現をした後に、彼に聞いてきた。

「ミスターウエノ、その理由を聞かせてくれる？」

「ただの勘だ」

勿論、彼はそんな理由で彼女たちが動いてくれるとは期待していなかった。だが、それでも少しでも警戒心を強めてくれればいと期待していた。

そのため、彼女の次の言葉は意外であり予想外のもであった。

「いい勘を持つてるわね、あなたは」

「と、言うとは？」

「この辺りの地形、どうだと思おう？」

上野は改めて辺りを見回す。

あたりはまだ木々に覆われているが、前方に視界を向けると、もうしばらく行った先に開けた場所が見える。ここからではあまりわからないが、そこが友軍との合流地点で

あり、ゲリラ地帯を突き抜けるように拓かれた、未舗装ではあるが広い道である事はマーティイ本人から聞かされていた。

後の方位は特に目を惹く地形は見当たらないが、その代わりに鬱蒼とした木々が異常に視界が悪くし、前方の道側から差し込む太陽光のせい、周囲は余計に薄暗く感じる。また、それまでは気にもしていなかったが、大人数になったことが災いし、自分たちの活動音のせいで、周囲の微かな物音も聴こえにくくなっていた。

上野は自身のざわつきの原因がなにかを理解した。

自分でも気付かないうちに、彼の防衛本能が警戒せよと働きかけていたのだ。彼は考えをまとめてからマーティイに対する答えを出した。

「小さな危険がいくつもある。茂りに茂って視界を塞ぐ木々、道からの光で通常よりも薄暗い空間、俺たち自身が出す活動音。

全てが集まると、それらはより大きな脅威となる」

マーティイは笑みを浮かべながら言った。

「半分正解。でも、まだ足りないわね」

「足りない？」

「例えば、道の向こう側はどうなっていると思う？」

「こつち側と同じ感じだろう」

「そう、正解。じゃあ、ジャングルの中は道から見たらどう見えると思う？」

彼は彼女が何を言いたいかわかった。マーティは上野の表情から察したらしく、先程の問いの答えを出した。

「お察しの通り、明るい場所から暗い場所は見にくい。逆に、暗い場所から明るい場所は……」

「見えやすい、と言うことですか？」

ミンが続ける。マーティは頷きながら答えた。

「特に、遮蔽物のない明るい場所はね」

上野は戯けたように言う。

「まさに俺たちが行く場所だな」

「そうね。まあ、だからこそ、それなりの対応策は用意しておくものよ」

「と、言うこと？」

「『雉も鳴かずに撃たれまい』ってね」

「はあ。」

「要は危ない場所に出る必要はないってこと」

上野はしばし口を開け、やがて見当違いのことを言う。

「間違えてるぞ。その例えは」

「えっ」

『雉も鳴かずば撃たれまい』は、余計なことを言ったばかりに自分に災いが来るって意味だ」

マーティは僅かに顔を赤らめたが、自身の間違えを素直に認めるだけの分別はあったようだ。

「これは失礼。とにかく、私たちは暫くこの辺りに隠れてウチの車が来るのを待ちましょう」

彼女は上野から視線を外し、部下たちへの指示を出し始める。上野はそれを見つめていたが、やがてそれを止めて背後を見た。

そして、それを見た。

木の陰から陰へ移動する人影を。

上野は迷わず叫びつつ近くの出来るだけ太めの木の陰に隠れる。

「敵だ！」

Enemyの叫びは、味方にも、そして敵にも聞こえた。

その叫びに対する反応は、クラックスのステアーAUGと、敵側が使用していると思われる銃器の発砲音だった。

ガルマハラップは自身の運の無さに舌打ちした。

せつかくここまで気付かれずにたどり着いたと言うのに……。突然振り向いたターゲットにこちらの動きを見られ、こちらの後方からの攻撃で敵を道に追い立て、出てきたところを狙撃すると言う計画がぶち壊されたのだ。

今やすつかり銃撃戦。奇襲もクソもあつたもんじやない。

…まあ、いい。第2プランに変えればいいだけだ。

彼は倒木にもたれながら無線で道の向こう側で待機していた部下たちに指示を出す。

「第1プランを中止。部隊を2隊に分け、後方から襲撃。奴らを追い立てろ」

『了解』

部下からの返答は非常に簡潔だったが、ガルマハラップはそれに特に感じることはなかった。

彼らはプロだ。こちらの望む動きをしてくれる。

それが済むと彼は状況把握を始め。

敵はクラックスの連中とターゲット2人。クラックスは分隊支援火器持ちが1人おり、他は自動小銃で武装している。ターゲットたちもどうやら武装しているようで、自動小銃と拳銃をこちらに向けてぶつ放している。

どちらがベトナム人でどちらが日本人かはここからでは分からないが、2人ともこの事態に動じず、冷静に反撃してくることに驚いた。特に、日本人の方には。

最近の日本人は平和ボケしている連中が多いと聞いていたが、今回のターゲットはそれなりに修羅場をくぐり抜けてきたらしい。

予想外と言えば予想外だが、それでも最悪の事態ではない。

彼は次に、味方の状況に眼を向ける。

ガルマハラップのいる側には彼を含めて合計5人が展開しており、それぞれがそれぞれを支援できる位置に隠れつつ、敵への攻撃を行っている。

武装はゲリラらしく63式自動歩槍と手榴弾等の小火器、あとはコンバットナイフ等の近接装備だ。

火力不足を感じるものの、彼らはそれを腕でカバーしている。現在は5対9と人数的には劣っているものの、拮抗した状態を維持できている。

ガルマハラップは倒木の陰から自身の63式歩槍を撃ち始めた。

このまま奴らをこの場に釘付けにしてやれば、勝てる。

グレラはすでに敵の腕と、その目的を把握していた。

奴らはこれまでのゲリラとは比べ物にならないほどの能力を持ち合わせている。本物の手練れだ。おそらくベトナム軍の間で噂になっている『穴熊』だろう。

そして、今奴らがこうして銃撃戦を演じているのは、何処かにいる奴らの味方がこちらへ襲撃をかけ易くする為だと。

それくらいのこととは、それなりこの仕事をしていれば分かる。が、それに対応する戦力は、今こちらには無かった。

彼女は舌打ちする。

迂闊だった。地図を見た時、ここを合流場所に選んだのは完全に間違いだった。

この合流地点が救助後、こちらのV-100との合流地点を選ぶ決めてとなったのはジャングルの中でも比較的分かりやすい地形であったことだ。

すぐ近くにかつてのクメール王朝の遺跡が見えるのだ。

これ以上ないほど合流場所として適していた。救助対象の予想位置に近いことも、そこを合流場所にとする決め手にもなった。

しかし、それは敵も同じだった様だ。

おそらく、こちらの足跡を見つけて追いかけて来たのだろう。そして、こちらが向かう先に先回りして部隊を配置していた。

人数はそう多くないとは思われるが、今の人数でも若干苦戦している中、何処からか攻撃されようものなら、今の陣形も崩されかねない。

さて、どうしたものか……。

彼女が隠れている場所に、誰かが駆けて来た。一瞬警戒しそちらにステアーの銃口を向けたが、直ぐに下ろした。

そこにいたのは、勘が良く、何やかんやで武器の扱いに長けた日本人らしくない日本人のウエノだった。

マーティが苛立った顔をしたのに上野は気付いたが、彼はそんなことも無視して彼女に話しかけた。

「さっさと場所を移したほうがいい」

ただでさえ銃声でうるさいのに、マーティの近くにMAG58の7.62ミリの鉛玉をぶつ放すジョーズ・ヘリングがいるせいでかなり声を張らないと相手に聞こえない。

「一応、理由を聞かせてもらえないか？」

マーティはこちらと同じくらいの声で答えた。

彼はすぐに答えた。

「奴らはこつちを釘付けにして後ろから俺たちを挟み撃ちにするつもりだ。今のこつちの戦力じゃ、サンドイッチにされたら対処しきれないんじゃないか？」

「正確な戦況分析ね。でも、あなたは分かってないことがあるわ」

「何だ？」

「出来たらもうやってるってことよ」

マーティは上野に向けて吐き捨てるように言った。

彼はため息をつく。まあ、予想通りだ。流星に、彼女はその程度の事も分からない無

能などでは決してない。それくらいは分かっていた。

だが、それでもやって貰わなければならぬ。ここで死ぬ訳にはいかない。

「いや、出来るな」

「何？」

彼の答えに、マーティは困惑しながら聞いた。そして、苛立ちを隠そうともせず、彼に言う。

「あなたはもう少し賢いと思っていたわ。今どう言う状況か分かっているの？」

「ああ、向こうから銃撃されてる。ほんの少しの移動も一苦勞だ。だが、狙いが正確で程でもないと思わないか？」

マーティは暫く周囲を見渡し、考え始めたようだった。

上野は戦闘が始まってから、反撃しつつも状況把握に努めていた。

敵はこちらの反撃を物ともせず、一瞬の隙もなく弾丸を撒き散らしている。見た目にも派手で、こちらの戦意を嵐のような猛攻で削いでくる。

が、そのせいで直ぐには分からなかったが、着弾地点に奇妙なばらつきがあることに気付いた。

そこで改めてよくと見ると、やはり敵は広範囲に銃撃していることが分かった。

こちらがほぼひと塊りになっているにも関わらず、である。

ここから分かることは1つだ。

奴らこちらの位置を正確に把握出来ておらず、目星をつけて当てずっぽうにぶっ放しているだけである、という事だ。

勿論、何か策があつてわざとそのようなしている可能性がある。しかし、賭けるだけの価値はある。

マーティも、その考えに至つたようだ。

「……いいわ。あなたの考えに賭けてあげる」

彼女は、それだけしか言わなかつた。無線で部下たちに指示を出す。

指示を出し終えると、彼女はこちらに顔を向けて言う。

「私とヘリングで殿を務めるわ。あなたたちが逃げる時間は稼ぐから、早く行つて」

マーティが、右手で指指す。

「分かつた。頼む」

彼女は頷くと、再び銃撃を始める。

上野は態勢を下げて彼女の指差した方角へと走り始めた。

ウエノが走り去るのを横目で見つつも、グレラは顔を正面から逸らすことはしなかつた。

部下たちが移動を始めているが、敵がそちらに向けて攻撃するような動きはなかつた。

た。

ウエノの予想は当たったようだ。奴らは正確にこちらの位置を把握していない。これなら…。

「何とかなるかも知れないわね」

とは言え、そう時間があるわけではない。部下たちが移動すればするほど、こちらの反撃の手は減る。

それを、仕留めたと判断する程、奴らは甘くないはずだ。

気付かれるのもそう遅くはあるまい。それまでに、出来るだけ遠くへ行つて貰わないと、せつかく残つた意味がない。

彼女はただ撃ち続ける。敵を狙い、トリガーに指をかけ、それを引き絞るだけの作業。実に簡単かつ、単純な作業だ。

彼女はその間に、別のことを考える。

私はきつと間違つていた。この仕事を選んだのは。

傭兵が自由などと、今思えば馬鹿らしいにも程がある。

給料はそこそこだが、クライアントの要望に応えるためにこんな風に命を賭けてやり合わなければならない。まあ、それ自体は軍にいたとしても変わることはないかもしれないが。

それでも、やはりリスクが大き過ぎる。軍は、それなりに身の安全を保障してくれるが、ここにはそれがない。

どれもこれも、自分の力と何よりも運が必要になる。

今回、私はそのうちの1つが欠けていたようだ。

要は、運がなかったのだ。

そして、気付く。

ああ、私がいかなんどうでも良い思考をしているのは、この行為の先にある確実な死から目を背けるためなのだ。

味方を逃がすために犠牲となる。

聞けば、美談だ。きっと、彼女たちの行動は英雄的な活躍と見なされるだろう。

ただし、本人たちからすれば、ただの悲劇に過ぎない。

弾丸が、彼女の頬を掠めた。熱い痛みと生温い液体が伝うのを感じる。

マーティは体を瞬時に木影に隠す。

すぐ近くにいたヘリングが撃たれた。ヘリングは彼女の目の前で頭を打ち抜かれ、脳漿を撒き散らしつつ倒れた。もう生きてはいまい。

下らない思考をしている時間はない。

彼女は微かに安堵を覚えた。これで、しばらく思考をする時間もなくなるだろう。

死を意識しなくて済む。

反撃が減っていることには、すぐに気付いた。が、ガルマハラップにはそれが何を意味するか未だ掴みかねていた。

やったのか？それとも逃げたのか？

どうにも、思考がまとまらない。

彼は、部下たちに無線で聞く。普段なら絶対しない行為だが、この際仕方ない。

「1より各員、仕留めたか？」

『こちら2。不明』

『3。1人始末しました』

『4。命中弾は確認出来ず』

『5。こちらも確認出来ず』

そこでガルマハラップは、自身が致命的なミスを犯したことに気付いた。

奴らはこちらが正確な場所を掴めずにいることに気付いたに違いない。

そして、殿を残して撤退したのだ。

くだらないヘマをした。普通ではあり得ない。どうも、今回の作戦はどうもうまく行かない。

彼は舌打ちをした。

彼は無線で部下たちに指示を出そうとする。今いる奴らに構っている余裕はない。彼らの目的は、あくまでも『生存者の抹殺』だ。クラックスの殲滅ではない。

「Iより各員。奴らは逃げた。探せ」

『了解』

部下たちは返答するが、ガルマハラップは自身の指示があまりにも大雑把であることを理解していた。

彼は苛立ちつつ、移動を始める。しかし、苛立ちの中でも彼の意思は明確だった。

必ず奴らを殺してやる。

グレラは攻撃が弱まっていくことに気付いた。まだ、銃弾は飛んでくるが、その射線が減っていることは嫌でもわかる。

どうやら、奴らは気付いたようだ。

彼女は舌打ちをしたが、それでもどこか安心した気持ちがあった。と、同時にそんな気持ちになる自分が腹立たしかった。

彼女は動く。今自分に怒りを感じている時間はない。その怒りを、敵に向けなければ。

彼女はヘリングの遺品と化したMAG58を手にする。弾数の減った弾倉を外し、ヘリングの死体から予備のマガジンを全て剥ぎ取り、その内のIつをMAGに装填する。

殿の役目はまだ終わっていない。

彼女は、MAGを移動しつつある敵に向ける。とは言え、こちらも正確な位置は突き止めているわけではない。

出来るのは足止めで、撃破は二の次だ。

運が良ければ1人か2人くらいは始末出来るだろ。

今更、生きて戻る気はない。せつかくの覚悟を無駄にしてたまるか。

彼女は銃床を肩に押し当て、射撃を始めた。

後方からの銃撃は、運の悪いことに部下の1人に命中弾を与えた。ガルマハラップの真横で、それが起きたので彼はその光景をしっかりと見た。

部下の右肩に弾丸が当たり、腕を丸ごと引きちぎるかの様に腕ぎ取ったのだ。

ガルマハラップの部下たちは大抵の傷でダメージを負うことはないが、今回のような件は当然ながら別だ。

部下は草に覆われた地面に突っ伏して、腕があつた場所を左手で抑える。血がその指の間から大量に溢れ出る。

部下は叫び声をあげまいと唇を思い切り噛み締めているようで、歯が食い込んだ唇から僅かに出血している。

ガルマハラップは既に気付いていた。

彼はもうそう長くは持つまい。

ガルマハラップは躊躇しなかった。彼は上着のポケットからモルヒネの注射器を取り出す。

撃たれた部下も、ガルマハラップが何をしようとしているか気付き、彼に向かって大きく頷きつつ、血で濡れた左手でポケットの中を探り、そしてガルマハラップにそれを手渡した。

ガルマハラップはそれを受け取ると、モルヒネを打った。

ただのモルヒネではない、致死量のモルヒネをだ。

彼はそれだけすると、部下たちの後を追ひ、1人捕まえて言った。

「こいつを持っていてくれ」

血に染まった手紙を受け取った部下は困惑の表情を浮かべた。

彼はこう言いたいのだろう。

『なぜ自分で渡されないのでですか?』

ガルマハラップはその表情に気付かなかったフリをして言った。

「頼んだぞ」

ガルマハラップはそれだけ言うと、それまでとは逆の方向へ向かって走り出した。

自分でも押さえられない衝動に身を任せ、彼は『穴熊』のリーダーではなく、ただの

ヴィスク・ガルマハラップとして行動を始めた。

彼は、口角を不自然に引き上げながら自分の愚かしさを笑う。

それでも、着けなければならない。

奴との決着を。

グレラは自身が放った7・62ミリ弾が1人に当たったことを理解した。

動いていた人影が1つ減ったからだ。

彼女は笑顔を浮かべた。ざまあみろクソツタレ野郎、ヘリングの仇だ。

が、そこで彼女は1つの違和感に気付いた。

動きの1つが大きくなってくる。まるで近付いてくるようだ。

彼女は何かに突き動かされるように右に飛んで逃げる。

その数刹那、3発の弾丸がそこを突き抜けていった。正確に心臓付近を狙っていたよ

うだ。

彼女はそれを目の端に捉えながら横つ飛びに避けた反動を利用し、低姿勢で走る。

ヘリングのMAGを捨て、肩に掛けていたステアーに持ち替え、発砲して来た方角に

弾丸をばら撒く。

当てる必要はない。とにかく、奴を怯ませればいい。

が、相手はそれほど甘くはなかった。

彼女の真後ろを弾丸が追ってくる。

早い。

まるで見えているみたいだ。

そこで、彼女はただ真つ直ぐに逃げているだけであることを思い出した。

彼女は顔を歪めつつジグザグに走り始める。これで少しは保つだろう。

しかし、彼女の予想は外れた。弾丸はまだ彼女が走った後を追いついて、地面を抉つてついで来た。

畜生、どうなってるんだ？ 彼女は走りながら考える。そして、面倒くさくなった。

彼女は腰に付けていたM26手榴弾の2種類のピンを抜き、投げた。

数呼吸置き、彼女は再び飛び、目を付けていた小さな岩陰に飛び込む。と、同時に、先程投げたM26が炸裂する。

僅かな炎と土煙、そして落ち葉や木片が炸裂地点を中心に舞い上がった。

彼女はその場に伏せ、息を潜める。今投げた目くらましのための手榴弾がどの程度役だったか評価しなければならぬ。

すでに射撃は止んでいる。しかし、見失ったかどうかの判断はまだ着きかねた。

全く、目眩し用の何か欲しいものだ。

更に待つ。攻撃はない。まだ微妙だ。

彼女は岩陰から顔を僅かに出す。周辺に敵の気配はない。攻撃が来る気配もない。どうやら、見失ってくれただようだ。

彼女はその場から移動を始める。体勢はギリギリまで低く、音を立てずに、それでいて早く。

今は静かに。火を付けるのは後だ。

強烈な殺意。まさか本当にこんな物を感じる時が来るとは思わなかった。が、おかげでギリギリで攻撃に気付けた。

真上からアジア系の男がナイフを片手にこちらの背中中に突き立てるべく飛び降りてくる。

彼女は、それが見えた時点で回避を諦め、当たりどころを調整しつつ腰のサブアームに手を伸ばし、抜く。

衝撃。そして脇腹に冷たく激しい痛み。熱い液体が肌を伝う感覚。だが、刺さった場所を見る気は無い。

彼女はブローニング ハイパワーことFN GP35を男に向ける。顔面。外しよ
うのない距離だ。彼女は口角を上げつつ、頭の中で男に言う。

死ね。

が、彼女が引き金を引く前に、男はその銃身を拳で払う。

銃口が外れ、彼女の撃った9×19ミリパラベラム弾は空を切る。

それが終わるか終わらないかの間に、男はナイフを抜き、こちらの喉を掻くべくそれを振るう。彼女は、それを紙一重で避けつつ、その反動で男のガラ空きの腹部に蹴りを入れる。

鈍い衝撃。男は僅かに体勢を崩したが、それでも襲い掛かってくる。

が、彼女も既に反撃の準備が出来ていた。

再びブローニングを発砲する。当たりはしなかったが、マズルフラッシュが男を怯ませる。その隙に、彼女は男との距離を開ける。

対峙。

男はナイフを片手にこちらに眼を向ける。

殺意と憎悪、その全てを込めてこちらを睨み付ける。

グレラは威圧感からたじろぎそうな足をしっかりと地につけ、その視線を受け止める。

どちらも動かない。だが、お互いに隙を探り合う。一瞬の隙が命取りだ。

先に動いたのは相手の方だった。

男は予備動作を一切せずに手に持っていたコンバットナイフをこちらに向けて投擲する。

正確に放たれたナイフは、彼女の顔面めがけて真っ直ぐに飛んでくる。彼女はそのナイフをブローニングのグリップで弾き返す。が、彼女は思わず目を細める。

視界が狭まった瞬間、男は消え、彼女の元へ一気に距離を詰めて来た。

先の交戦で近距離戦では敵わないことを、彼女はすでに把握している。

ブローニングを持ち直し、男に向ける。が、その前に男に接近される。

マズイ、と思った時には時すでに遅く、ブローニングを持った右腕を両手で掴まれ、力一杯に投げられる。

視界が反転し、身体が背後にあった木に叩きつけられた。

「ガアッ！」

彼女は思わず叫び声を上げた。口から血が飛び散る。

頭から落下しそうになるのを左手を地面につけ、逆立ちでバランスを取りつつ防ぐ。さらに、右手にまだ持っていたブローニングを再び男に向けて撃つ。

どんな状況でも、彼女は正確に狙いを付けて攻撃出来るよう訓練して来た。今回は無防備な頭を狙って撃った。

だが、男はそれを予想していたように素早く体を翻して回避する。まるで予知でもしているような動きだ。

彼女は左腕に力を込め、飛び上がりつつ体勢を元に戻す。そして、さらに撃つ。うち1発が、男の左の二の腕を貫く。

血飛沫が舞うが、男はそれに怯みもせず、こちらに走り寄ってくる。

やはり近接戦闘を仕掛けて来るようだ。

どうやら、飛び道具の様なものは持ち合わせていないようだ。が、それによって発生するデメリットを、男はまるで感じさせない。

『穴熊』の指揮官、ヴィスク・ガルマハラップ。ベトナム軍からも大いに警戒されている、ボル・ポト派最高の兵士。

まさかこれほどとは。

彼女のこの思考の間も、ガルマハラップは弾丸を正確に避けつつ迫り来る。

彼女はブローニングの残弾数を数えていた。

顔には出さないが、彼女は焦りを感じていた。

残り弾数はあと4発。

ガルマハラップは、クラックスのリーダーが持つブローニングの弾数を正確に予想していた。

残りは4発。これを凌ぎきれば、あの女は確実にリロードする。

リロードから1発目が発射されるまでの間はヤツは無防備だ。好きなように始末で

きる。

近接戦闘ではこちらの方に分がある。かなり手こずりはしたが、これで終わりにしてやる。

発砲。

あの女の癖は既に把握している。この距離ならば回避は難しくない。

9ミリの弾丸は彼の頬を掠める。

避けた。あと3発。

さらに来る。連続で2発。

先のように左右に避けても当たるように僅かに弾道がズレていることに、彼はすぐに気付いた。

彼は迷わず体勢を落とし、スライディングをする。

弾丸は彼の頭上を通過していく。その僅かな空気の振動を感じ取った彼は体を回し、クラウチングスタートの様な体勢に変え、無理矢理身体を持ち上げる。

女の驚いた表情を見ても無表情で接近を続ける。

ここまで来たら十分だ。あと1発避ければ、殺れる。

苛立ちを隠そうともしない女は最後の弾丸を撃った。

かなり近いが、もはや問題はない。

ブローニングの弾丸が、彼の顔を正確に狙って飛んで来る。が、あまりに正確すぎて逆に避けやすい。

彼は体勢を一気に下げ、ヘッドショットを回避する。

その間も、女から視線を逸らさない。

残弾の無い弾倉が、ブローニングのグリップから滑り落ちた。

リロードだ。

彼はこれまでよりも遥かに早く女に走り寄る。ここからは、数秒が全てを決める局面だ。

が、彼には確信があつた。あの女が生き延びる術はない。

残り3メートル。奴はまだ予備のマガジンを左手に持ち、再装填の真つ最中だ。

彼は最後のこの距離を詰める。あと2メートル。彼の口元に笑みが浮かぶ。

勝利を確信する。

終わりだ。クラックス。

グレラは恐怖を感じつつも、ガルマハラップの接近を見つめ続けた。

彼女は既に最後のカードを切っており、それがもたらす結果を待つよりほかなかつた。

そして、それは来た。

軋む音、落ちる枯葉、折れる枝。

彼女が狙っていたのは『穴熊』のリーダーではない。彼女が先程叩きつけられた木だ。彼女はその木が腐りかけている事実には既に気付いていた。

この木を利用できないか考え、そしてその利用法を思いついた。

倒木を利用した攻撃。

彼女はそれを実行した。

弾丸を叩き込み、上手い具合に奴の頭に叩き付けやる。

しかし、木は予想以上に強度があり、なかなか倒れないでいた。

彼女の苛立った顔はその現れだったが、どうやら敵はそうは見なかったようだ。

どちらにせよ、作戦は成功に近付いている。後は、奴さんにぶつけるだけだ。

が、そう上手くはいかなかった。

ガルマハラツプは倒れてくる木に気付き、ぶつかる寸前で体の向きを変え、ものの見事に回避して来た。

あれだけの音だ。気付くのは想定してはいたが、まさか避けて見せるとは。

彼女が思わず呆然としている隙を突き、ガルマハラツプは体を反転させつつ

彼女の右手に強烈な回し蹴りを叩きつけた。

凄まじい衝撃と、激痛で思わず手が緩みブローニングが吹き飛ばされる。

右手を抑えながら、彼女は後ずさりする。そこに、ガルマハラップは追撃を仕掛ける。先程蹴りに使った右足に力を込め、右手の掌で彼女ほ心臓付近を突く。

まるで銃弾に撃ち抜かれたかのような衝撃で、息が詰まる。そしてむせる。胸の辺りの違和感と痛みから防弾チョッキに仕込まれたセラミックプレートが凹んでいることが分かる。信じがたい威力だ。

が、彼女も簡単に倒れてやるつもりはない。

次の彼女の腹を狙った拳をなんとか躲し、逆にガルマハラップの脇腹に蹴りを入れた。

ガルマハラップの体勢が僅かに崩れる。その隙を利用し、彼女は追撃を加えた。

彼女は手首に収めていたダガーナイフを抜き取り、突く。

しかし、その判断は間違っていた。

ガルマハラップは、その突きを回避すると同時に、彼女の腕を掴み下に引っ張る。

つんのめった彼女の顔面に、ガルマハラップの膝蹴りがまともに入った

鼻の骨が折れ、彼女の頭は一瞬レッドアウトする。

そして、まともな思考が出来るようになった時にはすでに、彼女はガルマハラップに完全に抑えられていた。

ガルマハラップは、僅かに荒んだ息をしながら、女を制圧した。

まさか木を倒して攻撃してくるとは思わなかったが、過程が変わっただけで済んだ。随分と時間がかかったが、これで終わりだ。

この女にはすでに打つ手はない。

彼は、女から奪ったダガーナイフを握る。

女の顔が、恐怖に歪む。

彼は、その表情を見て大いに満足しつつ、女に死刑宣告をする。

「今度こそ終わりだ、クラックス」

この男の敗因があるとすれば、グレラを完全に制圧した訳ではなかったことだろう。

彼女は、僅かに動く左手でポケットを探り、そしてそれを取り出した。

ハイスタンダード・デリンジャーは、彼女の父親から譲り受けたもので、お守りのようなものだったが、最後の切り札として、あるいは自決用としていつでも使用できるようにしていた。

それが、ここで生きた訳だ。

彼女のこの動きに気付いたガルマハラップは、思わずそちらを見た。

その隙はほんの一瞬だったが、それで十分だった。

砕けた右手にムチを打ち、足首に仕込んでいたもう一本のダガーナイフを素早く抜き、ガルマハラップの喉仏に一気に押し込んだ。

ガルマハラップは驚きのあまり、彼女の方を見た。

そして、その表情をすぐに怒りに変え、ナイフで彼女を同じように刺そうとする。しかし、ガルマハラップにそれは出来なかった。

彼女は刺さったナイフを捻りつつ引き抜く。

抜き去ると同時に大量の血液が溢れ出る。

ガルマハラップは思わず立ち上がり、そして喉を抑え、溢れる血を止めようとする。が、その努力も虚しく、数秒後には傷口からゴボゴボと音を立てながら地面に倒れた。グレラは、倒れたままそれを見つめつつ、言った。

「終わったのはアンタだったね、『穴熊』」

同じ頃、上野は本当にこれでいいのかと疑問に思っていた。

マーティを残し、逃げることに気は引けたが、それも仕方がないことだった。

とは言え、確実に追いかけて来る敵を放置するのは論外であることは言うまでもない。

そこで、彼は1つの作戦を立てた。

どういうわけか、彼の作戦は特に文句も出ることなく採用されてしまった。特に、アングルからのお墨付きをもらってしまったことには、彼は大変困惑した。

曰く、アンタは信用できるとのことだが、いつそんな信用を得ていたのか、彼にはよ

く分からなかった。

彼の脇にはミンがおり、上野と同じように不安な表情をしている。

そもそも、本当に奴らがここを通るのかすら分からない。全く別の場所を通るかもしれないし、先程のように待ち伏せをしているかもしれない。

不確定要素があまりにも多く、いくつもの前提を立てざるを得なかったが、彼らとはかくこの陣形で待機していた。

陣形、と言つていいかよく分からなかったが。

遠くでしていた銃声は、今は止んでいた。最後にした音は、何か木が倒れる軋むような音、そしてそれが地面に倒れた地響きのような音。

それが何を意味するか、彼にはあまり考えないようにしていた。

どちらにせよ、今は待つしかない。

彼の想定とは違い、意外なほどそれは来た。

影の濃い場所から濃い場所へと動く、人影。それが8人分。

この位置ならすぐに分かるが、普通に移動していれば恐らく気付かなかつただろう。

彼は音をさせずに息を吐く。取り敢えず、最初の前提は間違っていないかつたようだ。そして、運のいいことに8人もの敵が同じ場所に来てくれている。

チャンスだ。

敵がこちらの都合のいい場所に着くまで、彼らは息を潜める。

予定位置に全員が入るのを待つ。とにかく、タイミングが肝心だ。

入った。

攻撃位置にいたアンクルたちが、わざと姿を晒すようにしつつ攻撃を始める。

その動きを事前に察知したであろう敵は、素早く反応しそれぞれが安全な位置につき反撃を開始しつつ、周囲への警戒を始める。

これが罠であることにもう気付いたらしい。

自前の火器をでアンクルたちを釘付けにしつつ少しずつ後方へと下がっていく。

上野は、打って出た。

彼の合図と同時に、上野やミンと共にそこにいたクラックスのメンバーが動く。

イチジクの木、樹冠付近に隠れていた彼らは、自前のロープでそこから降下し、素早くロープを切ると、突然降下してきたクラックスに驚いている敵にコンバットナイフで斬りかかる。

瞬間的に3人が始末され、地面に血溜まりを作りつつ倒れた。

残りの5人は、すぐに対応しクラックスとの近接戦闘が始まった。

そこにアンクルたち残りのメンバーが駆けつけて、上野の真下での戦闘が更に激しさを増す。

彼の隣のミンが、銃口を向けようとする。上野はその銃身を手で抑えて言う。

「味方に当たる。撃つな」

「しかし…」

「彼らを信じろ」

ミンは不満そうだったが、それでも上野の言葉を受け入れたらしく自動小銃を下げる。

こうなることは予想済みだった。この作戦を彼が考えた時から、最大の懸念事項は敵との近接戦だった。

しかし、アングルはそれを特に問題としなかった。そして、躊躇う上野にこう言ってみせた。

『我々に任せてくれ』

そう発したアングルの表情には自信が滲み出ていた。アングル以外のメンバーたちもその言葉に頷いている。あのひよろつとしたロースマンや上野とあまり変わらないラルフレッドすらも同じように自信に満ちた表情をしていた。

そこまで言われれば、上野も受け入れるしかなかった。どのみち、これ以外に方法はなかった。

地上の戦いを見つめていた、上野はやがてイチジクの木の小梢から隣の梢へと移動を始

めた。

クラックスに科せられたミッションは、あくまでも『生存者である日本人とベトナム人兵士の安全を確保し、送り届ける』ことだ。

その作戦中にクラックスのメンバーが死亡しようがそれは重要なことではない。

上野たちが生き残ってこそ作戦は成功と言える。

アングルはそう力説し、上野たちにこの待ち伏せ計画が上手くいき次第その場から立ち去るように告げた。

当然、上野はそれを拒否しようとしたが、強い説得の末、受け入れた。

回想しつつ振り向かず、先へと進む。

そうすることが、命を懸けて戦うクラックスたちへの手向けとなるはずだ。

戦場からある程度離れたと判断した彼らは、地上へと降り、最後の行程を進む。

木々の間に見える道に、予定通りクラックスのV-100コマンドウ装甲車が停車している。

ようやく、終わりが見えた。

油断したに違いない。集中力が途切れ、警戒を一時的に怠ってしまった。

その隙を突かれた。

発砲音。そして背中を思い切り押されたような衝撃。彼は思わずそのまま地面に倒

れ込む。

痛みはあまり感じなかった。あまりに疲れていたため、脳が痛みを検知しなかったのかも知れないし、そうでないかも知れない。

考えがまとまらない頭を僅かに動かすと、ミンが先程まで歩いていた方向に発砲しているのが見えた。

それが何のためなのか理解すら出来なくなった上野は、そのまま暗くなっていく視界をただ受け入れ、そのまま意識を失った。

1982年 6月20日

後で聞いたが、その日上野が目を覚めたのは奇跡としか言いようがなかったらしい。

肺を撃ち抜かれた彼は、そのまま速やかにコマンドウに乗せられ、近くのベトナム軍駐屯地に運ばれ、そこで応急処置がなされへりに乗せられ首都のプノンペン総合病院へと搬送された。

高価な機材など無い状態ではあったが、何と一命を取り留めはしたものの、眼を覚ますかどうかは五分五分だったらしい。

とは言え、眠っている間のことなどまるで分からない彼としてはその情報はあまり重要ではなかった。

彼の関心は、ミンとクラックスの面々がどうなったか、というものだった。それはすぐに分かった。

彼の病室に、1人の女性が入ってきた。鼻の辺りを包帯で巻き、右手をギプスで固定して、病院のガウンを着ていたが相手が何者であるかはすぐに気付いた。

「お互いボロボロだな」

「ええ、お互いに」

グレラ・マーティは笑顔を浮かべたが、鼻が痛んだらしく顔をしかめる。

彼女は、ベッド脇にあった椅子に腰掛けて上野に話しかけてくる。

「とにかく、生きてて良かった。ちゃんと報酬が貰えるわ」

「もう少し心配してほしいねえ」

「あら、これでも心配しているのよ」

マーティが戯けたように言う。上野はそれを無視して聞く。

「あれからどうなった？」

『穴熊』の連中は2人が逃げた。あとは全員ジャングルの肥やしにしてやったわ。ミン兵一も無事で、今はプノンペンの駐屯地で報告会に出てるわ。でも、犠牲なしとはいかなかったわ」

上野は呻き声を上げつつ、聞いた。

「何人だ？」

「3人よ。勝つたとは言えるけど、手放して喜べはしないわね」

「俺が至らなかつたばかりに……」

「勘違いしないで欲しいわね。アンタにそんなことは期待していなかつたから。」

アンタが罪悪感を抱くのはお門違いってやつよ」

「……」

「……まあ、無理な話よね。私も最初はそうだったから。どうにか出来たんじゃないかって、悩んだことは何回もあった。例えばどうしようもなかつた筈でも。」

でも、起こってしまったことはもう無かつた事には出来ない。

私たちが出来ることは、喪つた命を思い出して、二度とそんなことが起こらないように教訓として活かしていくことだけよ」

「そういうものなのか？」

「ええ。でも、もしそれが出来ないなら、それを償うために行動するしかない」

上野はマーティの顔を見た。その顔は真剣そのものだった。嫌な予感があったが、彼は聞く。

「行動？」

「そう」

「どうすればいいんだ?」

「ウチに来なさい」

予想通りの返答が来た。意外な程その言葉を彼は冷静に受け止め、それを吟味する。その間の沈黙を、拒否と取ったのか、マーティは苦笑いを浮かべて負傷していない左手を軽く振る。

「変なこと言ったわね。忘れて」

上野は何も言わない。そのまま病室を沈黙が支配する。

先にマーティが耐えられなくなったらしく、立ち上がって言った。

「それじゃあ、そろそろ行くわね」

「ああ。見舞い、ありがとな」

「保護対象の心配をするのは当たり前のこと」

マーティはそれだけ言うと、病室を出ようとする。しかし、そこで立ち止まり、やがて振り返って言った。

「アンタがどう思おうと、ウチのメンバーが助かったのはアンタのお陰でもある。それだけは覚えておいて」

マーティはそのまま立ち去って行った。

1人残された上野は、マーティの言葉を反芻する。

「俺のお陰で助かった…か。最初に言ってたことと矛盾してるじゃねえか」

彼は苦笑する。そして、一息ついた。

マーティの誘いも悪くないかもしれない。

頭が再びぼんやりとし始めた。

彼はそれに抗わず、襲って来た睡魔に身を任せて、そのまま眠りに落ちた。

2017年 7月6日

上野は頭をチーク材の執務机にぶつけて、目を覚ました。しまった。眠ってしまったか。随分と昔の夢を見ていたように感じる。

少し薄くなった頭部を掻きつつ、机の上のデジタル時計を見る。05:00。

彼は頭を抱えて座り心地の良い椅子に仰け反る。

しまった。またやってしまった。

彼は、机の上にある大量の書類の山に目を向ける。そして、他の皆が動き出す時間との差を予想する。

彼は確信を持ってそれまでに終わらないと結論付けた。

苦笑いを浮かべる。書類仕事やデスクワークは得意だったのだがな。

歳をとった。

彼は諦めて、一番上の書類に手を伸ばす。

例の、放射性物質の移送に関するものだ。今日の輸送機で本土に送り、そこで解析を始めるらしい。

彼はその内容を吟味し、特に問題ないと判断して自身のサインを書き入れると、決裁済みの籠に置く。

明らかにそちらの籠の方が書類が少ないことを無視して、彼はさらに作業を進める。

それから2時間後、サイパン基地の提督執務室から近所迷惑になりかねないほどの罵声が発せられたことは、また別の話である。

第7話 第9艦隊 始動

7月 7日

ノーフォークを出た巨大な艦隊たちが、大西洋の晴れ渡り凩いだ海を巡航速度で駆けている。

その勇姿を、ミッドウェイは艦隊の輪形陣の中央と言う、特等席から眺めていた。

彼女が立っているのはアメリカ級強襲揚陸艦1番艦アメリカの飛行甲板で、脇にはワイヤーでしっかりと固定されたCH-53Kがその巨体を休めている。

辺りには甲板要員がまるで虫に群がる蟻のように露天駐機された機体の整備をしたり、アイランド式の艦橋脇のエレベーターから上がってきたCAP（戦闘空中哨戒）任務に就く艦載機のF-35Bを発艦位置に誘導する誘導員などごった返している。

そんな場所でのんびりと突っ立っている彼女は、きっと彼らからしたら邪魔な存在だろう。

しかし、彼女はそれをあえて無視し、そこにいた。

この歴史的瞬間から、片時も目を離したくない。

人類史上初の艦娘と通常艦艇の合同部隊。強襲揚陸艦を改装し、艦娘の出撃、整備、補給、修復等を行うドック艦。地中海に引きこもっている第6艦隊から抽出した1ーと言うより分捕ってきたブルー・リッジ級揚陸指揮艦2番艦マウント・ホイットニーを改装し、通常艦隊と艦娘部隊双方の指揮を円滑に行うため新シフトを構築し、指揮系統を分割運用し易くした鎮守府艦。艦隊の腹を満たすサブライ級高速戦闘支援艦1番艦サブライ。そして、それを護衛する旧艦隊総軍、現第2艦隊の残存艦艇の3分の1に当たる計5隻の巡洋艦と駆逐艦。そして、水中哨戒を担うニューロンドンを母港とするバージニア級原子力潜水艦1ー番艦ノースダコタ。

艦艇の総数で見れば、僅か9隻だが、そこにプラスで艦娘たちが加わるため、数字上はさらに増え、彼女の所属する艦隊の保有艦数は22隻となる。

第9艦隊。米国の200年以上の歴史の中で編成されたことすらない、欠番艦隊。それが、この艦隊の名だ。

そもそも、米海軍の艦隊番号は世界を6分割したそのナンバーに合わせた艦隊番号を割り振っていた。例としてアメリカ東海岸は第2艦隊（深海大戦開戦と共に艦隊総軍を解体、再編成の末再建）、西海岸を第3艦隊、極東地域を第7艦隊などだ。

しかし、深海棲艦の出現後、米海軍はその戦力を大きく減らし、もはやナンバリングも体をなしていない状態となった。

もちろん、それぞれの艦隊が丸ごと消失したわけではない。

実際に壊滅したのは、ライジング・ストームに参加した第3と第7の2つの艦隊のみで後の第2、第4、第5、第6は戦争初期に被害を受けたものの健在で、各地域を守る分には十分な戦力を残していた。

とは言え、本大戦の主戦域は太平洋であり第3、第7艦隊の再建は米海軍にとって急務であった為、各残存艦隊から複数の艦艇を抽出し、やつつけ仕事で第3、第7艦隊を再建した。

その結果として、第5艦隊は事実上消滅、第6艦隊は艦隊の3割が失われ、再建されたばかりの第2、第4艦隊は再びその戦力を骨抜きにされた。

おかげで、太平洋地域の戦力は大戦以前には程遠いがある程度まで戦力は回復したものの、他地域ではもはや反撃に出ることもままならない程の弱体化を見せた。

当然、米国政府及び米海軍は大いに焦った。このままでは、米国の軍事プレゼンスは回復の難しいまでの被害を受けてしまう。

そこで、米海軍は少数精鋭の、高い機動力を持った遊撃部隊を編成し、1つの部隊で本大戦の終結までの米国の軍事プレゼンスの維持と、大幅に減少した艦隊の再建の時間を稼ぎを目論んだ。

そのために、どうしても必要だったのが、艦娘の存在である。

アメリカの力を知らしめる為には、深海棲艦へ打撃を与えなければならぬ。しかし、通常艦隊による攻撃はあまり効果が期待できないことは、これまでの交戦で現場はもちろんのこと、上層部すらも重々承知していた。

特に、レッド・ステイングレー作戦前の日本軍による威力偵察支援の際に使用した、サーモバリック兵器による攻撃の予想外の被害の少なさは、彼らに大きな衝撃を与えた。

そして、レッド・ステイングレーでの空軍による爆撃。BLU-109を弾頭としたJDAM48基と、GBU-28デープ・スロート8基の直撃を受けてようやく抹殺出来た姫級の存在は、彼らの考えが正しいことを証明した。

本来なら一発で事足りることを、これだけ使用しなければ勝てないと言う事實は、対比効果と言う面で見れば割りに合うとは到底言い難い。

彼らはすぐに決断を下した。

米海軍上層部は、多忙な大統領との会談を何とか取り付け、直談判した。

彼らの言い分は単純かつ明快であった。

『通常兵力（この場合、戦術・戦略核は通常兵力に含まれない）のみで本大戦を戦い抜くことは不可能である』

それを聞いても大統領であるニコラス・K・テネットはさほど驚かなかったと言う。

当然だろう。前線から流れてくる報告書——を大統領の心労に考慮してかなりマイルドな文面に変えているそれを読めば嫌でも理解出来る。

だからこそ、彼らの言う通常兵力以上の存在を運用する計画と準備は遙か以前から練られていた。

そして、海軍上層部と大統領との会談が行われたその頃には、日本政府との交渉は次官レベルでの合意にまで至っていた。

5月25日

時間は少し遡り、アメリカの東海岸はワシントンD・C。

首都としての機能に特化されたこの街は、世界の政治の中心と言っても過言ではないだろう。

世界最強の国家の中枢であるこの街には、いくつもの政府機関の他に127か国の大使館が点在する。当然、スパイもあちこちに散らばりそこかしこでうろついている。一説によれば、1万人以上とも言われている。1平方キロ当たり55人の計算だ。うろついていると言う言葉は適切と言えるだろう。

また、かつては殺人首都と呼ばれるほど治安が悪く、現在でも大幅に改善されたもの、未だに人口比での死亡率はプエルトリコに次でワースト2と、物理的にも危険な都市と

言える。

とは言え、この地が観光地であることに変わりはなく、連邦議会が置かれているキャピトルヒルの連邦議会議事堂、リンカーン記念館、かの有名なスミソニアン博物館郡にスミソニアン・キャッスルといったナショナル・モール地区、議会図書館、ジェファーソン記念館、フランクリン・D・ルーズベルト記念公園、桜で有名なポトマックなど数えればきりが無い。

そして当然、このホワイト・ハウスも含まれる。

ホワイト・ハウスのウエストウイングにあるオーバル・オフィスの歴代大統領たちが座り続けてきた椅子に腰掛けたニコラス・K・テネットはそのような他愛のない思考を巡らせていた。

もちろん、そんな時間など全くない。問題は常に山積みで、午前中に減った仕事の山が午後にはその3倍に増えていることなどザラだ。

しかし、超大国の指導者たる彼もまた、神などではなくただの人間であることは変わりなく、疲れる時は疲れる。

それを表情に出すことは決してないが、この数年間付き合ってきた彼の側近は僅かな変化から彼の疲労を感じ取り、時計に1度目をやり言った。

「ミスター プレジデント、1度お休みになられたらいかがでしょうか？」

テネットは顔を上げ、時計を見る。すでに昼は過ぎかなりの時間が経っていた。
「そうだな。そうしよう」

「昼食はどちらで取られますか？」

「ああ、ここで取ろう」

「分かりました、すぐにお持ちします」

テネットは苦笑気味に言う。

「それほど急がなくても構わないよ」

側近が出て行くと、オーバル・オフィスは一時的にテネット一人となった。

彼は椅子の向きを変え、窓の外を眺める。ここからでも、昼の陽光を浴びて先端が輝くオベリスク形状のワシントン記念塔が見える。

白色の大理石で出来たD・Cで最も高い建造物はまるで空に突き刺さんとする剣のように威厳に満ちているが、彼の心はそれを見ても一向に晴れなかった。

彼の心を曇らせる、悩ませている原因は今も机の上の書類という形で彼に戦いを挑むべく待機している。

『深海棲艦』。

人類の敵であり、彼の悩みの種である『海からの亡霊（シーゴースト）』。

先代の大統領を辞任に追い込み、戦後最も合衆国の大地を奪った忌むべき存在。

そんな、理解すら難しいヤツらへの対応を、彼は考えなければならぬ。

正確には、彼の部下——マシーンとも言うべき彼らが頭をひねって叩き出したいくつもの対応策の中から、最も犠牲とコストの少ないものを選び出し、それに文句を出来るだけつけられずに済ませる方法である。

それが出来るのは、この国の頂点であり、世界のリーダーに最も近い存在である彼だけだ。

だからこそ、彼の消耗は激しい。数億人の命を、世界の命運を背負う彼のプレッシャーは本来、ただの人間が担うべきではないのだろう。

しかし、彼はそれを覚悟して、この部屋にいる。この部屋の、ひいてはこの屋敷の主人とはその覚悟がなければなる資格すらない。

だからこそ、1人きりとなったこのひと時でも彼は弱さの1つすら見せない。多少の疲労の表情は出ても、内面の不安や恐怖、あるいは憎悪が彼の表側に出てくることは決してない。

…はずだ。

ここ最近、それが出来ているか、正直なところ微妙なラインである。自分でも感情のコントロールが若干出来ていないと感じるようになってる。おそらくは、疲労からくるものだろうが、あるいはそれ以外のもの、焦りや怒りと言った感情が原因でもある

かもしれない。

どちらにせよ、為政者にとって冷静さを失うことは致命的だ。特に、こういう非常時は。

扉のノックの音で、彼は意識を呼び戻された。椅子の向きを戻し、入るように促す。昼食が運ばれて来たらしく、扉が開くとすぐに食欲をそそる匂いが鼻をついた。

彼は僅かにリラックスした自分の存在に気付き、それを笑いながら言った。

「香りだけで疲れが取れそうだな。今日のメニューは何だったかな？」

「今日はロコモコです」

「ほう、ロコモコか」

かつて、ハワイの日系人が作ったとされる、ハワイのソウルフードだ。

今日、この日にこのメニューとは……。何かの運命か、あるいは……。

彼は笑う。下らない。この世界で最も現実的でなければならぬ、この国のリーダーが考えるようなことではない。

気を取り直して、机に置かれた食事に手を付ける。

「……美味しいな、このライスは。産地はどこかね？」

「日本のササニシキだそうです」

しばし、黙って食事を見つめる。料理人は随分と午後からのテネットの用事を意識し

ているようだ。

「ふむ……」

特に上手い言い回しではないが、頭の中に浮かんだので口に出す。

「午後からの会談がこのササニシキの様に美味であることを願おうか」

東部標準時、午後2時。

約12時間の時差のあるかの国は、今は真夜中だ。

それでも、テネットの会談相手は疲れを感じさせない程快活に対応してきた。

『お久し振りです、ミスタープレジデント。そちらは良い天気だとお聞きしています。ご気分はいかがですか？』

電話会談の相手、日本国首相竹下俊雄が、イギリス仕込みのキングスイングリッシュで言う。

テネットも同じように言った。

「こんな夜分に申し訳ない、ミスタータケシタ。君と話せて、とても嬉しいよ。そちらも良い天気のように何よりだ。

さて、前置きはこれくらいにして、早速本題に入ろう」

形式的な挨拶をすませると、テネットは会話のイニシアチブを握るために口火を切った。

この交渉は、内容が内容のため、常に日本側に主導権を握られ続けて来た。最後のこの会談で日本からさらなるものを引き出さねば、今回の外交交渉は実質的に敗北となる。

この敗北は後々になって響いてくる時が必ず来る。

とは言え、今更勝利をもぎ取ることなどまず不可能だ。この交渉において、勝利はそもそも想定されていない。

しかし、この土壇場での交渉次第では、完全敗北から戦術的敗北にまで引き上げることは十分に可能だ。

全ては、彼自身の話術にかかっている。

彼は、タケシタ首相が何かを言う前に続けて言う。

「まず、サイパン、テニアン両島の奪還の支援に感謝したい。おかげで、我々は敵の手から彼の地を取り戻すことが出来た。

それもひとえに、日本側の艦娘が率先して動いてくれたおかげだ」

『いえ、貴国軍が制空権を確保してくれたおかげで、彼女たちも突入出来たのです。

今回の勝利は我々にとって、いえ、人類にとって大きな意味があります』

「同感だ。ここから、我々は敵に対して反撃をしていかなければならない。太平洋だけではなく、大西洋、インド洋、地中海、北極海、南氷洋……『深海棲艦』によって支配さ

れている海を全て解放せねばならない』

言った後に、『解放』と言う言葉は使うべきではなかったと、少しばかり後悔する。『解放』など、所詮は人間の都合だ。まるで、元々は自分たちの所有物だとも言いたげなこの言葉、傲慢にも程がある。

気を取り直し、テネットは続ける。ここからが勝負だ。

「しかし、現状、他地域の奪還の為に戦力が不足しているのは、そちらも理解していることと思う。

通常戦力による攻撃が、有効打でない以上、現在の戦力で出来ることは限られている」
『だからこそ、『彼女たち』の力が必要だと、大統領はおっしゃりたいのですね』

タケシタ首相がこちらが言おうとしたことを先取りする。テネットは、一瞬言葉を飲み込み、次の言葉を紡ぎ出して口にした。

「そう言うことになる」

『大統領。こちら側はすでに艦娘11名の選定を終え、派遣の準備が整っております。本会談で、貴国との折り合いがつき次第速やかに部隊の派遣を行うことが可能です。』

また、艦娘のメンテナス面の技術も貴国に提供する準備も出来ています』

予想外の申し出に、テネットは驚く。特に、メンテナス周りの技術供与は、全くの想定外だ。と、言うよりあえて艦娘たちの部隊派遣と彼女たちのメンテナス面は分け

て交渉してくると、国務省もペンタゴンも予想していた。

次官レベルの交渉でも、その辺りは分けて交渉して来たこともあり、このサプライズは彼を大いに混乱させた。

こうなると、怖いのは見返りの内容だ。予定では、日本の安保理への常任理事国入りへの推薦とその根回し、圧力その他諸々と、新兵器の技術供与だったが、その2つはあくまでも、『艦娘派遣』の条件であり『メンテナンス技術の提供』は含まれていない。

とは言え、これ以上の譲歩はこちらとしても難しく、この会談でこの2つの見返りで『艦娘派遣』と『メンテナンス技術の供与』の双方を盛り込むつもりでいた。

しかし、その先手を打たれてしまったようだ。

テネットは苦い思いでその事実を受け入れた。どちらにせよ、日本がどのような要求をしてこようと、アメリカは受け入れざるを得ない。

「そちらの要求は？」

『我が国に安保理常任理事国入りの後押し、新兵器技術の供与。そして…』

「そして？」

『貴国軍が入手している『深海棲艦』の情報、特に、『深海棲艦』が人の手による生物兵器であると言う、『証拠』をいただきたいのです』

あまりの事態に、テネットは完全に黙り込んでしまった。それでも、頭はフル回転し、

この状況の打開策を見つけ出そうと思考する。

何故、この話を知っているのか？どこから漏れたのか？そして、この情報のどのレベルまで理解しているのか？

最後の疑問への答えは、彼はすぐに手に入れた。まず、この場でこの話題を出した時点で、ほぼ完璧にこの情報の内容を理解していることだろう。日本側が求めているのは、その情報が事実であると言う客観的な『証拠』であることから、それが予想できる。

後の2つに関しては、今考えたところで答えが出ることはないだろう。その辺りは、後で然るべき機関に任せればいい。

彼が今すべきことは、この条件が艦娘運用というメリットに見合うかどうかを評価することだ。

とは言え、彼の答えはすでに決まっている。

アメリカの軍事プレゼンスは、最早現状では維持できないことは明白なのだから。彼は最後の言葉を口から紡いだ。

「その条件で受け入れよう」

『交渉成立と言うことで、よろしいですね』

「ああ、交渉成立だ」

電話を切った彼は、しばし対応を考えた。何度かタケシタ首相とは会ったこともあるし、交渉に臨んだこともあった。

しかし、今日のような感覚を抱いたのは初めてだ。日本では、彼のことを『ボケシタ』などと称す者もいると言うが…。

「難局が本物の政治家を生む、と言うことか…」

誰に言うでもなく、独りごちたテネットはマシンたちに指示を出す。

交渉は終わった。ここからは、実際の行動によって決まってくる。

まずは、改装中の艦艇を出来るだけ早く実戦配備しなければならぬ。とは言え、これ以上作業スピードを上げるとは不可能だと現場から上がって来ている。

彼はカレンダーを見る。

第9艦隊の誕生まで、あと1ヶ月。

ほぼ同じ頃、東京は永田町、首相官邸の一室で竹下俊雄は額に汗を滲ませながら椅子に座りなおした。

ドツと疲れが押し寄せ、思わずため息が漏れる。

先程までの強気な態度が、嘘のように崩れ、彼はすっかりいつもの調子に戻っていた。これまで有利な進めて来た交渉を最後に無為にされてはこれまで裏で努力してくれた者たちに申し訳が立たない。

しかし、それ以外もある。

それは、今世界の海を水際で維持しているのは我が国に他ならないと言う意地だ。

かつてパックスアメリカーナを自負していたかの国が捨てたー捨てざるを得なかった意地を、今、この日本が引き継いだのだ。

ほんの10年前なら、下らない冗談と言われていたであろう。

しかし、今はこうして現実的な実感と重責を持つて、竹下の肩にのしかかっている。

実際に重量がある訳でもないのに、肩が凝りそうだ。

まあ、実際に肩が凝ったとしても原因は他にあるだろう。

彼は、官邸の窓から永田町の夜景を見る。この時間でも、どの建物にもたま灯りがついている。

その灯の1つ1つで、国家のために、家族のために、自分のために、そして人類のために人々が働いている。

自分だけが重荷を背負っているわけではない。

彼は改めてそれを再確認する。

しかし、裏切り者もいる。

『深海棲艦』という『生物兵器』を生み出して、人類に仇なす者たちが、人間たちの中にいる。

その者たちを見つけないならならぬ。そして、罪を償わせてやる。彼は動く。

今もこの部屋からの指示を待つ者たちのために彼は連絡を入れた。

ここからが、我々の反撃だ。

7月7日

再び時間は戻る。

この第9艦隊の成立に、どれだけの政治的思惑が絡んだかは、現場のミッドウェイには分からない。

しかし、少なくともこれまでの前例を丸ごと放棄して生み出されたこの艦隊に政治的な何かが関わっていない筈はないと、彼女は理解していた。

そして、それは他の者たちも同じだろう。

特に、その原因とも言える艦娘たちは。

日本から派遣された艦娘たちは、文字通りの精鋭たちだった。

本大戦中に『深海棲艦』たちを相手取り、縦横無尽に戦場を駆け、パックスジャポニカを維持し続けている立役者である艦娘たちの中でも、特に戦果を挙げてくる優秀な人材たち。

それが、艦級も原隊も違う今回派遣された艦娘たちの共通点だった。

ミッドウエイはこの第9艦隊の艦娘部隊の旗艦を務めると言うこともあり、日本から派遣される艦娘たちの経歴を確認する機会があった。

誰もかれもが、優れた成果を挙げ、なおかつ損害も軽微。さらに、彼女たちが所属している部隊の損耗率が極めて低いと言う共通点を持つ。

日本側の意図は明確だ。

艦娘の扱いに慣れない米海軍の指揮官が多少のミスをしようと、成果を挙げつつ無事に帰還できるような者たちを派遣して来ているのだ。

もちろん、アメリカへの配慮と言うものも少なからずあるだろう。艦隊を1つ維持するために、どれだけ税金が投入されているか分かったものではないし、アメリカは艦娘を派遣してもらうために、日本にかなりの支援を行うことになっている。

当然、それにも金がかかり、仮にこの部隊が予想した程の成果を挙げられなかった場合、現政権は大きな打撃を受けるはずだ。

日本としても、それは避けなければならないことだろう。

が、それと同じレベルのウエイトを占めているのは、日本側の米軍への不信感——慣れない艦娘運用への不安だ。

虎の子である艦娘たちを失う事態など、絶対にあってはならない。

だからこそ、これだけの人材を派遣してきたのだ。例えば、日本側の戦力が減少しよう

とも。

それだけ、日本は彼女たちの身を案じているのだ。

おそらく、人命尊重の考えではないだろう。

ただ、戦力としてだ。

考え過ぎかもしれないが、少なからずそのような考えが政府内では広がっているのだから。

俺たちは、人間じゃない。あくまでも…

「兵器として見なされてるってことかな？こりゃ」

彼女は自嘲気味に言う。当然、独り言のつもりだった。しかし。

「この部隊ではそうなの？」

後ろかな話しかけられた。

思わず、ミッドウエイは振り返る。

そこには、髪を三つ編みにしたセーラー服の少女が立っていた。犬の耳のように癖のある髪をしている。名前は確か…。

「時雨、だったか？」

「覚えてくれてるんだ。まだ会って2日しかたってないのに。それにほとんど話しもしない」

「2日あれば十分だろ？普通。それとも何だ？俺はそれだけ間抜けに思われてるのか？」

「まさか。素直に驚いてるんだよ、僕は。11人も人が増えたのに、よく覚えてるよ」
ミッドウエイは時雨の顔を見つめる。おちよくられているのか、本気で驚いているのか正直なところあまり判然としない。

艦娘になって1ヶ月ほどだが、自分の記憶力に自信が沸くような経験したことはない。

そもそも比較対象が少な過ぎて、己が平均的なのかそれ以下なのかそれ以上なのかすら把握していない。

そこに突然記憶力を褒められた所で困惑するだけだ。

「が、取り敢えず返答しておく。今後の円滑なコミュニケーションに役立てることにしよう。」

「そうか。まあ、案外記憶力はいいかもしれないねえな。さて、改めて自己紹介といこうか？」

ミッドウエイだ。第9艦隊第2艦群旗艦——要はお前さんの上司といったところだ。どれくらいこの期間になるか分からねえが、よろしく頼むぜ」

「白露型駆逐艦、時雨。これからよろしくね」

時雨がミッドウエイに手を差し出す。ミッドウエイはその手を適当に握り返し、取り

敢えずの社交辞令を済ませた。

それが済むと、時雨が先のミッドウエイの独り言をぶり返した。

「それで、さっきの独り言は何だったんだい？」

「気にするな。俺のくだらねえ考えが口に出ただけだ」

「そうなんだ。てつきり、この部隊ではそう言うことがあるのかと思ったよ。

日本でも、まだそう言う考え方が多いからね。簡単には、偏見は無くならないよ。

とは言え、仕方ないことかもしれないけどね…」

「…時雨」

「なんだい？」

「お前は『艦娘』を何だと思う」

「それは、『艦娘』の定義の話かい？」

「違げえ。お前や俺、それ以外の艦娘が『何者であるか』って話だ」

「それなら、答えは簡単だね。僕たちは『人間』だ」

「…」

「君は、どうなんだい」

「ただの『人間』ってやつだとは、俺は思っちゃあいない」

「それなら、なんだい」

「俺たちは『兵士』だ。戦うために動く『兵器』でもないし、だからと言って普通の『人間』でもない。」

『殺し』を生業にした時点でだ」

時雨が不満げに言う。

「僕らは好きで『戦い』をしている訳じゃない。必要がないなら僕らは戦ったりしない」
ミッドウエイは、時雨があえて『殺し』と言う単語を使わなかったことに気付いた。
なるほど、彼女はまだ自分の行為を正当化するだけの正気はあるようだ。

経歴には、戦闘中に性格が豹変し、やり過ぎると言うような事が書かれていたが、ただおかしくなるわけではないらしい。

自分と同じで。

「そんな『もしも』に価値はない。あるのは今という現実だ。いくら言葉で飾ろうが、やってることは変わりねえ。そうだろう？」

「たとえそうだったとしても、僕はその意見には乗れないね」

時雨は明らかに敵意の目をこちらに向ける。これで、円滑なコミュニケーションは崩壊したわけだ。

ミッドウエイは肩を竦めつつ、言う。

「お前さんはそれでいい。だからこそ、信頼できる」

「信頼？」

「今の俺たちに必要なのは、相互理解じゃねえ。信頼だ。」

少なくとも、背中を任せられるくらいの信頼がなかったらドンパチなんてやれやしねえ」

「僕の君への信頼は若干落ちてるんだけど」

「最初がゼロスタートだろ。だったら今はマイナスか？」

「噂で聞いていたから、最初の信頼はプラスからだよ。だから今は、ゼロだね」

「そいつはいい。これから信頼関係を築いていこうじゃねえか」

「一度失った信用を取り戻すのは簡単じゃない。そう上手くいくとは思えないけど」

時雨が冷ややかに言う。それでも、ミッドウェイは余裕を崩さない。

「やって見りゃ分かることさ」

鎮守府艦マウント・ホイットニーから海上ドック艦アメリカへと移動して来たアレックス・G・ナガブチ少将（大佐から昇進）は彼が指揮する第9艦隊第2艦群、すなわち艦娘部隊が待機するウェルドック横の待機室に入るなり、その場の空気の悪さに気付いた。

もちろん、換気が悪い訳ではない。

紛れもなく、この部屋の利用者たちからギスギスした何かが感じられた。

ナガブチはため息をつく。

こうなることは予想していた。第二次大戦の記憶を有する少女たちが、それも日本とアメリカと言う敵対していた両者が一堂に会せば、こうなることは目に見えていた。

日系人である彼も、同じような経験を何度かしたことがある。こう言う空気は、一種の異物である者たちにとって多かれ少なかれ感じるものだ。

しかし、予想出来たとしても対応策がある訳ではない。

精神的な問題は、本人たちで対応してもらうしかない。自分がそうしてきたように。

とは言え、今後彼女たちの指揮をし、その精神的な支えとして行動せねばならない『提督』と言う立場にある彼が手をこまねいている訳にもいかず、今こうしてこの艦に降りたのだが…。

今更自分一人でどうできる状態か？

胃の痛みが強くなるのを感じながら、彼は言葉を発した。己がこの艦隊の指揮官に選ばれた理由は分かっている。

同じ経験をした者として、彼女たちを導いてやれと言うことだ。

「さて、2日ほどだったが、お互い慣れたか？…と、言うわけにもいかないだろう。この空気を見ればすぐ分かる。

双方、感情の整理がついていないだろうからな。

しかしだ、軍と言う組織に属している以上、そう言った個人の感情が介在する余地はない。

直ぐに慣れるとは言わん。しかし、出来る限り速やかに慣れてもらいたい」

途中で口を挟まれないように、彼は一気に喋った。

誰一人として納得などしていないだろう。全く、先が思いやられる。

天の助けと言うべきだろうか？

それは突然訪れた。

『先行中のノースダコタがコンタクト。戦艦2、護衛空母2、巡洋艦4、駆逐艦8の敵艦隊を捕捉。』

方位3―2―0。距離50海里』

部屋の空気が変わる。先のギスギスした空気が嘘のように消し飛び、全員が適度な緊張感を持つてナガブチに視線を向ける。

彼女たちが求めているものは分かっている。

「お客さんだ、仕事にかかれ。ミッドウェイ」

「アイアイ、キャプテン。第2艦群、出撃準備。第1戦隊は俺と一緒にオスプレイに乗って敵艦隊を上方より強襲。奴らをかき回すだけかき回して離脱。第2戦隊は瑞鶴を旗艦とし、ウエルドックより出撃。後詰めとして俺らが離脱した後に第1艦群と共に余り

を潰せ。…ニュージャージー、てめえは第2戦隊だ。親睦とやらでも深めて来い。

分かったか？分ったなら行くぞ」

『了解』

その場にいる少女たちが答え、全員がキビキビと動き始める。

各戦隊の所属艦は既に決まっていたようで、少女たちは特に迷う様子もなくそれぞれが向かうべき場所へと向かっていく。

意外なほどに統制の取れた動きに、ナガブチは僅かに驚く。

そんな彼に視線を向けて来たのは、ミッドウェイだ。ニンマリとした表情を浮かべ、そして言う。

「俺らもプロだ。私情を脇に置いて仕事するなんざ朝飯前よ」

「…また、君への評価を改めなければならぬかな？」

「そうしてくれ、『キャプテン』」

「さつきも言っていたが、私はもう『アドミラル』だ」

「似合わねえよ。今のあんたにはな」

それだけ言うと、ミッドウェイは待機室を出て行く。

長い金髪を振り乱しながら駆けていく少女を見ながら、彼は呟く。

「随分と好き勝手言ってくれるな…ミッドウェイ」

彼も動く。ミッドウェイの言いたいことは分かる。

自分も、彼女たちに相応しい『艦娘指揮のプロ』とやらにならねばならない。

それも早急に。

ウエルドック脇の待機室を出て階層を一つ上に行くと、そこにはアメリカの広大な航空機格納庫がある。

もともと、航空機運用に特化し、ウエルドックを廃した設計をしていたこの艦は、完成間近のタイミングでの無茶な仕様変更により、本来規模を縮小せねばならない格納庫がそのままの状態に残っている。

そのため、制海艦としての役割担う必要があるこの艦には20機の固定翼機一つまるところF-35Bと10機の回転翼機という本来と同数が搭載されている。

ミッドウェイたちが乗るのはそのうちの1機、MV-22Bオスプレイだ。

海兵隊仕様の本機は、強襲揚陸、地上作戦活動等の維持、自軍の展開を目的とした機体で、自己防衛のIDWS（暫定防衛システム）。機体下部にミニガン・ターレットを装備し、機体内部から無線駆動させることが出来る。降下地点の安全確保、自機の防衛のために利用する）を装備している。そのため、他の仕様の、要は海軍、空軍仕様の機体に比べると残存性が期待できる。

とは言え、7・62ミリの豆鉄砲で『深海』の連中とやり合えるとは思えないが。

ミッドウェイはちょうど格納庫から飛行甲板に上がろうとしているオスプレイを乗せたエレベーターに同乗し、飛行甲板へと上がる。

エレベーターは僅かな駆動音をさせつつ、高速で上昇する。あまりの速度に、それを予想していない者はバランスを崩すだろう。

しかし、この場にいる者の中に、それを理解していない者は一人としていなかった。

わずか数秒で格納庫を抜け、飛行甲板に上がる。

オスプレイが自力で畳んでいた翼を展開し、プロップローターを広げて行く姿を横目に、ミッドウェイは先上がった第1戦隊の元へと歩く。

第1の面々が彼女の存在に気付き、こちらに目を向ける。その目は、遅れて来た彼女への批判の色が浮かんでいる。

彼女はそれを無視して言う。

「全員揃ってるな? 『ウォーリアギア』の動作チェックはいいか? おかしいなら今すぐ報告しろ。OK?」

よし、機内に入ってから説明するの面倒だから今から降下後の動きを伝えるぞ」

「ちよつと待つデース」

「あ?」

「私はまだ、YouをFlag Shipと認めていないデース!」

そう言った少女は、頬を膨らませながらこちらを睨んでくる。

「おいおい、勘弁してくれ。もう反乱か？」

「アー、金剛とか言ったか？それは後にしてくれねえかな？今は時間がねえ。ほれ、見てみる。もう俺らが乗るかわいいう鳥さんは準備万端なんだ。」

「つーか、次の奴が飛べねえから早く出てえんだよ」

ミッドウエイは話を折る金剛にうんざりとした表情を浮かべて言う。しかし、金剛は譲る気はないようだ。

「ここで下がれば後はなあなあになりそうデスからね。この場でハッキリさせまシヨウ！」

「OK、OK！んじゃ、今回の出撃でどっちが戦果を挙げるかで勝負でもしよう。丁度『ウォーリアギア』がある。戦果評価もちやんとやってくれるだろうよ。」

「これでいいか？いいな？異論は許さん」

金剛は不満があつたようだが、諦めたように肩をすくめて言った。

「まあ、仕方ないネエ」

ミッドウエイは辺りの様子を見る。どうやら、かなり飛行甲板が詰まってきたようだ。彼女はため息をつきながら言う。

「つたく。乗ってからブリーフィングをやる。ちやつちやと行くぞ」

ロールス・ロイスが供給するAE 1107Cリーバティーエンジンが咆哮する中、オスプレイの機内で、ミッドウエイは甲板上でする予定だったブリーフィングを始める。

聴力が強化されている艦娘と言えど、2基のエンジンの轟音の元ではやはり聴き取りにくいため、ミッドウエイは叫ぶように喋る。

「それじゃあ、始めるぞ。」

まず、友軍機が敵艦隊に突入し、対空砲火と直掩機の目を引きつける。その隙に、本機が敵艦隊から5海里ほど離れた場所で俺たちを降下させる。

降下時の高度は3メートル。ファストロープで速やかに降下。降下終了後に艦装を展開し、その場で全周警戒。

全員集合後、敵艦隊へ接近。任意のタイミングで攻撃を開始しろ。後は好きにやれ。それぞれ好きに撃ち、好きに殺せ。

ただし、同士討ちと負傷は許さん。たかがこの程度でやられるな。

質問は？」

「ハイハイ！しつもん」

妙にハイテンションなオレンジ色のセーラー服にツインテールの少女が手を挙げる。

「なんだ？川内」

川内は相変わらずよく分からないテンションで驚きの声を上げた。

「おお！カワウチって言わなかったね！」

「そりやそうだ。で、ご要件は？」

「アツ、そうだ！夜戦はありますか？」

「ありません」

「エエツー！なんで!!？」

「今何時だと思ってますか？」

「13：00時だよ？それが何？」

「いつまでドンパチする気だ？おめーさん」

「夜戦出来るまで」

「んー、ふざけてるのか？」

「至って真面目だけど？」

「うん、もういいや。もういい。次の質問！」

「そこで諦めたら負けだよ、ミッドウエイ」

時雨がミッドウエイに言う。

「これ以上話してるとこっちにも夜戦バカが感染りそうだったんでな」

「ちよつと！夜戦バカはナイでしょう！」

「喧しい！これ以上、質問がないなら終わりだ！」

ミッドウエイは喚きつつ頭を掻き耨りながら、キャビン前方右側のチーフシートに腰掛ける。

すぐ隣の時雨が再びミッドウエイに話しかけてきた。

「いい洗礼になつたんじゃないかな？」

「嫌味か？」

「言うまでもなく」

「黒いつたらありやしねえな、お前は」

「そうかな？」

「そうだよ」

「これでもマイルドにしてるんだよ」

「そいつは理解できるが……」

「それとも、もつと直接的な言葉を使った方がいいかな？」

「勘弁してくれ」

ジョー・《ホリデー》・ローマ大尉は、艦娘たちが乗ったオスプレイが飛び去るのを、F-35Bのコックピットから見た。

第4艦隊旗艦空母ジョン・F・ケネディの航空隊からこのドック艦アメリカへと異動

して来たのは第9艦隊の編成と同時で、彼と彼の率いる部隊は丸ごとこの艦の艦載機として吸収された。

同じF-35とは言えどほんの少し前までC型に乗っていたせいで、B型への慣熟作業でこの1ヶ月間は異常に忙しく、彼と彼の部隊はようやく実戦に耐え得るレベルへと達したところだ。

そして、その直後の『深海棲艦』の捕捉。

ギリギリのタイミングで、ベストとは決して言えない。

とは言え、奴らとの交戦はそれなりに積んでいる。

C型とB型など、STOVLが出来るか出来ないかの違いしか（実際には航続距離の大幅な減少と言う大きな違いがあるが）ない。

問題ない。

『アルバトロス1、発艦を許可する。風は東に4ノット』

「了解。アルバトロス1、発艦する」

管制士官からの指示に答えながら、彼はスロットルを押し上げる。

推力偏向ノズルのエンジンと、リフトファンが稼働する気配を背中に感じつつ、更に押し上げる。

機体が揺れる。

機体が飛行甲板を離れたのだ。

彼は右側にあるサイドステイックに力を加えた。

機体はゆるりと前進する。

高度を上げ、スロットルについているボタンを操作しSTOVLから通常飛行へと切り替える。

プラット・アンド・ホイットニー F135 ジェットエンジンが垂直から水平へと形状を戻す。

と同時に、リフトファンが自身の仕事を終え停止し、解放していた箇所が閉鎖される。それが済むと彼は僚機が追いついて来るのを待たため、艦隊上空で旋回する。

彼らのミッションは、艦娘が搭乗するオスプレイの護衛ではなく、敵艦隊の直掩機を惹きつける、いわば囮役だ。艦隊攻撃も含まれてはいるが、成否は重要視されていない。

派手に動いて、本命から目を逸らさせる。

戦闘の基本だ。

そのため、彼と彼の僚機の機体には翼に即席で取り付けたハードポイントに、RGM―84 ハープーンとAIM―120 アムラームを、内蔵式のウエポンベイにAIM―9X サイドワインダーをそれぞれ2基ずつ搭載され、彼の部下の機体にはアムラームが14基、サイドワインダー2基搭載している。

今回出撃した4機編隊全機がステルス性を犠牲にした、いわゆる『ビーストモード』の状態だ。

当然、レーダーにしっかりと映り、迎撃機が腐るほどやってくるのが予想されるが、今回はあくまでもそれが目的である以上、武装の増強は目的の遂行と出撃機の生存性の引き上げを双方共に達成するいわば一石二鳥の効果が期待できる。

ここまでの準備は完璧だ。

後は、神のみぞ知る、と言ったところか。

僚機が位置につき、4機の編隊を組む。

ローマは旋回飛行から離脱し、速度を上げる。

巡航速度のマッハ1.2に増速する。

さあ、仕事の時間だ。

『ウォーリアギア』。

アメリカ国防総省の下部機関、国防高等研究計画局、通称DARPAで陸軍向けに研究し、配備を目指している次世代陸上戦闘システム計画『ランドウォーリアー』をより現実的なものとした『ネットウォーリアー』計画を、更に艦娘用に調整した艦娘専用戦闘支援管制システムの名称だ。

本来、艦娘は火器管制を自身で行うため、その戦闘能力はその時の天候、兵装の精度、

そして何より実戦経験と運と言う非常に曖昧なものに左右される。

そのため、艦娘のパフォーマンスは常に変化し、安定することがない。つまり、お偉方が1番嫌いな不確定要素が常に付きまとう訳だ。もともと、その不確定要素とやらが、艦娘の力を時に100パーセント以上に引き上げているのだが、それはあくまでも数少ない『例外』に過ぎない。

『ウォーリアギア』はその不確定要素を可能な限り廃し、常に100パーセントに近いパフォーマンスを発揮するためのシステムと言える。

艦娘と艦装の間で行われる情報交流に干渉し、戦場での情報支援を行う『ウォーリアギア』はいわば艦娘版の射撃統制システム（FCS）だ。

あらゆる状況下で、正確な火力投射を行う。

たった1つの誤射、誤爆が政権の致命打になるこのご時世でスマート爆弾やミサイルといった精密兵器は戦争、紛争を行う上で必要最低限の道具だ。

当然、それは艦娘にも当てはまる。

アメリカの一員として戦うとは、そういうことだ。

もちろん、それは日本側も艦娘たちも承服している。

艦娘派遣の見返りの新兵器の技術供与とは、この『ウォーリアギア』のことだ。艦娘の戦闘能力を格段に向上させえるこのシステムを、日本側が欲しがったのは予想に難く

ない。

安定した戦力ほど、信用できるものはない。

また、艦娘たちも射撃管制という面倒ごとから解放され、自分たちの戦いが飛躍的に楽になると考え、『ウォーリアギア』使用に意欲的だったこともあり、本件はトントン拍子で進んでいったと言う。

正確には、『日本側との交渉』は、だが。

むしろ、本件に否定的、というより自分たちの技術を日本側へと流したくないDARPAが徹頭徹尾ごねまくって導入がアホみたいに遅れまくったとのことだ。

最後にはテネット大統領本人がDARPAへと催促（と言う名の脅迫）電話をかけて事なきを得たが、それ以降も非常に非協力的な態度を取り続けて（これに関してはミッドウェイ自身もこの目で確認した）いた。

結局、『ウォーリアギア』の最終的な艦娘との同調作業はDARPAの技術者が立ち会わないまま行われた。

当然、割りを食ったのは日本側の技術者だ。

彼らは、ほとんど初めて触るプログラムを、それなりには接して来たものの未だによく分からない艦娘・艦装間の情報交流システムに干渉し、異常をきたさないように運用出来るようにしなければならなかったのだ。

結果はお察しの通りである。

彼らの作業が終わったのはスタートから137時間後のことだった。よく過労死した者がいかなかったものだ。

しかし、そのおかげで彼らの命を文字通り削った『ウオーリアギア』は、ほぼ完璧な状態で彼女たちの艦装にしつかりと宿り、今こうして、彼女たちに情報を提供してくれている。

『ウオーリアギア』の表示画面が、友軍のF-35BがRGM-84をぶつ放したと伝えてくれた。

ブリップと横に注釈のように文字として表示されている兵装の種類と速度、ターゲットの位置情報と誘導方式、着弾までの予想時間と言う形で、だが。

このデータでは、ハーブーンは4基発射され、2基ずつが護衛空母目掛けて突き進んでいるらしい。

擬似視覚でディスプレイを見るミッドウエイはそのターゲット選定を評価する。

戦艦にただのハーブーンを打ち込んでもあまり効果はないだろう。

それなら、作戦部隊全体にとって大きな脅威となる艦載機をばら撒いてくる護衛空母を確実に始末してくれた方がありがたい。

光点が護衛空母に重なった。

明滅して、全ての光点が消滅する。
仕留めたようだ。

機内で小さな歓声上がる。他の艦娘たちもこの光景を見ていたようだ。

ミッドウエイは時計を見る。擬似視覚ディスプレイに表示されているデジタル時計は間もなく作戦時間である事を告げていた。

彼女は立ち上がり、コックピットに頭を突っ込む。

と、丁度キャビンに向かうべくジャンプシートから立ち上がったロードマスターと合った。

一瞬の沈黙の末、ロードマスターが告げる。

『降下地点まであと5分』

爆音の中でも聞こえるように無線で告げて来た。

ミッドウエイはサムズアップで了解を伝えたあと、キャビンへと戻る。

キャビン内は先と変わらなかった。

それぞれが新しいおもちゃに興奮しているようだ。

ミッドウエイは息を吸い込み、それを一気に吐き出すように言った。

「仕事の時間だゴラァー！」

突然の大声に、全員が反射的に体を震わせる。

その中で一番早く文句を言い出せたのは、夕立だった。

「ミッドウェイさん、うるさいっほいっほい」

「知るか。テメーらの中で1人でも作戦開始時間が近いことに気付いた奴はいるか？ いる？」

それなら態度で示せ。立って準備するなり新しいおもちゃで楽しんでる横の奴に知らせるなりしろ。

つたく。：降下まで3分だ。準備をしろ」

少女たちは動き出す。

その光景を見ていた、ロードマスターは苦笑いを浮かべて、コックピットの中に見やりながら言った。

「まるで学校だな。生徒と教師を見てる気分だ」

「高校にしては喧しくないか？」

パイロットが後ろを向かずに言う。

「まさか、小学校だよ。低学年だ。うちの息子のクラスそっくりだ」

「ほう。随分と物騒なクラスだな？」

「小石が飛ばないだけこっちはマシだ」

パイロットは笑いながら言った。

「こっちは砲弾が飛んで来そうだぞ」

ローディングドアが開いていく。

先のやりとりが嘘のように静まり返った少女たちに対して、キャビンの爆音は悪化する一方だ。

ロードマスターが一番最初に降下するミッドウェイのファストロープ器材をしつかりと確認し、やがて肩を叩いて言った。

「準備は出来た。いつでも行ってこい」

ミッドウェイは一度だけ頷き、開いたローディングドアから軽くジャンプし、キャビン上部から海面まで垂れ下がったロープを伝い、一気に降下する。

わずか数秒で、彼女は海面に立った。

ロープから離れると同時に、艀装を展開して水没を防ぎつつ、警戒活動を開始するべく右手のマスケットに『ホーネット』を装填し、発砲。

銃口から放たれたいくつもの弾子が火を噴き、F/A-18A ホーネットを形作り、それぞれが2機編隊を組み、彼女の上空で旋回飛行をする。

ミッドウェイはそのホーネットなCAP任務と直掩任務を行う部隊に分かれるように指示する。

次に彼女は『ホークアイ』を発砲する。再び、空に飛び散った無数の弾丸が双発のター

ボプロップ機を作り出し、そのまま飛び去る。

と、同時にE-2Cからのデータが『ウォーリアギア』の疑似視界に映し出される。

いくつものブリップと、気象情報、それぞれの数値が画面を埋め尽くす。人間の処理能力では間違いなく頭がパンクするであろうその情報量に、ミッドウェイも吐き気を覚える。

さらに、それぞれのガンカメラやあらゆる媒体を通して、まるで千里眼のように至る所の映像が彼女の他の疑似視界を支配する。

「まるで眼が増えたみたいだな…。オエツ…気持ち悪ウ」

と、そこに同じような感覚に陥っていると思われる川内が顔を見て青くしながら降りてきた。

「ご気分は？」

「サイアク」

ミッドウェイの問いに、川内はそう答える。

「そいつはいい。夜戦の気分じゃなくなっただろう？」

「それとこれとは別」

「呆れる程の夜戦バカだな。いや、もう中毒者かな？」

「バカじゃないし、中毒者でもない！ただ一日中夜戦してただけだもん！」

「それを中毒者ってんだよ」

「シヤラップ！この分からず屋フラッグシップ！」

「ええ…」

そこにもう一人の少女が降りてきた。金髪碧眼の少なくとも日本人には見えない少女だ。

「んもお、うるさい！この夜戦バカ！」

「何奴!!?」

「あたしよ！阿武隈！」

妙なテンションで自身への罵倒に反応した川内に阿武隈は真面目に答える。その答えは微妙にズレているように聞こえたが、気のせいと言うことにしておく。

どちらにせよ、味方が増えたのはありがたい。

「阿武隈もそう言ってた。大人しく夜戦は諦めろ、な？」

「やだ」

「どつちが分からず屋か分からなくなってきたぞ？なあ、阿武隈どつちに問題がある？」

「ん？」

「あたし的にはどつちにもあると思います！」

「何で!!?」

「どうせミッドウェイさんが先に煽ったんでしょ？」

「うん」

「なら、どっちも悪い」

こんな会話をしている間にも他の艦娘たちが降りてくる。

順番を言うなら、時雨、夕立、江風、金剛の順だ。

全員が降りるなり、オスプレイは上昇しつつ機首を巡らせ、戦域から離脱して行く。

『しばらくお別れだ。無事に帰ってこいよ』

オスプレイのパイロットからその様な言葉がミッドウェイの耳に届く。

彼女は笑いながら答える。

「そっちも気を付けてな。次もその機体の中で会おう」

『GOOD LUCK』

それだけ伝えた無線は、雑音と共に途絶える。

ミッドウェイは肩を回しながら、辺りを見る。

視線。

まだまだ一つとは言えないが、それでも彼女たちはミッドウェイに指示を求めている。
る。

いいとも。なら、それに応えてやる。元第3艦隊旗艦、『不沈空母（アイランド）』で

あるこの俺が。

「いい気分だなあ、テメエら。あ？」

誰も答えはしないが、それでも真意は伝わった。

全員が頷く。

「行くぞ。お偉方に俺たちの価値を見せてやれ」

第8話 Battle/Genocide?

5海里など、海戦という行為の中ではあまりにも近づける距離だ。

大口径砲はおろか、小口径砲、果ては魚雷まで全ての兵装が射程圏内にある。

その近距離に、本来ミッドウェイのような空母がいるべきではない。

空母の本懐は、長距離攻撃であり、航空機による瞬間的大火力投射に他ならない。

にもかかわらず、ミッドウェイは輪形陣すら組まず、単縦陣で『深海棲艦』艦隊へと突っ込んで行った。

誰が見ても無謀としか言いようがない。

そのため、これを見た者はまず畏か何かであると認識するだろう。この空母は囷で、他に主力が控えていて、こちらが引つかかった所を一網打尽にする作戦だろうと考える。

しかし、そうなると新たな疑問が湧く。

こんな安直な手で勝負を仕掛けてくるだろうか？

現に、夕級フラッグシップはその疑問を抱き、困惑した。

普通はこんな失敗する確率の高い作戦は立てないし、立てても実行に移すわけがない。

それでも、敵はそう動いている。

となると、何か裏があるのだろうか？

いや、なければおかしい。

だが、そうなるとその裏とは何か？

疑問が尽きず、夕級は味方への指示が遅れた。

戦場での迷いは死を意味する。

そんな単純なことを忘れるほど、ミッドウェイの行動は不可解で、理解し難いものだったのだ。

この逡巡で、夕級の命運は決まった。

空母の周辺に、何か群がっていることに気付いた夕級は、目を凝らす。

それは、異常な密集状態で編隊飛行する小さな航空機の群れだった。

直掩機、のようだが、それにしてはたった1隻に集中しすぎだ。

一体何のつもりだ？

その塊が閃いたのは、その直後だった。

閃光はそのまま熱い硝煙の塊に変わり、その煙の中から10本ほどの飛翔体が突き抜

けてくる。

噂の奴、『みさいる』とか言うのだ。

これの危険性はあらゆる情報で見聞きしている。こいつのせいで太平洋では大きな被害を受けたと言う。

こちらにもそれが回ってきたか。

だが、命中率が高いがその威力はさほど脅威ではないという。

人間共め。こちらも、いつまでもやられてばかりではないぞ。カラクリさえ分かれば後はどうとでも出来る。

冷静に、確実に撃ち落とす。

対空射撃を指示し、夕級は自らもそれを行う。

空がにわかに騒がしくなる。何百発もの機銃弾と砲弾が、空を赤黒く染める。

抜かれるなら抜けてこい。

夕級は笑みを浮かべ、空を眺める。

と、一際大きな爆発が空に起こった。数は5。

撃墜した。

彼女の笑みはさらに大きくなる。

が、それも直ぐに崩れた。

厚い黒煙を突つ切つて、高速の光の玉がこちらに向かつてくる。

そいつは、こちらの防空スクリーンの要であるツ級フラッグシップに襲い掛かる。

ツ級は体を捻り、何とか躲そうとするが、その努力もむなしくポップアップし、45度の急角度で突つ込んで来た『みさいる』は彼女に突き刺さった。

光が閃き、衝撃波と凄まじい爆音を辺りに撒き散らしたツ級は、そのまま海中へと没していく。

更に爆発。その数は2。艦隊の守備を司る駆逐艦イ級後期型がやられたようだ。敵と砲火を交える前に3隻。先の攻撃を含めると、5隻が失われた。

夕級は歯噛みしながら、次の対処を取る。

付近を遊弋している友軍艦隊。深海棲艦大西洋艦隊本隊へと、援護要請をする。

返答は直ぐに帰ってきた。こちらに向かっていると言う。

彼女は再び余裕の笑みを浮かべた。

我が艦隊が受けた痛みは、お前たちの命を持って償わせてやる。

彼女は視線を上げた。

影。

それが何か認識しようとした瞬間、彼女の脳天付近に衝撃がかかる。骨が砕けるような嫌な音は、これまで経験したことのない痛みに叫ぶ彼女の声で掻き消された。

が、それもすぐに途絶えた。

力なく崩れ落ちたタ級の頭は、ミッドウェイの脚部艤装のスクリューでズタズタに引き裂かれていた。

丁度辺りへの警戒を解いた戦艦に接近し、踵落としから21万馬力のタービンから生み出されるスクリュー回転のコンボを喰らわせ、返り血を浴びたミッドウェイは、最早動くことのない戦艦を冷めた目で一瞥した後、次のターゲットを定めようと周囲を見る。

戦闘はもう終結しかけていた。

旗艦を交戦直後に失い、更に護衛部隊の一部に被害を受けた『深海棲艦』たちは、手薄になった防衛網を単縦陣で突破してきた艦娘たちの圧力に負け、内側から陣形を瓦解させつつ、個艦での戦闘を余儀なくされていた。

一方の艦娘たちは単独戦闘を避け、2人1組で攻撃する。

実際にこのメンバーで戦うのは初めてのはずだが、それを感じさせない極めて完成度の高い連携は、流石に優秀な人材たちと素直に感心する。

こちらにも負けてはいられない。

長距離砲撃で敵を潰している金剛の存在を、遠雷のような砲声から感じながら、ミツ

ドウエイは動く。

ターゲットは時雨と夕立が追撃をかけている戦艦ル級フラッグシップだ。時雨、夕立は双方共に改二レベルに達していることもあり、戦艦相手でも引けを取らないが、それでも苦戦が見て取れた。

ミッドウェイは自身の周りに固めていたF/A-18ホーネットの一隊を時雨と夕立の元に差し向け、支援と攪乱を行わせる。

スズメバチがル級に群がり始めるのを尻目に、ミッドウェイは海面を全力で突っ走る。

と、目の前に突然駆逐艦イ級後期型エリートが彼女の目の前に立ちはだかった。どうやら、こちらの目的に気付いたようだ。

体を張って止める気か。しかし…。

「もう手遅れなんだよオ！」

彼女は叫びながら、全力でジャンプし、イ級を踏み台にしつつ空へと舞う。

ついでに踏み台になってくれたイ級にささやかな感謝の気持ちとして、マスケットを模したMk. 39 5インチ砲の砲弾を3発ほどプレゼントする。

炸裂音とそれより大きな爆音で敵の撃沈を把握しつつ、ル級への突撃コースへと態勢を修正しつつ、弧を描きながらル級の巨大な艀装の上に降り立った。

喧しい金属音を響かせ、衝撃で バランスを崩しかけながらもマスクットの銃口はル級の顔面へと向ける。

驚きと恐怖が入り混じった表情を浮かべるル級に出来るだけ優しい笑顔を見せながら、ミッドウェイはル級に語りかける。

「Hello Good Girl!」

声も可能な限り優しくしたこともあり、ル級は安堵のような表情へと変わる。が、ミッドウェイの言葉で、その表情は凍り付いた。

「GOOD☆NIGHT」

彼女はマスクットのトリガーを引く。1発、2発、3発、4発。執拗に、念入りに。

元の顔がどんなものかも分からないほど、滅茶苦茶に粉碎する。

すっかり『深海棲艦』の血液に染まって変色した制服に顔をしかめながら、時雨と夕立に目を向けつつ言う。

「よお、お2人さん。流石に戦艦相手に駆逐艦だけじゃ厳しいか?ん?」

2人は何も答えない。どちらも若干引き攣った顔でこちらを見る。

ミッドウェイは肩をすくめ、頭を振りながら言う。

「ふん。まあ、そんな顔するなよ」

「…こんな顔もするよ」

時雨は硬い表情を崩さずに言う。そこから見えるのは、嫌悪感。あるいは恐怖か。いや、少し違う。こいつが見ているのは、俺の中に映し出されるこいつ自身の姿だ。まあ、そんなことはどうでもいい。先程始末した夕級の通信の解読が終了して、不愉快な事態が判明している。

『深海』の大西洋艦隊の本隊がこちらに向かっている。

友軍機が偵察に向かい、規模を図るべく動いているが、本隊となると規模はこれまで戦つて来た連中とは桁違いのはずだ。

通常艦艇以外にも鬼級、姫級が存在している可能性が十分にある。

そんな連中とはまだ手合わせ願いたくない。

「『深海』のガラクタ共が来る。さっさと片付けるぞ」

時雨は震える腕を抑えながら、ミッドウエイを見る。

噂では聞いていた。たった2人でカリブ海方面艦隊、その本隊を殲滅した『バケモノ』。

だけど、これ程とは。

時雨自身のミッドウエイへの第1印象は、噂で聞いていた『バケモノ』とは大きく違つた、口は悪いが面倒見のいい人、だった。

話してみてもその印象は余り変わらなかった。

ある一点を除いて。

それは、その性格の裏に隠された『破壊衝動の塊』という本性がある、と言う点だ。艦娘は多かれ少なかれ戦闘で性格が豹変する。たとえ、幾ら普段戦闘はしたくないと言っているとしても、戦闘となると容赦は一切無くなる。

当然、自分の身を守るために戦うと言うこともある。

しかし、自分からもう戦闘に出たくないと言う艦娘は、これまでの所一人もいない。それが出来るにもかかわらず、だ。

艦娘は戦いから身を引けない。

そう言う意味では、ミッドウエイの考えは間違っている。

戦うことしか出来ない僕らはただの『人間』になんてなれない。敵を滅ぼすために存在する『兵士』なんだろう。

自分でも理解している。でも、それが実際に目の前に突き付けられたあの時、僕はそれを受け入れられなかった。

だから、今もこうしてミッドウエイに否定的態度をとる。

我ながら面倒くさい奴だなあ。

時雨は、自虐的な笑みを浮かべる。横にいた夕立には、その笑みが別のものに見えたようだ。

「時雨、大丈夫っぽい？」

「うん。大丈夫だよ、夕立。ありがとう」

夕立が何を心配しているか分かってている。

僕も、ミッドウェイと同じだ。

艦娘は戦闘中に性格が豹変すると言ったが、その中でも僕は特に酷いタイプだ。

やり過ぎ、とよく言われる。

それこそ、さっきのミッドウェイみたいに。

今もまだ腕が震えている。その原因は、恐怖。

ミッドウェイのあの姿を見たからじゃない。僕の内側にいる『ナニカ』に吞まれて己が失われていくことへの恐れだ。

戦いで『深海棲艦』をグチャグチャにするたびに感じる歓喜。そして、その後に訪れる恐怖。

その二面性が怖くてたまらない。

それこそまるで、『バケモノ』に変わって行くようで…。

今はまだ、そこに堕ちることはないけど、何は…。

とは言え、この力があつたから、今まで生きて来れた。

それのおかげか、僕の戦果は異常に良く、佐世保の時雨、とか呼ばれている。

それは榮譽なことではあるけど、もう一つ意味があるはずだ。

それは厄介者と言う、レットルだ。

だから、こうしてこの部隊に送られた。この艦隊にいる他の仲間たちも、似たような噂を聞く人たちばかりだ。

優秀だけ扱い辛い、いわゆる『はぐれ者』。

その厄介者たちをまとめる指揮艦が、『バケモノ』と言うのはある意味当然のことなのかもしれない。

それでも、ミッドウエイはまだ『バケモノ』に落ちる気は無いように見える。

あの時の会話で、それが分かった。

ミッドウエイは自分の行為を正当化するだけの人間的思考をまだしている。

自分のしていることが『殺し』だと、あの人は言った。そして、自分は『兵器』ではなく『兵士』だと続けた。

その言葉の裏にあるのは、自身の内側から湧き上がった『ナニカ』に飲まれる気は無いと言う、静かな決意表明だ。

ミッドウエイが言いたいのは、そう言うことなんだろう。

自分たちは『人間』ではない。

血に塗れた自分たちは『兵士』以外にはなれない。

しかし、それは破壊することしか出来ない、『兵器』であることの否定に他ならない。しつかりとした思想だ。

ただの『バケモノ』なら、こんな思考はしないだろう。

これは、ミッドウェイが『兵士』として完成されている証左に他ならない。

普通の艦娘は、こんな思想には至れないだろう。たとえ、そこに辿り着いたとしても、それを受け入れることはきつと出来ない。

少なくとも、僕は無理だった。

だから。

僕もそこに辿り着けるように努力しないといけない。

その先に、更なる強さがあるはずだから。

強くなれば、あの感情を受け止められるはずだ。あの黒い感情を。心の底の『ナニカ』を。

そのためにも、ミッドウェイの存在は必要不可欠だ。

支えないければ。

彼女の覚悟は固まった。そうと決まれば、やり遂げないと。

あの精神不安定な、それでも僕らより遥かに先に立つ、あの旗艦を。

…必ず。

「支え切って見せる」

ミッドウエイは後ろからついてくる時雨の変化に気付いた。

多少は信頼してくれたようだ。…あのやり方の一体どこに信頼を見たのだろうか？

さっぱり分からん。

とは言え、これは重要な一歩だ。これで多少は安心して仕事ができる。

ミッドウエイは辺りを見る。

残っているのは、巡洋艦2隻と駆逐艦3隻。

十分だ。

ミッドウエイは後ろからついてくる時雨と夕立が追い付けるように速度を落とす。

2人はすぐに追いついた。

ミッドウエイは2人に話しかける。

「第2の連中には悪いが、残りもやる。俺が先陣を切る。後に続け」

「ミッドウエイさんが先に行つて大丈夫？」

夕立が聞く。ミッドウエイは口角を上げながら言う。

「心配ない。あの程度なら、艦載機無しでも殺れる」

2人はとりあえずは受け入れたようだ。

「気を付けてね」

時雨が言う。

「随分と優しいじゃないか？」

「旗艦に沈んで貰っちゃ困るからね」

「いらん世話だな」

それだけ言うと、ミッドウェイは増速する。

それに合わせるように、彼女の周りを飛ぶホーネットたちが彼女の脇をすり抜けて、敵に向かって行く。

彼女は嗤う。

さあさあ、皆殺しの時間だ。

スズメバチたちに襲われた『深海』の生き残りたちは、必死の対空戦闘で速度が落ちる。

そこに、ミッドウェイは猟犬よろしく、全速で突っ込んだ。

最初に、1番端にいた駆逐艦を狙う。

こちらの動きに気付いた目標の駆逐艦は急いで回頭し、こちらに5インチ砲を向けようとする。

が、時すでに遅しだ。

こちらに砲塔が向く前に、彼女はその砲塔に蹴りを入れ駆逐艦のバランスを突き崩

す。

体制の崩れた駆逐艦の右舷側にマスケットの銃口を押しつけ、砲弾を叩き込む。

駆逐艦の胴が弾け飛び、あまり愉快ではないクラッカーのように内容物をばら撒く。

丁度いい目眩しが出来たのでその中を潜り抜け、重巡に襲いかかる。

右腕のアングルドデッキ付き飛行甲板で、全力で殴りかかる。

金属と金属のぶつかり合う耳障りな音と、その奥にある柔らかい肉を穿ち、更にその中にある骨格が砕ける感覚を感じながら、上空のホーネットに爆撃の指示を出す。

ミッドウェイの飛行甲板に体を穿たれているり級は避けることも出来ず、ただほぼ垂直に落下してきたハーブーンと言う名の銚に打ち抜かれた。

爆発の衝撃で、彼女の飛行甲板がズルリと抜ける。

飛行甲板には『深海棲艦』の青い血と、灰色の肉片、それに混じった若干黄色がかつた脂肪に塗れていた。

彼女ら一瞬間をしかめつつも、反撃の準備を整えた残り3隻の敵と対峙する。

一時的に、沈黙が空間を占める。

ミッドウェイは『深海』の連中が震えていることに気付いた。

彼女な啜う。そして、舌なめずり。恐怖に震える敵を殺すのは実に愉快なことだ。動く。

一気に間合いを詰めてその喉をぶち抜いてやる。

『深海』の連中も動く。5インチ砲と8インチ砲、更には機銃までがこちらに向けてばら撒かれる。

咄嗟に飛行甲板を盾にしつつ更に接近。

即席の盾は、バイタルパートを守り切っているが、それ以外、足や腕と言った部分を防御するには至っていない。

砲弾はともかく、機銃弾はこちらの腕や足を擦り続け、その度に血の線が身体に刻まれる。

それでも、彼女は止まらない。盾とした飛行甲板が徐々に損傷していくが、それでも立ち止まらない。

ただ、本能に突き動かされるように、ミッドウエイは接近を続ける。

飛行甲板の傍から腕を突き出し、マスケットを撃ち放つ。

砲弾は敵には突き刺さらなかった。別に命中させる気は無い。

海面に着弾し、熱い水柱が立つ。

一時的に、攻撃が止む。

その隙に、右腕の飛行甲板の固定具を外し、重りに近い飛行甲板を投げ捨てる。

空母であることを放棄し、今やなんと呼べばいいか分からない存在となったミッド

ウエイは飛沫が収まり、攻撃を再開しようとするその場に突っ込む。

全身に切り傷と銃創を負った空母もどきを見た『深海』共の驚愕の表情を楽しみつつ、生き残っていたり級の懐に潜り込んだミッドウエイは最大戦速の33ノットと言う速度と重さの相乗効果によってイカれた威力となったボディーブローを叩き込む。

彼女の拳はそのままり級の腹部を貫通する。

生温かい血液と肉、臓器の感覚にゾツとするが、それを堪えて空いている左手のマスケットを絶叫するり級の喉に当てて発砲する。

耳障りな悲鳴が射撃音と共に消える。

動かない重巡の死体を眺めながら、ミッドウエイは笑みを浮かべる。

その隙が悪かった。

背中に衝撃を感じると同時に、強烈な熱と痛みを感じる。

衝撃の大きさから予測して、主砲クラスの攻撃でないことを把握し、傷口を確認すらせず、彼女は重巡の死体を引きずりながら体の向きを変え、同時にり級を盾にする。

その直後、り級の死体が砲弾を受けて炸裂した。

死体の一部、正確には右の脇腹が抉れた。

それでも彼女はそれから手を離さない。まだ盾としての役割は果たせる。

機銃弾と砲弾を全身に浴びズタズタになっていく死体を冷静に見つめ盾が役割を果

たせなくなるタイミングを計る。

来た。

「Y e a a h h !!?」

ミッドウェイは馬鹿でかいシャウトをぶち撒けながら3分の1になっていたり級の残骸を駆逐艦にぶん投げた。

肉とも鉄とも取れない塊を避けようとする駆逐艦に向けて、ミッドウェイは両腕のマスケツトを連射する。

5発ほどの直撃弾を受けた駆逐艦は同じく流れ弾を受けまくったり級の死体と共に盛大な爆発を起こし消し飛ぶ。

あと1匹。

彼女は血走った眼であたりを見回す。

居ない。どこだ?

突然、辺りが暗くなる。

彼女は空を見上げた。

空を跳ねた駆逐艦が、彼女を轢き潰すべくこちらに飛び掛かってくる。

避けれない。

それが分かっても、ミッドウェイの笑みは崩れない。

駆逐艦は困惑しただろうが、今更その行程を止められる訳もなく、勝利を確信しながら最後の行程を進む。

2発の砲弾が、駆逐艦に突き刺さり、炸裂する。

空で弾けた駆逐艦は火花火よろしく肉片をばら撒きながら塵となって消えた。

ミッドウェイは小さくため息をつく。

そして、砲弾が飛来した方角を見る。

時雨と夕立が急いでこちらに向かってくる。夕立はミッドウェイが投げ捨てた飛行甲板を持って来てくれているらしく、時雨よりやや遅い。

先にミッドウェイの元に来た時雨が息を切らせながらも怒声を発した。

「無茶すぎだよー」

ミッドウェイは困ったように肩を竦める。

そのジエスチャーは時雨の逆鱗に触れたようだ。

「なんだいその態度は！こっちがどれだけ心配したか……」

「喧しい。傷が沁みるだろうが」

ミッドウェイは時雨の小言を遮りながら言う。と、その一言で時雨の態度が変わる。

「傷？どこかやられたの？」

「背中だ」

ミッドウエイは黒く焼け、血がこびりついているであろう背中を見せる。

傷口を見た時雨とようやくたどり着いた夕立が息を呑む音を聞き、ミッドウエイはただ事でないことに、今更ながら気付いた。

「あ。もしかして結構ヤバイ感じ?」

「無駄口を叩かないで。：夕立、直ぐに応援を呼んで」

「分かった」

いつもの語尾のない夕立の返答に、ミッドウエイはますます不安になる。と、同時に視界の端が徐々に暗くなるのを感じる。

「あー。ヤベーは、これ」

「何?大丈夫?今どんな感じだい?」

「視界の端が暗くなつて来てる。ついでに背中 of 辺りがスゲー痛い。アドレナリンつてやつのおかげだったのか?よく出来てるなあ、人間の体は」

ミッドウエイは余裕ぶつて笑おうとする。

その判断は大きな間違いだった。

背中が引き裂かれたような痛みが電流のように体を流れた。

悲鳴をあげる間も無く、ミッドウエイは身体を痙攣させる。

「ミッドウエイ!?」

時雨の悲鳴にも似た叫び声を最後に、ミッドウェイの意識は消し飛んだ。

穏やかな微睡みは、大きな揺れによつて粉碎された。

瞬間的に目を覚まし、態勢を整えようとするが、腕に刺さっている点滴がそれを邪魔する。

苛立ちげにそれを引き千切ろうとするが、辺りの静けさから被弾による衝撃ではなく、外洋の大きな波頭に艦が揺さぶられただけであることを把握する。

と、同時に緊張が解け、清潔そうな白い診療ベッドにへたり込むように寝転ぶ。

この時点でようやく、冷静になつた頭がこの部屋が医務室であることを理解し、ミッドウェイは無事に（と言つていいか分からないが）母艦に戻つて来たことを悟つた。

よく生きて帰つて来れたものだ。

彼女は背中への傷に手をやる。

意外なことに、傷はもうどこにもなかった。

彼女は頭を傾げつつも、その理由に思い当たるものがあつた。

日本からの贈り物。

艦娘運用に必要不可欠であるメンテナンス技術。もつと正確に言うなら、負傷（損傷と言ふべきか？）した艦娘の修復の為のドックラーというよりよく分からない風呂と更に訳の分からない効能のパケツ。

この技術には、艦娘の傷を速やかに治す力がある。

旗艦たる彼女が長時間ドック入りしている訳にもいかないであろうし、高速修復材と謎のバケツが彼女のために使われることは想像に難くない。

要は、さっさと出てこい、だ。

とは言え、傷は治せてもそれによつて発生した身体の不調は無くなる訳ではない。

彼女が今、この部屋にいるのがその証だ。体が異常に気だるく、どうにも直ぐに回復する気配が無さそうだ。

次のドンパチがいつになるか分らないが、ことによれば出れないか？

そんな思考をしている間に、ドアの方で物音がした。

ミッドウエイがそちらに目を向けると、丁度時雨が入つて来るところだった。

ベッドの上で体を起こすミッドウエイの姿を見た時雨は僅かに安堵の表情を浮かべる。

が、それは直ぐに消える。

「なんだ。もう起きたのかい？」

「一言めからそれか」

「死んでたら良かったのについて言われたい？」

「それは飛ばし過ぎだ」

「冗談さ。無事で良かった」

「ええ、おかげ様で」

会話はそこで途絶える。若干居心地の悪い空気が流れ、2人して曖昧な表情を浮かべる。

と、ベッドの脇で何やらゴソゴソという音が聞こえた。

ミッドウエイはそちらに目をやる。

そこには腕を枕にベッドの端の方で不貞寝している夕立がいた。

「……?」

ミッドウエイの声のない疑問に、時雨が答える。

「看病するって聞かなくてさ」

「看病、ねえ」

「結構頑張ってたんだよ」

「そうだろうな」

不貞寝するくらいには頑張っていたのであろう夕立を、ミッドウエイは眺める。

改二になってから出来たらしい犬耳のような癖毛がぴよこぴよこ跳ねる。

まるで馬鹿でかい犬がご主人と一緒に眠っているようだ。

そんな和やかな想像をしたミッドウエイは、思わず吹き出す。

「突然どうしたんだい？」

「何、下らん想像をしただけだ。…さて、俺が間抜け晒してる間に何があつた？」

「えーっと、ちよつと待って。今からまとめるから…うん、じゃあ早速。」

『間抜け面晒してた』君をオスプレイが回収した後、直ぐに『深海棲艦』大西洋艦隊本隊から発艦した偵察機の接近を君のこのE-2Cが確認した。

『ウォーリアギア』の情報統制機能で僕らもその情報がリアルタイムで確認出来た。おかげで、撤収も首尾よく完了して、敵偵察機に捕捉されずに済んだ。

その偵察機は後でローマ大尉の航空隊がアウトレンジ攻撃で撃墜したって話らしい。

偵察機撃墜後も、敵艦隊に大きな動きは見られず、通信内容を見る限り救援対象が消滅したと判断したらしく、それ以降、敵艦隊は当初の進路に戻ってる。

そこから現在まで、敵艦隊に目立った動きは無し。進路3-1-5から変わらず、15ノットの巡航速度で東海岸に接近するように航行してる。

このまま進むと、ノーフォークへの爆撃可能域に入るまであと120時間。ワシントンD.C.への爆撃可能域まで142時間。ニューヨークへの爆撃可能域まで155時間。

上は現在対応を検討中。第2戦隊は哨戒行動を実施しつつ、敵艦隊の動向に警戒、つてどこかな」

時雨は平然と信じ難い言葉を口にした。

「東海岸を爆撃だと？しかも、たったの5日後に？こんなことしてる場合じゃねえじゃねーか！

第2は出てるんだな？第1が出るまでに第一陣を飛ばせ。殲滅は期待しちやあいねえ。空母だけ始末する事くらいは出来るだろ」

ミッドウエイは再び点滴を引きちぎるべく腕を伸ばす。

しかし、その動作は時雨に阻まれる。

「落ち着いて、ミッドウエイ！」

「落ち着けど？ホームランドが襲われそうなのになに落ち着いてられるかってんだ！」

ミッドウエイは時雨の手を振りほどいて、点滴を引き抜き、ベッドから立ち上がる。と、同時にその動きに気付いて目を覚ました夕立とぶつかる。

「Ouch！」

「ほこら？」

互いに小さく、妙な声音の叫びを上げる。

夕立は医務室の床に尻餅をつき、ミッドウエイはベッドの上に再び倒れる。

それを見ていた時雨がこれは幸いとミッドウエイにのしかかる。

「いや、夕立のフォローしろよ!!?」

「あの程度なら心配する必要もないね」

「ひでえ」

「他人の心配してる暇があるのかな!」

しばらく揉みくちやになり、側から見たらかなり際どい態勢になりながら、ミッドウエイは時雨に抑えられた。

立ち上がった夕立が、こちらを見て、顔を赤らめながら顔を背ける。

「…うん。2人がそう言う関係でも夕立は受け入れるっぽい」

「やめろ! 誤解を呼ぶ発言はやめろ! ってさっきの話聞いてたろ、夕立! 普通そうはならないだろう!」

ええい、離せ時雨!

「離さないよ。君が落ち着くまではね」

「また誤解を呼ぶような…。クソツ、力が入らん…」

普段なら簡単に吹き飛ばせる(物理)出来るが、今の彼女にはそれをする力すらなかった。矢張り、気力だけではどうにもならないらしい。

「…Danm it!」

罵るミッドウエイを無視して、時雨が言う。

「いいから落ち着いて。君なら分かるだろう？」

敵は『深海棲艦』大西洋艦隊の、それも本隊だ。これまで君や、僕らが相手にしてきた奴とは規模が違う。

1回、『ウォーリアギア』に上がってる敵艦隊の偵察情報を見た方がいい」
時雨は、頭を指で指しながら言う。

ミッドウェイは大人しくその指示に従う。この体勢で拒否をしようものなら色々とな面倒なことになりそうだし、純粋に興味があった。

『ウォーリアギア』を起動し、最新のトピックの中にあつた偵察情報を擬似視界上のディスプレイから選択する。

そして、それを見た。

「…は？何これ」

あまりにも間拔けな声が出たが、仕方がないことだ。

どの数値を見ても、何かの間違いではないのかと疑いを持ってしまふ。

総艦艇数、350隻。戦艦棲姫、10。空母棲姫、5。駆逐水鬼、10。以下通常艦艇がそれぞれ数十隻単位。

それは、紛れも無い悪夢でしかなかった。

時雨が止めるのも、お偉いさんが悩むのも分かる。

これは…。

「なるほどねえ。勝てる訳がねえな」

自嘲気味に、彼女は言う。

「ようやく分かってくれたね。コイツらには、ただ真正面からぶつかっていったって、すり潰されるだけだ。

それと、もう一つ。画面をスクロールしてみて」

ミッドウエイはその通りにする。

それは、報告の最後にいた。

彼女は目を剥いた。ありえない、何かの間違いではないのか？

「氷山空母…だと？」

「そう。そいつが、大西洋艦隊の旗艦。いつもの調子で名付けるなら、『大西洋氷山空母

姫』ってところかな」

思わず、呻き声をあげる。

「ふざけてやがるな…コイツら」

「全くその通りだね」

時雨は笑顔を浮かべるが、その目は全く笑っていない。その奇妙な表情から読み取れ

感情は、恐怖。

人は本当の恐怖を感じると笑うと言う話を聞いたことがある。

時雨の今の状態がそれだろう。

それは、ミッドウェイも同じだ。

だが、諦めることは許されない。

アメリカに仇なす者は、誰であろうと粉砕する。

それが、『US NAVY』の、彼女の使命だ。

例え、姿形が変わろうが。世界が変わろうが。これだけは決して変わらない。

だからこそ、多少の無理が出来る。

「…まあ、手段が無い訳じゃねえな」

時雨は驚いた様に目を剥く。

「まさか。この戦力で勝つ方法なんて…」

「それが、あるんだなあ」

ミッドウェイは笑みを浮かべる。

「悪そうな顔するね」

「そうか？ そんな気はねえが…って、そんなこと言ってる暇はないぞ。

上に行つてナガブチに掛け合つてこねえと…」

…時雨、夕立。先に待機室に行つて他の奴らを集めといてくれ。出来れば第2戦隊の

連中も。

「この作戦は、全員の同意が必要になりそうだからな」

「全員の同意？」

「夕立は頭を傾げる。」

「ああ。アメリカに命賭ける覚悟があるかってな」

30分後。

疲れ切った顔をしながら、ミッドウェイは待機室兼ブリーフィングルームに入った、すでに、第1戦隊の面々は顔を揃えていた。

「第2は？」

「もうちよつと時間かかるっぽい」

ミッドウェイの問い掛けに、夕立が答えた。

「OK。それじゃ、先に始めるか。第2の奴らは『ウォーリアギア』で確認してるだろ」
ミッドウェイは待機室の一角にあるプロジェクターのスクリーンを引き出し、プロジェクターを起動しつつ灯を消す。

スクリーンに、『ウォーリアギア』の画面が映し出される。どう言う原理か知らないが、使えればいい。

「俺の作戦が上に承認された。作戦名は『Ice Hunt』。本作戦の目的は敵旗

艦——便宜上『大西洋冰山空母姫』と呼ぶが、そいつの無力化、それが出来ないにしてもこれ以上の交戦を不能にするレベルの損害を与えることだ」

手が上がる。

「何だ、江風」

「敵さんの数から考えて、そいつは厳しいんじゃないですか？そこまで行けるわけない」「そうだろうな。正面からことに当たれば、厳しいだろう。だがな、今回に関しては、その『数』が奴らにとって裏目に出る」

ミッドウエイは画面を操作しながら続ける。

「さて、ここが問題だ。艦隊を指揮する者は、どうやって末端にまで指示を伝えている？」

誰も答えない。

「答えは単純だ。自分の声を全体に伝えるシステムを組めばいい。現代であれば、それは無線通信と言った物がそれに該当する。」

数が増えればその分末端に指示が回るまでに時間がかかり、それをなんとかするため、より強力な出力での発信が必要になる。

今回の敵艦隊の数は、350隻。その全てに可能な限りズレなく指示を伝えるには、当然極めて精度の高い支持システムが必要だ。と、言うより無ければこの規模の部隊を

運用するなど不可能だ」

一旦言葉を切って、全員にその言葉の意味が浸透するのを待つ。

待つ間に、頭の中で次の言葉を紡ぐ。そして、口を開く。

「かつて、旧ソ連のドクトリンにこんな物があった。『敵の3分の1を火力で減し、残った敵の3分の1を電子的に制圧すれば、残りの3分の1は自壊する』ってやつだ。

今回、俺たちがやるのは、それをより高等にしたものだ」

熱が入って来たのが、自分でも分かる。一旦、近くにあったペットボトルの水を飲む。そして、続ける。

「作戦内容を伝える。

まず、第1艦群によるECM攻撃で敵艦隊の通信システムを無力化。そこに、このアメリカの航空機部隊と、ホームランドの航空隊による多重攻撃を囿とし、俺たちがその隙に作戦海域までオスプレイで移動、降下し、敵旗艦を叩く」

ミッドウェイはスクリーンに映し出された『大西洋氷山空母姫』のアイコンを拳で叩いた。

「通信システムを失った艦隊全体に、旗艦襲撃の報が広がるまで、少なくとも10分はかかる。そこから部隊の移動等があり実際に反撃が開始されるまで30分程の余裕がある。

その間に、目標を達成し離脱するのが、我々のミッションだ。

旗艦が戦闘不能となれば、奴らは混乱し、撤退すると予想される。正確な統制が出来る。正しい部隊では、まともな成果を上げられないからな」

誰かが口笛を吹いた。誰かは分からないし、その意図も微妙だが、それでもミッドウェイは口を動かし続ける。

「さっきのソ連のドクトリンに合わせて言うなら、『電子的に全艦を一時的に機能不全にし、火力で旗艦1隻を潰すことで、敵艦隊全てを無力化する』って感じだ」

「…勝率は？」

珍しく真面目な口調で、川内が聞く。

「100%、パーフェクトだ」

「冗談は聞きたくないんだけど」

「…五分五分、でも希望的観測だな。正直なところ、40%程の成功確率だ」

「…」

「だからこそ、お前たちに問う。この40%に、アメリカの平和に、お前たちは命を賭けられるか？」

「安易に手を上げてくれるなよ。この場で、お前たちの生き死にが決まらんからな」

室内に重苦しい空気で占められる。まるで空気に実際に重量を持ったように、全員の体にのしかかる。

ほんの僅かでも弱気になれば、そのまま潰されそうだ。

その中でも、ミッドウェイは背を伸ばして立つ。この程度の重みに耐えれないのであれば、『アイランド』の名は名乗れない。

彼女は待つ。この中から、何人の『馬鹿』が出てくるか分からない。事によれば全員が怖気付いて、1人の手も上がらないかもしれない。

それならそれでも、構わない。1人でもやってやる。

しかし、彼女の奥底でそうはならないと確信を持っている部分がある。

そうだと。コイツらは怖気付いても進んでくる覚悟がある。

手上がる。

「君は、例え1人でも行くんだらう?」

「当たり前だ。俺たち『US NAVY』以外の誰がアメリカ国民を守る?」

「そうだね。でも、僕も頭数に入れてくれてもいいんじゃないかな?」

時雨は笑う。これで、『馬鹿』が2人になった。

「時雨が行くなら、夕立も行くっほい!」

夕立が勢いよく立ち上がりながら手を上げる。これで3人。

「私も行くネー。まだ、旗艦に相応しいのがドツチか決まってない以上、ミッドウエイに好き勝手させる訳にはいかないネー!」

「いや、勝負は俺の勝ちだろ」

「あんなのノーカウントネ! 空母が砲戦に突っ込んでくなんてダメでショウ!」

「いや、ちよつとよく分かんない」

「とにかく! 私も乗りマース!」

4人。

「うーん。みんなが行くなら…アタシも…」

「そんな曖昧な理由で着いてこられても困るんだがなあ、阿武隈」

場の空気に流される阿武隈に、ミッドウエイはピシヤリと言った。

意外なことに、阿武隈は引き下がらなかつた。

「んもお! 私だって、みんなを守りたいんですけど!」

「…覚悟があるなら、それでいい」

5人。悪くない。

川内が手を上げる。

「質問し…」

「今回は夜戦だ」

ミッドウエイは川内の質問をさっさと答える。

『夜戦！』

川内と江風は目を輝かせながら待機室の椅子を勢いよく倒しながら立ち上がる。マズイ。この2人の判断基準をもうちよつと考えてから答えるべきだったか。

「2人とも来る感じ？」

「だって夜戦だよ？ 待ちに待った夜戦！ 行かない手はないよね？」

「そうですよね、川内さん！ 江風も行くぜ！」

これで、馬鹿が7人。

予想外に来てくれた。

意外とカリスマあるのか？ 俺。

「OK。後は第2戦隊の連中……」

ドタドタと駆けてくる音。それが徐々に大きくなり……

扉が勢いよく開かれた。あまりの衝撃に、蝶番の一部が壊れる。

「話は聞かせて貰ったわ！ 第2戦隊は、全員アンタの作戦に乗ってあげる！」

「壊した扉を直してから言ってください！」

「あ、うん。ごめん」

部屋に入って来た瑞鶴は少し気落ちしたように答える。

「で、全員来るんだな？」

「ええ。アウトレンジで決めてやるわ！」

と、第2戦隊の艦娘たちがヒイヒイ言いながら入って来た。随分と急いで来たらしい。

最後に入って来た死にそうな顔のニュージャージーに、ミッドウェイは聞く。

「どう言う風の吹き回しだ？」

「フフン。私にかかれば、この程度朝飯前ですわ」

「具体的には？」

「特に何も」

「じゃあ何威張ってんだ、お嬢様（笑）？」

「あ？」

「おおっ怖っ」

「…お互いに話し合っただけですわ。私たらは、お互いに相手のことを何も知りませんでしたもの。」

だから、話しました。

そちらで全て始末してくれたおかげで、私たち暇だったので」

「相互理解…か？」

「ええ。貴方が早々に捨てたことです。ちよつと苦勞しましたが」

「何をしたんだ？」

「殴り合いました」

「肉体言語」

ミッドウェイはニュージャーザーをまじまじと見つめる。そう言えば、青あざがちらほら。

第2の面々も、どうも殴打痕があるようだ。どうやら、割と本気でやり合ったようだ。

「お互いに、良い汗かきましたわ」

「ただの脳筋じゃねえか……。やめろ、爽やかな笑顔をするな。俺のお嬢様のイメージが壊れる」

「あら？最近のお嬢様は殴り合わないと？」

「？……………!?？」

「私、何か変なことでも…」

「黙れ。喋るな。お前の訳の分からん話をこれ以上聞きたくない」

「あらそう。…私たちは何をすればいいの」

「第1と第2両方を合流させて、連合艦隊を構築。後は出たところ勝負だ。…ああ、編成はちよいと変える。変更後の部隊編成は『ギア』に上げとくから後で見てくれ」

「分かりましたわ」

「OK。…全員、傾注!」

ニュージャージーとの会話を雑に終わらせたミッドウェイは叫ぶ。

待機室内の少女たちが全員ミッドウェイに目を向ける。

「作戦決行は明後日の19:30時だ。神様へのお祈りなり、遺書書くなり、演習するなりして準備を済ませておけ。

最後に…。自国でもないアメリカを守る判断をしてくれた全員に…感謝する。ありがとう」

ミッドウェイはそこで言葉を止めて、辺りを見渡す。

全員が頷く。その瞳は、使命に燃えている。

これなら、間違いなくいける。

彼女は、謎の確信を抱きながら、次の言葉を口にした。

「以上。解散!」

弾かれるように、少女たちは動き出す。

それぞれが、決戦に備えて行動を起こす。

『Ice Hunt』まで、残り50時間。

第9話 『氷山狩り』

7月10日

07:00時。

早々に朝食を済ませたミッドウェイは自身の乗艦するドック艦アメリカの後部、正確にはウエルドックに向かつていた。

アメリカのウエルドックには、本来ならL C A C—1エアクッション揚陸艇が3隻搭載することが出来るが、今その巨大な空間は艦娘の出撃用ドックと言う用途に占拠されている。

基本的に、陸上基地と同じものを艦載しただけに過ぎないのだが、その『艦載する』という行為がどれ程の困難を極めたかは、筆舌に尽くしがたい。

ノーフォークで知り合ったドック工員曰く『ガソリンで担当を焼く計画を立てていたが、実行に移す前に逃げられた。あんな作業は二度としたくない』。同じくノーフォークで知り合った技術者曰く『仕様変更を決めた奴を本気で殺してやろうと思った』。

これでも、かなりマイルドな表現をした者をピックアップしたのでから恐ろしい。

実際にこうなった原因である海軍上層部の担当者を連れて来たら一両日中にリンチ

を喰らい、赤錆と油の浮く海に浮かぶことになるだろう。

そんな、多大なる憎悪とあらゆる苦勞によつて産み出されたこの出撃ドックが、現状ほとんど活用されていないと聞けば、彼らはどうするだろうか？

考えただけでもゾツとする。

ミッドウェイは肩を震わせながらウエルドック内へと入った。

意外なことに広大なウエルドックは、海水を湛えてそこにあった。

本来なら艦内から揚陸艇を発進させる時のみ乾いたドックは海水に満たされるのだが、今はそう言う訳ではない。

それに、艦娘が出撃するのなら、旗艦であるミッドウェイの耳に入つて来るはずだが、現状それも無い。

では何故だ。

理由はすぐに分かった。

「あら、ミッドウェイさん。どうしたの？」

プールの上を疾走していた瑞鶴は、ミッドウェイの存在に気付くと、彼女の名を呼び、聞いてきた。

「艦内演習か？許可は？」

「提督さんには許可貰つてる。あの人は話が分かつて助かるわ」

「ナガブチの野郎、俺には連絡もなしか……。しかし、精が出るな。こんな時間から」
「こんな時間じゃないと出来ないでしょ」

「そうだな。自由時間なんざ、この艦じゃ殆ど取れやしねえ」

「だからこそ、大事に使わなきゃね。次の作戦は規模が大きいし……」

「失敗した時に失われる命は大戦中最悪規模だ」

「……うん」

会話が途切れる。こう言う時は激励でもしてやらないといけないのだが、生憎ミッドウェイにそんな気の利いた言葉はなかった。

「……そうだ。それで何の用？」

「あ？用がないと来たらだめか？」

「いや、そんな柄じゃないでしょ？ミッドウェイさんは」

「ひでえな……。いや、まあ、用はあるんだが……」

「じゃあ、早く要件を済ませて。さっき言ったみたいに、時間がないから」

ミッドウェイはため息を吐きながら言った。

「折角だ。俺と模擬戦と行かねえか？要件はドンパチしながら。悪くねえだろ？」

「……別にいいけど」

「じゃあ始めるか」

ミッドウェイはそう言いながら擬似的に再現された海に降り立つ。

海面に足をつけると同時に艦装を展開。そのまま水面を歩いて瑞鶴の元へ向かう。

「『ギア』使ってるのか？」

「ええ。そうじゃないと、艦内演習なんて出来ないわよ」

『ウォーリアギア』は、実戦以外でも大いに役立つツールだ。AR技術を利用した模擬戦闘演習システムに、あらゆる時代の戦闘の詳細な記録等のライブ러리機能、それらを組み合わせた、机上演習など、その機能は多岐に渡る。

『ウォーリアギア』の正式名称は戦闘支援管制システムであるが、その『戦闘支援』の中には、実戦以外での使用も含まれているわけだ。

当然、艦内での模擬戦に、その能力は大いに活躍する。

模擬弾といえど艦内でぶつ放せば酷いことになるのは目に見えているし、艦載機など飛ばせばすぐに天井に体当たりする。

当然艦内は滅茶苦茶。折角約37億ドル（機体込み）で調達した新鋭艦は戦わずして中からズタズタにされる。

そんなことなれば、出来たばかりの第9艦隊の歴史は僅か2週間足らずで大団圓。現政権の息の根は絶たれるだろう。

そう言うことにならないようにするための『ウォーリアギア』だ。

いや、そのための装備ではない。正確にはその為だけの装備ではない。

演習プログラムを起動し、ミッドウェイの視界にいくつものアイコンが現われる。

数値と拡張現実の映像で表される風や潮の流れ、気温、湿度、海水温。視界が広がり、あたり一面が海へと変わる。

瑞鶴の目にも、似たように見えているはずだ。

「さて、それじゃ始めるか」

「ええ」

瑞鶴は相槌を打つと同時に動き出した。

艦載機が虚空から現れる。数は：30機。最初から随分と飛ばしている。

が、ミッドウェイは余裕を持って動き出す。

先の戦闘と同じように、飛行甲板の拘束具を外し、マスキットを両手に持ち、横つ飛びで回避する。

と、ほんの数秒前までいたその位置に250キロの航空爆弾が着弾する。

「用つてのは、お前さんに頼みたいことがあったからだ」

「頼み？」

ドック内を駆けながら、ミッドウェイは瑞鶴に話しかける。その後ろを、烈風が機銃弾をばら撒きながら追撃してくる。

ミッドウェイは烈風に正対し、機関を逆進に入れる。烈風を視界に入れる。シースパローの標準を合わせ、発射。

ターターから飛び出したR I M-7Eシースパローは回避しようと散開した烈風の発する熱を追いかけて、それを叩き落とす。

機関を後進から前進に切り替え、再び走り出す。

「うちの艦隊には、俺とお前しか空母がない」

ミッドウェイは瑞鶴へと発砲する。放たれた3発の砲弾を、瑞鶴は素早く避ける。

「それは…見れば分かるしッ！」

「今回の作戦では、第9艦隊の全戦力を持つてことに当たらなきゃならん」

「それで？」

瑞鶴は更に航空機を放つ。流星改と烈風だ。

「氷山空母は通常、砲撃や爆撃、果ては雷撃にも強い。硬い氷の塊は簡単には打ち抜けないし、抜けたとしても海水さえあれば速やかに再生できる。」

そう言う意味では…おっと、危ねえっと。奴は本物の『不沈空母』だ」

あらゆる角度から襲い来る瑞鶴の航空隊を、C I W Sと手のM k. 39で迎撃する。

「話が見えないんだけど？」

「まあ、聞け。あの『パイクリート野郎』を潰すには、火力が必要だ。焼夷弾、ナパーム、

サーモバリック。

氷を溶かす火。

それがなければ、俺たちは勝てない」

あらかた航空機を始末したミッドウェイは瑞鶴に走り寄る。瑞鶴は再び矢を番えて放つ。彗星（江草隊）に天山（村田隊）。どちらも強力な戦力だ。

が、発進とほぼ同時に、ミッドウェイの放った5インチ砲弾で粉々に粉砕される。驚きに眼を見開く瑞鶴の脇を通過するその瞬間に、ミッドウェイは呟く。

「お前の火力では足りない」

と、同時に瑞鶴の背後に無理矢理着け、後頭部にマスキットの銃口を押し当てる。

「俺の勝ちだな」

「…そうね」

瑞鶴は肩をすくめつつ言った。

ミッドウェイは満足げにマスキットを降ろす。

「で、話の続きだがア?」

彼女の言葉は、唐突に腕を掴まれそのまま一本背負いを取られたために途切れた。海面に叩きつけられ、全身がびしょ濡れになる。

「フフン。これでおあいこね」

「そりや卑怯だぞ」

「卑怯もらつきよも大好物ってね。戦場じやなにが起こるか分かんないものよ」

瑞鶴はミッドウエイに手を差し伸べる。ミッドウエイもその手を取り立ち上がる。

「…まあいい。で、お前さんへの頼みってのは…」

「さつきまでの話を聞く限りじや、私は攻撃向きじやあないって感じ?」

「今回の作戦ではな。だから、今回は俺の代わりに艦隊防空に専念してもらいたいって訳だ」

「でも、戦闘機の性能じやそっちの方が良いんじゃない」

「だろうな。だが、俺も今回は忙しいんでな。防空にまで手が回らん」

「だから、私に任せるって訳ね」

「俺はこれまでの戦争で随分と色々なモノを焼いたからな。ウチの艦載機はそう言うのが得意なんだ。」

「機体選択はお前に任せる。いい感じに戦闘機で固めてくれりやなんとかなるだろう?」

「やってみないと分かんないわね。まあ、やれるだけやってみるわ」

「やって貰えなきや困る。いいか、俺たちがミスれば…」

「大勢の人が死ぬ。分かってる。やってやる」

瑞鶴は真剣な表情で言い切った。覚悟は出来ているようだ。

「じゃあ、頼むぜ」

ミッドウェイはそれだけ言うと、濡れたままその場から立ち去る。

全く…。

「風呂入らなきゃならねえ」

彼女は独りごち、水滴を滴らせながら艦内を抜けて行った。

ドック艦アメリカには巨大な浴室が用意されている。乗員たちも使用可能だが、それは副次的なもので、メインは艦娘たちの入浴、と言う名の修復作業だ。

もちろん、修復以外にも普通に入ることも出来る。風呂に入ってさっぱりすると言うのは日本人らしい考え方だが、実際にやってみると、思いの外気分が良くなつてので、ミッドウェイも事あるごとに他の艦娘たちと同じようにこの設備を利用するようになった。

利用者―要は艦娘だが―とのコミュニケーションもこの場ではしやすく、皆酒が入ったかのように口が緩くなった。

先の戦闘以降、ある程度打ち解けたとは言え、まだまだ他人に近いミッドウェイはこの機会を常に生かし続けた。

ひどい時は1日に5回も風呂に入り、その全てが長風呂だった。

結果体から熱が抜け切らず、何度か医務室の世話にもなったが、身を削る努力は無駄にはならなかった。

おかげで、第1、第2戦隊双方の艦娘と、少なくともブラックジョークを言い合えるくらいの仲にはなった。

先の瑞鶴との模擬戦はその好例と言えるだろう。

ミッドウエイはそれを思い出し、思わず笑みを浮かべる。

艦隊内での不和を打ち崩せば、それだけ仕事が楽になる。

仕事が楽になれば、ミッドウエイのストレスは自ずと減ると言う訳だ。

「ん、順調順調」

若干はつちやけたように独り言を呟きつつ、濡れた制服を洗濯機に叩き込み、あまり濡れていない下着やらをバスケットに打ち込む。

すっかり解放された彼女は更衣室と浴室の仕切りドアを全力で開放し、何となく叫ぶ。

「バァアアスタァアイムツツ!!？」

浴場に反響する声。そして噎せる音。…噎せる音？

ミッドウエイは浴室を目で隈なく探る。

人影。

彼女は特に迷うことなく横にあつたかけ湯用の洗面器をぶん投げる。

21万馬力の腕から放たれた洗面器は紛れも無い凶器となり、その人影の記憶を奪うべく突き進む。

が、洗面器はギリギリのタイミングで躲かれ、浴室のタイル壁に叩きつけられ粉碎される。

「つづなあ！ちよつと、何すんのよ！」

声の特徴から相手が何者か把握し、そして回避されたことに合点が行く。

「喋るな。貴様は見えてはいけないものを見たのだ。ただの負傷で済むと思うなよ」

ミッドウエイは川内に冷徹に告げる。

「いや、ここににいるの私だけじゃないからね！」

「何？」

川内のその発言に、ミッドウエイは驚く。畜生め、2人分も記憶を殺らないといけな
いとは…。

「いや、ミッドウエイさん。ありやないつすわw」

ターゲット確認。夜戦バカ師弟コンビ。

「排除開始」

ひとまず江風から始末を開始する。浴室を全力で走り、手に持った垢すりで、その細

首を狙う。

結果は見えていた。

当然のように、濡れたタイルで足を滑らせたミッドウェイは、硬い床に叩きつけられつつ、それでも止まらずに浴槽に盛大にダイブする。

一瞬意識が飛び、水死体よろしく浴槽に浮かんだミッドウェイの耳に、川内の声が聞こえた。

「大丈夫？」

本気のトーン。

2人が覗き込む気配を感じ、考えることなくその無防備な下半身に足払いをかます。

「ううおわっ！」

奇妙な叫びを上げつつ、2人は仲良く打つ倒れる。

倒れた川内の方にマウントを取り、ミッドウェイは勝利の叫びを上げる。

「グッバイ！グッナイ！フハハハッ！」

「クソツ、テメエ！」

理性をかなぐり捨てたミッドウェイの狂言に乗せられたように江風が割と本気で殴りかかった。

理性が飛んでいるにしては脅威にしっかりと対応したミッドウェイは、右腕の艦装を

即座に展開し、飛行甲板を盾にする。

ところが、予想外のことに飛行甲板が大きく凹んだ。

そこで、ミッドウェイの理性が帰ってきた。

と、同時に悟る。

さっきの、普通に受けてりや死んでた。

思わず後ずさりしつつ、両手を上げて命乞いをする。

「あ、いや待て、悪かった。悪ノリが過ぎた。ほら、この通りだ。土下座くらいはするからさ、な？だからその拳を下ろせ」

「振り上げた拳つてのはさ、どっかに落とさなきゃいけないだよなあ」

江風が笑顔で言う。その割には殺意しか感じないが。

まずい。非常にまずい。死ぬる。

「あ……川内さん」

「何？」

「あのお弟子さんに落ち着いてもらうように言ってくれませんか？」

川内は考え込むような仕草をした後、サムズアップをしつつ笑顔で言う。

「自業自得☆」

「外道が！」

「ほーら、自分の心配をしないとやばいよ?」

ミッドウェイは背後に気配を感じ、逃げようとした。が、腕を掴まれ、それは妨げられた。

「捕まえたぜえい」

拳を握る江風。

「おい、よせ、やめろ! お前、俺の頭狙ってるだろ! それは、洒落にならんぞ!!? この辺りに俺の脳漿ぶちまけて誰が得するんだ!!?」

「問答無用!!?」

江風から無慈悲にも放たれた拳が迫るなか、ミッドウェイの悲痛な声が浴室に響く。

「頭はやめろお!」

体に熱が戻るのを感じつつ、ミッドウェイは目を開けた。頭痛がひどい。

「ああ、ここは天国か…」

「あ、起きた。おはよ」

ミッドウェイのボケを無視しつつ、川内は快活そうな声でモーニングコールをする。

「…あれ? 俺の頭まだ付いてる。なんで?」

「結構記憶が飛んでるね。ほら、横見て」

「横?」

首を動かして横を見る。

そこには、今もスヤスヤと眠っている江風がいた。額に青あざがある。

「なんでこいつが寝てんだ？」

「うわあ、ほんとに忘れちゃったの？」

「？」

「ミッドウェイさん、江風に頭突き喰らわしたんだよ」

「まじ？」

なるほど、道理で頭が痛むわけだ。

「いや、あの土壇場でよくあんな動きできるねえ。流星は噂のモンスター」

「そりやどうも」

それだけ答え、ミッドウェイは江風を見つめる。

うむ…、このままにしておきたいところが…そう言う訳にもいかない。

「…あんま乗り気しねえが…起こすか」

「起きた瞬間に気を付けなよ？もしかしたら、そのまま…」

「妙なこと言うな」

ミッドウェイは江風の顔をペチペチと叩く。

「おい、起きろ。おーきーろー」

赤髪の少女は起きない。このまま寝かせてもいいのだが、こんな格好で寝ていては確実に風邪を引く。今夜の作戦に支障をきたされたら困る。

ミッドウェイはため息をついてから、耳元で囁く。

「夜戦が待つてるぞー」

「夜戦!?」

江風は飛び起きる。危うくぶつかるところを、ミッドウェイはすんでのところで避ける。

「おっと、危ねえ。マジで持つてかれるところだった」

「ミッドウェイさん！夜戦はどこでやってんだ？」

江風は先程のことをすっかり忘れているらしく、ミッドウェイに言う。

「江風ー、夜戦はやってないよー」

川内が能天気そうに告げる。

「あ!?まさか騙したのかよ?」

江風はミッドウェイに詰め寄る。

「いや、俺は何も言つてねえぞ」

「嘘だ、江風聞いたぞ！間違いない『夜戦』つて!」

「夢でも見てたみたいだね?だが、残念。夜戦は今日の夜だ」

「ンだよ…。今日の夜か…ん？今晚^{!!}?夜戦^{!!}?キターッ!」

「あー、うるせえ。これだから、イカれたテンションしてる奴は面倒なんだ」
「人のこと言えるの?」

耳を抑えるジェスチャーをするミッドウェイに川内は言う。

「お前もだろうが」

「というか、この艦隊みんなこんな感じじゃない?」

「そういや、そうだな」

と、背中に唐突に体当たりが仕掛けられた。

「グエエ」

奇妙な悲鳴を上げて浴槽で翻筋斗打つミッドウェイのをよそに、江風は言う。

「そうと分かれば早速準備しないと!川内さん、一緒にしましょう!」

「うん、いいねえ!それじゃ、ミッドウェイさん。私たち先出るから!」

ミッドウェイの返事を待たず、2人は出て行った。

1人残されたミッドウェイはごちる。

「俺の扱いが酷い…」

湯気の中に、その言葉は消えていった。

無駄に疲れたミッドウェイはそのまま浴槽で休むことにした。

さっきのケンカ…と行っていいか分からないアレのせいで、全身が痛い。作戦前にこんなことをしていて大丈夫なのだろうか？

よくはないだろう。

扉が開く音が聞こえる。

人影は…2つ。

誰だろうか？

ただのシルエツトだった人影が、しつかりとした形で姿を現した。

「あれ？これはこれは。良いところで会いましたね、ミッドウェイさん！」

「んああ、青葉と衣笠か…」

「随分と疲れてるね？さっきの『あの2人』と関係ある感じ？」

「ご明察」

「ところで、早速取材したいのですが！」

「容赦ねえな、お前」

「恐縮です！」

「褒めてねえよ…」

「ごめんね、この娘いつもこんな感じなの。もう、青葉。もうちよつとタイミングを考
えなよ」

「ガサ、それじゃダメなんだよ。取材は一期一会。今この瞬間に感じることを、言いたい事を語って貰わないと、本物の……『真実』の記事は書けない」

「……とまあ、こう言ってるんで……。取材、受けて貰えないかな？」

「……たく。分かった。好きに始めてくれ」

投げやりに言うミッドウェイに、言質を取ったとばかりに青葉は何処からかジップロックに入れたICレコーダーを取り出し、それ起動させて取材を始める。

「まずは、ミッドウェイさんの前の所属をお聞かせください」

「アメリカ海軍太平洋艦隊第3艦隊。旗艦をした。同僚にニュージャージーのお嬢様気取りがいる。他にも結構な数の艦が俺の、と言うより俺に乗ってたランシング中将の指揮下にいた。」

パラオにヴェラ・ガルフがいたろ？あいつも、元はと言えば俺の部下だ」

「なるほど。だから、あんなに指揮が手馴れていたんですねえ」

「そんな上手かったか？」

「はい！何というか、有無を言わせないあの感じが旗艦って感じですよ！」

「はーん。そういうもんなのか、衣笠？」

「……あつ。う、うん多分、きつとそうなんじゃないかなあ……」

歯切れの悪い返答。明らかに話を聞いていなかった。ふむ、たまにこうやって話を振

らなきやならないな。

「では、次の質問です」

「どーぞ」

「ズバリ、ミッドウェイさんの戦う理由は何ですか？」

「戦う理由、ねえ」

即座に返答できない自分がいる。もちろん、祖国のために戦っているの言うまでもない。そして、この世界の安定のためにも。

だが、彼女の中にはそれ以外の何かも、確かに存在した。

それが何か、彼女も理解している。

俺の、『バケモノ』の部分。戦闘中に表面化する、殺戮衝動の権化。それが、戦いを求めているのだ。

総合すれば、彼女の戦う理由とは、世界を救うと言う理由を盾としたただの趣味となる。

流星に、それを口に出すのは気が引けるが、だからと言って嘘をつくのも後が面倒になるかもしれない。

ミッドウェイが言葉を詰まらせたのは、ほんの一瞬だった筈だが、経験豊富なこの艦娘はその裏にある真実を直ぐに汲み取ったらしい。

「何か、言い難いことでも？」

「よく分かるな。感心するよ」

「いいんですよ、本当の事を語っていただいて。先程も言いましたが、青葉は『真実』を知りたいんです。言い繕った綺麗事じゃない、あなたの本心を知りたい。」

それが青葉の、取材に対する心構えであり、ポリシーです」

「『真実』……か。それが、お前にとって、いや、世界にとって不都合な物でも、お前はそれを『真実』として報道するのか？」

「ええ。それが、『真実』なら」

「ふん、それがお前の覚悟か。なら答えてやる。」

俺が戦う理由は、我が祖国を救うためだ。それは、世界を救うのと同義であり、それが俺の大義だ。

と同時に、それを戦闘行為の正当化の出しにしていることも否定は出来ない。

俺は戦いたいんだ。俺の戦闘艦としての役割である以上に、戦いを望んでいる。

これが俺の答えだ。どうだ、満足か？」

ミッドウェイの吐露を、青葉は表情を変えずに聞く。一方の衣笠は困ったように頭を掻いている。

非常に居心地が悪そうだ。

まあ、当然だろう。旗艦がイカれた戦闘狂だと分かったのだ。誰でも不安になるだろうし、居心地も悪くだろう。

しかし、青葉はそれをおくびにも出さずに平然とインタビュ―を続ける。

「なるほど、なるほど。それが、あなたの強さの根源ですか…。」

深く考えない分、戦闘に集中出来るってことですかね？」

「さあな」

「いや、よく話し続けられね？2人とも」

衣笠がツツコミを入れる。と、言うより居心地の悪さに耐えかねてとにかく会話に入ってきたような感じだ。

「それは俺も思ってたがな？青葉、お前はさっきの答えに驚きも無しか？」

「いえ。青葉も驚きましたよ？旗艦がイカレ野郎だったんですからね。」

でも、今さらこの程度で驚くのも馬鹿らしいですよ」

「馬鹿らしいとききたか」

「ええ。これまでも、色々な方の取材をしてきましたが、毎回何かしらの驚きがありました。た。」

今回のミッドウェイさんのお話は、その中でも上の中くらいですかねえ？

それくらいで驚いていたら、この仕事は務まらないですよ」

「プロ根性つてやつか？」

「かもしれない。まあ、伊達に艦娘と記者の二足のわらじを履いてないですからねえ。

あ、この辺りは記録していないので安心してくださいね」

「手際がいいな」

「勿論です。もう長いですから。

…さて！湿っぽい話はやめて、次の質問に移らせて貰いましょう！

「ここからは、ミッドウエイさん個人のお話を聞かせてもらいます」

「あ、それ、衣笠さんも気になる」

「でしょ？と、言うわけで質問その1。好きなことは何ですか？」

「戦闘」

「んー。そうでしょうねえ」

「夜戦バカのこと言えないじゃないの？」

「るせえ」

「次の質問です。嫌いなものは何ですか？」

「あー、嫌いなもんか。…特に思い付くもんはねえなあ。大抵のことは嫌いじゃねえし

…。強いて言うなら…平和な空間？」

「艦娘にあるまじき回答、ありがとうございます！」

「これ、使うのか？」

「勿論です」

「流石にそれは不味くない？青葉」

「ダメダメ。ガサ、甘いよ！こういう時はもつとガツ！つて行かないと」

「ちよつとよく分かんない」

「インタビュアー、止まってんぞ」

「あ、すみません。えーつと、好きな食べ物は何？」

「ジャンク」

「幅広っ」

「もうちよつと絞れませんか？」

「あー、JFKの油ベタバタのハンバーガーは最高だったな。二度と喰いたくねえが」

「どつちよ」

衣笠の的確なツツコミ。

「あれだ、青汁のCMにもあっただろ？『まずい、もう一杯！』とか言うやつ」

「ああ、キュー〇イ青汁ですか。なるほど、アレと同じと…」

「いや、なんで知ってるの？あれ、日本のCMじゃあ…」

「細かいことは気にするな」

「結構大きいことだよ!?」

「もお、分かってないなあガサは。そんなんじゃ、いつまでたつてもいい人見つからな
…ウツ」

いつの間にやら、衣笠は青葉に腹パンを食らわせていた。ミッドウェイの目を持ってしても見えなかったとなると、相当なダメージが入ったと見て間違いないだろう。

彼女の見立ては正しかった。

青葉の体が、衣笠に寄りかかる。完全に意識が飛んでいるようだ。

「ごめんね、変なことに付き合わせて。青葉にはキツク言っておくから」
「お、おう」

ミッドウェイは若干たじろいで、後退りする。と、不意に頭がクラつときた。

どうやら、頃合いらしい。

「悪い。ちよいと長風呂すぎたみたいだ。俺は先に上がる」

「あ、うん。夜の作戦、頑張ろうね」

「ああ」

言葉少なく、風呂から上がる。立ち上がるときに視界が暗くなり、スツと力が抜けるが、それを微塵も感じさせない足取りで、ミッドウェイは浴室を出た。

扉を開け、再び後ろを振り返ってみたが、湯気がその視界を遮り、先程まで彼女が浸

かっていた湯船は見えなかった。

洗濯の済んだ制服に、ミッドウエイは腕を通す。微かに香る甘ったらしい柔軟剤の匂いに顔をしかめながらも、生乾きの匂いがするよりはマシだと諦める。

更衣室を出て艦内の狭い通路に入る。と、途端に息苦しさを感じ、広い場所を求めて上の階層へと向かう。

浴室はウエルドックと同じ階層にあり、その階には艦娘たちの待機室という名の溜まり場と狭苦しい艦内でのささやかなプライベート空間として宛てがわれる2人部屋がある。

そこをさらに1つ上がると航空機の広大な格納庫だ。

ミッドウエイは比較的息苦しさを感じにくい、その格納庫へと向かった。

隔壁扉を開けて、再び閉める。

LED電球に照らされたその部屋は、いくつもの航空機で埋め尽くされている。

F-35BにMV-22B、CH-53K、AH-1Wなどなど。さながら海兵隊採用機の展示会のようなのだ。

素人が見れば、ただ乱雑に放置されているように見えるだろうが、実際のところはそうではない。

有事の際にどの機体を最初に上げるか、整備のしやすさはどうか、弾薬等を搭載する

時にどの位置にどの機体があれば楽か。

そう言った効率化を突き詰めた結果の配置が、現在のこの格納庫だ。

すでに今夜の作戦に向けて機体の整備、弾薬等の準備が始まっており、格納庫内はどれも殺気立った整備士たちで溢れている。

まずいタイミングで来たと思いつつもそこから更に上の飛行甲板に上がる気にもなれず、邪魔にならなそう壁際で彼らの動きを眺める。

騒々しい整備音と、罵声、黄色の警報灯とそのサイレンが鳴る喧しい空間ではあったが、どちらかと言うと忙しさを好むミッドウェイにとってはこの空気はむしろ居心地がいいほどだ。

静かなのも嫌いではないが、性に合わない。

そんな思考をしつつも、しっかりとこの空間を観察していた彼女の目に、格好こそ似合わないものの、服の中の人物だけはこの場に案外合う少女を見かけた。

どうやら迷っているらしく、辺りをキョロキョロと見回し、時々足元にある障害物に引っかけりながら危なっかしく歩いている。

ミッドウェイは足早にそこへと向かう。このままほっておいたら大惨事になりそう
だ。

ミッドウェイは阿武隈の手を掴み引つ張っていこうとする。が、阿武隈の小さな悲鳴

を聞いて、咄嗟に危険を感じて少し距離を取ろうとする。

遅かった。

彼女が後ろを向きながら下がろうとしたその瞬間に、右の頬にビンタがすつ飛んできた。

小気味よい音を響かせながら、ミッドウェイは思わず後ずさりする。

「何すんのよ！この、変た：？あれ、ミッドウェイ：さん？」

「フフツ、いいビンタだ…。効いたぜ、こんちくしょう」

阿武隈は現状を理解したらしく、見ていて分かるほど焦り始めた。

「あ、あの、これは誤解で！突然手を掴まれたからてつきり、痴漢かと思つて…。だから、決して、何か悪意があつたとか、そんなんじゃないから！」

「分かつた、分かつたから！落ち着け、な？ほら、こつちめつちや見られてるじゃねえか」

我に返つたかのように、阿武隈は周りを見回した。

が、喧騒に満ちたこの空間で、このような怒鳴り合いは些細なことだ。

実際のところ、それはミッドウェイのハツタリであり、彼女たちのこの一悶着を見る者は誰もいなかった。

騙されたと分かつた阿武隈は今度は怒りの表情を浮かべる。実に感情豊かだ。大いに結構。

が、少しやり過ぎたかもしれない。今にもこちらに殴りかかってきそうだ。まあ、もう喰らわないが。

意外にも、阿武隈は矛を取めた。江風とは大違いだ。

流石に、いくらあまり注目されていないとはいえ、公共の場で旗艦に殴りかかる艦娘というのはいささか面倒なことになりかねないと言う判断は出来るくらいの理性は持ち合わせていたようだ。

とは言え、煽り過ぎるのは注意が必要だな。

ミッドウエイは頭の中でそう結論付けつつも、あまり本気で心には留めなかった。

「まあ、いいです。悪かったのはこっちですし…」

「そんなことあどうでもいい。こっち来い」

「ちよつと、手を掴まないでよ!」

「掴んでねえと迷うだろ?」

「…まあ」

「なら文句言うな」

無言のまま、少し前までミッドウエイがいた壁際まで移動する。

そして、そこに着くなりミッドウエイは手を離しつつ阿武隈に聞く。

「で、このクソ忙しい時にあんな場所で何してたんだ? あん?」

「ちよつと迷っちゃて…」

「んまあ、そうだろうなあ。で、どこに行きたかったんだ？」

「え？部屋だけど？」

「ちなみにどこから帰る時に迷った？」

「待機室」

「なんで同じ階層のところで迷うかねえ…」

「え！同じだったの？」

「ええ…。今までどうやってこの艦で生きて来たんだ？」

「何となくで」

「あー、なるほどなるほど。うん、OK。よし、俺が送ってやってやる。だから道覚えろ。このまま放置してたら艦内で迷子になってお前さん死にそうだ」

「そんなことならないですう！」

「真剣な話だ。でかい艦で迷子になって死にかけるってのは稀にあるぞ」

「嘘…」

「嘘だ。が、そうなってもおかしくない程の空間であることを忘れるな」

「うう…」

阿武隈のうめき声を無視して、ついでに腕を掴んで歩き出す。阿武隈は一瞬嫌がった

ものの諦めてそのまま着いてくる。

先とは逆に、隔壁扉を開け、近くのラツタルを降り狭苦しい通路をずんずん進んでいく。

やがて、2人は阿武隈の部屋の前に辿り着いた。

「覚えたか？」

「…」

「ん？何だ？まさか覚えてないとは言わないよなあ？」

「ば、馬鹿にしないでよ！あたしだってちゃんと出来るんだから！」

「じゃあ、1人でもう行けるな？」

「…えっ？」

「ほーれ、早速テストだ。さっきの場所からこの部屋まで、行って戻って来い」

「なんであたしがそんなことしないといけないの？」

「自己申告なんざ信用ならんからな。俺も見といてやるから、安心して行ってこい」

「いや、それはちよつと…」

阿武隈は言い淀む。

「どうした？覚えたんだろ？」

「…」

無言の阿武隈。それが答えだった。

「…つたく。覚えてないならそう言え。

…しかし、困ったな。この程度の道も覚えられんとなると、俺もどう教えたらいいか分からねえぞ」

頭を掻くミッドウェイに阿武隈は言う。

「もういいです。なんとかしますから」

「なんとかかなるとは思えねえんだがなあ。…そうだ。こう言うのを教えるのは、あのお嬢様が慣れてるだろ。そうに違いない。俺が決めた、今決めた」

「何言ってるんですか…」

困惑気味の阿武隈に、親指を立てながらミッドウェイは言う。

「安心しろ、阿武隈。お前の悩みはすぐに解決するぞ」

いい笑顔。

「いや、別に悩んでないんですけど…」

「…で、そんな理由で私を呼んだと」

数分後、ミッドウェイに呼び出されたニュージャージーは腕組みをし、靴を鉄の床に打ちつけながら言う。

口調は丁寧そのものだが、語気とその態度から明らかに苛立っているのが見て取れ

た。

が、ミッドウェイはそれに気付きながらもあえて無視し、答える。

「そうだ」

「なるほど、なるほど。私は貴女から緊急だからすぐに来いと言われて、ティータイムをわざわざ、わざわざ中断して来て差し上げたのですよ？」

そして、来たら来たで理由が、『ソレ』だと？」

わざわざの部分が無駄に強調しながら、更に語気を強めてニュージャージーは言った。

「ああ」

ミッドウェイの返答は淡白そのものだ。

阿武隈はハラハラしながら、2人のやりとりを見ていた。

ただでさえイラついているニュージャージーを、適当にあしらおうとするミッドウェイ。

火に油のような対応だ。ロクなことになる筈がない。

「ハッキリと言いますわ。私は別にそう言うことが得意だとは一言も言っていないわよ。

明らかにお門違いですわ」

「まあ、そうだろうなあ。俺が勝手に決めたことだからな」

あ、マズイ。阿武隈が思った時にはすでに遅く。

「は？私、キレますわよ」

拳を鳴らすニュージャージー。その動作にお嬢様らしさのかけらも見られない。

「ああ、別に構わねえぞ」

その挑発にアツサリと乗るミッドウエイ。

阿武隈は呆れた。この艦隊、大丈夫？

取り敢えず止めなくては。

「ちよつと、ちよつと！2人とも落ち着いてよ」

「外野は黙っててくれ」

「そうですね、これは私たちの戦いです」

「あたしも当事者なんですけど……」

「なんだ？お前も混ざりたいのか、阿武隈？」

「ち、違います！」

「なら、すつこんでろ」

ミッドウエイは話は終わりだと言わんばかりにファイティングポーズを取る。

ニュージャージーも同じように構える。

一触即発の空気が、通路に立ち込める。

ミッドウェイが、足に力を入れた：ように見えた。少なくとも阿武隈にはそう見え
た。

と、その瞬間にはニュージャージーの鼻先までミッドウェイは迫り、最初の一撃を加
えるべく拳を放っていた。

あまりの速度に、阿武隈の目は全く追いつかないほどだ。

が、ニュージャージーは涼しそうな顔でその拳を掴み、勢いよく引つ張り、体勢を崩
して前につんのめるミッドウェイの顔面に、膝蹴りを叩き込む。

嫌な打撃音。

くぐもった悲鳴と、血飛沫が通路を舞う。

ニュージャージーが、更なる打撃を加えるべく追撃に移る。

が、ミッドウェイもそれを許さず、二撃目が来る前にニュージャージーの顔に向かっ
て血の混じった唾を吹きかける。

突然の目潰しをすんでのところで防いだニュージャージーはしかし、それによつて生
まれた、大き過ぎる隙をカバーすることは出来なかつた。

攻撃態勢と、視界を一時的に奪われたニュージャージーは、ミッドウェイに足払いを
受けて抵抗虚しく重力に従つて通路に倒れる。

痛みに悪態を吐いたニュージャージーは、瞬間視界の端に脅威を見て取り、咄嗟に左に転がる。

風切り音が聞こえた後皮膚に熱い痛みを感じる。

当たれば失神するだけでは済まないだろう蹴りを何とか回避したニュージャージーは転がった勢いを利用して立ち上がり、ミッドウエイを睨みつける。

その頬から血が流れる。

「殺す気ですの?」

怒気に震えるニュージャージーを涼しい顔で眺めるミッドウエイはさも当然のように頷きながら言う。

「そうでもしなけりやお前には勝てんのでな」

「…そちらがその気なら、こちらもやり方を変えないといけませんわねえ」

一呼吸置いた後のニュージャージーの口調は、大きく変わっていた。

「手加減抜きだ」

側から見ていた阿武隈は、その言葉を向けられた訳でもないにもかかわらず、全身に鳥肌が立つのを感じた。

ニュージャージーとの付き合いが長い訳ではないが、なんだかんだで既に1週間以上を共にしている。特に、『Ice Hunt』作戦の都合上この2日間は当直が同じで、

待機室で談笑したり、ティータイムをするくらいには親しくなっていた。

もう見知った相手と言つても構わないだろう。

と、考えていた。

今、この瞬間までは。

しかし、今日の前に立つニュージャージーは最早阿武隈の知る相手ではなかった。

おそらく、これが彼女の『素』なのだろう。

ミッドウェイがよくニュージャージーを『エセお嬢様』と呼ぶが、それが事実だったことは明白だ。

だからこそ、今すぐに止めなくては。このままおつ始められたら、この艦が半壊するまでそう時間はかからないはずだ。

阿武隈は自らを奮い立たせ、止めに入るべく一歩前出しようとした。

が、その前に誰かがミッドウェイとニュージャージーの間に割つて入った。

命知らずのその人物の顔を見て、どう言う訳か阿武隈は納得した。

なるほど、この人ならやつてのける。

「Youたち！ 一体いつまでその下らない喧嘩をしているつもりネー！」

金剛は珍しく苛立ちを募らせているようで、眉を潜めている。

あまりいい予兆ではない。

大抵の者は金剛のこの気配を察して鉾を納めるのだが、いかんせんこの2人はそんなことを気にかける人物ではない。

特に、今のようあまり冷静でない場合は。

「邪魔しないでもらえるか？」

ニュージャージーは言う。金剛は片眉を上げながら言う。

「フーン。Youはそんな喋り方も出来たんデースネ」

と、その一言でニュージャージーはハッと我に返ったように眼を見開く。

自分の口調が変わっていたことに気付いていなかったようだ。

バツが悪そうに、ニュージャージーは目を泳がせながら言う。

「あー、もしかして…『出て』ましたの？」

「おうおう、出てたぞ。エセお嬢様？」

ニヤニヤしながらミッドウェイは煽る。相変わらずレベルは低いが効果は絶大な煽りだ。

「いい加減その減らず口を…」

再び口調の変わったことに気付き、ニュージャージーは口を塞ぐ。そして、ミッドウェイを睨み付ける。

数呼吸を置いてから話し始めたことから、ニュージャージーが自らの『素』を押さえ

つけるために時間がかかったことが分かった。

「…もうその手には乗りませんわ。私はもう貴女と手合わせする気はありませんわ」
ミッドウエイは、両手を挙げ頭を振りながら言う。

「あつそ。つまらねえなあ」

「…それで、この騒ぎはなんデスカ？」

金剛は疑問を呈す。

「…ありや？何だっけな」

ミッドウエイは頭を捻る。

「あたしの方向音痴を直すって話しじゃないんですか？」

「ああ、そういやそうだったな」

「忘れてたんだ…」

「いや、忘れてた訳じゃねえ。ただ、頭から抜けてただけだ」

「それを忘れてたって言うんですわよ、まな板空母さん？」

「死に晒せ」

「あ？」

「アン？」

再びピリつく空気を感じ取った金剛が動く。

メンチを切る2人の頭をブン殴る。

小気味のいい殴打音が通路内で響く。

「痛つてえな！テメエ！」

「なんで私まで殴られるのです!?!?」

「喧しいデース！これ以上ここでNoisyにするならワタシがYouたちをScramble Eggみたいにくチャグチャにしますヨ？」

鋭い眼光に、ミッドウェイとニュージャージーは後退りする。

本気でやりかねない空気を醸し出す金剛に逆らう勇氣を持ち合わせていなかった2人は、素直に従う。

「分かればイイネ。…さて！アブウ？」

「え？あ、はい。何でしょう？」

「Youの方向音痴はどれだけヒドイんですか？」

阿武隈への問いに、ミッドウェイは答える。

「待機室から自分の部屋まで戻れないくらいだそうだ」

「Oh…」

金剛は若干引きながら言った、そして、しばらくの無言の後に阿武隈に言う。

「アブウ。ワタシは別にYouの方向音痴をどうこう言うつもりはないデスガ…それは

ヤバイデース……」

その一点に関しては、全員の意見が一致していたらしく、金剛の言葉に追従するようにニュージャージーも言った。

「……まあ、確かに、それはマズすぎますわね。直した方がいいですよ？それも早急に」
何故か得意げなミッドウェイが更に追撃を掛ける。

「そうだ。だから言っただろ？早々にどうかしねえと手遅れになっちまう」
「もう！分かりました！じゃあそれを治すにはどうしたらいいんですか！」

阿武隈の半ば投げやりな言葉に、真剣に3人は考える。

「まあ、簡単に治るものじゃないですわね……」

「ワタシも、そう言ったQuestionには苦手ネー」

ニュージャージーと金剛は早々に思考を投げ捨てたようだ。

一方のミッドウェイは無言でどこかを見ながら何かを考えている。……ように見える。
実際のところはその姿を見ただけでは分からない。

しかし、何かしらの結論が出るような雰囲気、阿武隈は感じた。

別に悩んでいる訳ではないが、治せるなら治しておきたいのが、今の素直な気持ちだった。

やがて、ミッドウェイは目を上げた。

まるでどこか遠くに意識を飛ばしていたかのように僅かに体を震わせ、目を瞬く。

「いい案とは行かねえが、まあマシな提案は出来た」

「あら？意外ですわね。てつきり問題を提起してその後は放置するタイプの荒らし野郎だと思っていたのですが」

「ああ、ニュージャージー。テメエと違って困った奴はほつとけない性分だな」

「ハッ！笑わせてくれますわね？で、その貧相な頭で考えた精一杯のご提案をお聞きかせ願いますわ」

相変わらずの煽り合いをしつつも、ミッドウェイは解決策を提示する。

「何にせよ、根本的解決はしばらく時間がかかるだろ。それなら、矯正するのが一番手っ取り早い」

「矯正？」

阿武隈は困惑気味に聞く。視力や歯並びとは訳が違う。一体どうやってするのか？

「…まさか痛くしないですよね？」

「当たり前だ。ぶん殴って解決出来るならそれに越したことはねえが、そんな『昭和式家電解決法』が役立つのはそれこそ白黒テレビくらいのもんだ」

「あ、そうですよね」

「要するにだ、お前が道に迷わないようにすりゃいんだろ？なら、ナビを与えるのが一番

「簡単だ」

「Oh! Navigation! 確かにそれがあれば一発で Solved ね! でも、いつもそんなものを Carry するにはメンドクサイんじゃないデスカ?」

「おいおい金剛? いつも似たようなものを持ち歩いてるだろ?」

「What?」

「『ギア』、ですわね」

金剛の代わりにニュージャージーが答える。金剛と阿武隈は合点が入ったとばかりに口を開けた。

「なるほどネ、それなら Always で使えるってワケネー」

「でも、『ウォーリア・ギア』にそんな機能ないんじゃない?」

「阿武隈、お前の疑問ももつともだ。本来だったらそんな機能要らねえからな。だが、今なくてもインストールすることは出来る。」

腕の良い技術者がいりやすく出来るだろ」

「まあ、確かにそれが一番現実的ですよ。ホント、意外とまともな案であまり面白くないですよ」

「たりめえだ。テメエと違って俺はやるときはやるんだ」

ドヤ顔のミッドウェイをニュージャージーは睨み付けたが、やがて首を振って言っ

た。

「今回ばかりはその通りでしたわね」

「勝った……！」

ガッツポーズをするミッドウェイ。

「何に勝ったの……まあ、いいですわ。さて、私はティータイムに戻りますわ。……全く、これくらいご自分で解決すればいいものを……」

「すみません……」

阿武隈はニュージャージーに頭を下げた。慌ててニュージャージーは手を振る。

「いえ、貴女ではなくて……あのまな板のことですわよ」

ニュージャージーは未だにニヤついているミッドウェイを指差す。

ミッドウェイはそれに気付いたようで怪訝そうな顔をした。

「あん？なんだ？」

「何でもありませんわよ。……ハア、妙に疲れましたわ……」

ニュージャージーは背中を丸め、全身で疲労感を醸し出しながら立ち去っていった。

「相変わらず老人臭い奴だな」

ミッドウェイはその背を見送りながら言う。

と、ニュージャージーが手を挙げた。その手の中指は天を突いている。

「純粋な悪意だけを示すそのジエスチャーを向けられたミッドウェイは特に気にする素振りも見せない。」

「…くたばれつて言われてますよ」

阿武隈はミッドウェイに言う。存外、この口の悪い旗艦はこのジエスチャーの意味を理解していないのかも知れない。

「ああ、そうだな」

穏やかな口調で、ミッドウェイは答える。

「意外とC o o rな対応ネー」

金剛は言う。どうやらこの高速戦艦もあたしと同じことを考えていたようだ。

この喧嘩つ早い空母があんなものを向けられて、それでもキレないのはむしろ気味が悪い。

ミッドウェイは言う。

「クール、ねえ。そんなつもりはねえんだが…。ま、これ以上やると後が厄介そうだしな」

「その方がイイネー。これからのSortieのことを考えるとこれ以上のDiscordは控えないとネー」

「あ！そういうえば、今夜なんでしたね…」

「お？忘れてたのか、阿武隈？」

「…まあ、はい」

「なら、思い出せてよかったじゃないか。おかげで忘れずに出撃できる。1人減ったら俺の仕事が増えるからなあ」

「え？仕事？」

「おつと、言つてなかつたか。ちようどいい、お前さんにやつてほしいことがあつてな」
「何ですか？」

「『Ice Hunt』の時の連合艦隊第2艦隊の旗艦をやつてほしい」

「はい？…え、えっ？？」

金剛も驚きに目を剥く。そして何より、明らかな不満の色が見えた。

それに気付かない阿武隈ではない。阿武隈はミッドウェイに文句を言う。

「ちよ、ちよつと待つてくください！何であたしなんですか！」

「あ？お前が適任だからに決まつてるだろ」

「そんなこと…第一、他にも適任者はいるじゃないですか！金剛さんとか、あの、夜戦バカとか…」

「いや、お前以外に適任者などいない。金剛は第一に必要で、川内は…まあ、なんだ、旗

艦経験はまああるが、あー、その、あんまり向いてないんだよなあ」

「ワタシにはそんな感じはしませんか?」

金剛が自身の意思を伝えてくる。

「いや、あいつは個人プレーの方が向いてる。もちろん出来るが、それでは奴の持ち味を潰しちゃう。一方で、だ」

ミッドウエイはそこで一旦言葉を切り、阿武隈に目を向けながら再び口を開く。

「阿武隈、お前は違う。第9に来る前の戦果は聞いている。旗艦としての腕は良好、おまけにこれまでの被撃沈艦なし。」

その点は、金剛や川内にはない持ち味だ」

ミッドウエイは金剛を見遣る。彼女の顔には、今まで見たことのない表情が浮かんでいた。後悔と、苦痛に満ちたその顔をあえて無視し、ミッドウエイは続ける。

「うちの艦隊には人手が足りない。今は、犠牲を出させない指揮艦が必要なんだ。分かるか?」

「…ミッドウエイさんの言いたいことは分かります。それが間違っていないことも。」

でも、これまであたしが指揮してきた艦隊から犠牲が出なかったのはただの偶然で、あたしの指揮が良かったからだとかじゃ…」

「例え偶然でも、俺たちはそう言ったささやかなお呪いに賭けていかなければならねえ。」

俺たちは今非常に不安定な場所にいるんだ。人類滅亡の瀬戸際にな」

「…」

自分で言っていてなんだが、この事実を思い出すと足がすくみそうになる。それは、おそらく阿武隈と金剛も同じだろう。

自分たちの肩にのしかかる、77億人の命。

一歩間違えれば、その内の数万人、あるいはその何倍もの命が奪われるこの戦争の中で戦うことの意義はあまりにも重く、深い。

かなり長い沈黙の後、阿武隈は言った。

「分かりました。やります。それが、あたしにしか出来ないのなら」

ミッドウエイは頷き、言った。

「よく言ってくれた。『ギア』に詳細は上げとく。作戦までによく読んでやることを頭に入れといてれ。」

さてと。俺はそろそろ医務室にでも行こうかねえ」

ミッドウエイは自身の折れた鼻に手をやった。相変わらず血が止まっていないことに気付き、顔をしかめる。

「畜生、思ってたよりひどいな…」

「今更気付いたんデスカ？」

「知ってたなら教えてくれても良かったんじゃないか？」

「てつきり分かった上で放置してるのかと思ったネー」

「分かってたらさっさと治しに行ってるぞ」

「それもそうネ」

舐められてるような…。まあ、いい。

ミッドウエイは2人に暇を告げ、その場から離れた。

風呂場を出てから感じたあの閉塞感を感じる余裕はすでになくなっていった。

鼻血を制服の袖で拭いながら、ミッドウエイは足早に通路を進む。

せつかく洗濯した制服が、未だに止まらない血液で少しづつ、しかし確実に変色して

いく。

困ったものだ。

ミッドウエイは頭の中で呟く。どうも今日は調子が悪い。

もしや、夜の作戦のことでブルツてるのか？

「フン」

彼女は鼻で笑う。まさか。有り得ない。

これは高揚感だ。

俺の『バケモノ』が、俺に刻まれた黒い感情が、先走って暴走しているのだ。

祖国の危機であるにも関わらず、彼女の気分は高鳴る。

祖国を仇なす敵を滅ぼす時が堪らなく楽しみだ。

相も変わらずサイコパスの如き、か。

そう自嘲しつつも、その顔には歪んだ笑みが。

鼻血を垂らしながら歪みきった笑顔を見せる人物を見たら、果たして何を思うだろう

？

人それぞれ、千差万別だろうが、結論は出ている。

『関わらないでおこう』

現に、彼女の脇を通り抜けるアメリカの乗員たちはこちらに目線を合わせようとしな

い。

当然だ。

彼女は歩きながらさらに思考を続ける。

この状態の俺に話しかけてくる奴など、よっぼどの変人だけだろう。

「やあ、ミッドウェイ。酷い顔だね？」

おっと、こんなすぐに変人が現れるとは。

「ちよつと訳ありでな」

ミッドウェイは時雨の言葉に返答する。その隣には、相変わらず癖毛がびよこびよこ

動く夕立。

「何その顔？新しい顔芸の練習っぼい？」

「ちげえよ。俺は芸人じゃないぞ」

「なーんだ。新しいのが見れるかも知らないって思ったに」

「それは残念だったな。…ん？待て、夕立」

「ぼい？」

「俺がいつ顔芸などした？俺はいつでも至って真面目な顔をしているはずだぞ」

「知らぬは亭主ばかりなり、だね」

「どう言う意味だ、時雨？」

「もちろん、そのままの意味さ」

時雨は悪意のある笑みを浮かべながら言った。

コイツ…。

少々腹を立てつつも、その怒りを抑える。これ以上、馬鹿げたことで負傷してたまるか。

「で、その訳ありって言うのはどんな訳だい？」

時雨は腹立たしい笑顔で更に踏み込んでくる。

「訳ありは訳ありだ。これ以上の詮索は旗艦命令で許可せん」

「職権濫用は良くないっぼい！」

夕立が至極まともなことを言う。

「知らん！黙って言うことを聞きなさい！」

教師が生徒を叱りつけるかのように、ミッドウェイは叫ぶ。違いとしては、教師は筋道立って叱るのに対し、ミッドウェイのそれは何処までも理不尽であることだ。

「むー」

夕立はむくれる。ふむ、これはこれで可愛らしい。

「まあ、いいじゃないか、夕立。どうせ知ってることだし」

時雨はどうでもいいことのように言った。

何だと？

「どこで聞いた？というか、いつ聞いた？」

「金剛さんからね。ついさっきだよ。派手にやらかしたみたいだね？」

あの野郎…。

勝手に話しやがって…。口止めしとけばよかったか？

駄目だ、だんだんと腹が立ってきた。

こういう時は、楽しい事を考えよう。

今回の作戦でやらなければならないことは…。

楽しい事がイコールで戦闘となるのはどうかと思うが、そのような思考をミッドウエイがすることはなかった。

不意に頭が冷える。赤くなっていたらどう顔は今や普段と変わらない。

「あ、落ち着いたみたいだね？」

時雨が言う。顔色を伺っていたらしい。まあ、この場でブチ切れられたら、時雨と夕立にとつても大いに面倒なことであつたことは想像に難く無いため、当然と言えば当然だ。

しかし、その問いかけにミッドウエイは答えない。思いがけないことに、この思索は『氷山狩り』の大きな穴を見つけたのだ。

「何かあつたつばい？」

夕立は心配そうに聞いてくる。癖毛がご主人様を心配する忠犬（この場合は狂犬だ）の耳よろしく、元気なさげに垂れる。

ミッドウエイは苛立たしげに頭を描きながら、答えた。

「ああ、面倒なことがな」

ミッドウエイは体面を気にしないタイプの間人だつた。

それこそ殺意すら湧いていた相手にも、平然と話しかけられるし、その相手に教えを請うことにも、特に疑問を感じることもない。

それ故に、ミッドウエイは時雨と夕立を引き連れて、再び大急ぎで移動を開始した。目的は、ニュージャージーと接触することだ。

この広いアメリカの艦内で、たった1人を探すのは決して容易くは無い。そのこともあり、ミッドウエイは狭苦しい通路をほとんど走りながら抜けていく。

アメリカの乗員たちは、そのアホみたいなスピードで駆けてくるミッドウエイをギリギリで交わしながら、若干の恐怖の入り混じった表情で、この艦娘御一行を見つめる。

ミッドウエイはそれに見向きもしないが、後ろを行く時雨と夕立はすれ違う度に申し訳なさげに頭を下げる。

流石に危なっかしいので、時雨が注意を促す。

「ミッドウエイ、もうちょっとゆっくり動こうよ。あの人の居場所はある程度分かっているんでしょ?」

「ああ。だが、俺らには時間がない。それこそ、1秒無駄にすれば成功確率が下がりかねない」

「そんなに大事なことっぽいな?」

「そうだ…つと、見つけた」

阿武隈と川内の相部屋から少し離れた場所、正確には待機室の入り口前にいるニュージャージーを見つけたミッドウエイは言う。

と、早足の3人の足音に気付いたニュージャージーはこちらに目を向ける。顔に嘲りの表情が浮かべながら、ミッドウエイに話しかける。

「あら？これはこれは、愚かなまな板空母さん！その素敵な鼻はもしかしてお洒落のつもりでして？」

それに返答することなく、鼻先がぶつからんばかりに近寄る。

ニュージャージーの顔が僅かに引き攣る。

時雨と夕立は身構えた。このまま殴り合いになつてもおかしくない。

意外なことに、ミッドウエイは至つて冷静な調子でニュージャージーに言う。

が、内容はそうではなかった。

「ニュージャージー、核は持つてるか？」

「は？」

ニュージャージーは理解出来ず、素に近い返答をする。その場にいた時雨と夕立も同じだ。

ミッドウエイは続ける。

「お前のトマホークに核弾頭は付いてるかかって聞いてんだ」

空気が凍りつく。ニュージャージーはミッドウエイの言葉を理解したが、そこから先の思考は数秒出来なかつた。

一方の時雨と夕立は、信じられない言葉を聞いたとばかりに目を剥き、ミッドウェイを見つめる。

冗談でも言つてはならないであろう発言をしたミッドウェイはしかし、至つて真剣な顔をしている。

明らかに本気で口にしたであろうその言葉を、ニュージャージーは受け止めた。この言葉を聞く時がいずれは訪れるだろうことを、彼女は予想していた。

再び戦うことなる以上、それは必然とも言えた。

が、それでも彼女は返答に窮した。口の中から一緒に水分が奪われ、言葉が枯れて、声にならない。

「答えろ、ニュージャージー。これは本作戦において非常に重要な意味がある」
ミッドウェイが急かす。

ニュージャージーは一息つき、更に唾を飲み込んでから答えた。

「搭載していますわ」

会話を見守つていた、と言うより余りの衝撃に頭がまともに機能していかなかった時雨が、やつと思いで言葉を紡ぎ割り込む。

「ちよつと待つてよ！まさか、核を使うなんて言わないよね？」

「使う、かどうかはまだ分からん。だが、場合によつては使用することになる」

時雨は体が震える気配を感じた。普段のふざけた喋り方では無い、まるで機械の様なミッドウエイ受け答えに、思わず怖れを抱いてしまった。

これが、彼女の『素』なのだろうか？

怖気付く気持ちを抑え、口を動かす。

「自分が何を言っているか分かってるのかい？」

「勿論だ。禁忌を犯すことは分かっている。しかしだ、それを恐れたために多くの犠牲が生まれた時に、我々はそれに対する責任を取れるか？」

「それは……」

時雨は答えに詰まる。

核の恐ろしさは、艦娘になってから知った。祖国を焼き払った『神の炎』の威力とそれによってもたらされた悲劇の記録を、時雨は心の奥に常に宿らせ、人が再びその力に手を出さなくてもいいように、彼女は戦って来た。

人類が、この未曾有の危機に自らの最終兵器を使用してこなかったのは、ひとえに艦娘という『抵抗手段』が残されていたからに他ならない。

しかし、艦娘の力だけで守り切るには限界がある。

その時、この世界を、人を守るのは人の力だけが頼りになる。

その力の中で、最も強力な力が使われるのはそう遠く無いはずだ。

核が抑止力では無くなる時が。

…やはり駄目だ。そんなことになれば、戦争が終わった後の世界に、責任が持てなくなる。

「それでも、核は駄目だよ…ミッドウェイ」

時雨の声は弱々しい。自分の言葉に自信が持てていない表れだ。

とは言え、それはミッドウェイも同じだ。

自分でも、この言葉を口にしたのが信じられない。核を使うだと？とんでもない！愚かしいにも程がある。

だがしかし、一応のプランとしては絶対に必要な物だと、彼女は理解していた。軍人とは、夢想家では無い。時に非道なまでのリアリストにならない時があるのだ。

それでも、それを平然と受け入れることが出来るのは、やはりサイコ気質だからか？
答えは出ないが、取り敢えず時雨を安心させてやろう。

「勿論、核は最後の、それも最悪の手段だ。これが使用されないように動くのは俺たちの役目だからな」

「ふーん、意外と冷静でしたわね？ てっきり何処ぞの核テロリスト見たく問答無用でぶっ放すかと思いましたわ」

「俺はサイコだが、そこまで腐ってねえ。それに、お前は断固拒否するだろ？ん？」
「…命令なら、撃つつもりでしたわ」

ニュージャージーは正直に白状する。

「フン。まあ、それはそれでお前らしいか？いや、軍人ならそれが正解か」

「それが軍人なら、なりたく無いね」

時雨は独り言のように言った。

ミッドウエイはそれが聞こえなかったフリをしながら、ニュージャージーに本来の案件を聞く。

「さっきのは、一応の確認だ。お前さんに会いに来たのは、それとは別件」

「別件、ねえ」

「先の話にも通ずるところがあるんで、あんな前置きをしちゃったが、失敗だったか？

まあ、それはいい。

で、要件だが…」

「何ですの？」

「お前、トマホークの終末誘導出来たりするか？例えば…そう、第1艦群のミニアーセナルがブツパしたトマホークをピンポイントでズガンとブチ込めるか？」

「お分かりかと思いますが、私はあくまでも発射プラットフォームですわ。終末誘導は、

それこそ航空機だとか地上誘導員だとか、移動しない目標でしたらトマホーク本体の弾頭、あるいはGPS衛星等に任せています。

残念ながら、私には出来ませんわ」

「…あー、そうか…。マズイなあ…」

「何がまずいっばい？」

ミッドウェイは再び教師のような口調で説明を始める。

「敵旗艦は『氷山空母』だ。その性質上、氷によつてその巨体を構成し、浮力を維持する。北極海の冰山だとかがいい例だ。アレは馬鹿でかいが、沈まずに浮いてるだろ？」

氷は他の物質より隙間が多く結合するから密度が低くなり、結果海水に浮かぶわけだ」

「前置きが長いよ？」

時雨が不機嫌そうに言う。

「そう急くな、ここからだ。」

当然氷を維持するには、寒さが必要だ。流水に南限があるのは、言うまで間なく氷が溶けるからであり、海水温の上昇によるところが大きい。まあ、それ以外もあるが今はどうでもいい。

しかしだ。この『パイクリート野郎』は、南限を遥かに超えてこの辺りで出張つて来

てやがる。

考えられる理由は、奴単体でその艦体を維持するだけにの冷却が出来る、ということだ。

それ故に、この温暖、では無いが氷が溶けるだけの海水温の大西洋まで出て来れたわけだ」

かなり分かりやすく説明した筈だが、夕立は首を傾げている。ふむ、これは困ったぞ。これ以上簡潔に説明すれば、内容が無くなってしまふ。

仕方がないので、夕立は無視して話を進める。

「さっき言ったように、『冰山空母』は氷が溶けたら終いだ。なら、やるべき事は単純かつ非常に明快だ。馬鹿でもわかる。

コイツを倒すには、その氷を維持する冷却ユニットをぶっ壊しちまえばいい。冷却系を失えば、奴は自分の体を維持出来なくなり、自壊する。

つまり、俺らの大勝利ってな」

ミッドウエイは手で何かを叩き潰すようなジェスチャーをする。

ここに来て、夕立は内容を理解したようで、大袈裟に何回も頷く。

「だが、だ。世の中そう上手く行くもんじゃ無い」

ミッドウエイは首をふりふり言った。

「当然、冷却ユニットは強固に装甲化されてるだろう。しかも、その装甲は分厚い氷の下、だ。並大抵の火力ではそこまで達するのも簡単じゃ無い。まあ、ぶち破れんことはないが、随伴艦の撃破やらなんやらをやっていけば、弾薬不足は免れない。」

となると、本命――要は冷却ユニットの破壊は、俺たち以外の誰かがやるしか無い。後は、分かるな?」

「後の始末は第1艦群の仕事、だと」

ニユー・ジャージーは言う。

「ベング。で、ここで先の問題に帰ってくるわけだ。」

いくら敵がデカイとはいえ、それは『深海棲艦』としてはつてなだけに過ぎない。何ならそこいら観光船よりちっこい有様だ。

ンなもの相手じゃ、対艦用に調整されてるトマホークでも当たるかどうか分かったもんじゃねえ」

『ウオーリアギア』で誘導したり出来ないのかい? 或いは、君の艦載機とか」

時雨の疑問に、ミッドウェイは苛立ち気味に答える。

「出来たら困っちゃいねえ。『ギア』は今のバージョンじゃ精密誘導は出来ん。本来、艦娘の戦闘システムを支援、効率化するためのユニットだ。艦娘がメインで、通常艦艇がメインのシステムじゃねえ。」

それともう一つ。俺のF/A-18はレガシーホーネットだ。今のリンク16には対応してねえし、ましてや統合戦術無線システムなんぞ受け入れられるほどキャパもない。

E-2ならやれんことはないだろうが、いかんせん終末誘導となるとかなりの接近が必要だ。航空優勢も取れてねえ空域に非武装かつ鈍足でデカイE-2を送っても早々に撃ち落とされてバッドエンドだ。

うちの艦載機でも打つ手無し。まず無理だな」

ミッドウエイは肩をすくめる。もつと早くに気付けたなかつたことが悔やまれる。

何せあの作戦を立案（と言うより思い付いた）時の精神状態はお世辞にも良好ではなかった。多少のボロは出るとは予想していたが…。

根幹を揺るがすほどのボロが出るとは。

沈黙が辺りを支配する。

諦めたわけでは無い。全員が何か案を出そうと必死で頭を回転させている。

「あ、この状況を打開したのは意外なことに、夕立だった。

「い、い、い」と思いついたっぽい。」

大西洋の波間に夕陽が沈み始める。

アメリカの飛行甲板は、発艦作業に阿鼻叫喚の如き様相を呈しており、それこそ分単位でライトニングIIが発艦していく。

発艦管制は疲労と心労で血反吐を吐かんばかりだろう。

気の毒なことだ。

そんなどうでもいい思考を巡らせながら、ミッドウェイは飛行甲板の脇で発艦作業を見守っていた。

自身が搭乗するオスプレイは整備の最終段階に入り、そう時を置かずして左舷側のエレベーターから現れることだろう。

本来ならそれに合わせて来ればいい。が、気が逸つて落ち着かず、結局早々と来てしまったわけだ。

おかげで、せつかく風呂に入ってさっぱりした髪が潮風で傷んじまう。

…言ってみたかっただけだ。別に髪に気を遣つてなどいないし、何ならバサバサのまま放置してることが多い。

大体、いつ何時出撃命令が下るか分からないこの第9艦隊勤めの時点で、人並みのお洒落など、どだい無理な話だ。

…足音が2人分。『ギア』で誰何をする。…反応あり。綾波と敷波。こちらに気付かれないようにコソコソやっているようだが、素人感丸出しだ。

何か妙なことを考えているのか？

ミッドウエイは振り向かずに言う。

「何の用だ？」

足音が止み、相手が息を呑む気配を感じる。

しばしの無言の後、小さな声が聞こえてきた。

「あれ？もしかして気付かれてる？」

「艦内から出た時点だな」

「うーん……。流石の探査能力……」

敷波は心底驚いた様子で項垂れる。

「で、何やろうとした？ん？」

「えっ、べ、別に、何もしようとしてないよ！ただちよつと散歩しようかなーって思っ

て！

「そんな嘘が通じるとでも？」

「嘘じゃないし！ね、綾波！」

「はい。もちろん、嘘ですよ」

唐突に裏切る綾波。

敷波は口をあんどぐりと開けて綾波を見る。予想外の行動だったであろうことは明らか

かだ。

「よく言ってくれた、綾波。それで、お前さんたちは一体どんな悪さを企んでたんだ？」
「ちよつと後ろから脅かそうとしただけですよ」

「なるほど、それであわよくば真つ逆様に落ちてくれたらいいとも思ってたんだな？」
「はい」

「あ！綾波！言っちゃダメでしょ！」

姉妹の会話に、ミッドウエイは苦笑しながら言う。

「くだらんこと考えてるなあ、お前さんたち？」

「綾波もそう思ったんですけどね。敷波が聞かなくて」

「責任転嫁は良くないでしょ！綾波だつて乗り気だつたじゃん！」

「ソナナコトナイデスヨ」

怒る敷波ととぼける綾波。 見ている分には楽しいが、いかんせん士気に関わるので放置しておく訳にはいかない。

どのみち、話したいこともあつたのだ。 丁度いいだろう。

「ハイハイ！お二人さんストップ！どちらにせよ俺に妙なことしようとしたことには変わらないだろ？ん？」

「いや、まあ……」

「そうですけど…」

「OK、帰ってきたら暫く待機室の掃除当番だ。もちろん、拒否権はない」

2人は本気で嫌そうな顔をしながら抗議の声をあげる。

「それは勘弁してよお。ほら、あの部屋みんなめっちゃ汚してるじゃん？」

「だからだろ」

「鬼！悪魔！甲板胸！」

敷波は吠える。

「ブーメランだぞ、それ？」

「私たちはまだ未来があるッ！」

「当番1週間追加」

無慈悲に告げるミッドウェイ。

「何故に!?」

今にも嘔みつかんばかりの敷波がさらに叫ぶ。これでは、どちらが黒豹か分かったものではない。

「幼気な乙女を傷付けた罰だ」

「幼気な乙女って」

「私の視界にはそんな人いないんですが？」

綾波が言う。半ば本気のような。ミッドウェイの精神に少しづつダメージが蓄積される。

これ以上食らう前に本題に進まなければ。

「とにかく！2週間待機室の掃除！旗艦命令！OK!?!?」

「No way!」

「:アー、うん。OK、分かった。なら、これから言うことを完璧にこなしてくれたら、お咎めなしつてのはどうだ？いい案だ。ん？」

2人は顔を見合わせ、怪訝そうに言う。

「気乗りしないなあ…」

「嘘だろ？自分たちが悪いのに。俺が慈悲深い心で提案してやつてるのに！」

「本当に慈悲深い方なら、笑いながら許してくれてますよ」

「そうか、綾波。それは慈悲深いんじゃないやなくてただの馬鹿だ。」

…さて、それでは早速、お前たちに素敵な任務を命じよう」

「どうせロクでもないもんなんですよ？」

「大正解だ、敷波。『アレ』が見えるか？」

「どれですか？」

綾波はとぼけたように言う。ミッドウェイは、その問いに答えるべく飛行甲板の一角

に指を差す。

丁度、車両引揚用のエレベーターから目的の物が出て来たところだった。

「アレは…何？」

「アレは発信機みたいなもんだ」

「発信機？」

「そうだ。さしずめ、俺たちの『切り札』ってところかな？」

ミッドウェイはウインクをしてみせる。

「お前たちはアレを積んで、『冰山空母姫』にひいこら言いながら取り付けて、とつととおさらばしてもらうってのが、今回の任務だ。

な？…簡単だろ？」

「どこが？」

「言うは易し行は難し、ですねえ」

敷波と綾波はそれぞれ反応する。

ミッドウェイは笑顔で対応した。

「何、心配するな。骨くらいは拾ってやる」

「…よくない」

不機嫌そうな敷波の顔。

「冗談だ。俺らが全力でバックアップしてやるし、本気でヤバくなったら俺が変わってやる。だから安心しろ」

「なら最初からミッドウェイさんがやればいいじゃないですか?」

綾波の正論。しかし、ミッドウェイは取り合わない。

「生憎、俺も忙しいんでねえ。途中で変わってやる余裕も、本来はねえくらいだ」

もちろん、嘘ではない。ミッドウェイは『氷山狩り』の最中は、分刻みに仕事をこなさなければならぬ。それも、ドンパチしながら。

そこにプラスでこの作業だ。作戦中の余裕は、ミッドウェイには1秒たりともない。「分かってくれたか?」

暫しの無言。しかし、敷波は大きなため息と共に言った。

「仕方ないなあ。…よし、いっちょやろうか! いい、綾波?」

「はい。最初からそのつもりでしたし」

「感謝する。早速降りてアレの扱い方をレクチャーしてもらって来てくれ。脇に説明してくれる奴がいる。そいつから、しっかりと話を聞いて来い。」

以上だ」

2人ともそこはプロだ。与えられた使命を完遂すべく、速やかに動く。

立ち去る2人の背中を見ながら、腹の底から湧き上がる感情に気付く。

いつもの『アレ』ではない。これは…。
『不安』。

らしくもない感情に困惑しつつ、だがしかしそれを抑えることも出来ず、彼女はただ2人の背を見守った。

「随分と早くからいるな？」

彼女の背中に声が投げかけられる。

ミッドウエイは驚き、そして己の不注意に舌打ちする。

妙な感情に気を取られて辺りへの警戒を疎かにしていた。

戦場なら、死んでいてもおかしくはない愚かな行為だ。

自身を叱責しつつ、ミッドウエイは振り返りながら答える。相手は誰がすでに把握している。

「気が逸つてな。いつの間にかここにいた。で、キャプテン。アンタこそ指揮所を離れてこんな所で何やってんだ？」

予定じゃホイットニーから指揮するはずだろ？」

アレン・G・ナガブチ少将は苛立った様子で言う。

「キャプテンじゃないと…いや、まあいい。お前たちを見送ろうかと思っただけだが…この調子だといらん世話か？」

「まさか。俺はともかく、他の連中は喜ぶだろうさ」

ミッドウエイは答える。若干煽り気味に。

「…」

ナガブチは答えない。

おっと。やり過ぎたか？

が、そうではなかったようだ。

「不安なのか、ミッドウエイ？」

ミッドウエイは眉をひそめる。何故分かった？

「その顔を見ればすぐに分かるさ」

また読まれた。俺はそれ程顔に出やすいタイプなのだろうか？

「それに、言葉の切れ味も普段より悪い。らしくもないな？」

「よく観察出来てるな、ナガブチ。アンタの言う通り、珍しくそういう感情を抱いてい
る。」

理由は…まあ、何となくは分かる」

「当てるみようか？あの2人のことが心配なんだろう？」

「心理カウンセラーの方が向いてるんじゃないか？」

「遠慮しておこう」

穏やかな笑顔を浮かべながら、ナガブチは答えた。こういう返答をする時は、明確な拒否の返答であることを、ミッドウェイは理解していた。

これ以上この話題では進まないの、彼女はアプローチを変える。

「盗み聞きしてたのか？」

「正確には丁度見えた、だ。別に見たくて見た訳じゃない」

「その言い方は誤解を招きかねないぞ？」

「なんの話だ？」

「…いや、何でもねえ」

全く、どうにも話がしにくい。何時もはもつと話しがしやすいのだが…。

矢張り、この『不安』が原因か？

「とにかく、だ。ミッドウェイ、お前の感じてるその『不安』は、指揮官特有の感情だ」

「ふん」

「お前の中で、今回の作戦をどう回せば最高の結果が出るかを模索しているだろう？」

ミッドウェイは沈黙を返答とした。言うまでもない。今もまだ細部の詰めが済んでいない。

「おそらく、お前の中では大まかな流れは出来上がっているだろう。しかしだ、それで本当にいいのか？」

心臓が跳ね上がった。先程より『不安』が強まる。今や焦燥感まで抱く始末だ。呼吸が僅かに荒くなる。

ナガブチは慌てたように言った。

「落ち着け。お前が『ギア』に上げてる計画は俺も何回も精査している。これ以上の物は誰にも作れやしないし、この計画通りに事が運べば100%上手く行く」

「そんなフオローいらねえ……。分かつてんだ、100%なんてものはこの世に存在しない。良くて、99.9…と言った曖昧な数字だけだ。」

そして、そう言った数字が絡む限り、計画は常に破綻の可能性を秘めてる」
最早、嘘が通るような精神状態ではない。

俺は…

「出来れば、あいつらが死にかけるとような命令を下したくはない」

ナガブチは頷く。その瞳に優しさが宿っている。

畜生、センチメンタルになり過ぎだぞ、ミッドウェイ。

「よかったよ」

「よかった？」

ナガブチの見当外れな返答に、眉をひそめながら、そしてナガブチの瞳を見た時の奇妙な感覚を隠しながら、ミッドウェイは答えた。

「お前にも、そう言う感情があることが分かって」

「ナガブチ、お前は俺を馬鹿にしているのか？ 或いは俺がただのサイコ野郎だとも思ってたのか？」

「サイコであるとは思っているが、馬鹿にはしていない」

「それもどうなんだ…」

「とにかく、お前の中で変化があったのは間違い無いはずだ。この世界に来てすぐの時に、こんなことを感じたか？」

「いや。全く」

ミッドウエイは素直に答える。

「第2艦群の連中と会って、話して、交流して、お前は変わったんだ。…多分な」

「かも知れねえな。…俺は弱くなっちゃまったのか？」

ミッドウエイは自嘲気味に言った。

「いや、強くなっているとも。お前はな」

ナガブチの一言に、ミッドウエイは首を傾げる。

「何、今に分かるさ。…そろそろお前たちのヘリが来るぞ」

「…ああ」

ミッドウエイはナガブチに背を向け、飛行甲板に登って来たばかりのオスプレイの元

へと向かう。

ほんの数分の道中で、ミッドウェイはナガブチの真意を探る。

あの言葉の意味はなんだったのか？

まるで結論は出なかった。

飛行甲板に、第2艦群のメンバーが全員集合したのは、ミッドウェイはオスプレイの脇に待機し始めてから5分ほどしてからだった。

誰一人遅れもなく、ミッドウェイの前に整列する。

ちよつとは旗艦らしくなつたかな？いい傾向だ。

彼女は自分の頭の中で言葉を紡ごうとした。

が、止めた。

今の本心を語ろう。

「あー、諸君。これより『Ice Hunt』作戦を執行する。俺から言いたいことは1つだけだ」

一息入れ、多くの感情の入り混じつた言葉を紡ぐ。

「共に勝利を。以上」

指示をすることもなく、皆がそれぞれの乗機へと向かつて行く。

ミッドウエイもそれにならない、オスプレイの後部ローディングドアの緩い傾斜を足早に進む。

一步踏み出すごとに、様々な思いが巡る。

不安、恐怖、高揚感、使命感。

いくつもの感情が入り混ざり、やがて一つとなった。

諦観。

今更、何を思索しようが、何を後悔しようが最早手遅れなのだ。

なら、やるしかない。

悟りのような感情が、ミッドウエイの腹の底に残った。まさに、諦観の言葉にふさわしい状態だろう。

目を閉じる。

リバテーターエンジンが機内に轟音を吹き込む。

それでも目を開こうとしないミッドウエイは、僅かに感じたマイナスGと、えも言えない浮遊感から、飛行甲板を離れたことを知った。

騒々しい咆哮とダウンウオツシュを撒き散らしながら、オスプレイは飛び立つ。

制帽を抑えながらそれを見守ったナガブチは、徐々に遠ざかって行くオスプレイに背を向け、自身が乗機するキングスタリオンへと足を運ぶ。

胴体だけでも30メートルを超える巨人へりは、まさに『キング』の名に相応しい。俺もまた、この艦隊の『キング』であらねばならない。

彼はふと、そんな考えに至った。

ミッドウエイからの言葉を思い出す。

『似合わねえよ。今のアンタには』

自分でも分かっている。

この艦隊の『キング』。つまりは、『アドミラル』に俺はまだ至っていない。

これまでは、1隻の面倒を見れば済んだ。

が、今の俺は、9隻の艦艇とその乗員たち、そして13人の艦娘の面倒を見なければならなくなった。

あまりにも、責任が大きくなり過ぎだ。

彼はため息をつきながら、キングスタリオンの側面ドアから機内に入る。

ただ機能性のみを追求した機内の、比較的座り心地の良い椅子に座る。

操縦士と発艦管制との会話を聞き流しながら、先の思考に再びふけようとした。

しかし、その前にヘッドホンからパイロットの声が響いた。

『提督、発艦します。シートベルトの着用を願います』

おっと、忘れていた。

彼は4点式のベルトを素早く締めて、謝罪の意味も込めてこちらを見つめるパイロットに手をあげる。

パイロットは満足したようで、発艦前の作業に戻った。

パイロットの動きを見ながら、ふと自分が『アドミラル』と呼ばれたことを思い出した。

彼は苦笑する。

少なくとも、これまで指揮してきた者たちは彼を認めてくれたようだ。

ゼネラル・エレクトロリクスGE38—1Bエンジンが悲鳴のような音を上げる。

心地よいエンジン音に、懐かしさを感じる。

最近自分で操縦していない。

体はなまってはいるが…。

それでも感覚は覚えている。

ヘリも戦闘機も、原理が違うだけで飛ぶことには変わらない。

もちろん、それはかなり大きな違いではあるが、固定翼機、回転翼機双方の資格を持つ彼からすれば気にするほどの違いはなかった。

回転し始めた秒数と音から、彼は頭の中でスロットルを上げる。

ほぼ同タイミングで、現実のパイロットも動く。

彼は笑みを浮かべた。

上出来だ。

彼は満足げに小さな窓から外を見み、しかし意識は作戦に向けた。

失敗も妥協も許されない。確実に任務を遂行しなければ、数万人が死ぬ。

この明確な事実こそ、彼にのしかかる本当の責任だ。

部下の面倒を見るのも彼の責任ではあるが、それは平時の時だ。

今は有事。

いかなる犠牲を払おうとも、守らなければならないのは国家の安寧と無辜の市民たち。戦場で戦う兵士たちの命ではない。

それが『アドミラル』の仕事なのだろう。部下たちの命を守るのは『キャプテン』や現場の『コマンドー』、そして『ウォーリア』たち自身の仕事だ。

彼は窓から目を離し、前を向いた。決意とともに。

キングスタリオンが飛び立ったのは、それと同時にだった。